

長野市

あさ かわ せん じょう ち い せき ぐん      ほん むら みなみ おき  
浅川扇状地遺跡群      本村南沖遺跡

新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017. 3

長                      野                      県  
長野県埋蔵文化財センター



1c 区全景 (南より)



2b・2c 区全景 (南東より)



整穴住居跡 SB03 出土遺物



弥生時代の土器



墓跡 SM02 出土土器



墓跡 SM02 棺内完掘（北より）



竪穴建物跡 SB13 出土土器



竪穴建物跡 SB13 遺物出土状態 (南東より)

## はじめに

北信五岳の1つ飯縄山（標高1,917m）を水源とする浅川は、扇状に緩やかに広がった地形を形成しています。浅川は流域面積が小さいため、雨が続くと氾濫し、雨が降らなければ急に水量を減らします。近年、浅川扇状地上は市街地化が急速に進み、河川が形成したかつての地形はわかりません。しかし氾濫によって形成された微高地や流路にあたる低地を巧みに利用し、縄文時代からの人々が生活していた遺跡が数多く存在する長野市内有数の規模を誇る浅川扇状地遺跡群が知られています。

1950年に開学した長野県短期大学は、1929年長野県長野女子高等学校（現長野県長野西高等学校）内に設立された長野県女子専門学校が前身で、1931年に現在の校地に移転した際には発掘調査は行われていませんでした。2018年4月に開学する新県立大学施設整備事業のため、今回初めて埋蔵文化財の発掘調査が行われることになりました。

今回の発掘調査では、17軒の堅穴住居跡や堅穴建物跡、掘立柱建物跡、墓跡、流路跡等が発見されました。なかでも弥生時代後期初頭の吉田式期の堅穴住居跡7軒は重複がなく、比較的短期間に存在した集落であることが分かりました。この時期の集落跡は浅川扇状地上でも少なく6例目の発見となりました。弥生時代中期後半や弥生時代後期前半の大規模な集落の分布と重なることがなく、「吉田式土器」の標式遺跡である吉田高校グラウンド遺跡とほぼ同時期であるため、吉田式期の集落域の分布の広がりを考えるうえでの貴重な資料の1つとなるでしょう。

最後になりましたが、発掘作業から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県短期大学、長野市三輪・上松地区の皆さま、長野市教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や長野県立歴史館、そのほか関係各位に、心から敬意と感謝を表す次第です。

## 例 言

- 1 本書は新県立大学施設整備事業に伴う長野県長野市三輪に所在する<sup>あさかわけせんじょうちいせきけんほんむらみなみあきいせき</sup>浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県の委託を受けて、長野県教育委員会の指導の下、(一財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の概要は、「長野県埋蔵文化財センター年報」、現地公開、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図 1:25,000〔長野〕・〔須坂〕・〔若槻〕・〔中野西部〕、1:50,000〔長野〕・〔須坂〕・〔戸隠〕・〔中野〕、長野市都市計画図 1:2,500 (デジタルデータ) をもとに作成した。
- 5 発掘・整理作業において以下の機関に業務委託した。

測量業務および空中写真撮影	: 株式会社こうそく
自然科学分析 (年代測定、樹種同定)	: 株式会社パレオ・ラボ
自然科学分析 (花粉、珪藻、プラント・オパール)	: 株式会社古環境研究所
自然科学分析 (付着物)	: 株式会社古環境研究所
遺物写真撮影	: 信毎書籍印刷株式会社
- 6 発掘・整理作業において、以下の方々にご指導をいただいた。  
飯島哲也、市澤英利、小山岳夫、櫻井秀雄、笹澤浩、茂原信生、本郷一美、長野市教育委員会
- 7 発掘調査・整理作業の担当者、発掘・整理作業員は第 1 章第 1 節 3 項に記載した。
- 8 本報告書は第 1 章第 1 節 1 項・第 3 節・第 4 章第 1 節を町田勝則、第 1 章第 2 節を高山いずみ、第 3 章第 1 節を福井優希、第 2・第 3 節の遺物の執筆を西香子、それ以外の執筆と編集は長谷川桂子が行い、調査部長平林彰、調査第 2 課長町田勝則が校閲した。
- 9 註および引用参考文献は末尾に記載した。
- 10 調査資料および遺物は長野県立歴史館へ移管予定である。

# 凡 例

1. 遺跡分布図、遺構図等に示した国家座標は世界測地系の値である。
2. 遺構番号は遺構種ごとに付してある。
3. 遺物番号は本文、挿表、遺物図版、遺構図版の遺物出土状況図、写真図版のすべてに共通する。遺物図版に実測図が掲載されていない遺物の写真には、(遺物管理番号)で示した。
4. 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

## (1) 遺構実測図

竪穴住居跡・竪穴建物跡・掘立柱建物跡 1:60 墓跡 1:20 土坑 1:60  
土器集中 1:40 溝跡 1:40~1:200

## (2) 遺物実測図

土器・陶磁器 1:4 土器拓影 1:3 1:4  
石鏃等小形石器 2:3 石核・石斧・磨石・敲石 1:3 金属製品 1:2

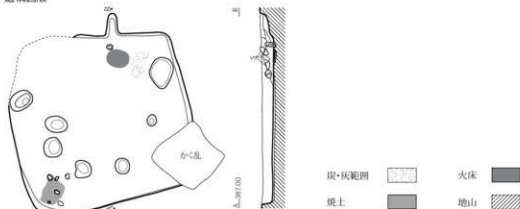
## (3) 遺物写真

土器 1:3 1:4 石器・石器製品 1:3 2:3 金属製品 1:2

上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。遺物写真縮尺は遺物実測図に一致する。

5. 遺構図版のPは土器、Sは石器または自然礫を示す。
6. 基本層序および遺構埋土の色調と土器の色調は『新版 標準土色帖』による。
7. 本報告書で用いたスクリーン・トーン等の凡例は以下のとおりである。

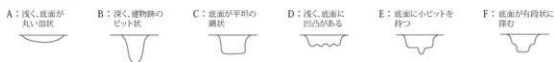
## 遺構図版



## 遺物図版

赤彩土器 (light grey) 黒色土器 (dark grey) 須恵器 (black) 灰釉陶器 (dark grey)

## 土坑断面分類記号







# 目 次

巻頭写真  
はじめに  
例 言  
凡 例  
目 次

## 第1章 調査の経緯と方法

### 第1節 発掘調査の経緯と作業経過

1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘作業と整理作業の経過	3
3. 調査体制	3
4. 調査日誌抄	4

### 第2節 発掘作業と整理作業の方法

1. 発掘作業の方法	8
2. 整理作業の方法	10
3. 遺物と記録の収納	11

### 第3節 遺跡・遺物の公開方法

1. 公開の方法	12
----------	----

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	15
-----------	----

### 第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡	20
2. 歴史的環境	21

### 第3節 調査成果の概要

1. 遺跡の範囲	28
2. 調査成果の概要	28

第4節 基本層序	37
----------	----

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 弥生時代前期以前

1. 墓跡	43
2. 遺構外	44
3. 小結	44

### 第2節 弥生時代後期

1. 竪穴住居跡	46
2. 掘立柱建物跡	65
3. 墓跡	67

4. 溝跡	75
5. 土坑	76
6. 遺物集中	81
7. 遺構外	81
8. 小結	82
第3節 古墳時代	
1. 流路跡	84
2. 遺構外	86
3. 小結	87
第4節 奈良・平安時代	
1. 竪穴建物跡	88
2. 掘立柱建物跡	110
3. 流路跡	111
4. 土坑	115
5. 遺構外	118
6. 小結	118
第4章 総括	
第1節 浅川扇状地遺跡群の後期弥生式土器の位置づけ	
1. 本村南沖遺跡出土の後期弥生式土器	119
2. 中期後半から後期前半の弥生式土器変遷試案	121
3. まとめ	126
第2節 浅川扇状地遺跡群の弥生時代集落の変遷	
1. 浅川扇状地と弥生時代の遺跡の立地	130
2. 本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期遺跡の様相	132
引用・参考文献	134
遺構一覧	137
遺物一覧	144
写真図版	
報告書抄録	
添付 DVD	

## 図版目次

第1図	地区設定図	3	第37図	SB09 遺物図	60
第2図	調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称	9	第38図	SB09 遺構図	61
第3図	本村南沖遺跡の位置	16	第39図	SB16 遺構図・遺物図	62
第4図	遺跡周辺地形区分図	17	第40図	SB17 遺物図	63
第5図	本村南沖遺跡周辺の鳥瞰図(南西より)	17	第41図	SB17 遺構図	64
第6図	遺跡周辺地質図	18	第42図	ST01 遺物図	65
第7図	地質図凡例	19	第43図	ST01 遺構図	66
第8図	周辺遺跡位置図	23	第44図	SM01 遺構図	67
第9図	周辺遺跡位置図 弥生時代	24	第45図	SM02 遺構図(1)	69
第10図	周辺遺跡位置図 平安時代	25	第46図	SM02 遺物図(1)・遺構図(2)	70
第11図	遺構分布全体図	29	第47図	SM02 遺物図(2)・遺構図(3)	71
第12図	遺構分布部分拡大指示図	30	第48図	SM02 遺物図(3)・遺構図(4)	72
第13図	遺構分布部分拡大図(1)	31	第49図	SM02 遺物図(4)・遺構図(5)	73
第14図	遺構分布部分拡大図(2)	32	第50図	SM03 遺構図	74
第15図	遺構分布部分拡大図(3)	33	第51図	SM03 遺物図	75
第16図	遺構分布部分拡大図(4)	34	第52図	SD04 遺構図	75
第17図	遺構分布部分拡大図(5)	35	第53図	SK127・220・261・287 遺構図・遺物図	77
第18図	遺構分布部分拡大図(6)	36	第54図	弥生時代後期 土坑分布図	78
第19図	基本層序	37	第55図	SD06~10 遺構図	80
第20図	断面位置図	39	第56図	SQ01 遺構図・遺物図	81
第21図	1・2区 土層柱状図	40	第57図	弥生時代後期 遺構外 遺物図	82
第22図	3区 土層柱状図	41	第58図	SD01 遺構図	85
第23図	1・2区 深掘りトレンチ柱状図	42	第59図	SD01 遺物図	86
第24図	SQ02 遺構図・遺物図	43	第60図	古墳時代 遺構外 遺物図	86
第25図	弥生時代前期以前 遺構外 遺物図	45	第61図	SB05 遺構図	89
第26図	SB01 遺構図	47	第62図	SB05 遺物図(1)	90
第27図	SB01 遺物図(1)	48	第63図	SB05 遺物図(2)	91
第28図	SB01 遺物図(2)	49	第64図	SB06 遺物図	92
第29図	SB02 遺構図	51	第65図	SB06・07 遺構図(1)	93
第30図	SB02 遺物図	52	第66図	SB06・07 遺構図(2)	94
第31図	SB03 遺構図(1)	54	第67図	SB07 遺物図	96
第32図	SB03 遺構図(2)	55	第68図	SB08 遺構図	97
第33図	SB03 遺物図(1)	56	第69図	SB08 遺物図	98
第34図	SB03 遺物図(2)	57	第70図	SB10 遺構図・遺物図	99
第35図	SB04 遺物図	58	第71図	SB11・12 遺構図	101
第36図	SB04 遺構図	59	第72図	SB11・12 遺物図	102
			第73図	SB13 遺構図(1)	103

第74図	SB13	遺構図(2)・遺物図	104	第85図	奈良・平安時代	遺構外	遺物図	118
第75図	SB14	遺物図	105	第86図	本村南沖遺跡	出土土器の様相		120
第76図	SB14	遺構図	106	第87図	壺形土器の変遷			127
第77図	SB15	遺構図(1)	107	第88図	甕形土器の変遷			128
第78図	SB15	遺構図(2)・遺物図(1)	108	第89図	鉢形土器・高坏形土器の変遷			129
第79図	SB15	遺物図(2)	109	第90図	弥生時代中期	栗林式期の遺跡		130
第80図	ST02	遺構図・遺物図	110	第91図	弥生時代後期	吉田式期の遺跡		131
第81図	SD02・03	遺構図(1)	113	第92図	弥生時代後期	箱清水式期の遺跡		131
第82図	SD02・03	遺構図(2)・遺物図	114	第93図	本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期箱 清水式期の遺構分布			133
第83図	SK062・232・233・237	遺構図	116					
第84図	奈良・平安時代	溝跡・土坑分布図	117					

## 表目次

第1表	文化財保護法に関わる諸届	2	第11表	竪穴建物跡一覧(平安時代)	137
第2表	受・委託契約一覧	2	第12表	掘立柱建物跡一覧	137
第3表	遺跡保護協議一覧	2	第13表	墓跡一覧	138
第4表	調査体制	3	第14表	溝・流路跡一覧	138
第5表	発掘だより・ホームページ	12	第15表	土坑一覧	138
第6表	現地説明会等	13	第16表	縄文土器一覧	144
第7表	周辺遺跡一覧(1)	26	第17表	弥生土器一覧	145
第8表	周辺遺跡一覧(2)	27	第18表	古墳・奈良・平安・中世土器一覧	151
第9表	SD03 出土歯骨一覧	112	第19表	石器一覧	159
第10表	竪穴住居跡一覧(弥生時代)	137	第20表	金属製品一覧	159

## 写真図版目次

PL1	本村南沖遺跡の基本土層1	PL12	本村南沖遺跡の遺構8
PL2	本村南沖遺跡の基本土層2	PL13	本村南沖遺跡の遺構9
PL3	本村南沖遺跡の基本土層3	PL14	本村南沖遺跡の遺構10
PL4	本村南沖遺跡の基本土層4	PL15	本村南沖遺跡の遺構11
PL5	本村南沖遺跡の遺構1	PL16	本村南沖遺跡の遺構12
PL6	本村南沖遺跡の遺構2	PL17	本村南沖遺跡の遺構13
PL7	本村南沖遺跡の遺構3	PL18	本村南沖遺跡の遺構14
PL8	本村南沖遺跡の遺構4	PL19	本村南沖遺跡の遺構15
PL9	本村南沖遺跡の遺構5	PL20	本村南沖遺跡の遺構16
PL10	本村南沖遺跡の遺構6	PL21	本村南沖遺跡の遺構17
PL11	本村南沖遺跡の遺構7	PL22	本村南沖遺跡の遺構18

PL23	本村南沖遺跡の遺構19	PL36	弥生時代後期土器7
PL24	本村南沖遺跡の遺構20	PL37	弥生時代後期土器8
PL25	本村南沖遺跡の遺構21	PL38	弥生時代後期土器9
PL26	本村南沖遺跡の遺構22	PL39	古墳時代土器
PL27	本村南沖遺跡の遺構23	PL40	奈良・平安時代土器1
PL28	本村南沖遺跡の遺構24	PL41	奈良・平安時代土器2
PL29	本村南沖遺跡の遺構25	PL42	奈良・平安時代土器3
PL30	弥生時代前期以前土器・ 弥生時代後期土器1	PL43	奈良・平安時代土器4
PL31	弥生時代後期土器2	PL44	奈良・平安時代土器5
PL32	弥生時代後期土器3	PL45	奈良・平安時代土器6
PL33	弥生時代後期土器4	PL46	奈良・平安時代土器7
PL34	弥生時代後期土器5	PL47	奈良・平安時代土器8
PL35	弥生時代後期土器6	PL48	石器1
		PL49	石器2・金属製品

## 添付 DVD 収録データ

遺構・遺物一覧  
 写真図版  
 自然科学分析報告書  
 周辺遺跡データ

# 第1章 調査の経緯と方法

## 第1節 発掘調査の経緯と作業経過

### 1. 調査に至る経緯

#### (1) 事業概要

平成22年、長野県は高等教育を取り巻く近年の環境変化を背景に、その現状と課題をまとめ、県が高等教育において果たすべき役割を整理した。また、その過程で長野県短期大学（以下「短期大学」という。）の現状と課題をまとめ、「長野県高等教育をより一層充実するため、短期大学を改組し、新たな公立4年制大学に転換することが必要」との結論から、平成25年「県立大学基本構想」を決定、めざすべき大学像を提示した。4年制大学移行に伴う短期大学施設整備は、現在の短期大学と長野市立後町小学校跡地を利用し、前者に校舎および体育館を建設、後者に新生学生寮や地域貢献型施設を建設するものとした（県立大学設立準備委員会2013）。

新県立大学の校舎および体育館予定地は、埋蔵文化財包蔵地として周知化された浅川扇状地遺跡群（長野市遺跡番号A-①）内であり、予定地の近傍には弥生時代後期から古墳時代にわたる大規模集落として知られる本村東沖遺跡、平安時代の集落として知られる三輪小学校遺跡等がある。当該予定地は未調査地であり、遺跡の内容や遺構の広がりに関する情報が不十分であった。このため長野県（総務部情報公開・私学課県立大学設立準備室、以下「設立準備室」という。）は、開発事業を円滑に進めるため、事前に建設予定地内の埋蔵文化財に関わる試掘調査を長野市教育委員会（以下「市教委」という。）に依頼した（H25.6.24）。市教委は、建設予定地内に試掘坑を設定、遺物包含層の存在とその広がりを確認、埋蔵文化財保護の措置が必要であると判断した（H25.9.24）。この結果を踏まえ、設立準備室は文化財保護法第94条に関する通知を、市教委に提出（H27.3.3）、市教委は、記録保存の措置（発掘調査）を長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）に委託して行うよう長野県に対して勧告した（H27.3.6）。一連の経過の中、設立準備室は本発掘調査を委託する目的で、埋文センターと埋蔵文化財調査のための調整協議を重ね（H25.10.11～第3表参照）、平成27年4月1日付けで埋蔵文化財調査のための業務委託契約を締結した。

#### (2) 試掘調査

市教委は、平成25年8月13日および14日に、開発予定地内14箇所（短期大学構内）に試掘坑を設定した。その結果、8箇所（1～3、9、10～13試掘坑）に遺物包含層を確認、埋蔵文化財の保護措置の必要性が示された（H25.9.24付け25長埋5-11号）。

開発予定地のうち、遺物包含層が確認できた部分は、グラウンド西側および駐車場・遊具場一帯（約3,000㎡）、付属幼稚園舎、職員宿泊棟、北棟周辺（約3,000㎡）である。グラウンド東側および体育館周辺では、遺物包含層を確認できず、その理由として現校舎建設および旧校舎の建設・解体時に埋蔵文化財への破壊があったと推定した。

#### (3) 本発掘調査

平成27年4月7日から、埋文センターによる本発掘調査が始まった。短期大学はもとより、移転の決

## 第1章 調査の経緯と方法

まった付属幼稚園の運営（4月～5月）、解体工事着手（7月～）との工程調整に関わりながら、発掘調査は進められることとなった。幼稚園運営期は、主にグラウンド東側（業務箇所3区）に試掘溝を設定し、破壊が及んでいるとされた範囲の内容確認調査を実施した。結果、遺構および土器破片1点も出土することなく、広範囲にわたりグラウンド造成に伴う削平があったと判断した。駐車場・遊具の解体期（5月～7月）、幼稚園舎および職員宿泊棟の解体期（7月～9月）は、グラウンド西側（業務箇所2区）や旧テニスコート部分（業務箇所1a区・1b区）の面調査を実施し、弥生時代から平安時代の堅欠住居跡や墓跡を調査した。最後に、幼稚園舎および職員宿泊棟部分を調査して11月30日で発掘作業を終了した。

### （4）遺跡の名称

市教委は、平成27年5月1日、6月3日に遺跡の調査状況を確認し、周辺遺跡の調査内容を加味した現地指導を埋文センターに行った。その中で、浅川扇状地遺跡群内における当該遺跡の位置付けは、北400mにある本村東沖遺跡に隣接する遺跡であり、そこでの調査成果（長野高校校舎建設地および市営住宅上松東団地2号棟建設地）とは集落時期を違えており、弥生時代後期前半を中心とする集落遺跡として、本村南沖遺跡（ほんむらみなみおきいせき）と評価、長野市遺跡番号 A503 を符号した。

第1表 文化財保護法に関する諸届

遺跡名 (調査年度)	発掘届 (法92条1項)		発掘許可通知 (法92条2項)		発掘終了報告		埋蔵物発見届 (遺失物法)		埋蔵文化財保管届		文化財認定 (法102条)			
	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	認定日	文書番号		
浅川扇状地 遺跡群 (H27)	H27.3.5	36長埋 第14-4号	H27.3.17	36教文 第6-18号	H27.12.4	27長埋 第4-8号	H27.12.4	27長埋 第2-7号	H27.12.4	27長埋 第3-7号	H27.12.15	27長埋 第106号	H27.12.28	27教文 第529号

第2表 受・委託契約一覧

年度	埋蔵文化財発掘調査事業名	契約期間	契約額(円)	作業内容
H27	平成27年度 新築立大学施設整備事業	H27.4.1～H28.3.31	78,325,000	発掘作業 基礎整理作業
H28	平成28年度 新築立大学施設整備事業	H28.4.1～H29.3.31	24,246,000	本構整理作業 報告書発行

### （5）遺跡協議

遺跡保護のための打ち合わせ等協議は以下のとおりである。

第3表 遺跡保護協議一覧

	出席者	協議内容
平成25年	10月11日 設立準備室・短期大学事務局・埋文センター	1 埋蔵文化財調査の時期と調査箇所、費用概算 2 付属幼稚園の運営等 3 埋蔵文化財調査の方法
	10月25日 設立準備室・埋文センター	1 埋蔵文化財調査の時期と費用概算 2 工事用進入路の取り扱い
平成26年	6月2日 設立準備室・埋文センター	1 埋蔵文化財調査の時期と期間 2 工事用進入路の取り扱い
	11月12日 設立準備室・埋文センター	1 埋蔵文化財調査の時期と手順、費用概算 2 工事用進入路の取り扱い
平成27年	3月6日 設立準備室・短期大学事務局・埋文センター	埋蔵文化財調査の準備と開始時期
	6月3日 設立準備課（旧設立準備室）・県教育委員会事務局・市教委・埋文センター	埋蔵文化財調査と校舎建設工事との調整
	6月16日 設立準備課・埋文センター	付属幼稚園解体に伴う1期・2期工事の区分
	7月14日 長野県建設部施設課、設立準備課、短期大学事務局・埋文センター・建設関係4社	付属幼稚園解体1期工事の実施と発掘調査工程等
	7月23日 短期大学事務局・埋文センター・建設関係者	3者で毎週水曜日に現地定例打合せ開始7/23～
	8月6日 短期大学事務局・埋文センター・建設関係3社	付属幼稚園解体1期工事の実施と発掘調査工程等
	8月28日 設立準備課・短期大学事務局・埋文センター・建設関係2社	付属幼稚園解体1期工事の実施と発掘調査工程等
	9月3日 長野県建設部施設課、設立準備課、短期大学事務局・埋文センター・建設関係3社	付属幼稚園解体1期工事の実施と発掘調査工程等
	9月17日 長野県建設部施設課、設立準備課、短期大学事務局・埋文センター・建設関係2社ほか	付属幼稚園解体2期工事の実施と発掘調査工程等
	11月5日 長野県建設部施設課、設立準備課、短期大学事務局・埋文センター・建設関係2社	付属幼稚園解体2期工事の実施と発掘調査工程等
	11月25日 設立準備課・埋文センター・建設関係1社	H27年度発掘調査の終了と現地引渡し。
12月3日 設立準備課・埋文センター	H27年度発掘調査の終了と現地引渡し。	
12月17日 設立準備課・埋文センター	1 H27年度の事業進捗状況 2 H28年度事業計画等	



## 2. 発掘作業と整理作業の経過

### (1) 発掘作業

平成27年度に発掘調査を行った。新県立大学施設整備事業に伴う発掘調査であり、施設建設予定地に調査区が設定された。調査区を1区から3区に区分し、調査を実施した(第1図)。

1区・2区は表土を重機で除去したのち、遺構検出を行い、弥生時代、古墳時代、平安時代を主体とした遺構の調査を実施した。3区は内容確認のためのトレンチ調査を実施し、市教委の試掘結果と同様包含層の分布が認められなかったため面調査は行わなかった。

発掘作業期間と調査面積は以下のとおりである。

平成27年4月7日から平成27年11月28日 6,000㎡

### (2) 整理作業

図面、写真、遺構等の台帳類作成、遺物の洗浄と注記等の基礎整理は平成27年度に実施した。また遺物の分類、接合・復元作業も平成27年度に実施した。

平成28年度は遺物の実測、トレス、写真撮影、遺構図版作成等本格的に整理作業を開始した。図版組、原稿執筆をし、報告書の印刷製本を行った。

## 3. 調査体制

調査体制は、第4表のとおりである。

第4表 調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成27年度	会津敏男	平林 彰	町田勝則	長谷川桂子、大澤泰智、鈴木時夫
平成28年度	会津敏男	平林 彰	町田勝則	長谷川桂子
平成27年度 発掘作業員 大澤紅美、岡村文雄、上畑幸子、菅雅孝、竹内福一、竹内美枝子、竹内鈴子、土屋美晴、傳田早苗、徳竹知徳、徳竹寿幸、徳永理樹、戸谷利男、中沢和剛、中村かね子、中村國男、中村誠、松本正美、丸山高資、山岸あや子、山口良則、若林敏、和田明				
平成27～28年度 整理作業員 阿部高子、市川ちず子、伊藤由美、猪俣万里子、白井博子、大内秀子、小根山貞子、柄澤登紀子、窪田順、窪田翔、小池美香、児玉匡子、小林愛、近藤朋子、坂田恵美子、塩野入奈菜美、島田由美、清水秋子、清水栄子、相馬麻織、祖山克彦、高松法子、塚田晴美、土屋悦子、中村智恵子、松本眞行、丸山千夏、柳原澄子、山下千幸				



第1図 地区設定図

## 4. 調査日誌抄

平成27年度（発掘作業）

- 4月1日 受・委託・重機借上・現場建物運搬等・安全対策  
契約締結 発掘作業開始（～11月30日）
- 4月8日 重機（0.45m）搬入
- 4月10日 安全対策（安全鋼板・防塵ネット・単管バリケード）  
施工
- 4月13日 3区 重機によるトレンチ掘削開始
- 4月23日 現場建物（プレハブ・トイレ）運搬・設置
- 4月24日 電気仮設工事（契約締結4月20日）
- 4月28日 測量業務委託打ち合わせ（契約締結4月28日）
- 5月1日 3区 トレンチ調査終了 重機による埋め戻し
- 5月7日 発掘作業員作業開始（～11月30日）  
水道仮設工事（契約締結4月22日）  
契約変更等に関する協議
- 5月8日 敷鉄板設置
- 5月11日 1a区 重機による表土掘削開始 遺構検出調査開始  
流路跡SD01・02・03検出調査
- 5月14日 測量業務委託 基準杖設定 単点測量等開始
- 5月15日 普及啓発「発掘だより」No.1発行 以降7号発行  
（6月3日No.2・7月8日No.3・8月19日  
No.4・9月11日No.5・10月16日No.6・11月24  
日No.7・12月17日No.8）
- 5月20日 2c区 重機による表土掘削開始
- 5月21日 安全対策（安全鋼板）撤去
- 6月2日 1a区 調査終了・重機による埋め戻し
- 6月3日 発掘調査に関する協議（第1回）
- 6月4日 2c区 遺構検出・調査開始  
竪穴住居跡SB01・02検出調査
- 6月9日 1b区 重機による表土掘削開始
- 6月15日 重機（0.25m）・クローラー搬入
- 6月16日 幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第2回）
- 6月18日 1b区 遺構検出 調査開始  
竪穴住居跡SB03検出調査  
墓跡SM01検出調査
- 6月22日 2b区 重機による表土掘削開始
- 7月1日 短期大学生 遺跡見学（58名）
- 7月6日 1b区 調査終了 重機による埋め戻し  
2b区 遺構検出 調査開始



重機による表土掘削



掘削り



遺構調査



遺物出土状態図作成

- 7月7日 敷鉄板撤去・搬出 1a・1b区 調査区引き渡し
- 7月10日 2a区 重機による表土掘削開始
- 7月14日 2b・2c区 空堀による全景写真撮影  
幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第3回）
- 7月17日 2b区 調査終了 重機による埋め戻し
- 7月22日 2a区 遺構検出 調査開始  
竪穴住居・建物跡SB04～10検出調査  
墓跡SM02検出調査
- 7月23日 長野女子高校生 遺跡見学（36名）定例連絡会  
3区 調査区引き渡し
- 7月27日 現地公開（～7月31日）来訪者 計280名
- 7月30日 定例連絡会
- 8月6日 幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第4回）  
安全対策（防塵シート）移設
- 8月20日 定例連絡会
- 8月26日 短期大学生 発掘体験（17名）
- 8月27日 定例連絡会
- 8月28日 幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第5回）
- 9月3日 幼稚園舎解体と調査工程に関する協議（第6回）
- 9月7日 1c区 重機による表土掘削開始
- 9月10日 定例連絡会
- 9月11日 2a区 高所作業車による全景写真撮影
- 9月15日 2c区 調査終了 重機による埋め戻し
- 9月17日 長野県議会議員5名視察  
解体工事と調査工程に関する協議（第7回）
- 9月25日 発掘作業員増員に関する協議
- 9月28日 水道延長仮設工事
- 9月29日 2a区 調査終了 重機による埋め戻し  
1c区 遺構検出 調査開始  
竪穴住居・建物跡SB11～17検出調査  
掘立柱建物跡ST01検出調査  
墓跡SM03検出調査  
墓跡SQ02検出調査  
流路跡・土坑SD01～10検出調査
- 10月1日 発掘作業員増員
- 10月7日 短期大学生 講義に伴う遺跡見学（110名）
- 10月8日 定例連絡会
- 10月15日 定例連絡会
- 10月18日 短期大学「六鈴祭」に伴う現地公開（見学者162名）
- 10月21日 調査研究員の増員に関する協議



遺構検出



写真撮影



土器洗浄



土器接合

第1章 調査の経緯と方法

10月22日	定例連絡会	平成28年度（整理作業）	
10月31日	安全対策(防塵シート)撤去 2区 調査区引き渡し	原稿執筆、遺構図トレス、遺構図版編集、遺物の分類、接合、 実測、トレス、遺物図版編集、遺物写真撮影、写真図版編集 を行い、報告書を刊行。	
11月1日	調査研究員増員		
11月5日	解体工事と調査区埋め戻しに関する協議（第8回）	4月1日	受委託契約締結
11月11日	1c区 空撮による全景写真撮影		本格整理作業開始（～3月31日）
11月12日	定例連絡会	4月12日	本格整理作業員作業開始（～3月16日）
11月24日	1c区 調査終了 重機による埋め戻し		原稿執筆、遺構図デジタルトレス（～7月13日）
11月25日	現地引き渡しに関する協議		土器実測開始（～7月6日）
11月30日	仮設水道・仮設電気撤去 安全対策（単管バリケード）撤去 発掘器材運搬作業 発掘作業員作業終了 発掘作業終了	4月15日	金属製品（5点）保存処理開始（～7月21日）
12月1日	基礎整理作業開始（～3月31日） 基礎整理作業員作業開始	5月6日	小山岳夫氏（御代田町）弥生土器見学
12月2日	現場建物（プレハブ・トイレ）撤去	5月26日	市澤英利（（一財）長野県文化振興事業団理事） 弥生土器見学
12月3日	現地引き渡しに関する協議（第9回） 現地引き渡し	6月7日	石器実測開始（～8月10日）
12月4日	埋蔵物発見届および発掘調査終了報告等	6月8日	科学分析委託業務（付着物分析）契約締結 実施 打ち合わせ 分析試料引き渡し
12月17日	予算執行状況および来年度予算確認等に関する協議 （第10回）	6月10日	土器トレス開始（～7月8日）
12月24日	科学分析委託業務（C14年代測定）打ち合わせ 分析試料引き渡し（契約締結12月21日）	6月27日	写真撮影用土器着色開始（～7月15日）
平成28年		7月7日	長野市立三陽中学生 職場体験で作業見学
1月6日	科学分析委託業務（花粉・珪藻・プラント・オバ ール分析）打ち合わせ 分析試料引き渡し（契約 締結12月28日）	7月13日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大
2月4日	遺跡報告会		
2月14日	長野県埋蔵文化財センター出土品展 『掘るしんじのいのい2016』開始（～2月19日） 出土物展示		
3月8日	科学分析委託業務（C14年代測定）分析結果報告 書一式納品 科学分析業務委託（花粉・珪藻・プラント・オバ ール分析）分析結果報告書一式納品		
3月10日	基礎整理作業員作業終了		
3月11日	測量業務委託 成果品一式納品		
3月12日	長野県立歴史館「長野県の遺跡発掘2016」開始 （～6月26日）出土遺物および写真パネル展示		
3月31日	本年度委託契約終了		



土器復元



土器実測

	学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員による出土動物歯骨鑑定指導	10月12日	長野市立松代中学生 職場体験で作業見学
		10月18日	小諸高校生 キャリア教育で作業見学
7月19日	普及啓発「発掘だより」No.9発行 以降1号発行 (1月18日No.10)	10月22日	短期大学「六鈴祭」において出土品展開催 (~23日) (167名)
7月25日	長野市立川中島中学生 職場体験で作業見学	10月28日	若槻養護学校中学部で出前授業 (社会科授業「遺跡に親しむ」)
7月26日	長野市立篠ノ井東中学生 職場体験で作業見学		
8月2日	科学分析業務委託 (付着物分析) 成果品一式納品		
8月3日	金属製品実測開始 (~8月19日)	11月28日	資料調査 愛知県埋蔵文化財センター
8月8日	遺物写真撮影委託業務打ち合わせ、実施 (~9月1日) (契約締結 7月27日)	11月29日	資料調査 岐阜県埋蔵文化財センター
8月24日	資料調査 長野吉田高校出土遺物について 長野市埋蔵文化財センター	12月5日	長野合同庁舎ロビーにおいて出土品公開 (~15日)
9月5日	金属製品トレス開始 (~9月9日)	12月27日	本報告書印刷製本等委託業務 (明和印刷 (株)) 契約締結 打ち合わせ
9月8日	国立長野工業高等専門学校学生インターンシップ受け入れ (~9日)	平成29年	
9月20日	中間報告 (設立準備課)	1月23日	笹澤浩 (元長野県文化財保護審議委員) による指導 (吉田式土器)
9月27日	写真撮影委託 成果品一式納品	2月18日	長野県埋蔵文化財センター出土品展 『掘るしん in しのい2017』 開始 (~2月24日)
10月11日	石器トレス開始 (~11月11日) 長野市立犀陵中学生 職場体験で作業見学		出土遺物展示
		3月15日	報告書刊行



遺構デジタルトレス



遺物写真撮影



出土動物歯骨鑑定指導



吉田式土器の指導

## 第2節 発掘作業と整理事業の方法

### 1. 発掘作業の方法

埋文センターでは調査の統一を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。

#### (1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡（あさかわせんじょうちいせきぐん ほんむらみなみおきいせき）  
遺跡記号 B A S M

埋文センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡を示す「B」、2文字目および3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。ただしすでに浅川扇状地遺跡群では埋文センターで吉田地区・桐原地区において発掘調査を行っており、その遺跡記号に「BAS」を用いているため、4文字目のアルファベットを付け区別した。各種記録類や遺物の注記に上記の遺跡記号を使用している。

#### (2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、遺構の形状および特徴で区分した。

遺構番号は時代等にかかわらず、検出順に付けた。調査の結果、遺構でないことが判明した場合は欠番とした。

今回の発掘調査で用いた遺構記号は以下の種類がある。

S B : 2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。

【**竪穴住居跡・竪穴状遺構**】

ただし平安時代の同形状の掘り込みについては、【**竪穴建物跡**】と呼称した。

S D : 溝状の掘り込み。【**溝跡、自然流路ほか**】

S K : 単独、もしくはほかの掘り込みとの関係が認められないS Bよりも小さな掘り込み。

【**土坑、土坑墓**】

S M : 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。【**土坑墓、土器棺墓、周溝墓**】

S Q : 遺物が面的に集中するもの。【**遺物集中**】

S T : S Bより小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【**掘立柱建物跡**】

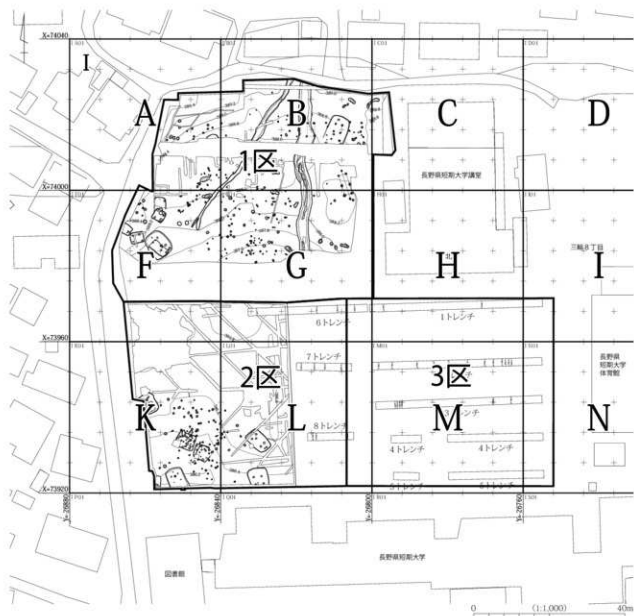
なお、S B内の柱穴・貯蔵穴等やS Tを構成する個々の掘り込みにはピット (Pit) を付した。

#### (3) 調査グリッドの設定と呼称 (第2図)

国土地理院の平面直角座標系第Ⅳ系の原点を基点 (X = 0.0000, Y = 0.0000) に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

大々地区は200m × 200mの区画で、ローマ数字で示した。X = 74.040, Y = 26.880を基準として調査対象地区全体にかかる1区画を設定し、Iと表記した。

大地区は大々地区を40m × 40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yまでの大文字ア



A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

大々地区  
200m

大地区  
40m

大地区(40×40mグリッド):A・B・C…Y

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

大地区  
40m

中地区  
8m

中地区(8×8mグリッド):1・2・3…25

グリッド名の呼称例  
8mグリッドの記載例: I G07

第2図 調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称

ルファベットの用いた。中地区は大地区を8m×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区である。

#### (4) 調査区の区割りの設定 (第1図)

グリッドとは別に調査区を1区～3区に分割した。1区、2区では表土を重機で除去し、遺構検出を行った。3区では重機で内容確認のトレンチ調査を行った。

#### (5) 遺構の発掘

遺構検出はIV層とした地山の上面で行った。ただし、遺物包含層であるIII層を重機で掘削中に遺構を認めた場合はIII層中で検出を行い、遺構調査を実施した。調査面は1面である。検出された遺構の調査では、平面で遺構の形状や重複関係を把握してから精査にとりかかった。断面で遺構埋土を観察・記録し、掘り下げ、完掘状態を記録した。堅穴住居・建物跡は掘り上げて記録を行った後、床面下の状態を確認して調査を終了した。

遺物は遺構ごとに出土層位を分けて取り上げた。堅穴住居跡の埋土中の遺物は遺構内をセクションポイントを結んだ線で4分割し、北・南・東・西で分けた。出土地点の記録の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付けて取り上げた。遺構に属さない遺物は地区単位で取り上げた。金属器、有機質等の脆弱な遺物は脆弱遺物台帳を作成し遺物を管理した。

#### (6) 遺構の記録

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘作業員が行った。前記の測量基準杖による簡易遣り方測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。遺構測量は、中地区(8m×8m)単位に図面用紙に記録した割付図と、必要に応じて個別の遺構ごとに図面用紙に記録した個別図を作成した。断面図はすべて図面用紙に記録した。遺構図の縮尺は1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、トレンチ位置図、調査区範囲、地形の測量は業務委託で実施した。

遺構の撮影は一眼レフデジタルカメラとマミヤ7Ⅱ(6×7)を用いてモノクロネガフィルム(ネオパン100)・カラーリバーサルフィルム(フジクローム100F)で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼き付けは業者に委託した。また空中写真撮影による調査区の遺構全体写真を業務委託により実施した。デジタル写真のファイル名は遺跡記号と通し番号を組み合わせたものとし、LAWデータとJPG形式のデータを保存した。

## 2. 整理作業の方法

### (1) 遺物の整理について

ブラシを用いた水洗作業の後、注記マシンによる注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。土器、石器、金属器、歯骨類の素材別に整理を進めた。土器・石器は1cm角以下程度の微細な資料を除きすべてに注記をした。遺跡名BASM、出土地点または層位を以下の略号を用いて注記をした。

注記に用いた略号 床：床面・床下、表：表土、検：検出面、採：表採、カク：かく乱、

Z：出土地点不明

土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。接合作業は遺構の周辺出土土器を含めて遺構ごとに実施した。切り合う遺構は、相互の遺構間接合を実施し、器形が推定できる堅穴住居・建物跡出土の土器は、ほかの住居跡との遺構間接合を実施したが、土器群全体の遺構間接合の実態を把握するには不十分である。実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。また必要に応じて拓本も行った。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。



石器・石製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。剥片については接合作業を実施した。実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。

金属器は、発掘調査後はシリカゲルを入れてタッパーに保管し、長野県立歴史館においてX線透過写真撮影を行った後、金属製品と判断した資料については保存処理を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレスは製図ペンを用い手作業で実施した。

歯骨片については水洗・乾燥後、鑑定を実施し、すべて破片のため写真・図化の必要がないと判断された。

トレスした遺物図は、画像編集ソフトPhotoshopを用いてデジタルスキャニングと画像処理を行い、描画ソフトIllustratorと組版ソフトInDesingを用いてデジタル図版データを作成した。

遺物写真撮影は業者に委託し実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラと6×7判カラーリバーサルフィルムを使用した。

掲載した遺物については観察表を作成した。(第16～20表)

### (2) 遺構図面の整理について

遺構図面類はグリッドを基準にして図面用紙に1/20で測量したものと、委託業務で単点測量後結線しデジタルトレスしたものがある。原図は記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。図面用紙に記録した平面図は、委託業務でデジタルトレスを行い合成し、グリッドごとに1/20で出力したものを第2原図とした。基礎整理作業で作成した修正図や第2原図をもとに、遺構配置図(全体図)、個別遺構図、土層図等を作成し、描画ソフトIllustratorを用いてデジタルトレスを行い、組版ソフトInDesingを用いてデジタル図版データを作成した。

### (3) 写真記録の整理

フィルム写真はアルバムに収納し、撮影内容を注記した。デジタル写真はポータブルハードディスクとDVDに記録しBASM0002～BASM5420(IGP0002～IGP5420)の通し番号をファイル名とし、ファイル名と撮影内容を記入した台帳を作成した。

## 3. 遺物と記録の収納

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納し、遺物収納台帳を作成した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号(図面番号)を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関連写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、DVDおよびポータブルハードディスクに記録した。

### 第3節 遺跡・遺物の公開方法

#### 1. 公開の方法

埋文センターが行う埋蔵文化財の公開は、発掘作業時に行うもの、整理作業時に行うもの、報告書刊行後に行うもの等、3つの段階がある。本書では、発掘作業時に行うもの、整理作業時に行うものについて取り上げる。

##### (1) ホームページでの公開、発掘だよりの配布

発掘調査の情報を迅速に、そして的確に公開することは、発掘調査の透明性確保という観点において重要である。埋文センターでは、月に1回程度、公式ホームページに調査情報を掲載するとともに、遺跡来訪者だけでなく遺跡周辺の住民に対し「発掘だより」を配布して、情報の早期公開・共有化を図るよう努めている。浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡では平成27年度に8回、平成28年度に3回、調査状況をホームページに掲載した。また「発掘だより」は平成27年度に8回、平成28年度に2回、配布を行った。内容については、第5表のとおりである。

##### (2) 現地説明会、展示会の開催

「現地説明会」は発掘調査を進める過程で、調査状況を広く一般に公開し、説明を加えることで、より分かりやすい馴染みのある存在として遺跡を周知できる。埋文センターでは、年に1～2回程度、発掘調査の進行状況に応じて現地説明会を実施するように心掛けている。時に遺跡の周辺環境により多くの見学者を受け入れることのできない場合は、現地説明会の方法を、遺跡公開期間を限定し随時見学者を受け入れる「現地公開」に変更、開催通知範囲の広狭、公開期間の長短等を工夫し実施している。浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡では、見学者駐車場のスペースが確保できないことから「現地公開」のスタイルで平成27年7月27日（月）から31日（金）までの間遺跡を公開した。また短期大学六鈴祭において六鈴祭実行委員会からの依頼があり、10月18日（日）に遺跡を公開した。短期大学構内での発掘作業であることから、短期大学生や教職員の関心が高く、授業として現地や出土遺物の公開を行った。

「展示会」は遺跡の所在する地域とより広い地域を対象にそれぞれ場所を選定し、展示公開した。開催内容については、第6表とおりである。

第5表 発掘だより・ホームページ

番号	発行日	掲載内容	HP掲載日
1	平成27年5月15日	1. 本格的に発掘調査を開始しました 2. 浅川扇状地遺跡群とは 3. 4月の調査 4. 豆知識「延喜式」 ※発掘開始のお知らせ	平成27年4月22日
2	6月3日	1. 5月の調査 2. 豆知識「小型丸底土器」	5月20日
3	7月8日	1. 6月の調査	6月9日
4	8月19日	1. 7月の調査 2. 豆知識「吉田式土器とは」 ※7/27～31現地説明会の報告	7月13日
5	9月11日	1. 8月の調査 2. 豆知識「再葬とは」 ※8/26短期大学生の発掘体験の報告	8月19日
6	10月16日	1. 9月の調査 2. 豆知識「遺跡の名まえ」 ※浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡の名称を周知。10/7短期大学「地域と文化」受講生見学の報告	10月1日
7	11月24日	1. 10月の調査 2. 豆知識「掘立柱建物とは」 ※10/18短期大学学園祭「六鈴祭」遺跡公開の報告	11月10日
8	12月17日	1. 11月の調査 2. 調査成果 3. 豆知識「片口土器とは」 ※発掘終了のお知らせ	平成28年1月8日
9	平成28年7月14日	1. 遺構実測園のトレス・編集作業 2. 土器の実測・トレス作業 3. 埋文センター施設公開のお知らせ	5月10日 7月13日
10	平成29年1月18日	1. 遺物写真撮影 2. 報告書の編集・版組・発行 ※「掘るしんしんしのい2017」のお知らせ	平成29年1月30日

第6表 現地説明会等

番号	実施日	公開の種類	参加者(数)	掲載内容
1	平成27年7月1日	現地見学会	短期大学生・ 教職員 63名	遺跡の概要説明および出土遺物の見学
2	7月23日	現地見学会	長野女子高生・ 教員 37名	遺跡の概要説明および出土遺物の見学
3	7月27日 ～31日	現地公開	一般 280名	遺跡の現地公開と概要説明 ※信濃毎日新聞23面(7/29)・長野市民新聞3面(7/25)に掲載記事
4	8月26日	発掘体験	短期大学生・ 教職員 17名	遺跡の発掘体験および出土遺物の洗浄体験
5	10月8日	現地見学会	短期大学生・ 教職員 111名	遺跡の現地公開および出土遺物の展示解説
6	10月18日	現地公開	一般 162名	遺跡の現地公開および出土遺物の展示解説 ※短期大学学園祭「第48回六鈴祭」に伴う遺跡現地公開
7	平成28年2月14日 ～19日	展示会	一般 265名	長野県埋蔵文化財センター出土品展 「探るしんしんしのい2016」 (於: 埋文センター展示室)
8	3月12日 ～6月26日	展示会	一般	長野県立歴史館発掘調査速報展2016
9	10月22日 ・23日	展示会	一般 167名	遺跡の概要説明および出土遺物の展示解説 ※短期大学学園祭「第49回六鈴祭」に伴う遺物展示公開
10	12月5日 ～15日	展示会	一般	長野県長野合同庁舎1階ロビー、遺跡速報展
11	平成29年2月18日 ～24日	展示会	一般	長野県埋蔵文化財センター出土品展 「探るしんしんしのい2017」 (於: 埋文センター展示室)



発掘日より



遺跡の現地公開と概要説明



短期大学生 遺跡の発掘体験



発掘体験記念バッジ



短期大学生 現地見学会



短期大学学園祭「第48回六鈴祭」に伴う遺跡現地公開



長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in しなのい2016」



短期大学学園祭「第49回六鈴祭」に伴う遺物展示公開



調査スタッフ

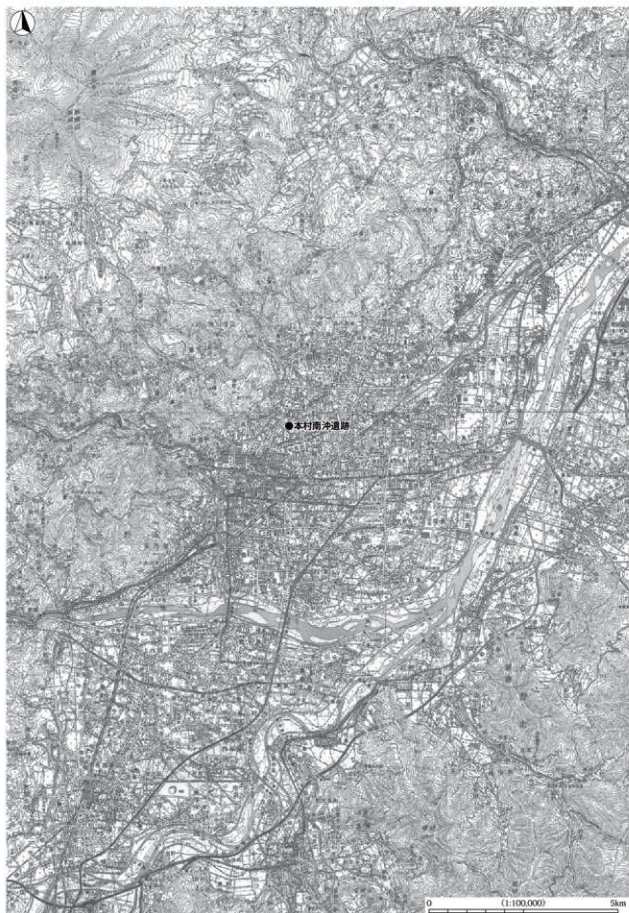
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

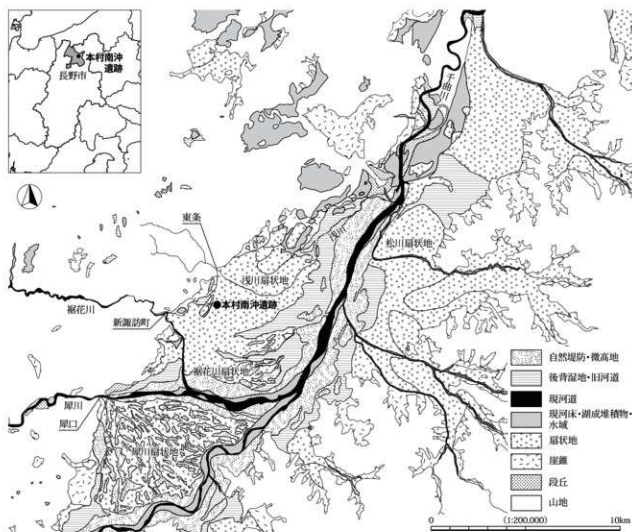
浅川扇状地遺跡群は長野盆地北西部に位置する（第3図）。長野盆地は西側に主に堆積岩類からなる標高900m以下の西部山地（丘陵）、東側に主に火山岩類からなる最高所2,000mの東部山地（河東山地）に挟まれた南北約30km、東西幅約8～10kmの紡錘形をしている。盆地の西縁山麓線は北北東-南南西の直線状で、長野盆地西縁断層が走っている。東縁の山麓線は屈曲している。周囲の山地からは河川が流入し下流部に扇状地を形成している。主なものに西部山地の南側から、犀川扇状地、裾花川扇状地、湯福川扇状地、浅川扇状地、東部山地から松川扇状地がある。盆地内を流れる千曲川はこれらの扇状地に影響を受けながら自由蛇行し、南南西から北北東に向かって流れ、自然堤防や後背湿地、旧河道等の氾濫原を形成している（第4図）。

犀川扇状地は犀口（標高370m）を扇頂とし南東方向に広がり、扇端が千曲川と接する。長野盆地内で最も大きい扇状地であり、勾配が4/1,000と緩いため千曲川氾濫原との明確な境がない。裾花川扇状地は新諏訪町（標高400m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地中心部が発達する。裾花川が長野県庁付近で方向を南に変え、犀川へ合流するのは江戸時代に人工的に川筋を掘削したためである。それ以前は県庁から東へ流れ千曲川と合流していた。現在市街地を流れる北八幡川、南八幡川等は裾花川の分流である。湯福川扇状地は善光寺の北西、箱清水の湯福神社（標高420m）を扇頂とし、裾花川の古い扇状地表面を覆う急勾配の新しい扇状地である。浅川扇状地は飯縄山（標高1,917m）南東麓を源流とする北浅川と南浅川が真光寺で合流した浅川が運搬した土砂で形成される。浅川東条付近（標高435m）を扇頂として南東方向に広がり、長野市街地が発達する。扇頂部で浅川は扇状地表面を開析するが、扇状地が開けてくるとかつては天井川を形成していた（現在では河川改修が進み解消されている）。浅川は富竹で流れの向きを南東から北東に変え、上駒沢で新田川を、下駒沢で駒沢川を合流し北流した後、上高井郡小布施町で千曲川と合流する。扇端側は千曲川氾濫原と接していて、最も標高が低いのは下駒沢（標高332m）である。また裾花川扇状地とも接し、境は善光寺下駅と東和田を結ぶ線である。浅川扇状地遺跡群はこの浅川扇状地上に立地し、多くの遺跡が登録されている（第5図）。

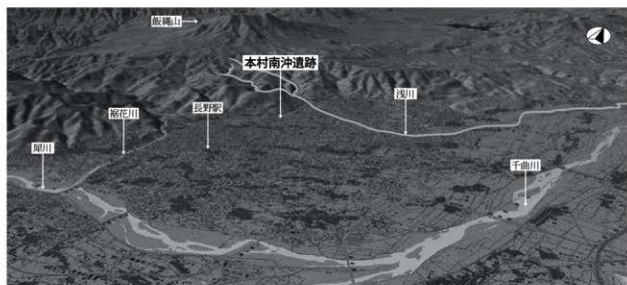
本村南沖遺跡は長野市三輪8丁目、短期大学構内に所在する。長野電鉄本郷駅から北西約500m、浅川扇状地扇央部分の西端で南東方向に傾斜する地形にあたり、標高は約387～390mを測る。遺跡の南西にある康楽寺墓地東側から短期大学の北西隅、長野県長野高等学校東縁を通り、湯谷小学校南西までの約1.5kmにわたって南南西-北北東方向に延び、2～4mほどの段差で幅100～200mの拗曲崖を伴う。城山断層（活断層研究会1980）といわれ、1847年（弘化4年）の善光寺地震によって動いたと考えられているが、この拗曲崖が1847年の善光寺地震1回で形成されたものか、それ以前の地震の影響があるかどうかは不明である。長野市が作成した1/3,000地形図（大正15年測量、昭和27年修正）によれば、遺跡周辺は田畑や桑畑、果樹畑が広がっている。



第3図 本村南沖遺跡の位置

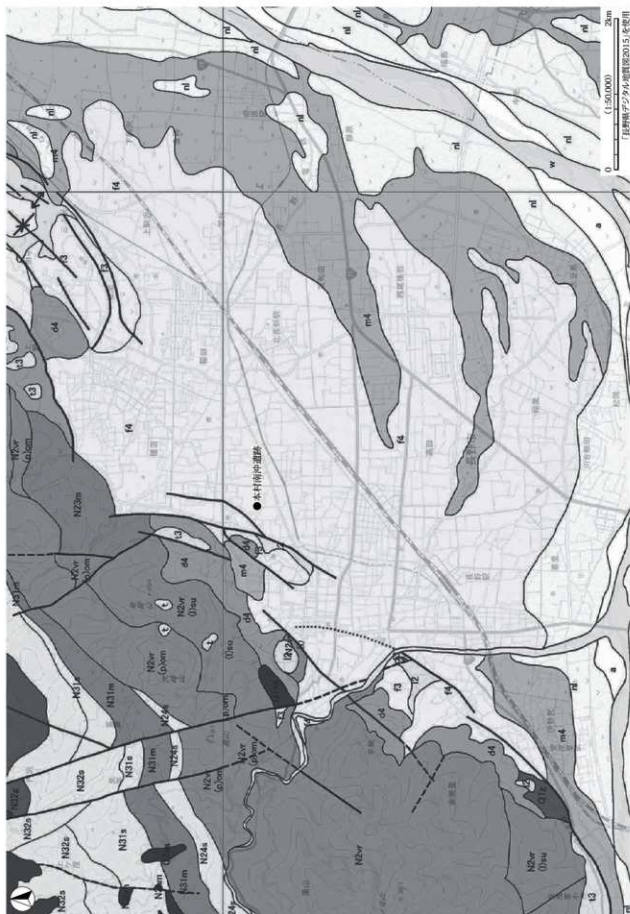


第4図 遺跡周辺地形区分図



カシミール 3Dにて作成

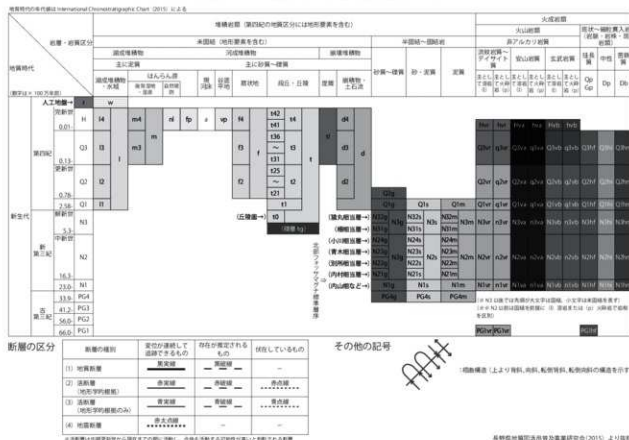
第5図 本村南沖遺跡周辺の鳥瞰図(南西より)



第6図 道路周辺地質図



長野県デジタル地質図 (2015) 統一地質凡例 (ver.0.8)



第7図 地質図凡例

浅川が運搬する土砂は後背地である新第三紀中新世、鮮新世、第四紀更新世の堆積物からなる (第6・7図)。下位より中新世の青木層相当層である半固結から固結の泥質の浅川泥岩層 (N23m)、中新世の小川層相当層である椀花凝灰岩部層の流紋岩質からデイサイト質の溶岩 (N2vr (l)) と火砕岩 (N2vr (p))、鮮新世の柵層である半固結から固結の砂・泥質岩 (N31s) と泥質岩 (N31m)、鮮新世の猿丸層である半固結から固結の砂質～礫質岩 (N32g) と砂・泥質岩 (N32s)、前期更新統である半固結から固結の砂質～礫質岩 (Q1g) が分布している。飯縄山は安山岩質の溶岩や火砕岩 (q2va) からなる成層火山で、時々溶岩ドームを形成している。今から25万年前に噴火を開始し5万年前まで活動していたと考えられている (長野県地質図活用普及事業研究会 2015)。

本村南沖遺跡西方の長野市城山丘陵には更新世中期末から後期にかけて堆積した南郷層が分布する。長野盆地内に形成された湖成堆積物で、盆地西縁に沿って分布する。全体に砂礫層、下部ほど礫層優勢である。礫種は亜円礫の安山岩、凝灰岩、円礫のチャート、粘板岩等の古期岩類で礫径は大礫以下である。浅川何去真光寺では油井が掘られ、石油の生産が行われた。現在は稼働しておらず、ループ橋の脇に石油井戸だけ残されている。浅川泥岩層からの産出である。真光寺のブランド薬師の南方および東方に分布する椀花凝灰岩層からベントナイト (白土) が採掘されていたが、現在は稼働していない。北郷では猿丸層に含まれる最大数10cmほどの亜炭層を資源種であった第二次世界大戦中に採掘していた。現在は採掘されていない。遺跡南西約20kmの長野盆地南部に矢崎山陶石鉱山 (千曲市八幡矢崎山) がある。この鉱山は椀花凝灰岩部層の流紋岩が熱水変質をして形成されたもので、耐火物の原料として利用された。現在は採掘されていない (加藤・赤羽 1986)。

## 第2節 歴史的環境

浅川扇状地遺跡群は長野市北部を代表する遺跡群である。水はけや日当たりが良いため人々にとって住みやすい場所であり、扇状地の広い範囲で各時代の人々が集落を営んだ痕跡が確認されている。

本村南沖遺跡（69）（図表番号）は浅川東条を扇頂に南東方向に広がる扇尖部分で、南東方向に傾斜する地形にあたり、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構と遺物が発見されている。そのなかでも、集落の構成は弥生時代後期前半と平安時代9世紀中頃から後半期にはほぼ限定されている。本節では、当該時代を中心に本村南沖遺跡（69）周辺の遺跡の概要を、時代ごとに述べる（第8～10図、第7・8表）（註）。

### 1. 周辺の遺跡

**旧石器時代**：旧石器時代の遺跡は、浅川源流に近い飯綱猫又池遺跡、飯綱大池遺跡等が確認されているが、浅川扇状地上およびその周辺では確認されていない。

**縄文時代**：浅川扇状地上で確認されている縄文時代の集落跡は比較的少ない。本遺跡に隣接する本村東沖遺跡（21）では晩期の土坑1基と、早期末から中期後半の多量の土器・石器が出土している。長野高校地点南側の緩斜面に縄文期の遺跡が展開する可能性が高いと考えられているが、調査による確認は行われていない。ほかに代表的な遺跡では、多量の土器や、球状耳飾りを中心に多彩な装身具が出土し、縄文時代を通して集落が営まれた松ノ木田遺跡（42）、早期から前期では住居跡や特殊磨石がみつかった牟礼バイパスA地点遺跡（103）等がある。中期では大規模な集落跡が営まれた檀田遺跡（16）、中期から後期の住居跡や土偶、ヒスイ製垂飾がみついている吉田古屋敷遺跡（45）、後期では敷石住居跡を検出した吉田四ツ屋遺跡（44）等がある。晩期の遺跡は非常に少なく、上述の遺跡のほか、吉田古屋敷遺跡（45）で遺物が出土する程度である。

**弥生時代**：中期後半の栗林式期には、檀田遺跡（16）、水内坐一元神社遺跡（78）、中俣遺跡（79）等で集落跡が確認されている。檀田遺跡（16）では微高地ごとに形成された複数の居住域と、居住域に近接する位置に設けられた墓域が検出されている。この時期の拠点集落であった可能性が高く、墓域も集団墓地的な性格であったと考えられる。後期初頭には吉田式の標式遺跡である吉田高校グラウンド遺跡（31）がある。吉田式期の集落跡は三輪地区ではこれまで確認されていなかったが、本村南沖遺跡（69）では今回の調査で吉田式期の住居跡を検出した。発見された新資料から浅川扇状地上の吉田式期の集落の広がりを検討する要素が得られた。後期前～後半には、箱清水式の標式遺跡である箱清水遺跡（152）をはじめとして、本村東沖遺跡（21）、長野女子高校校庭遺跡（24）、下宇木遺跡（26）等がある。本村東沖遺跡（21）上松東団地地点では円形周溝墓・木棺墓・土器棺墓が検出されており、この時期の墓域としての様子もうかがえる。

**古墳時代**：三輪地区では長野女子高校校庭遺跡（24）、下宇木遺跡（26）、三輪遺跡（27）等で集落跡が確認されている。浅川扇状地上では、古墳時代の中心的な集落跡として本村東沖遺跡（21）が挙げられる。上松東団地地点では前期の住居跡・遺物がみつかり、長野高校地点では中期から後期にかけての大型住居跡が集中傾向にある。出現期のカマド・間仕切り溝・ベッド状遺構等特殊施設の画一的配置もみられる。出土遺物には多量の古式須恵器、まとまって出土した石製模造品の未製品、手持勾玉や土鈴等祭祀的性格の強い特殊遺物等がある。このことから本村東沖遺跡（21）は古墳時代中期の中核集落であるとされる。また地附山前方後円墳を盟主墓とする地附山古墳群（117）と同時期の土器が多量に出土しており、地附山古墳群（117）との密接な関連性も考えられる。また、浅川端遺跡（30）では大陸とのつ

ながりを示す青銅製の馬形帯鉤が出土している。祭祀に関連する遺跡では、5世紀から7世紀の水辺の祭祀遺構が確認されている駒沢祭祀遺跡(38)がある。そのほか中期の三才古墳(120)、中期後半に比定される本堂原1号古墳(121)、後期の円墳で直刀や装飾品、馬具等が出土している湯谷東古墳群(55)、6世紀頃の築造と推定される南向塚古墳(139)等がある。

**奈良時代：**三輪地区においては三輪遺跡(27)三輪保育園地点で住居跡が確認されているが、ほかには遺物が少量出土するのみである。浅川扇状地上では浅川端遺跡(30)、吉田四ツ屋遺跡(44)、二ツ宮遺跡(39)、北陸新幹線調査地点(77)等があり、二ツ宮遺跡(39)では奈良時代後半頃に廃棄されたと考えられる瓦製鴟尾が溝跡から出土している。周辺では梶花川扇状地上の八幡田沖遺跡(82)、御所遺跡(83)、芹田東沖遺跡(84)等で集落跡が確認されている。

**平安時代：**本村東沖遺跡(21)、辰巳池遺跡(33)、芹田東沖遺跡(84)で8世紀末から9世紀代、二ツ宮遺跡(39)では前期から末期の集落跡が確認されている。10世紀から平安時代末期にかけては芹田小学校遺跡(81)、小坂屋遺跡(50)、寺村遺跡(86)、西方遺跡(85)、上中島遺跡(80)、御所遺跡(83)、牟礼バイパスC地点遺跡(105)、浅川西条遺跡(18)等が確認されている。

**中世・近世：**中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城跡(56)をはじめ本堀(65)・押鐘(58)・相木(57)・平林(74)・和田(東和田城(76)・西和田城(149))等の城館址がある。本村南沖遺跡(69)からは青磁片が出土したのみで、該期の遺構は確認されなかった。

## 2. 歴史的環境

旧石器時代には、浅川源流である飯綱高原の湖沼周辺に動物が集まり、人々は動物たちを追ってきてこの地を生活の舞台とした。続く縄文時代になると、山間地に住んでいた人々は徐々に長野盆地へと生活の場所を移動してくるようになる。

浅川扇状地で大規模な集落が形成され、本格的な開発が始まったのは弥生時代に入ってからである。稲作文化の伝来により、人々は山から平地へと移り住み家を構えるようになった。浅川の氾濫を受けない微高地には多くの集落がつくられ、社会の仕組みも縄文時代とは大きく変わる。後期の千曲川流域では地域色の強い「赤い土器のクニ」文化圏が形成され、弥生時代の終わり頃にはムラ長の墓が築造されるようになる。これらの墓跡からは鉄製武器等の副葬品がみつまっている。

古墳時代に入ると、大和政権によって広域を結ぶ道が整備された。この道は古東山道とよばれ、松本平や善光寺平へもこの道につながる支道が延びていたことが古墳の分布から確認できる。この頃には「王」の登場により地域的政治圏が形成されるようになり、長野盆地では前方後円墳が築造されている。5世紀以後はこの道を通じてカマドや馬匹・馬具、須臾器等が伝えられ、新しい文化が広まっていった。

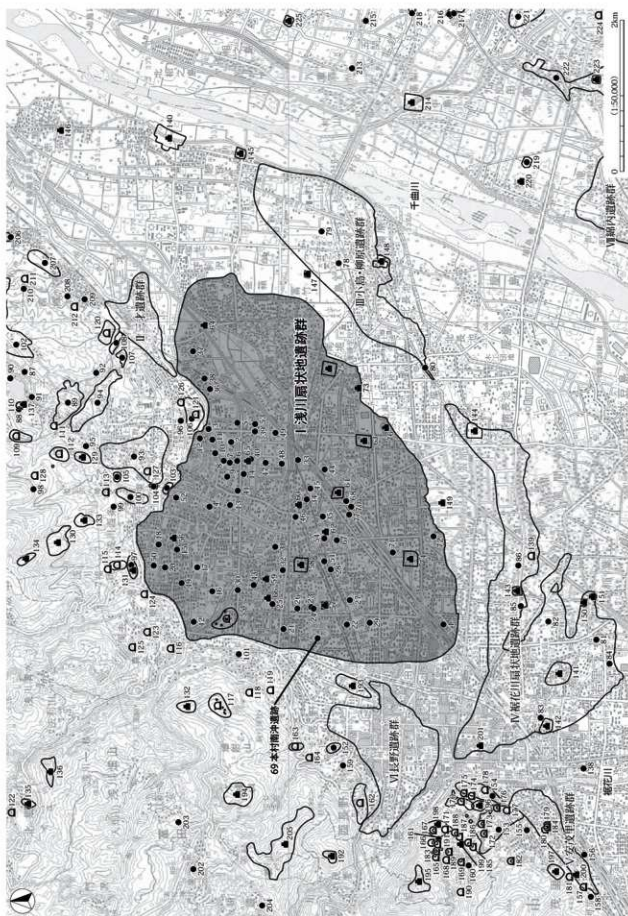
古代には古東山道等を母体とした令制東山道が整備され、支道を通じて長野の地でも陸上交通路の重要性が増大した。「善光寺縁起」によると、7世紀半ばに善光寺が建立され、以降長野の地は「三国一の霊場」善光寺の門前町として親しまれ、繁栄の大きな要因となった。

『日本三代実録』巻十二の清和天皇貞観八年(866年)二月七日の条に、「国司、講師が水内郡の三和・神部の両神に派遣され、奉幣・転読して憤怒を鎮める」と美和神社に関する記録が確認されている。美和神社は、「延喜式」神名帳記載の水内郡九座中の一社であり、祭神は三輪大物主・相殿に国業比売を祀る。医薬の神として信仰されている。創建年代の詳細は不明だが、同書の貞観三年(861年)には相殿に祀られる国業比売についての記録もあり、古くから美和神社が鎮座していたことがうかがわれる。「三輪」の地名はこの美和神社に起因するものとされ、中世には三和とも書いたようである。平安時代末期にはこの地域に信濃2牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢等の名称はその名残と考え

られる。広大な扇状地は好適な放牧地であったようだ。

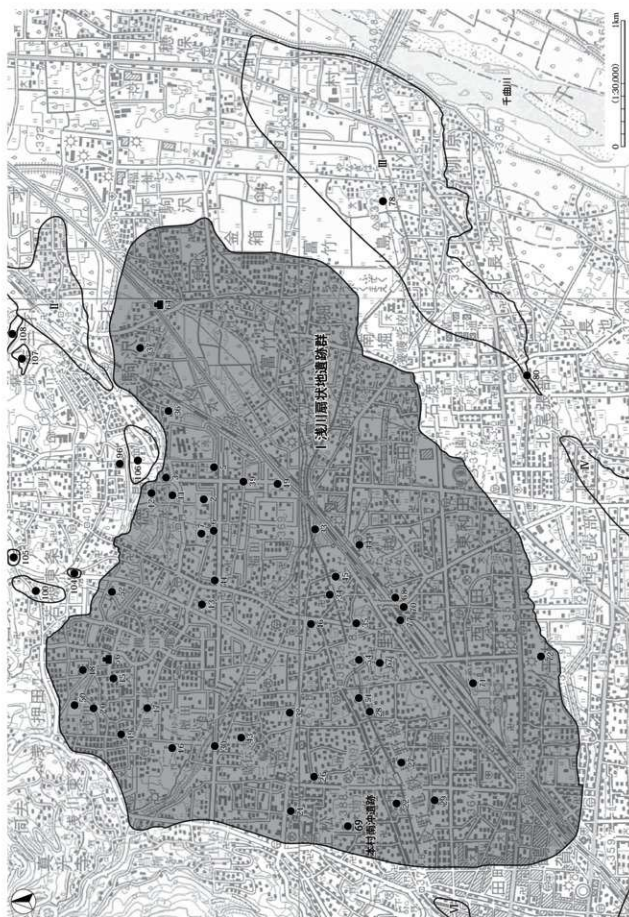
中世には幕府の政策により、焼失した善光寺の再建が行われる。善光寺信仰は全国に広がり、参詣者が増加するに伴って道も発達した。室町時代には戸隠・飯綱信仰と併せ多くの人々が長野市域を訪れた。近世には三輪の地にも北国街道が通り、善光寺へ参詣する人がこの地を行き来した。弘化4年(1847年)に発生した善光寺地震のときは、7年に1回の御開帳行事と重なり、全国から訪れた多くの参詣者が犠牲になった。被害は県北部の広い範囲におよび、火災や土砂災害・洪水等二次災害も深刻であった。

註 長野市が公開している長野市行政地図情報「道跡地図(埋蔵文化財)」(2016年現在)、須坂市が公開している「道跡詳細分布図」(2016年現在)、各教育委員会発行の道跡発掘調査報告書をもとに作成している。本節で用いる道跡に関しては、その出典を末尾の引用参考文献一覧に譲る。



第8図 周辺遺跡位置図





第10圖 周辺遺跡位置圖 平安時代

第7表 周辺遺跡一覧(1)

地図 番号	遺跡名	所在地 (長野市 は地区)	遺跡 番号	時代				
				縄 文	弥 生	古 墳	中 古 世	近 古 世
長野市								
I	浅川扇状地遺跡群		A-①	○	○	○	○	○
1	東坊町	長野	A-000	○				
2	徳間梅田	若槻	A-012	○	○	○		
3	三反田	若槻	A-013	○	○	○		
4	五ツ屋	若槻	A-014	○				
5	徳間神田	若槻	A-016				○	
6	徳間大南	若槻	A-017					○
7	徳間中南	若槻	A-018				○	
8	徳間春橋	若槻	A-019	○	○	○	○	○
9	徳間横田	若槻	A-020	○	○			
10	八幡社境内	若槻	A-022					
11	徳間寺下	若槻	A-023					
12	徳間古原敷	若槻	A-024		○			
13	北浦田	若槻	A-027		○			
14	稲田坂口	若槻	A-028	○				
15	屋敷田	浅川	A-033				○	
16	稲田	若槻	A-035	○	○	○	○	○
17	神楽橋	浅川	A-036	○	○	○	○	○
18	浅川新築	浅川	A-037		○	○		
19	浅川団地	浅川	A-039				○	
20	稲田	浅川	A-040				○	
21	本村東沖	長野	A-053	○	○	○	○	○
22	三輪小学校(二輪遺跡)	三輪	A-054	○	○	○	○	○
23	下字木B	三輪	A-055		○			
24	長野女子高校校庭	三輪	A-056	○				
25	古字木	三輪	A-057	○				
26	下字木	三輪	A-058	○	○	○	○	○
27	三輪	三輪	A-059	○	○	○	○	○
28	坂貝	三輪	A-060	○	○	○	○	○
29	本郷前	三輪	A-061	○	○	○	○	○
30	浅川通	吉田	A-062	○	○	○	○	○
31	吉田高校グラウンド	吉田	A-063	○				
32	信濃放送局前	吉田	A-064	○				
33	飯巴池	吉田	A-065	○	○	○	○	○
34	信濃吉田駅	吉田	A-066				○	
35	東部中学校	吉田	A-067	○	○	○	○	○
36	新沢新町	古里	A-072	○	○	○	○	○
37	上長町	古里	A-073	○	○	○	○	○
38	新沢惣紙	古里	A-074	○	○	○	○	○
39	二ツ宮	若槻	A-080	○	○	○	○	○
40	本郷	若槻	A-081	○	○	○	○	○
41	稲通	若槻	A-082	○	○	○	○	○
42	松ノ木田	浅川	A-084	○	○			
43	押鎌	吉田	A-085				○	
44	吉田四ツ屋	吉田	A-086	○	○	○	○	○
45	吉田古原敷	内田	A-087	○	○	○	○	○
46	吉田町東	吉田	A-088	○	○	○	○	○
47	天神木	若槻	A-089					○
48	橋爪	若槻	A-090	○	○			
49	権風堂	若槻	A-091	○	○	○	○	○
50	小坂屋	浅川	A-092	○	○	○	○	○
51	桐原宮西	吉田	A-093	○	○	○	○	○
52	道田	若槻	A-094	○	○	○	○	○
53	稲穂一里塚	若槻	A-095					○
54	桐原宮北	吉田	A-099	○	○	○	○	○
55	湯谷東古墳群	長野	A-110	○				
56	若槻皇城跡	若槻	A-204	○	○	○	○	○

地図 番号	遺跡名	所在地 (長野市 は地区)	遺跡 番号	時代				
				縄 文	弥 生	古 墳	中 古 世	近 古 世
57	恒本城跡(頼ノ木氏居館跡)		三輪	A-207				○
58	押鎌城跡	吉田	A-208					○
59	盛伝寺居館跡	吉田	A-209					○
60	善教寺居館跡	吉田	A-210					○
61	中絶居館跡(宮下氏館跡)	吉田	A-211					○
62	桐原宮東(高野氏館跡)	吉田	A-212					○
63	太田古原敷跡地	吉田	A-213					○
64	新沢城跡	古里	A-214				○	○
65	本郷城跡	若槻	A-215					○
66	字木古城跡	三輪	A-221					○
67	桐原牧野	吉田	A-501	○	○	○	○	○
68	中絶	吉田	A-502	○	○	○	○	○
69	本村南沖	長野	A-503	○	○	○	○	○
70	国鉄南基地	小牧	B-009	○	○	○	○	○
71	西和田	小牧	B-010	○	○	○	○	○
72	平林東沖	小牧	B-023	○	○	○	○	○
73	高山氏館跡(石渡館跡)	朝曇	B-202					○
74	平林城跡	小牧	B-203					○
75	穂里城跡	朝曇	B-212					○
76	東和田城跡	小牧	B-213					○
77	北陸新幹線調査地点	-	-	○	○	○	○	○
II	三才遺跡群		A-②	○	○	○	○	○
III	小島・柳原遺跡群		B-①	○	○	○	○	○
78	水内堂一元神社	柳原	B-003	○	○	○	○	○
79	中保	柳原	B-004	○	○	○	○	○
80	上中島	朝曇	B-019	○	○	○	○	○
IV	飯巴川扇状地遺跡群		B-②	○	○	○	○	○
81	芹田小学校	芹田	B-013					○
82	八幡田沖	芹田	B-015					○
83	御所	芹田	B-016					○
84	芹田東沖	芹田	B-017					○
85	西方	小牧	B-018					○
86	寺村	小牧	B-021					○
V	安茂里遺跡群		C-①	○	○	○	○	○
VI	長野遺跡群		C-②	○	○	○	○	○
VII	堀内遺跡群		G-①	○	○	○	○	○
87	沖	若槻	A-001	○				
88	二本松	若槻	A-003	○	○	○	○	○
89	和出	若槻	A-004	○	○	○	○	○
90	田子池上	若槻	A-005					○
91	南田子	若槻	A-006					○
92	田子池跡	若槻	A-007					○
93	上野	若槻	A-008	○				
94	田中	若槻	A-010	○	○	○	○	○
95	田中渡跡	若槻	A-011					○
96	徳間宮東	若槻	A-015					○
97	赤岩平A	浅川	A-038	○				
98	麻生	若槻	A-026	○				
99	寺山	若槻	A-029					○
100	宮前	若槻	A-030					○
101	湯谷	長野	A-052	○				
102	吉	若槻	A-075	○	○	○	○	○
103	牟礼バイパスA地点	若槻	A-076	○	○			
104	牟礼バイパスB地点	若槻	A-077					○
105	牟礼バイパスC地点	若槻	A-078					○
106	徳間本堂跡	若槻	A-083	○	○	○	○	○
107	堀沢	古里	A-097	○	○	○	○	○
108	両塚	古里	A-098	○	○	○	○	○



第8表 周辺遺跡一覧(2)

地図 番号	遺跡名	所在地 (長野市 は地区)	遺跡 番号	時代						
				縄 文	弥 生	古 墳	古 墳	中 古 世	近 古 世	
109	山手寺古墳群(3基)	若槻	A-102			○				
110	用子池古墳	若槻	A-103							
111	用子古墳群(6基)	若槻	A-104							
112	上野古墳群(4基)	若槻	A-105							
113	岐阜田古墳群(6基)	若槻	A-106			○				
114	鶴沢古墳群(4基)	浅川	A-107							
115	嵐塚古墳	浅川	A-108							
116	葛王塚古墳	浅川	A-109			○				
117	地附山古墳群(7基)	長野	A-111							
118	栗平古墳群(6基)	長野	A-112			○				
119	滝上山古墳群(3基)	長野	A-113			○				
120	三才古墳(2基)	吉里	A-114			○				
121	本堂塚1号古墳	若槻	A-115			○				
122	観ヶ基古墳	浅川	A-116							
123	鶴沢古墳群(2基)	浅川	A-117			○				
124	平福田古墳	浅川	A-118			○				
125	金塚古墳	浅川	A-119			○				
126	徳間古墳群(3基)	若槻	A-120			○				
127	寒木古墳群(2基)	若槻	A-121			○				
128	ウマツクガ古墳群(4基)	若槻	A-122			○				
129	上堂山城跡	若槻	A-202							○
130	若槻山城跡	若槻	A-203							○
131	浮田館跡(浮田城跡)	浅川	A-205							○
132	穂形城跡(穂形山城跡)	長野	A-206							○
133	赤沢山城跡(若槻山城跡)	若槻	A-216							○
134	香西跡(若槻山城跡)	若槻	A-217							○
135	北郷古城跡	浅川	A-218							○
136	北郷本城跡	浅川	A-219							○
137	多田氏居館跡	若槻	A-220							○
138	九反	浮田	B-024		○					
139	南河塚古墳	小牧	B-101			○				
140	長沼城跡	長沼	B-201						○	○
141	栗田城跡	浮田	B-204						○	
142	宇連所跡(中御所居館跡)	浮田	B-205						○	
143	中沢城跡	小牧	B-206						○	
144	尾張城跡	小牧	B-207						○	
145	西新寺館跡?	長沼	B-208						○	
146	串沼館跡	長沼	B-209						○	
147	柳田城跡	柳原	B-210						○	
148	中俣城跡	柳原	B-211						○	
149	西和田城跡	小牧	B-214						○	
150	金子氏古宅跡	浮田	B-216						○	
151	千田城跡	浮田	B-217						○	
152	瀬清水	長野	C-002		○					
153	平塚平	安茂里	C-006	○	○	○	○	○		
154	小塚堤	安茂里	C-007						○	
155	春花台	安茂里	C-008	○	○	○	○	○		
156	欠下	安茂里	C-011		○					
157	西河原墳墓	安茂里	C-013						○	○
158	西河原宮宇	安茂里	C-014						○	○
159	住生寺	長野	C-019	○						
160	朝日山東部	安茂里	C-022	○						
161	二子塚附近	安茂里	C-023		○					
162	西長野古墳群(3基)	長野	C-101			○				
163	花園平古墳群(2基)	長野	C-102			○				
164	小丸山古墳群(3基)	長野	C-103			○				
165	玉塚古墳	安茂里	C-104			○				
166	双子塚古墳	安茂里	C-105			○				
167	大黒山古墳	安茂里	C-106			○				
168	上集勝寺古墳	安茂里	C-107			○				
169	弥助寺古墳	安茂里	C-108			○				
170	北原古墳群(4基)	安茂里	C-109			○				
171	北原古墳?	安茂里	C-109?			○				
172	きょうら古墳	安茂里	C-110			○				
173	中塚古墳(平塚中塚古墳)	安茂里	C-111			○				
174	諏訪平古墳	安茂里	C-112			○				
175	諏訪の原古墳	安茂里	C-113			○				
176	蓮華塚古墳	安茂里	C-114			○				
177	大分塚古墳	安茂里	C-115			○				
178	小倉見古墳群(3基)	安茂里	C-116			○				
179	三合塚古墳	安茂里	C-117			○				
180	大門古墳群(2基)	安茂里	C-118			○				
181	(西河原)城古墳	安茂里	C-119			○				
182	穂高山古墳	安茂里	C-122			○				
183	若子古墳	安茂里	C-123			○				
184	三合塚西古墳	安茂里	C-124			○				
185	木曾原古墳 1号墳	安茂里	C-136			○				
186	木曾原古墳 2号墳	安茂里	C-127			○				
187	新開古墳 1号墳	安茂里	C-128			○				
188	新開古墳 2号墳	安茂里	C-129			○				
189	河原陀堂山古墳	安茂里	C-130			○				
190	金栗塚古墳	安茂里	C-131			○				
191	春日社古墳	安茂里	C-132			○				
192	朝明山城跡	長野	C-201						○	
193	穂山城跡	長野	C-202						○	
194	大峠城跡	長野	C-203						○	
195	嵐山城跡	安茂里	C-204						○	
196	小倉見城跡	安茂里	C-206						○	
197	窪寺城跡	安茂里	C-207						○	
198	大黒山城跡	安茂里	C-209						○	
199	木曾原居館跡(朝日氏居館跡)	安茂里	C-211						○	
200	窪寺居館跡	安茂里	C-212						○	
201	山王館跡	長野	C-213						○	
202	泉平	宇井	D-011			○				
203	富田	宇井	D-015					○	○	
204	古代製鉄所跡	宇井	D-016					○	○	
205	葛山城跡	宇井	D-201					○		
206	明神前	長野	J-064	○	○	○	○	○		
207	中ノ丁	長野	J-065	○	○	○	○	○		
208	宮宿	長野	J-070	○	○	○	○	○		
209	原倉	長野	J-071	○	○	○	○	○		
210	玉塚林	若槻	J-072						○	
211	徳山古墳	長野	J-129						○	
212	虚空蔵山古墳	長野	J-130						○	
嵐 坂 市										
213	八重森	八重森、 上西九条	14			○				
214	高梨城跡	高梨・磯山	15						○	
215	観田	観田	16						○	
216	境沢	小山・磯山	19-7						○	
217	八幡	小山	19-8						○	
218	前田	小山・前田	21			○				
219	東畑	福崎・観田	27						○	
220	福島城跡	福島・城	28						○	
221	赤井	赤井	29						○	
222	井上・宇高遺跡群	井上・宇高	30			○	○	○		
223	井上氏居館跡	井上・観田	31						○	
224	藤山古墳	井上・藤山	88						○	
225	福王寺跡	沼田・北沖	111						○	

### 第3節 調査成果の概要

#### 1. 遺跡の範囲

本村南沖遺跡は今回の発掘調査を契機に遺跡台帳に登録された。市教委が示す遺跡地図（長野市行政地図情報）に示されているが、遺跡範囲は未確定である。今回の発掘調査結果から南側、西側の調査区外へ弥生時代や平安時代の住居跡が延びており、遺跡はさらに周囲へ広がる可能性が高い。

#### 2. 調査成果の概要

新県立大学施設整備事業に伴う発掘調査は、調査対象地を1～3区に区分し、平成27年度に発掘作業を実施した（第11図）。

検出した遺構・遺物は縄文時代、弥生時代前期末、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代、平安時代9世紀後半のものである。このほかに、中世の陶磁器が1点出土したのみで、ほかの時代の遺構・遺物はなかった（第12～第18図）。土坑については、埋土の特徴と遺物から時期を判断できたものだけで、大半の土坑の時期は特定できなかった。

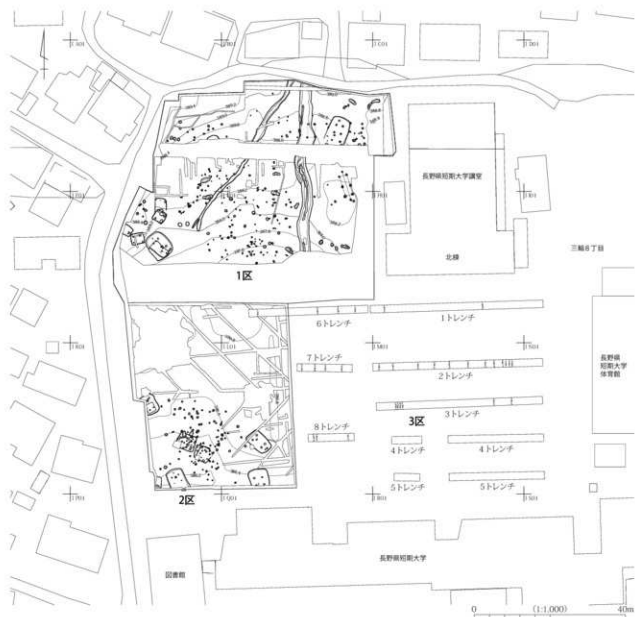
縄文時代では、土器（前期・中期・後期）が出土しているのみである。

弥生時代では、竪穴住居跡7軒（後期初頭）、掘立柱建物跡1棟（後期初頭）、土器棺墓3基（前期末1基、後期前半2基）、土坑墓1基、土坑4基、溝跡1条を検出した。竪穴住居跡は切り合いがなく、ほぼ同時期と考えられる。竪穴住居跡（SB03）は長軸方向が東に振れ、6本の主柱穴から構成されほかの6軒と異なる。竪穴住居跡から出土の遺物は壺が目立ち、甕は破片で復元できる個体はない。ほかに凹石や剥片、磨製石鏃の未製品が出土した。掘立柱建物跡は1間×2間で、長軸方向の側柱外に棟を支えるような柱穴があり棟持柱をもつ。土器棺墓（SM02）は3個体の大形の壺と1個体の甕からなる。溝跡は周溝墓に伴ったものであった可能性がある。

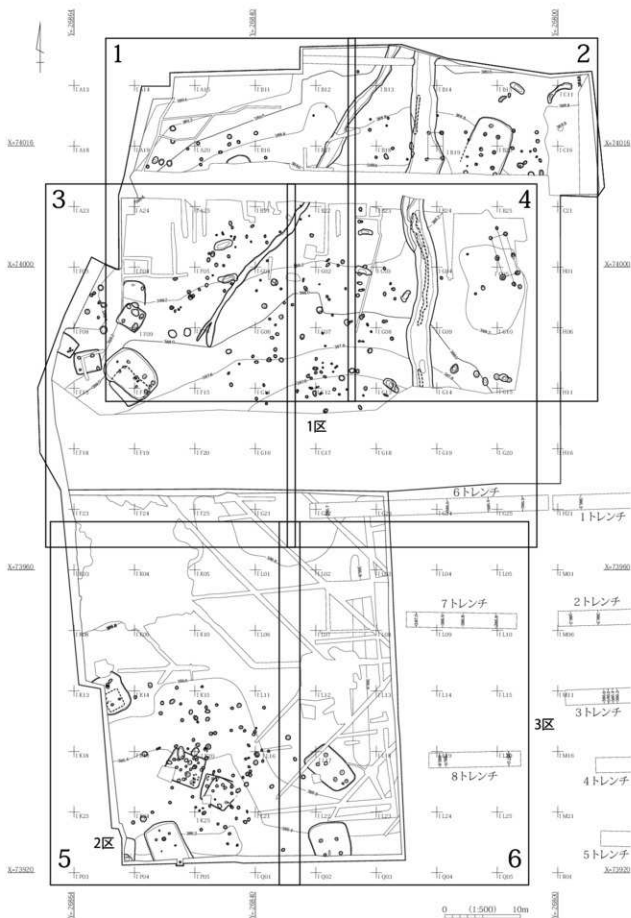
古墳時代では、流路跡1条（中期）を検出した。摩耗が少ない遺物の集積が認められることから、祭祀を行った可能性が考えられる。

奈良時代では、流路跡1条を検出した。

平安時代では、竪穴建物跡10軒（9世紀後半）、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、流路跡1条を検出した。竪穴建物跡はSB06と07、SB11と12に切り合いがあるが、出土遺物からみた時期差はない。10軒はほぼ同時期に存在していたと考えられる。SB05からは毛抜きや刀子、釘等の鉄製品が出土した。掘立柱建物跡は奈良時代からの流路跡が埋没後につくられている。詳細な時期は不明である。



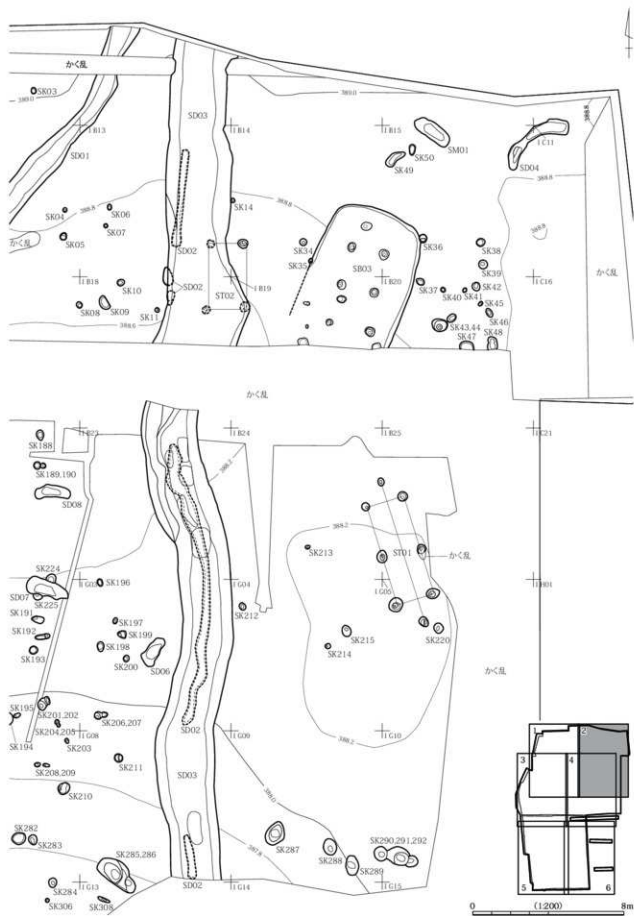
第11図 遺構分布全体図



第12図 遺構分布部分拡大指示図



第13図 遺構分布部分拡大図(1)



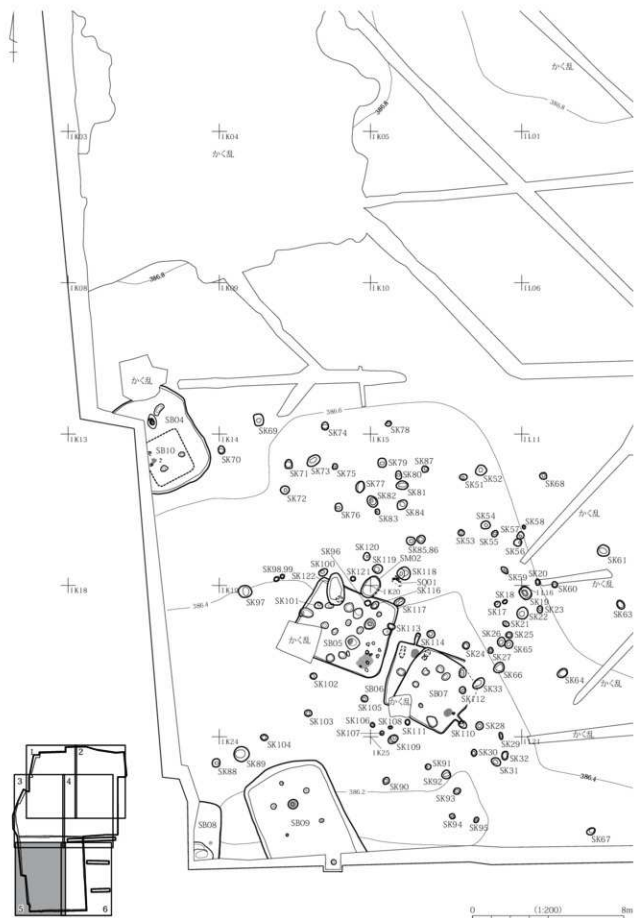
第14図 遺構分布部分拡大図(2)



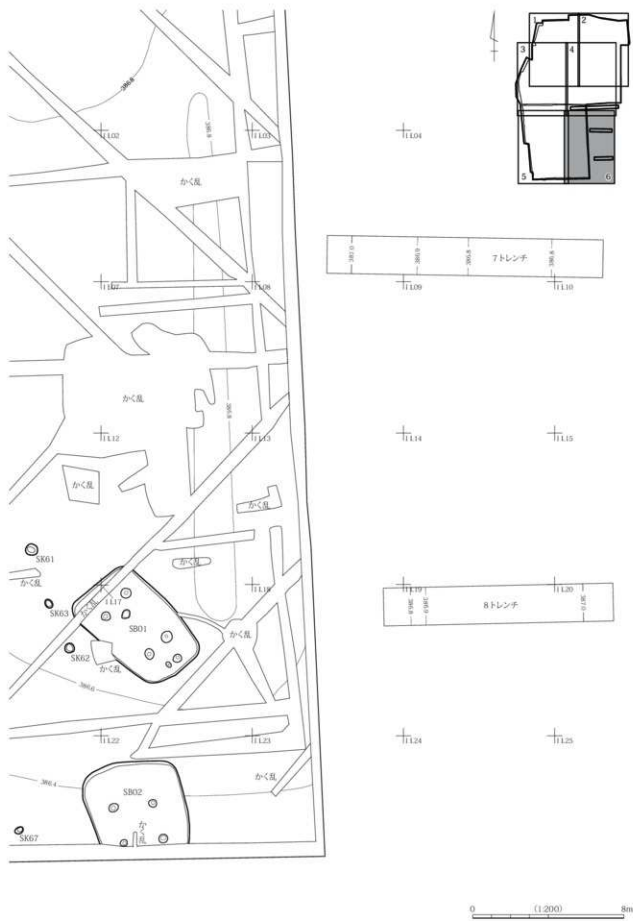
第15図 遺構分布部分拡大図(3)







第17図 遺構分布部分拡大図(5)



第18図 遺構分布部分拡大図(6)

## 第4節 基本層序

層序は調査地区の壁断面の土層観察を行って把握した。また遺構調査終了後、深掘りを行い下位に遺物包含層の有無を確認し、堆積物の記録に努めた（第19図）。

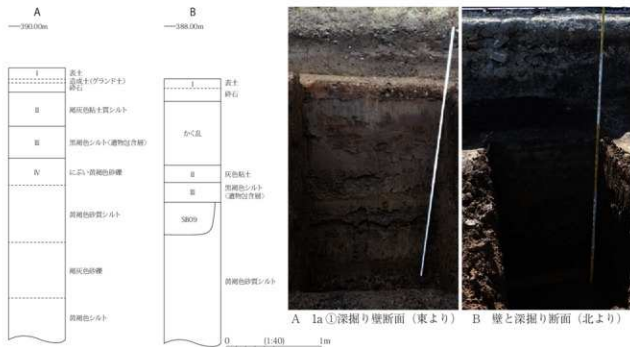
**I層**：表土（グランド土、碎石、駐車場アスファルト、園庭・宿舍造成土を含む）、かく乱（旧構造物の基礎、基礎解体後平坦にするための客土、かく乱埋土はこれに相当する。灰色～灰褐色土粘質土を主とし黒褐色土のブロック土を含むこともある）。

**II層**：灰色～褐灰色粘土質シルト。1a区、1b区南部では比較的明瞭に分布している。古代の須恵器、土師器の摩耗した破片を含む部分がある。下位の遺物包含層の遺物を巻き込んだものと考えられる。1c区壁から採取した土壌の科学分析で多量のプラント・オパールが検出され水田の指摘がある。大正15年測量の長野市地形図では調査地周辺に水田が広がっていることから、旧水田土壌と考えるのが妥当である。

**III層**：黒褐色シルト。層厚約20～30cm。遺物包含層。砂～小礫を含む。礫の含有量に多少はあるが分層できない。本来は調査地全体に分布していたと考えられるが、後世の削平で地形に合わせ、南部は残りが良く、北部は残りが悪い状況と考えられる。またグランド東側の3区では残存していない。

**IV層**：黄褐色～褐灰色砂礫～砂質シルト。上面で遺構検出を行う。礫質優勢な部分とシルト質優勢な部分がある。扇状地の堆積物であるため、層相の変化は著しいと考えられる。

深掘り下位層確認では、検出面下約3mまで砂礫層とシルト層の互層が続く。遺物包含層の分布はなかった。



第19図 基本層序

### 基本土層の自然科学分析

**1c区西壁** 基本土層II層（分析No.8）、III層（分析No.9）、IV層（分析No.10）（第20・21図J地点）

堆積物1g中の珪藻殻数はII層 $2.3 \times 10^2$ 個、III層 $4.2 \times 10^2$ 個、IV層 $1.5 \times 10^2$ 個、完形殻の出現率はII層16.7%、III層66.7%、IV層100%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群では沼沢湿地地着生指標種群(O)が検出された。

花粉・胞子の分類群集数は、Ⅱ層：樹木花粉（サワグルミ属-クルミ属、コナラ属アカガシ亜属）2個、シダ植物胞子1個、Ⅲ層：樹木花粉（マツ属複雑管束亜属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属）6個、草本花粉（イネ科、ヨモギ属）8個、Ⅳ層：草本花粉（タンポポ亜科）1個で、いずれも保存状態は良好でなく十分な量の花粉化石が得られなかった。

プラント・オバールの分類群集数は、計測値を試料1g中に換算して示す（単位は×100個/g）。Ⅱ層ではイネ（84）が高密度であり優占する。水田土壌である。ススキ属型（36）とチマキザサ節型（36）がやや高い密度である。ほかにはキビ族型（12）、ヨシ属（12）、シバ属（6）、ネザサ節型（18）、およびミヤコザサ節型（18）がやや低い密度で検出された。Ⅲ層ではイネ（30）、ススキ属型（24）、チマキザサ節型（24）がやや高い密度である。キビ族型（6）、ヨシ属（6）、シバ属（6）、ネザサ節型（6）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。Ⅳ層ではイネ（6）、ヨシ属（6）、ススキ属型（6）、チマキザサ節型（6）、ミヤコザサ節型（6）が検出されたがいずれも低い密度である。

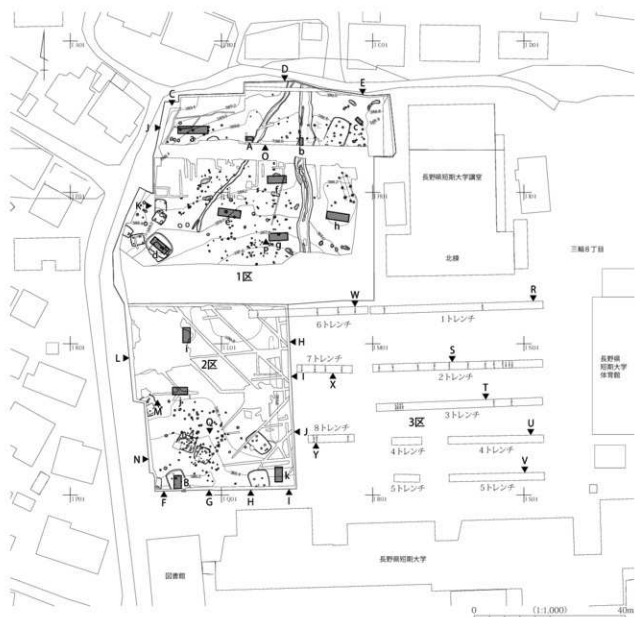
**2c 区南壁** 基本土層Ⅱ層（分析 No.11）、Ⅲ層（分析 No.12）、Ⅳ層上（分析 No.13）、Ⅳ層下（分析 No.14）（第20・21図H地点）

堆積物1g中の珪藻殻数はⅡ層0個、Ⅲ層0個、Ⅳ層上 $1.6 \times 10^2$ 個、Ⅳ層下 $4.0 \times 10^2$ 個、完形殻の出現率はⅡ層0%、Ⅲ層0%、Ⅳ層上25%、Ⅳ層下0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群では陸生珪藻A群（Qa）が検出された。

花粉・胞子の分類群集数は、Ⅱ層：樹木花粉（マツ属複雑管束亜属、ニレ-ケヤキ属）2個、草本花粉（アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科）4個、Ⅲ層：樹木花粉（スギ属、ニレ-ケヤキ属）3個、草本花粉（イネ科、ヨモギ属）2個、Ⅳ層上：草本花粉（アブラナ科）1個、Ⅳ層下：樹木花粉（マツ属複雑管束亜属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属）5個、草本花粉（イネ科、タケノグサ属、ヨモギ属、キク亜科）7個で、いずれも保存状態は良好でなく十分な量の花粉化石は得られなかった。

プラント・オバールの分類群集数は、Ⅱ層ではチマキザサ節型（36）が比較的高い密度である。ほかのイネ（12）、キビ族型（12）、ヨシ属（18）、ススキ属型（18）、ネザサ節型（6）、ミヤコザサ節型（12）はやや低い密度である。Ⅲ層ではチマキザサ節型（54）が比較的高い密度である。ヨシ属（24）、ススキ属型（24）はやや高い密度である。ほかのイネ（12）、キビ族型（6）、ネザサ節型（6）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。Ⅳ層上ではチマキザサ節型（54）が高い密度である。ほかのイネ（6）、ヨシ属（12）、ススキ属型（6）、ミヤコザサ節型（6）は低い密度である。Ⅳ層下ではチマキザサ節型（30）がやや高い密度である。ほかのイネ（6）、ヨシ属（12）、ススキ属型（12）、ミヤコザサ節型（12）は低い密度である。

**まとめ** 珪藻化石、花粉化石がほとんど検出されなかったため、それぞれの分析だけでは堆積環境や古植生についての推定は難しい。検出が困難であった理由として、堆積速度が速く珪藻化石や花粉化石が取り込まれなかったことや堆積時の乾燥化が挙げられる。乾燥化が著しければ、珪藻は繁茂できず化石化しない。また花粉は水成堆積物中では保存状態が良好であるが、一般的に乾湿を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリア等によって分解され消失してしまう。基本土層の1c区西壁Ⅳ層（分析 No.10）、2c区南壁Ⅳ層上（分析 No.13）、Ⅳ層下（分析 No.14）は灰褐色砂礫層で、中礫を含むことから堆積速度が速かったことが予想される。Ⅲ層（分析 No.9・12）は砂礫を混入する黒褐色土層で、弥生時代から平安時代の遺構や遺物を含むことから、水の営力で堆積したがその後は安定した環境であったと考えられるため、乾燥化が予想される。Ⅱ層（分析 No.8・11）は灰色粘質土層で、プラント・オバール分析から分析 No.8は水田土壌の可能性が指摘され、乾湿を繰り返す環境であったと予想される。



第20図 断面位置図

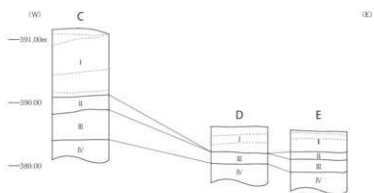


2c区南壁断面 (H・I) 東側 (北西より)

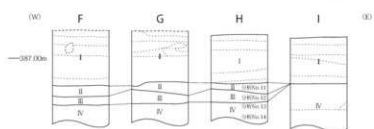


1a区西壁 撤削り (南より)

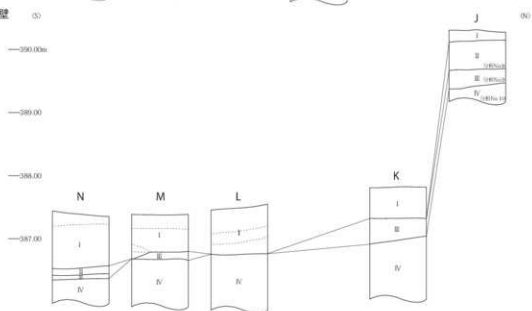
1区北壁



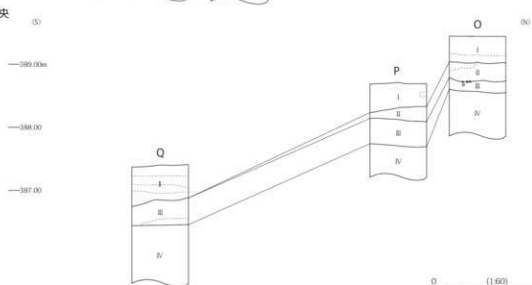
2区南壁



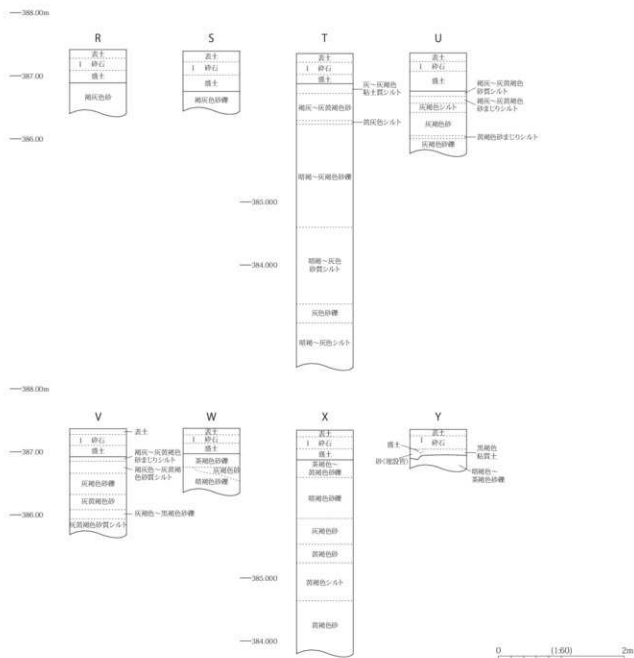
1・2区西壁



1・2区中央



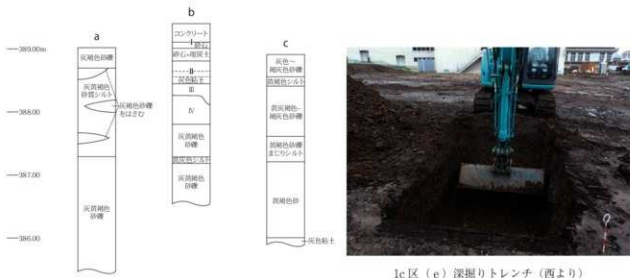
第21図 1・2区 土層柱状図



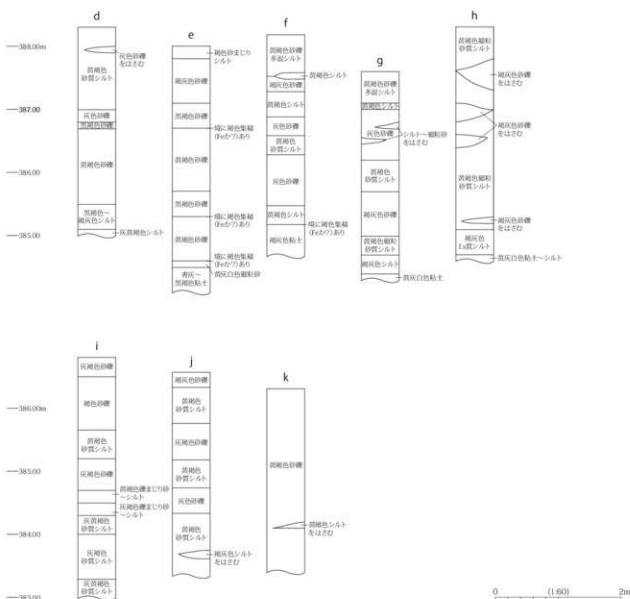
第22図 3区 土層柱状図



3区トレンチ (東より)



1c区 (e) 深掘りトレンチ (西より)



第23図 1・2区 深掘りトレンチ柱状図



## 第3章 遺構と遺物

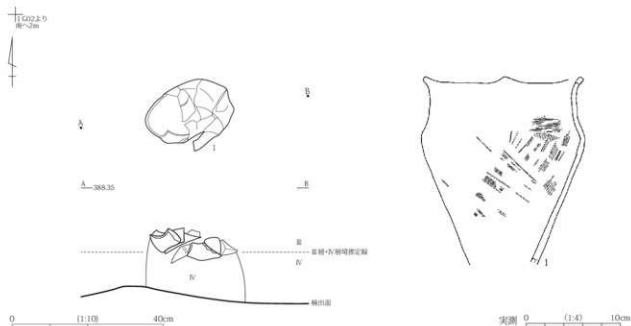
### 第1節 弥生時代前期以前

#### 1. 墓跡

SQ02 (第24図 PL 5・30)

**位置**：I G02 グリッド。**検出**：IV層上面で土器片を認めるが、周囲は検出面を掘り下げ過ぎた。**重複関係**：なし。**埋土**：なし。**構造**：掘り込みは確認できない。**遺物出土状態**：小形の深鉢（1）で、底部を西側にして横にされ、口縁部をやや下に向けた斜めの状態で出土している。底部は欠損している。出土時はほぼ完形と思われたが、取り上げたところ地山（IV層）に接している口縁から胴部は欠損していた。土器内部の土を水洗いしたが、歯骨片、玉類等の副葬品と思われる遺物はない。**時期**：出土土器から弥生時代前期併行（縄文晩期水Ⅱ式）と考えられる。

**出土遺物**：掲載した遺物はⅢ層からの出土である。口縁部の大半と底部を欠き、外面には条痕文が施文される。口縁は波状を呈し、口頸部と胴部の間に稜をもつ器形である。



第24図 SQ02 遺構図・遺物図

## 2. 遺構外

### 包含層出土遺物（第25図 PL30）

調査区内に縄文時代の遺構はなかった。1a・1c・2a・2c区の遺構検出面および弥生時代・古代の遺構埋土から出土した縄文時代の土器片について本項に掲載した。

すべて深鉢形土器である。4～7は口縁部、16は底部と台部の接合部、そのほかはすべて胴部である。2は胎土に繊維を含んでおり、外面には沈線が2本横方向に施されている。前期前半の土器と判断する。3は横方向と斜め方向の沈線による条痕文が施されている。前期後半の諸磯b式併行期の土器と判断する。4は内側折り返し口縁であり、折り返し部分がやや肥厚している。5は口縁部破片で、隆線により左右に区画された内部を縄文の磨り消しが施されている。また、内面口唇部付近には圧痕がみられる。6は口縁部で斜縄文が施された下部に圧痕隆帯が施されている。7は隆帯による渦巻文が施されている。渦巻文様下部の左右には斜め方向と縦方向の沈線がみられるが、縦方向の沈線は摩耗している。いずれも沈線文を施した後に、隆帯を貼り付け、渦巻文を施文している。口縁部の上面には刺突文が施されている。全体的に剥離面が多く、摩耗が激しい。また、同一片とみられる土器片が2点出土しているが、いずれも口縁部付近の部位であり、施文が類似していることから、4つの突起をもつ深鉢形土器片であると考えられる。8は縄文、9は斜縄文が施されているが、摩耗が激しく詳細は不明である。10～14も斜縄文が施されている。10の内面は摩耗している。13の内面は剥離している。15は全体に斜縄文の後に縦縄文が施されているが、U字に区画された内部には一部磨り消しがみられる。16は深鉢形であるが台が付いており、台部と胴部を分けるように2本の分割線が施文され、そのすぐ上部には縦方向の沈線文が施される。4・9・11は中期、16は中期前半（五領ヶ台式併行期）、5～8・10・12～15は中期後半（5・6・8・15は加曾利EⅢ式併行期）の土器と判断する。

17は上下で方向が異なる斜縄文が施されている。18は縄文が施されているが、摩耗が激しく詳細は不明である。17・18は後期の土器と判断する。

19～25は条痕文や細密条痕文が施され、晩期の土器と判断する。19は条痕文が摩耗している。20・21は摩耗が激しい。

## 3. 小結

縄文時代の遺構はない。縄文時代前期から晩期の土器片が包含層や他時期の遺構から出土しているが、いずれも摩耗した破片であり、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。北方約400mに所在する浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡（長野高校地点）においても縄文時代早期末から中期後半の土器片が出土しているが、同様の傾向がみられる。

弥生時代前期では本遺跡の北方約700mに位置する浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡（上松東団地地点）において土坑（SK 1（径95cm））からSQ02と類似する条痕文を施した深鉢が出土している。当調査地ではSQ02以外に遺構はみつからない。SQ02周辺の土坑の中には同時期の遺構がある可能性も考えられるが、遺物が出土しないため時期を特定できない。調査地周辺に集落域があった可能性を指摘するのとどまる。



第25図 弥生時代前期以前 遺構外 遺物図



2c区検出 (南西より)

## 第2節 弥生時代後期

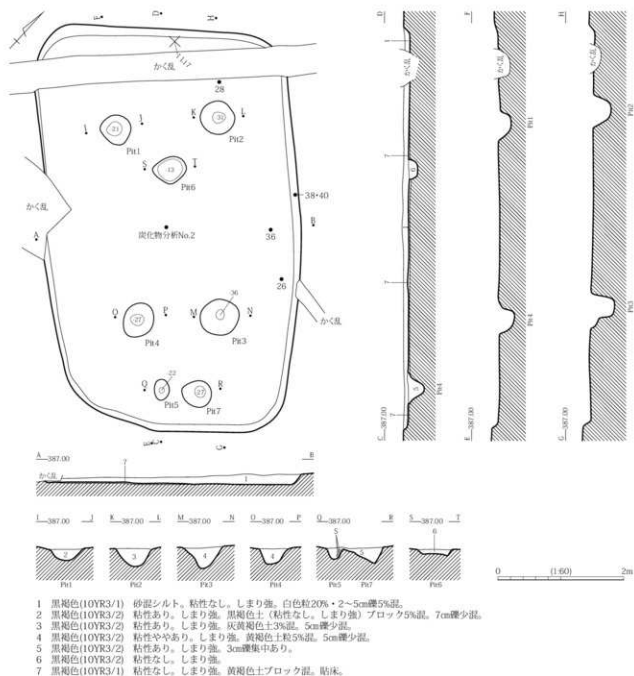
### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区全体（1・2区）から7軒が検出されている。住居跡間の重複関係はない。

SB01（第26～28図 PL 5・30・48）

**位置：**I L11・12・16・17 グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居北西壁付近と南西壁中央部分、北東壁中央部分が破壊されている。**重複関係：**なし。**埋土：**黒褐色土を主体とする単層。**構造：**平面隅丸長方形。主軸方向はN42.5° W。主軸長6.10m、直交軸長3.90m。検出面からの深さは10～16cm。床は黄褐色土を混入した厚さ2cm程度の貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6基を床面で確認する。主柱穴4基（Pit1～Pit4）は長方形に配置する。床面からの深さは21～36cm。南東壁際中央の床面には出入口施設と思われるピット（Pit5、Pit7）が並ぶ。住居北西壁付近はかく乱で破壊されているが、棟持柱のピットが存在した可能性がある。**竪：**北側の主柱穴（Pit1、Pit2）間よりやや中心寄りにPit6を検出する。位置的に炉跡と考えられるが、埋土から焼土および炭化物は出土しない。**遺物出土状態：**遺物の総量は少なく埋土中全体にまばらに広がり、床面からやや高い位置での出土が目立つ。北東隅埋土中から壺口縁部の破片（28）が、北東壁際中央からやや南よりの床面からはほぼ完形の鉢（26）が伏せた状態で出土している。また埋土中から石器の出土がほかの遺構より目立つが、床面からは泥岩の剥片（36）が出土したのみである。**時期：**埋土と床面出土の土器から、弥生時代後期（吉田式期）と判断する。床面から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析No.2）の放射性炭素年代測定で $2.039 \pm 20\text{yrBP}$ （暦年較正用年代）の結果を得た（111cal BC-23cal AD（95.4%））。

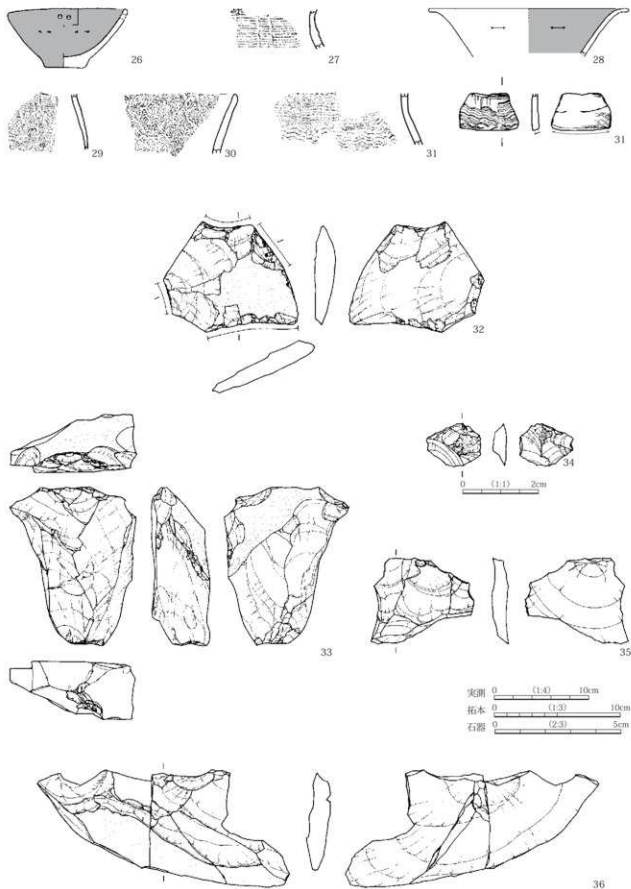
**出土遺物：**26は鉢である。内外面とも赤彩され、口縁部には一対の円孔が設けられている。27・28は壺である。27は頭部の破片で、櫛描籬状文が巡らされる。28は口縁が外反する壺の口縁部で内側だけが赤彩される。29～31は甕である。29は頭部付近の破片であるが小形であるため、台付甕の可能性も考えられる。頭部文様には櫛描籬状文が巡らされ、文様直下には櫛描波状文が施される。30は口縁部の破片で、櫛描波状文が施される。31は頭部付近の破片で、頭部文様には横走る櫛描平行沈線文（以下本節では「櫛描直線文」とする。）を縦方向の垂下線で区画する「T字文」が施され、文様直下には櫛描波状文が施される。また、破片の下部側面には磨痕が認められる。中野市琵琶島遺跡で「磨痕をもつ土器片」として報告（黒岩2016）されているような、土器の器面調整等に用いられた工具の可能性も考えられる。32は泥岩の楔形石器である。上下と左右に挟み打ちによる両極打撃痕が二対ある。33は泥岩の石核である。34～41は剥片である。34は黒曜石、35は流紋岩、そのほかは泥岩で、いずれも使用痕は確認できない。37～41は5点の剥片接合資料。38と40は東壁際の床面付近から出土し、37と39は埋土中からの出土である。また41は本跡の南約8mに位置するSB02の検出時に出土した資料である。以上の出土状況から、この接合資料はSB01廃絶後に流入した資料と判断できる。自然面打面で、連続的に打点を移動し、横長の剥片を剥離している。いずれも二次加工や使用の痕跡は確認できない。



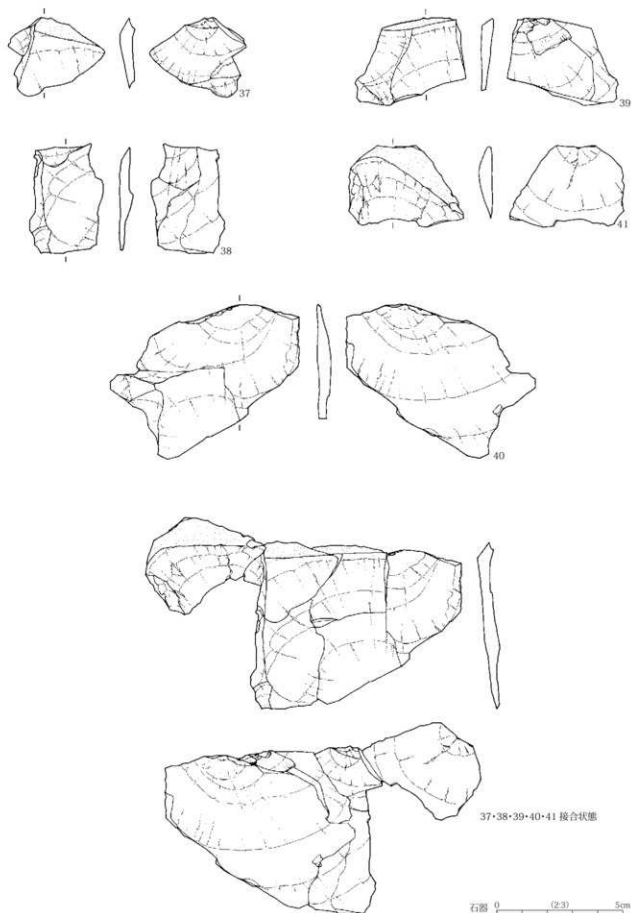
第26図 SB01 遺構図



SB01 28出土状態(南東より)



第27図 SB01 遺物図(1)



第28圖 SB01 遺物圖(2)

## SB02 (第29・30図 PL 5・6・30・31・48)

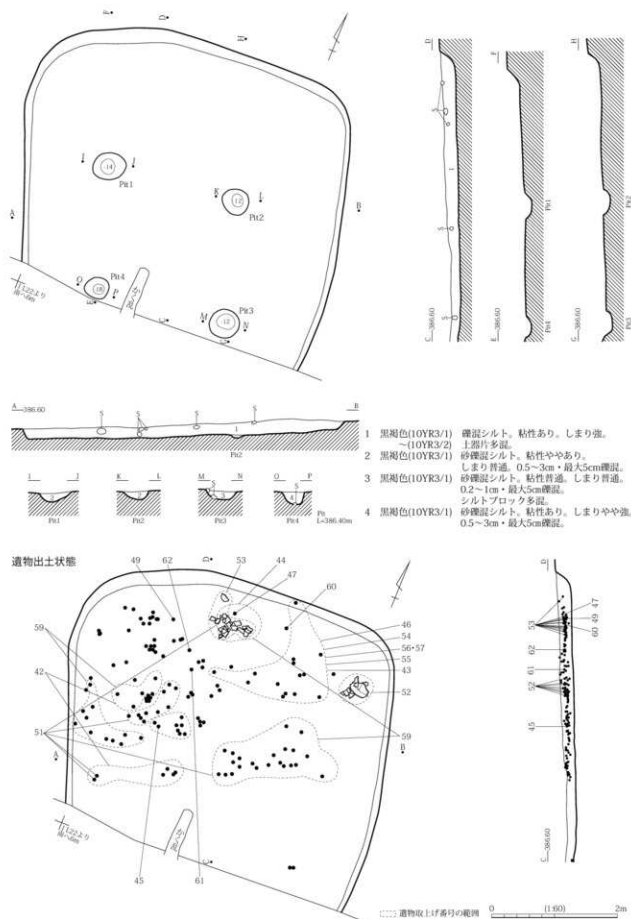
**位置:** I L21・22グリッド。**検出:** IV層上面で黒褐色土の広がりや遺物の分布を確認する。かく乱で住居南部分が一部破壊されている。南側は調査区外へ延びる。**重複関係:** なし。**埋土:** 黒褐色土を主体とする単層。上部の方がやや粘性があり、下部の方が礫の混入がやや多い印象があるが、分層できない。**構造:** 平面隅丸長方形。主軸方向はN22°W。主軸残存長4.30m、直交軸長4.80m。検出面からの深さは12～25cm。床は不明瞭である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴4基 (Pit1～Pit4) は方形に配置され、主柱穴の位置にあると考えられるが、ほかの住居跡の主柱穴と比較して掘り込みは浅く(床面からの深さは12～18cm)明確でない。**材:** ない。埋土中に炭化物や焼土粒はない。**遺物出土状態:** 遺物の総量は多く埋土中全体に広がり、ほとんどが破片である。北東部から壺口縁部～頸部(52)、北部から壺胴部(53)や高坏脚部(47)、甕(ミニチュア)(60)、中央部から高坏接合部(45)が出土している。北西部から出土の破片は北へ90m離れたSB03埋没後に掘り込まれたPit2出土の高坏脚部(64)と接合する。安山岩の凹石(61)や敲石(62)が出土している。**時期:** 埋土の土器から、弥生時代後期(吉田式期)とする。

**出土遺物:** 42は鉢で内外面とも赤彩される。43～48は高坏である。43・44は坏部が碗形を呈する高坏で、内外面とも赤彩される。45～47は高坏の脚部で、45・46は赤彩される。48は口縁部が水平に屈曲する鐮縁状口縁高坏の坏部で、内外面とも赤彩される。49～53は壺である。49・50は頸部付近の破片で、49は外面が赤彩される。49は頸部文様に篋描直線文が施され、文様直下には鋸歯文が付加される。50は頸部文様に篋描直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。51は口縁が外反する壺の口縁部で、内外面とも赤彩される。52は口縁が外反する壺の口縁部から頸部で、頸部文様に篋描横羽状文が巡らされ、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。外面と口縁部内面が赤彩される。53は壺の胴部で胴部上半外面が赤彩される。52・53は同一個体と考えられるが接合しない。54は内外面とも赤彩され、赤彩深鉢の底部としたが、器種は検討を要する。55～59は甕である。55・59は口縁部に篋描波状文が巡らされ、口唇には疔痕が施されるが、施工具は不明である。両者は同一の個体である可能性が考えられる。56は口縁部が短く外反するもので、口縁部には篋描波状文が、頸部には簾状文が巡らされる。57は頸部付近の破片で、頸部文様に簾状文が、文様直下には篋描波状文が巡らされる。56・57は同一個体と考えられるが接合しない。58は口縁部が短く外反する小形の甕で、口縁部と胴部には篋描波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。60は甕のミニチュアである。口縁部には篋描波状文が、頸部文様に簾状文が巡らされている。61は凹石である。安山岩の自然礫を用い、片側に敲打による凹部が認められる。62は敲石である。安山岩の自然礫を用い、長軸の片側の端部に敲打痕が認められる。長さは幅の2倍以下である。

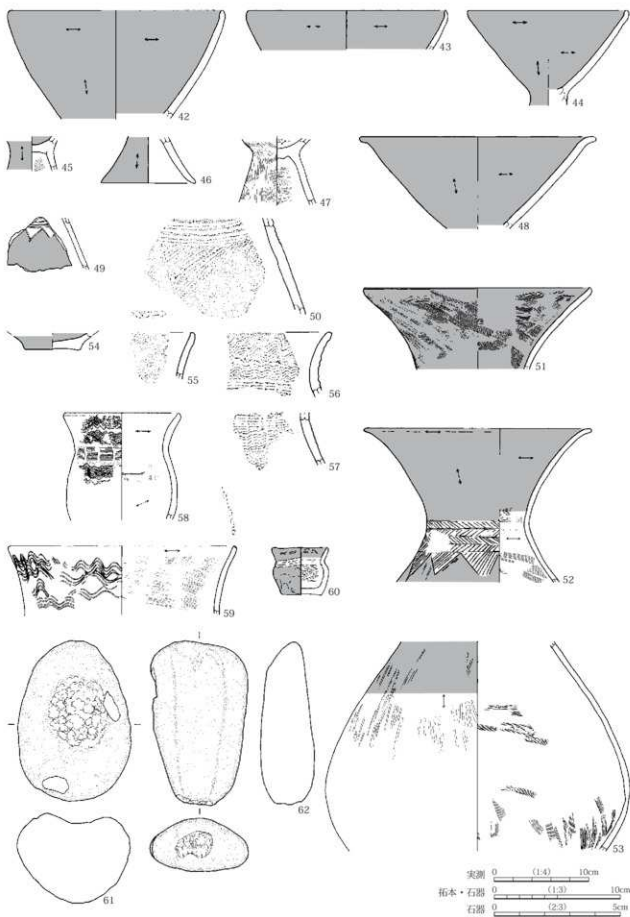


SB02 調査(北西より)





第29図 SB02 遺構図

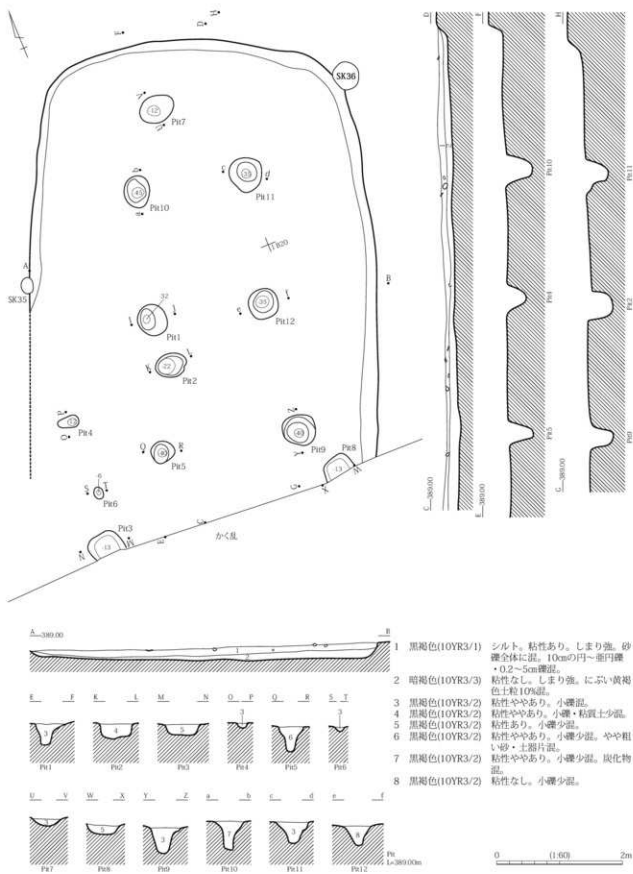


第30図 SB02 遺物図

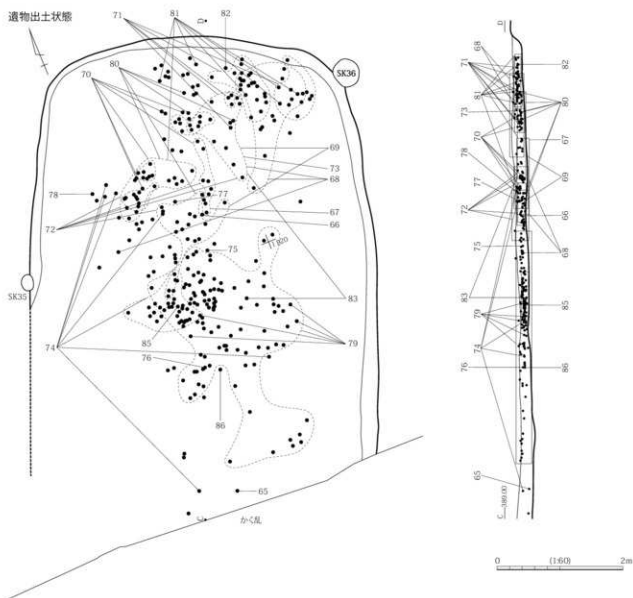
## SB03 (第31～34図 PL 6・7・31～33・49)

**位置**：I B14・15・19・20グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の広がりや遺物の分布を確認する。かく乱で住居南壁が破壊されている。**重複関係**：SK 35・36に切られる。**埋土**：先行トレンチの壁断面では黒褐色土を主体とする上層と黄褐色土粒を含む下層の2層に分層できるが、埋土掘り下げ時において、平面では明確に違いを認めることができない。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向はN22°E。主軸残存長7.45m、直交軸長5.15m。検出面からの深さは10～25cm。床面は地山がややしまりのよい部分が認められるが、全体に広がらない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット12基を床面で確認する。うち6基(Pit1・Pit5・Pit9～Pit12)は床面からは32～45cmと掘り込みが深く、住居跡の主軸方向に合う長方形に配置することから主柱穴と考えられる。主柱穴が1間×2間の規模である住居跡は本遺構のみである。Pit7は棟持柱のピットであると考えられる。Pit2の埋土は黒褐色土に粘質土を混入し、弥生土器片と共にタタキ甕の破片が出土することからSB03埋没後に掘り込まれたピットと考えられる。同様にPit3・Pit8は平面形が方形であること、埋土の粘性が強いことから、SB03に伴うピットではないと考えられる。Pit4・Pit6の埋土は主柱穴の埋土と同じであるが、床面から6～12cmと掘り込みが浅く機能は不明である。竈：ない。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。特に検出面から10cmほど掘り下げた1層中に多数の破片が目立つ。住居跡北部から壺(70・71・73・74・78)、甕(80～82)、中央部から壺(67・68・75～77・79)、ほぼ完形の小形の鉢(83)が出土している。また検出面から泥岩の剥片(84)や床面よりやや浮いた状態で安山岩の凹石(85・86)が出土している。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期(吉田式期)とする。壺(79)はやや新しい様相を呈するが、ほかの土器については埋土の上・下による型式の差はない。Pit10埋土中から出土した炭化材(コナラ属コナラ節)(分析No.1)の放射性炭素年代測定で2,028 ± 20yrBP(暦年較正用年代)の結果を得た(92cal BC-26cal AD(95.4%))。

**出土遺物**：64はPit2内とSB02埋土中からの接合資料、63はPit5内と埋土からの接合資料、69～72はPit10と埋土からの接合資料である。63～65は高坏の脚部で赤彩される。66～79は壺である。66は頸部付近の破片で頸部文様に櫛描直線文が施され、その下位は赤彩される。69は口縁が外反する壺の口縁部から頸部で、頸部文様に櫛描直線文が施される。67は頸部付近の破片で、頸部文様に櫛描直線文が施され、その最下位は櫛描波状文となる。70は口縁端がわずかに内湾する壺の口縁から頸部で、頸部文様に櫛描直線文が施され、その最下位は櫛描波状文となる。口縁部内外面とも赤彩される。68・71は頸部から胴上部の破片で、頸部文様には横走る櫛描直線文を縦方向の垂下文で区画する「T字文」が施される。68の口縁部内側は器面の摩耗が進んでいて範囲は不明であるが、赤彩されている。72は頸部から胴上部の破片で、頸部文様には寛楕横羽状文が巡らされ、文様直下には逆三角形内を棒状工具による刺突で充填した鋸歯文が付加される。73は壺の頸部付近の破片で、頸部文様には櫛描「T字文」が施され、円形浮文が貼り付けられる。74は壺胴部の破片である。75～78は壺の底部である。73～75は同一個体と考えられるが接合しない。79は口縁が外反する壺で、頸部文様には櫛描「T字文」が施され、口縁部内外面と胴部が赤彩される。80～82は甕である。80・82は甕の底部で、頸部文様には簾状文が施され、文様直下には櫛描波状文が巡らされる。81は大形の甕で、頸部文様には簾状文が巡らされ、櫛状工具により刺突が付された円形浮文が付加される。口縁部と胴部上半には櫛描波状文が巡らされ、胴部下半には縦羽状文が施される。83は小形の鉢である。85・86は安山岩の凹石である。85は敲打により表裏の両面に皿状に凹部が形成される。86は敲打により表裏の両面にわずかな凹部が形成される。84は泥岩の剥片である。剥離面を打面とする。微弱な剥離が認められるものの、使用痕とは断定できない。



第31図 SB03 遺構図(1)



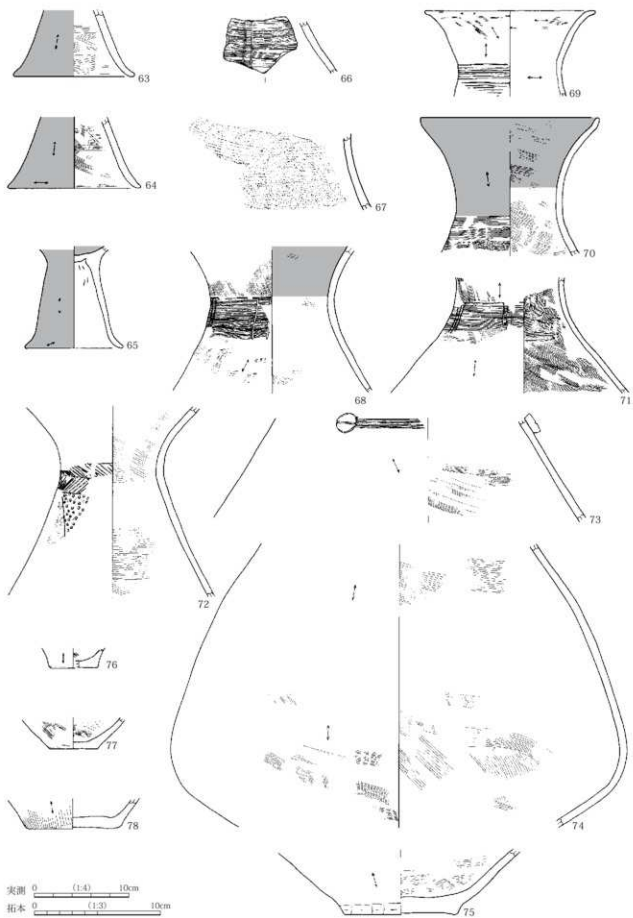
第32図 SB03 遺構図(2)



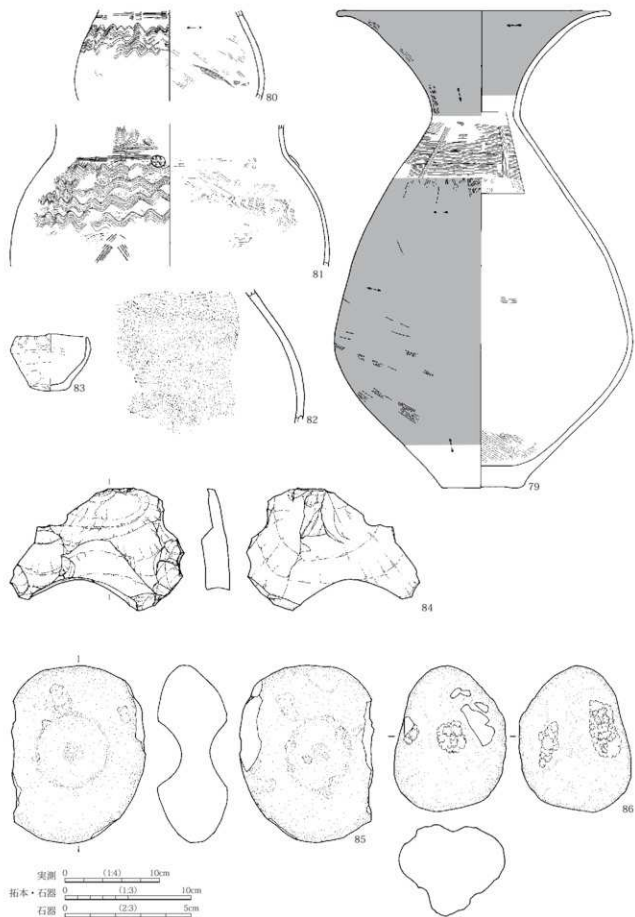
SB03 調査(西より)



SB03 遺物出土状態(西より)



第33図 SB03 遺物図(1)

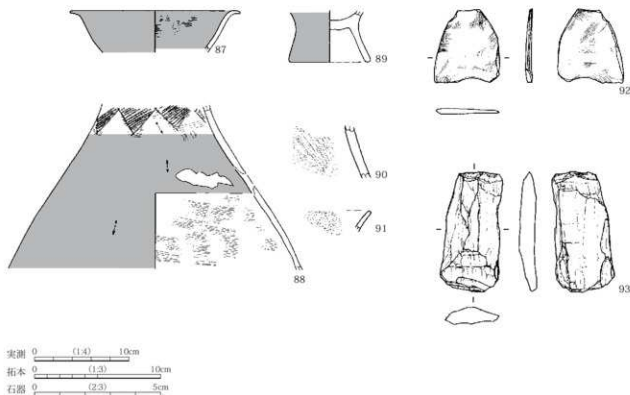


第34図 SB03 遺物図(2)

## SB04 (第35・36図 PL 8・33・49)

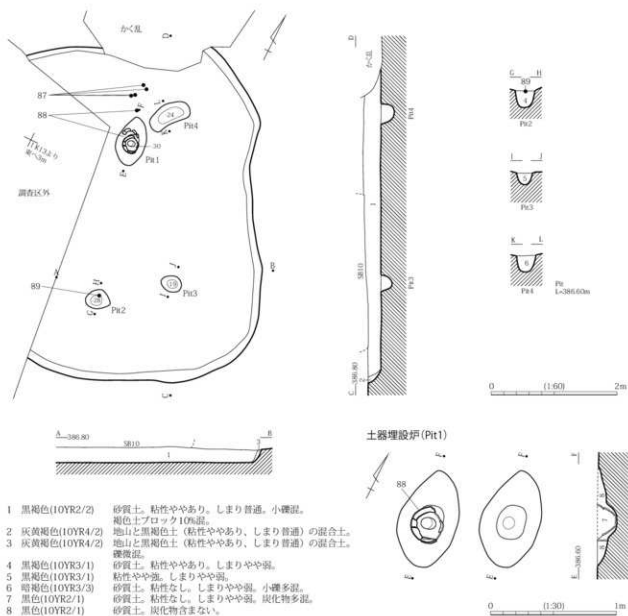
**位置:** I K08・13グリッド。**検出:** IV層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居北壁が破壊され、西壁は調査区外へ延びる。**重複関係:** SB10に切られる。**埋土:** 黒褐色土を主体とする複層。壁際に地山の崩落土が観察できる。**構造:** 平面隅丸長方形。主軸方向はN26.5° W。主軸長5.05m、直交軸残存長2.60m(推定4.00m)。検出面からの深さは20～30cm。床は貼床でなく地山を敲いて床としている(以下「地山敲き」とする)。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴3基(Pit2～Pit4)を確認する。1基は調査区外に位置すると考えられ、長方形に配置する。床面からの深さは19～28cmである。**炉:** 土器埋設炉(Pit1)である。北側主柱穴間よりやや内側の床面を掘り窪め、内部に壺口縁～頸部を逆位にして設置している。**遺物出土状態:** 遺物の総量は少なく、ほとんどが破片である。北西壁際床面から高坏体部(87)、Pit1内炉体土器と床面から壺頸部直下から胴上半部(88)、Pit2埋土上部から赤彩深鉢台部(89)が出土している。**時期:** 炉体土器から、弥生時代後期(吉田式期)とする。

**出土遺物:** 87は口縁部が水平に屈曲する鐔縁状口縁高坏の坏部で、赤彩されている。88・90は壺である。88は頸部直下から胴部上半の破片で、頸部文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加され、その下方は赤彩される。胴部上半に穿孔が認められる。90は頸部の破片で、頸部文様には寛幅直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。89は台付の赤彩深鉢の台部と思われるが、検討を要する。91は小形の甕の口縁部破片で櫛描波状文が巡らされる。92・93は磨製石鏃である。92は未製品で表裏面に研磨痕がある泥岩。側面は研磨後、再加工され刃付に入るのか。93は緑色片岩素材で、上下は挟み打ちによる両極打撃痕、右側面は折り取り痕が認められる。擦り切り痕は確認できない。



第35図 SB04 遺物図





第36図 SB04 遺構図



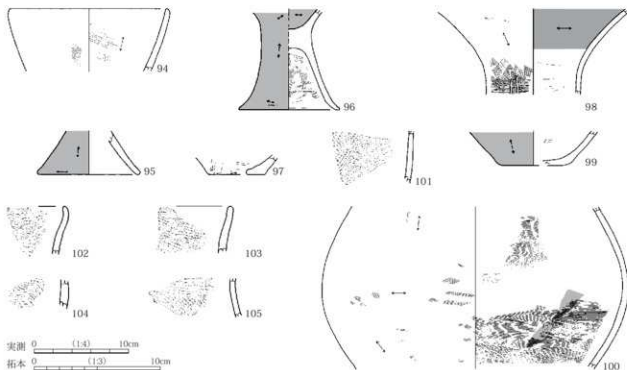
SB04 調査(東より)

## SB09 (第37・38図 PL 8・9・34)

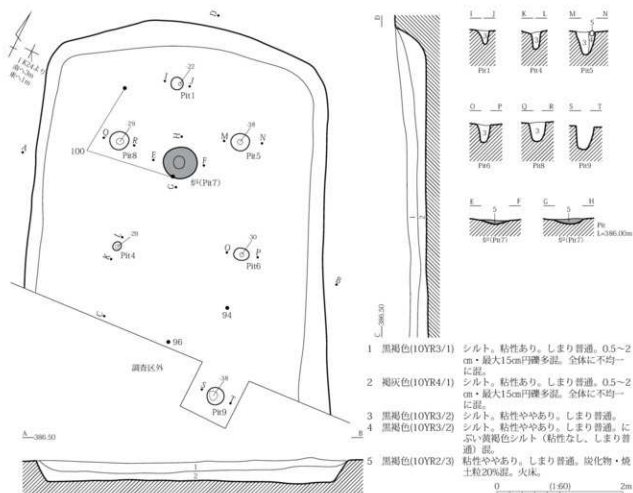
**位置:** I K24 グリッド。**検出:** IV層上面で黒褐色土の広がりを確認する。住居南壁は調査区外へ延びる。

**重複関係:** なし。**埋土:** 黒褐色土を主体とし砂礫を不均一に多く含む。色調で2層に区分した。1層は黒褐色土、2層はやや色調が明るく褐灰色土である。**構造:** 平面隅丸長方形。主軸方向はN26°W。主軸長推定6.00m、直交軸長4.24m。検出面からの深さは32～48cm。床は地山敲き締め。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6基を床面で確認する。主柱穴4基 (Pit4～Pit6・Pit8) は方形に配置する。床面からの深さは29～38cm。Pit1は北側の主柱穴間と北壁中央との間に位置する。棟持柱の柱穴であると考えられる。南側で検出したPit9は、住居跡の軸方向に平行するように検出された主柱穴4基と軸方向が一致しない。棟持柱と炉の位置から、おそらく入口は南東方向であると想定されるので、Pit9は出入口施設や貯蔵穴の可能性ある。**炉:** Pit7。主柱穴Pit5、Pit8間よりやや内側に位置する。やや掘り窪められた土坑の埋土に炭化物和焼土を多く含んでおり、地床炉と考える。**遺物出土状態:** 遺物の総量は少なく、ほとんどが1層からの出土で破片である。2層中から壺(98)、甕(101)、床面から壺胴部(100)、Pit8内から甕(102)が出土している。**時期:** 埋土の土器から、弥生時代後期(吉田式期)とする。

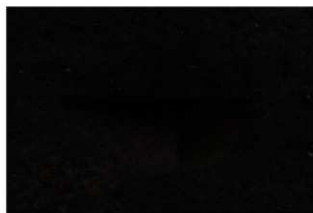
**出土遺物:** 94は鉢である。95・96は高坏の脚部で赤彩される。97は甌である。98～100は壺である。98は頸部付近の破片で、頸部文様には横走る篁描直線文を縦方向の垂下文で区画する「T字文」が施される。口縁部内側は赤彩される。99は壺底部付近の破片で赤彩される。100は胴部の破片で、内面の一部に赤色顔料の付着が認められる。101～105は甕である。101は胴部の破片で縦羽状文が施される。102・103は口縁部の破片で篁描波状文が充填される。104は胴部の破片で篁描波状文が充填される。内面に豆粒大の圧痕が認められる。105は頸部付近の破片で、頸部文様には籐状文が巡らされ、文様直下には篁描斜線文が施される。



第37図 SB09 遺物図



第38図 SB09 遺構図



SB09 炉A-B断面(南より)

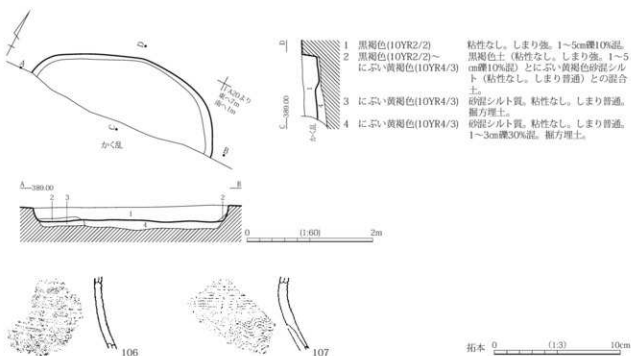


SB09 調査(北より)

## SB16 (第39図 PL10・34)

**位置:** I A20 グリッド。**検出:** IV層上面で黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で建物跡の大部分が破壊されていて北西壁付近のみ残る。**重複関係:** なし。**埋土:** 黒褐色土を主体とする複層。壁ぎわから床面にかけて地山の崩落土が観察できる。**構造:** 平面隅丸長方形と推定。主軸方向はN27° W。主軸残存長1.45m、推定直角軸長2.70m。検出面からの深さは22～24cm。床は地山を掘り窪めた後埋め戻し敲いて整形している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴はかく乱で破壊されていると考えられる。**炉:** かく乱で破壊されていると考えられる。**遺物出土状態:** 遺物の総量はごくわずかで破片である。検出時、周囲のかく乱土から弥生土器が出土した。埋土の遺物と同時期であり、おそらくこの建物跡の遺物であったと推測する。**時期:** 埋土の土器から、弥生時代後期(吉田式期)と推定する。

**出土遺物:** 掲載した遺物は、埋土中からの出土である。106は壺の頸部の破片で、頸部文様には竇描直線文が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線を充填した鋸歯文が付加される。107は甕の頸部の破片で、頸部文様には簾状文が巡らされ、文様直下には櫛描波状文が施される。



第39図 SB16 遺構図・遺物図



SB16 A-B断面(南より)

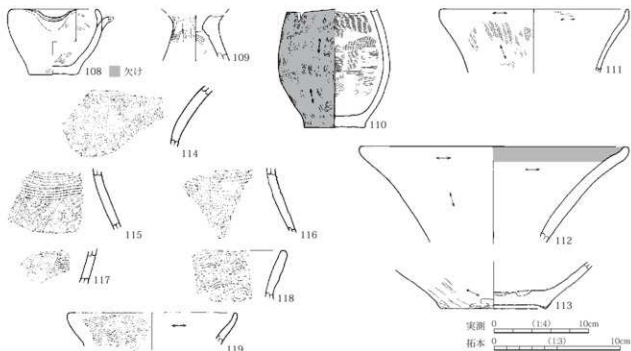


SB16 調査(南東より)

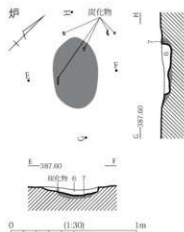
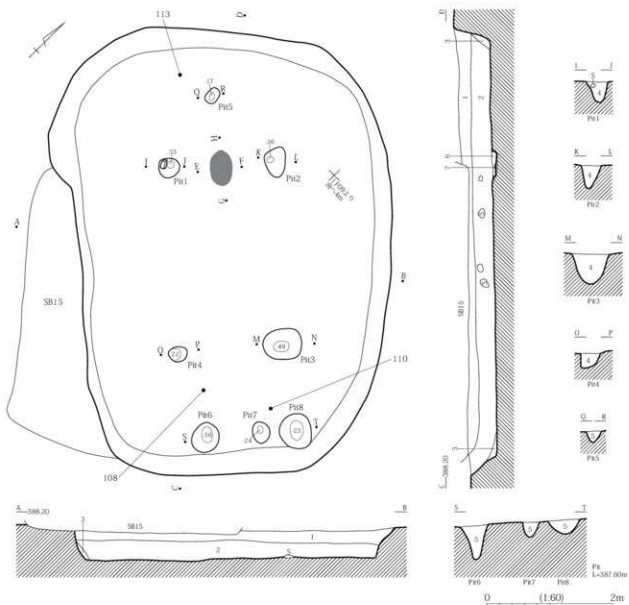
## SB17 (第40・41図 PL10・11・34)

**位置**：I F08・09・13・14グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の広がりを確認する。SB15で住居南西部が一部破壊されている。**重複関係**：SB15に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面隅丸長方形。主軸方向はN45°W。主軸長6.40m、直交軸長4.45m。検出面からの深さは50～60cm。床は地山敲きだがしまりは弱い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは8基を床面から確認する。主柱穴4基(Pit1～Pit4)は長方形に配置する。床面からの深さは22～49cm。北東壁中央付近の床面から椀持柱のピット(Pit5)を検出する。南東壁中央付近の床面には出入口施設と思われるピット(Pit6・Pit7)が並ぶ。南東隅に位置的に貯蔵穴と考えられるPit8を検出する。**炉**：Pit1、Pit2間に検出する。炭化物が散在し地山が焼けている状態で地床炉と考えられる。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、埋土中全体にまばらに広がりほとんどが破片である。床面から頸部から上方が欠損する壺(110)、完形の片口鉢(108)が出土している。埋土1層から高坏破片(109)、壺破片(111・113・114)、埋土2層から壺破片(112)、甕破片(117・119)、埋土中から壺破片(115)、甕破片(118)が出土している。**時期**：埋土の土器から、弥生時代後期(吉田式期)とする。炉の埋土中から出土した炭化材(コナラ属コナラ節)(分析No.10)の放射性炭素年代測定で $2,026 \pm 20$ yrBP(暦年較正用年代)の結果を得た(9268cal BC(5.7%), 61cal BC-28cal AD(88.6%), 41-48cal AD(1.1%))。

**出土遺物**：108は片口の鉢である。109は高坏の脚部である。110～116は壺である。115・116は壺の頸部の破片で、頸部文様には櫛描「T字文」が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線を充填した鋸歯文が付加される。114は頸部の破片で、頸部文様には櫛描直線文が施される。110は小形の壺で赤彩される。頸部より上方が欠損しているが、欠損部が水平に近く疑似口縁として加工され再利用された可能性も考えられる。111は口縁端がわずかに内湾する壺の口縁部である。112はわずかに口縁端が内湾する壺の口縁部で、口縁端内側が赤彩される。113は底部の破片である。117～119は甕である。117は胴部の破片で、櫛描波状文が施される。118・119は口縁部の破片で櫛描波状文が施される。



第40図 SB17 遺物図



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫多混シルト。粘性ややあり～普通。しまり普通。2m以下礫(垂円～垂角)多混。砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通～弱。
- 2 黒褐色(10YR3/1)～褐灰色(10YR4/1) 砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通～弱。1cm以下礫(円～垂円)・黄褐色土粒ブロック混。
- 3 褐灰色(10YR4/1) 細礫混砂質土。粘性ややあり。しまり普通。5cm礫少混。
- 4 黒色(10YR2/1) 砂礫土(粗礫)。しまり普通。
- 5 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト。粘性ややあり。しまり普通。純土粒5%・炭化物混。
- 6 暗褐色(10YR3/4) 粘性なし。しまり強。火灰。
- 7 赤褐色(2.5YR4/6) 粘性なし。しまり強。火灰。



SB17 調査(南東より)

第41図 SB17 遺構図

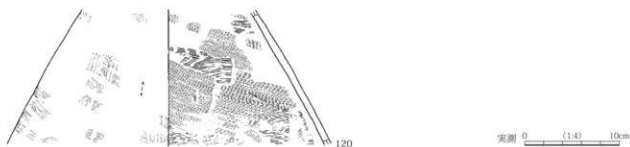
## 2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は1棟検出している。竪穴住居跡が南側（2区）まで広がって分布しているのに比べ、唯一1棟のみが北側（1区）で確認された。また、独立した棟持柱（以下「独立棟持柱」とする。）をもっているのが特徴である。

### ST01（第42・43図 PL12・13・34）

**位置：**I B24・25、I G05グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。当初土坑として調査を開始したが、土坑の形状が類似し等間隔に並ぶことから掘立柱建物跡と判断した。かく乱でPit3の上部が破壊されている。**重複関係：**なし。**埋土：**黒褐色土を主体とする単層。**構造：**棟方向N 17°Wで独立棟持柱をもつ側柱建物。桁行2間×梁行1間、桁行長5.4m、梁行長2.03m。柱穴は平面形が径42×52cm～31×75cmの円形～楕円形で、検出面からの深さが42～57cmである。埋土は単層で柱痕は認められない。Pit1～Pit6が支柱穴、Pit7、Pit8が棟持柱である。**遺物出土状態：**遺物の総量はわずかで、破片である。Pit4から壺胴部破片、Pit5から壺胴部破片（120）が出土している。壺胴部破片（120）は検出時に包含層から出土した破片と接合する。また120とPit5出土のそれ以外の破片とは接点はないが、同一資料の可能性がある。**時期：**出土遺物から弥生時代後期と考えられる。出土遺物は破片のため、吉田式期か否かは判断できないが、遺跡内の弥生時代後期の竪穴住居跡は吉田式期であると判断しているため、この掘立柱建物跡も同時期と考えるのが妥当である。

**出土遺物：**120は壺の胴部上半の破片で、内側表面に部分的な剥離が認められる。意図的なものか検討を要する。



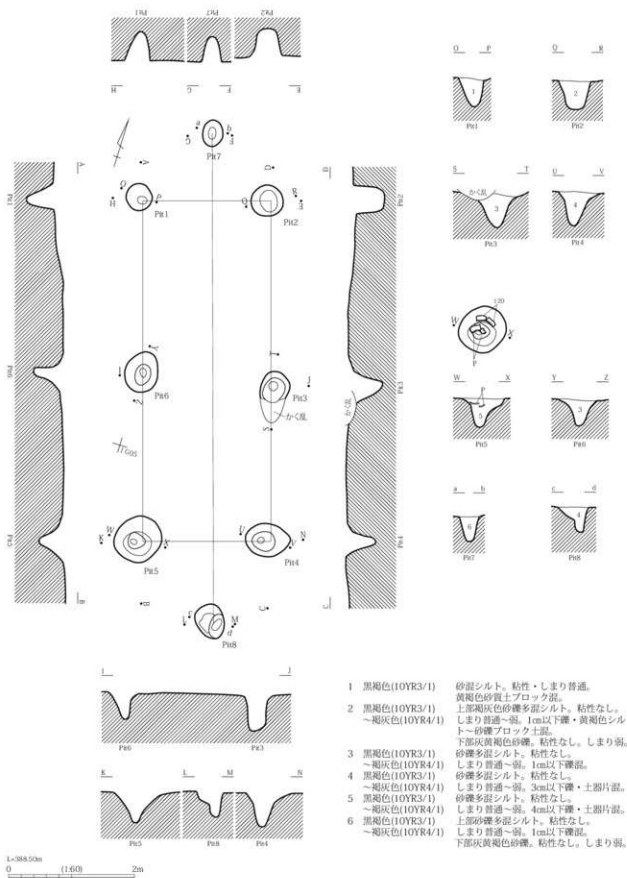
第42図 ST01 遺物図



ST01 発掘（北西より）



ST01 調査（南東より）



第43図 ST01 遺構図

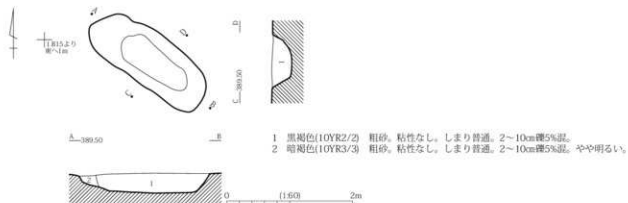


## 3. 墓跡

墓跡は3基検出している。SM01は遺物が出土しないため断定はできないが、平面と掘り込みの形状から、土坑墓と判断した。SM02は3個体の壺と1個体の甕を組み合わせて作られた土器棺墓である。SM03は1個体の甕で作られた土器棺墓である。

## SM01 (第44図 PL13)

**位置**：I B10・15グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。形状から土坑墓と判断し調査をする。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。北西側の壁際に崩落土と考えられるやや色調の明るい埋土が堆積する。**構造**：長軸方向N50°W、長軸長2.10m、直交軸長0.80m。平面形は角がやや丸い長方形で、壁はやや急に立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは31～33cmである。**遺物出土状態**：土坑墓内の土を水洗いしたが、歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物や土器はない。**時期**：SM01と弥生時代後期の堅穴住居跡(SB03以外)の長軸方向が類似すること、SM01、SD04の埋土が掘立柱建物跡ST01の柱穴の埋土と類似する砂礫(粘性なし、しまり普通～やや弱)であることから、弥生時代後期と推測する。



第44図 SM01 遺構図



SM01 調査(南より)



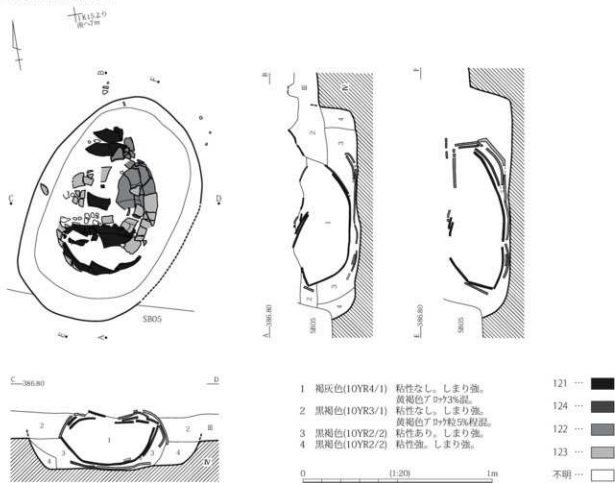
SM02 調査、検出(南西より)

## SM02 (第45～49図 PL13・14・35～37)

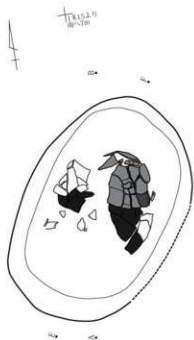
**位置:** I K14・15・19・20グリッド。**検出:**Ⅲ層中で遺物の分布を確認する。大形の壺が横にされた状態から土器棺墓と判断し調査をする。検出したⅢ層中では掘り込みは認められないが、遺物の出土状態からⅢ層中から掘り込まれた可能性がある。断面観察において、弥生時代の竪穴住居を検出するⅣ層上面で掘り込みを確認する。**重複関係:**南端をSB05に切られる。**埋土:**掘方埋土は黒褐色土を主体とする。土器棺内は粘性の強い黒褐色土である。土器棺を少しずつ埋めながら掘り進めたかどうかは、埋土の観察からは明らかにできなかった。**構造:**楕円形の掘り込み内に3個体の壺と1個体の甕を組み合わせて埋設している。組み合わせは外側から壺(123)、壺(122)、甕(124)、壺(121)の順である。掘方の長軸方向はN31°E、長軸長1.24m、直交軸長0.83m。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平らで、Ⅳ層上面からの深さは約17～23cmである。**遺物出土状態:**遺物の出土状態から、構築状況を復元する(第45図遺物出土状態)。下面:掘り込みの北東側に壺(123)の底部から胴下半部の半分を底部を北東方向に向けて置く。南西側には壺(122)の破片、壺(123)の頸部から胴上半部の一部の破片と甕(124)の胴上半部の破片を平らに敷く。さらに北東側に壺(123)とやや長軸方向を東へずらして、壺(122)の底部から胴下半部を重ねている。中間:掘り込みの北東側で壺(122)の内側に甕(124)の底部から胴下半部を底部を重ねるように置き、一番内側に壺(121)の底部を南西側、頸部を北東側に向け掘った後、壺(122)の口縁部を壺(121)の底部に逆位で被せている。壺(121)胴部の一部に焼成後の穿孔が1つあるが、穴は掘り込みの底面側にある。上面:北東側の壺(122)胴下半部の内側に甕(124)を置いている。検出面:最後に南東側で壺(121)胴部の外側に壺(122・123)の胴部から頸部の大きな破片を貼りつけている。棺として底部から頸部までほぼ完形なのは一番内側の壺(121)のみである。それ以外の甕(124)、壺(122・123)は底部から胴下半部はほぼ完形で、出土時に隣り合った破片同士が接合することから、構築時は完形のまま掘えられたと考えられる。しかし胴上半部は1/2から1/4程度のみ残存することや、出土時に隣り合った破片同士が接合しないこと、破片の上下の方向がさまざまな方向を向くことから、大きく割った(割れた)破片を利用し、全体として棺の形状になるよう整えていったと考えられる。一番内側の壺(121)の胴部最大径が約50cmと最も大きく、一番外側に置かれる壺(123)の胴部最大径は約45cmと最も小さいことから想定できる。また一番外側に置かれる壺(123)は赤彩の残りが最もよい。色彩的な効果を意識している可能性が考えられるのではないかと。内側の壺(121・122)も赤彩されているが残りはいくつかない。土器棺内の土を水洗いしたが、歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物の出土はない。**時期:**出土土器から弥生時代後期(箱清水式期)と考えられる。土器棺(121)内埋土中から出土した炭化材(コナラ属コナラ節)(分析No.5)の放射性炭素年代測定で $1,950 \pm 20\text{yrBP}$ (暦年較正用年代)の結果を得た(387cal AD (92.2%), 105-120cal AD (3.2%))。ただし1世紀から3世紀は日本産樹木が数10年から100年程度古い炭素年代を示すことが知られている(Sakamoto 2003; 尾寄 2009)ので、欧米産樹木で作成したIntCal13で較正した暦年代範囲は見かけ上実際の年代より数10年から100年程度古い可能性が考えられる。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセット(Jcal)で較正し直した場合、暦年代範囲はより新しい方に動く可能性に留意する必要がある。

**出土遺物:**掲載した遺物は、すべて土坑内に埋置されていた土器である。121～123は壺である。121は頸部から底部の破片で、頸部文様には2条一対の櫛描「T字文」が施され、文様直下から胴部最大径のやや下側まで赤彩される。胴部中央付近に径約0.8cmの焼成後穿孔が認められる。122は口縁が外反する壺で、頸部文様には櫛描「T字文」が施され外面と口縁部内面が赤彩される。123は頸部から底部の破片で、頸部文様には2条一対の櫛描「T字文」が施され外面と口縁部内面が赤彩される。124は甕である。胴部から底部の破片で胴部上半には櫛描波状文が施される。

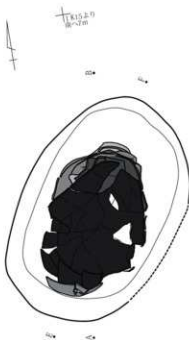
遺物出土状態(検出面)



遺物出土状態(上面)



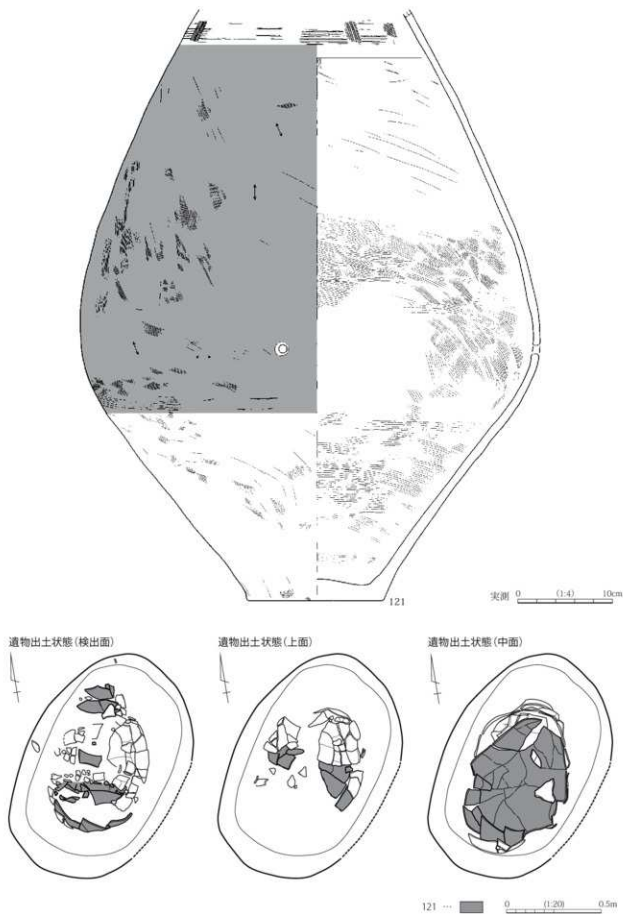
遺物出土状態(中面)



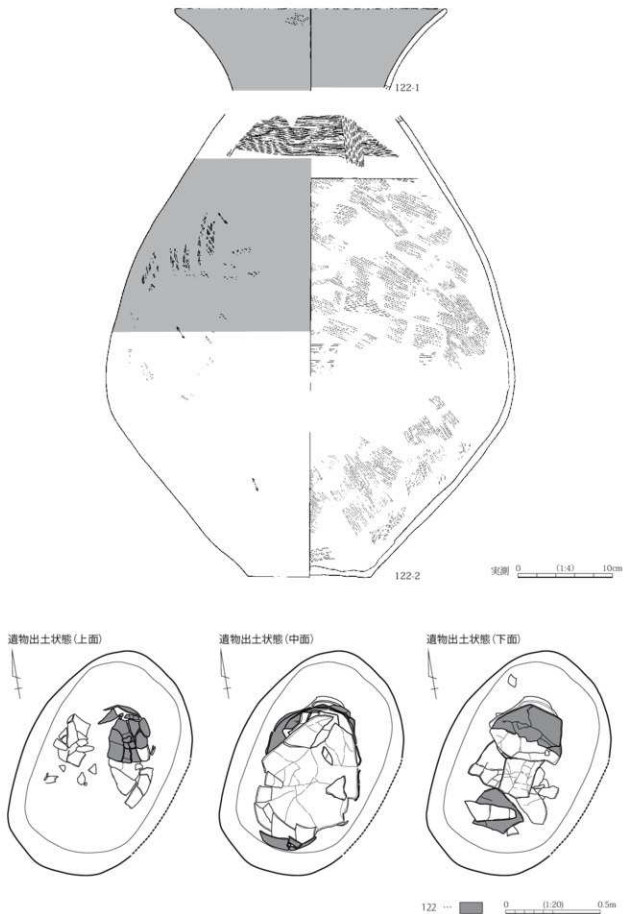
遺物出土状態(下面)



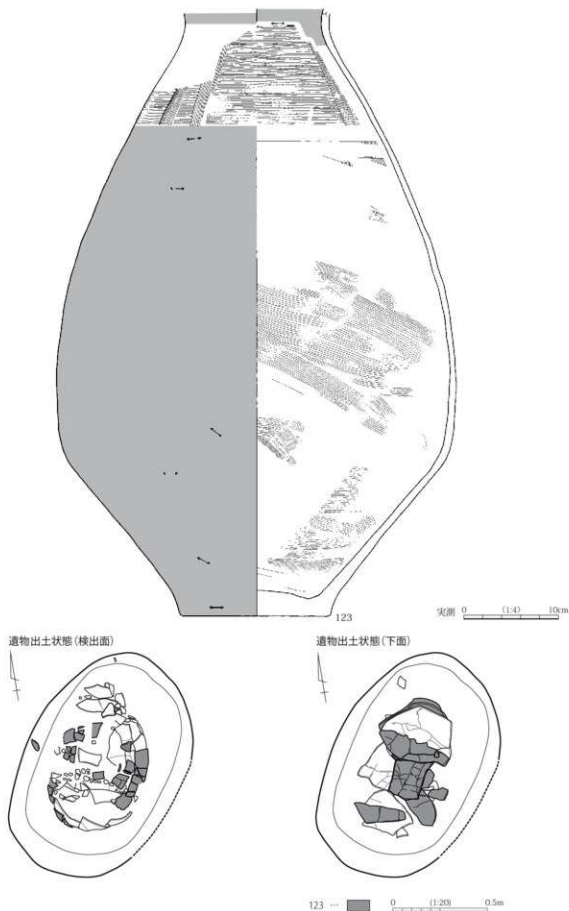
第45図 SM02 遺構図(1)



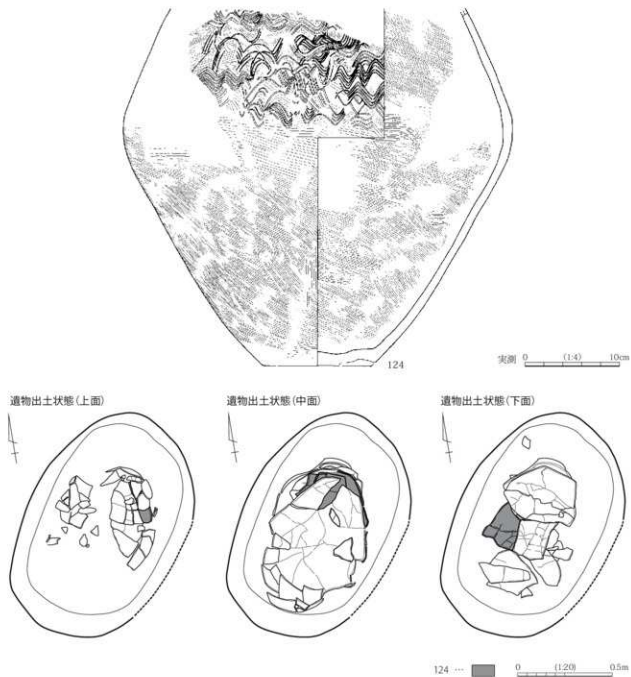
第46図 SM02 遺物図(1)・遺構図(2)



第47図 SM02 遺物図(2)・遺構図(3)



第48図 SM02 遺物図(3)・遺構図(4)



第49図 SM02 遺物図(4)・遺構図(5)

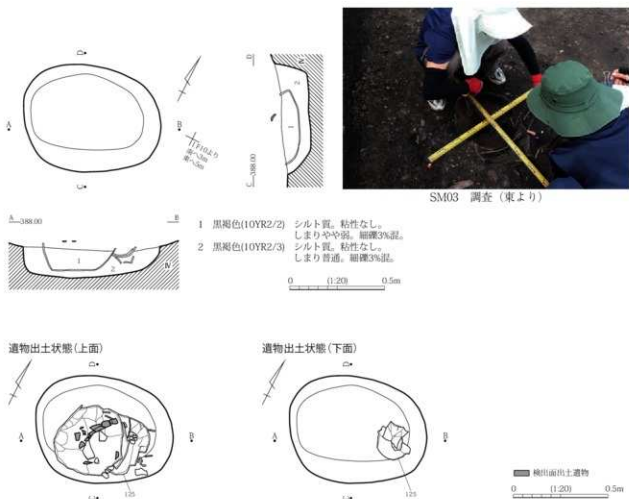


SM02 調査(南東より)

## SM03 (第50・51図 PL14・38)

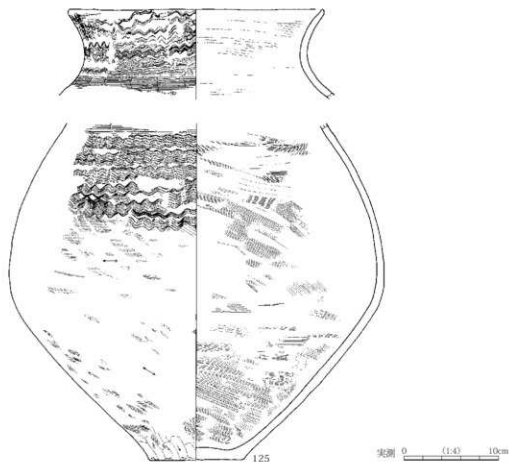
**位置:** I F10 グリッド。**検出:** IV層上面で土器が出土する。上部はかく乱により破壊されているため、土器は半分のみ検出される。また土器を埋設した掘り込みが確認できる。SM02と類似し、形状から土器棺墓と判断し調査をする。**重複関係:** なし。**埋土:** 土器棺内は黒褐色土を主体とする単層。粘性はなく、しまりはやや弱い。掘方埋土は土器棺内埋土と類似する黒褐色土を主体とするが、しまりは普通でやや明るい色調である。**構造:** 掘り込みは主軸方向 N63° E、主軸長 0.70m、直行軸長 0.58m。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは 12～19cm である。**遺物出土状態:** 甕 (125) の頸部で破壊し、口縁部から頸部を逆位にして被せ、主軸とはほぼ同一方向に底部を南西へ向け、横にされた状態で掘り込み内のやや南東側へ片寄って埋置している。甕 (125) を設置後埋め戻したと想像できるが、上部が破壊されているため、埋土から埋め方の過程を推測することはできない。土器棺内部の土を水洗したが、歯骨片や玉類等の副葬品と思われる遺物の出土はない。**時期:** 出土土器から弥生時代後期と考えられる。

**出土遺物:** 掲載した遺物は、土坑内に埋置されていた土器である。125 は甕で口縁から頸部の破片と頸部から底部の破片である。同一個体と考えられるが接合しない。口縁部と胴部上半に櫛描波状文が充填され、頸部には等間隔止めの櫛描傘状文が施される。



第50図 SM03 遺構図





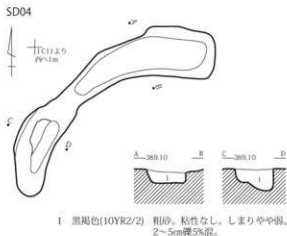
第51図 SM03 遺物図

## 4. 溝跡

1区においてIV層上面検出面で1条の溝跡を検出している。長方形に延びるため溝跡として登録したが、遺構の機能は不明である。

## SD04 (第52図 PL14)

**位置:** I B15、I C06・11 グリッド。**検出:** IV層上面で黒色土のやや湾曲した帯状の分布を認める。**重複関係:** なし。**埋土:** 黒色土を主体とする単層。やしまりがない。**構造:** 北東-南西方向に弧を描き、全長3.90m、溝幅0.35～0.80m、断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは11～35cm。平面形から周溝が考えられるが、内側で主体部と考えられるような遺構はなく、機能は不明である。**遺物出土状態:** 出土遺物なし。**時期:** 弥生時代後期か。



第52図 SD04 遺構図

## 5. 土坑

弥生時代の遺物を出す土坑は、SK127とSK160、SK220、SK261、SK287、SK289、SK291の7基である。SK160、SK289、SK291の出土土器はいずれも破片で、掲載可能な遺物はない。SK49、SK50は付近の墓跡SM01や溝跡SD04と埋土が類似すること、SK214、SK215は掘立柱建物跡ST01やSK220と埋土が類似すること、SK286、SK288～292はSK287と形状や埋土が類似することから同時期の土坑の可能性が高い。調査時に溝跡として登録したSD06～SD10は整理時に土坑と判断したため、本項に記載する。SD07とSD08、SD09とSD10は3.5m～4mほどの距離をとってほぼ平行に位置する。これらの4基の土坑にはなんらかの関連性があると考えられる。SD10が古墳時代の流路跡SD01に切られることから、古墳時代中期以前弥生時代後期以降の遺構であると考えられ本節に掲載するが、出土遺物がないため詳細な時期は不明である。また形状の類似性からSD06、SD07、SD08、SD09も同様の可能性が高い。

## SK127 (第53・54図 PL49)

**位置：**I F04グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**SK134を切る。**埋土：**黒褐色砂質シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N38°E、主軸長52cm、直交軸長43cm。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は南側に偏って柱状に窪む。検出面からの深さは40cmである。**遺物出土状態：**磨石(126)が埋土中から出土している。**時期：**弥生時代後期と考えられる。

**出土遺物：**126は粗粒玄武岩の磨石である。表裏面に磨面があり、長軸方向に沿ってわずかに擦痕が認められる。

## SK220 (第53・54図 PL15・34)

**位置：**I G05グリッド。**検出：**IV層上面で褐灰色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**褐灰色砂礫多混シルトを主体とする単層。粘性なし、しまり普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N7°E、長軸長52cm、直交軸長52cm。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は窪み、検出面からの深さは30cmである。**遺物出土状態：**鉢(127)と甕(128)の破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器から弥生時代後期と考えられる。

**出土遺物：**127は内外面とも赤彩される鉢としたが、検討を要する。128は小形の甕で、口縁部には櫛歯状波状文が充填され、頸部には簾状文が巡らされる。

## SK261 (第53・54図 PL34)

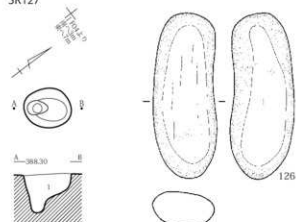
**位置：**I F10、G06グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**小礫をわずかに含む黒褐色シルトを主体とする単層。粘性ややあり、しまり普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N86°W、主軸長49cm、直交軸長34cm。平面形は楕円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平らで、検出面からの深さは17cmである。**遺物出土状態：**甕(129)の破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器から弥生時代後期と考えられる。

**出土遺物：**129は甕の底部付近の破片で、櫛状工具により施された斜条文の一部が残る。

## SK287 (第53・54図 PL15・49)

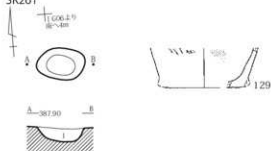
**位置：**I G09グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**小礫をわずかに含む黒褐色シルトを主体とする単層。粘性なし、しまり普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N23°E、

SK127



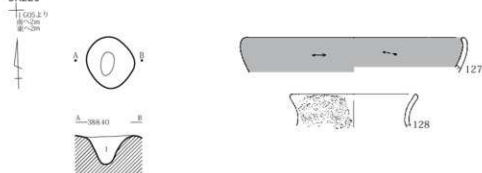
- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂質シルト、粘性普通、しまり普通。  
黄褐色砂質土ブロック少量。  
黄褐色砂質土地山。

SK261



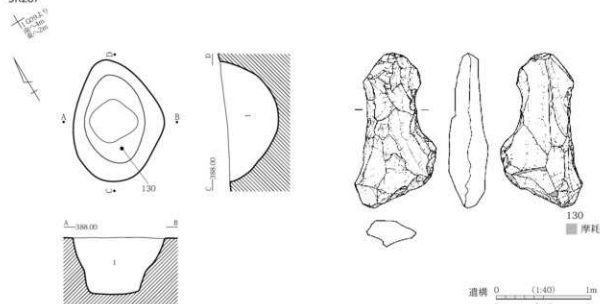
- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘性ややあり、しまり普通。  
黄褐色土粒3%混。  
3cm礫微混。

SK220



- 1 褐灰色(10YR3/1~10YR4/1) 砂礫多混。シルト。  
粘性なし、しまり普通~弱。  
1cm以下(最大3cm)礫混。

SK287



- 1 黒褐色(10YR3/2) 粘性なし、しまり普通、3cm礫微混。

遺構 0 (1:40) 1m  
実測 0 (1:4) 10cm  
石器 0 (1:3) 10cm

第53図 SK127・220・261・287 遺構図・遺物図



第54図 弥生時代後期 土坑分布図

主軸長128cm、直交軸長96cm。平面形は楕円形で、壁は短軸方向にはほぼ垂直に、長軸方向には緩やかに立ち上がる。底面は比較的平らで、検出面からの深さは63cmである。**遺物出土状態**：打裂石斧（130）が底部付近の埋土中から刃先を下に向けて出土している。**時期**：出土遺物から弥生時代後期と考えられる。**出土遺物**：130は分銅形の打裂石斧。使用頻度が激しかったようで、刃部は片減りして変形、摩耗し鋭利さを失っている。泥岩製。

## SD06（第54・55図 PL15）

**位置**：I G03グリッド。**検出**：IV層上面で暗褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：暗褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向はN31° E。主軸長166cm、溝幅55～75cmで断面形は南東側がやや深くなった逆台形状で、検出面からの深さは28～44cm。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

## SD07（第54・55図 PL15）

**位置**：I B22、I G02グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：SK224、SK225に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向はN68° W。主軸長228cm、溝幅76～92cmで断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは40～52cm。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

## SD08（第54・55図 PL15）

**位置**：I B22グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土のわずかに湾曲した帯状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向はN83° W。主軸長187cm、溝幅50～60cmで断面は南側がやや深くなった逆台形を呈し、検出面からの深さは23～33cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

## SD09（第54・55図 PL15）

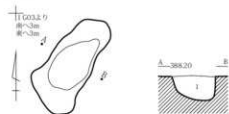
**位置**：I A25グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の先端のつぶれた長楕円形状の分布を認める。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向はN66.5° E。主軸長260cm、溝幅100～120cm、断面は緩やかなV字状で検出面からの深さは36～55cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

## SD10（第54・55図 PL15）

**位置**：I F05グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土の帯状の分布を認める。**重複関係**：SD01に切られる。**埋土**：黒褐色土を主体とする単層。しまりよい。**構造**：主軸方向はN80° E。主軸長263cm、溝幅75～90cm、断面は中央部がやや深く凹む逆台形を呈し、検出面からの深さは23～35cm。底面は凹凸がある。土坑墓の可能性も考えられるが、SM01と比較して形状が不整形であることから、用途は不明である。**遺物出土状態**：出土遺物なし。**時期**：不明。

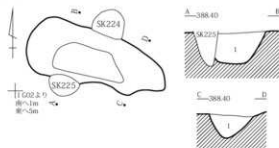
第3章 遺構と遺物

SD06



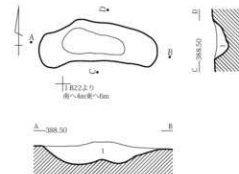
- 1 暗褐色(10YR3/4) 砂混シルト。粘性なし。しまり強。1~3cm細礫10%・黄褐色粒3%混。

SD07



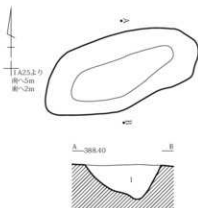
- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂混シルト。粘性ややあり。しまり強。黄褐色粒3%混。5cm礫少量。

SD08



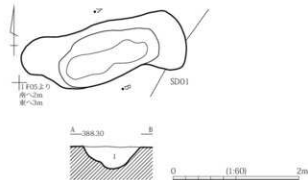
- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂混シルト。粘性ややあり。しまり強。黄褐色粒3%混。上部に細礫多混部分あり。

SD09



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂混シルト。粘性なし。しまり強。黄褐色粒5%混。3~7m礫上部に多混。

SD10



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂混シルト。粘性なし。しまり強。黄褐色粒5%混。礫微混。

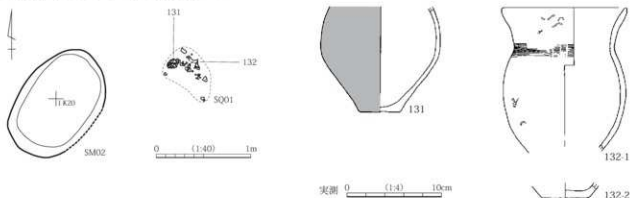
第55図 SD06~10 遺構図

## 6. 遺物集中

## SQ01 (第56図 PL15・34)

**位置**：I K20 グリッド。**検出**：遺物包含層（Ⅲ層）をバックホーで掘り下げ、Ⅳ層上面での遺構検出途中で土器片の集中を認める。西側約1.5mに土器棺墓SM02が位置するため、関連性を考え調査をする。**重複関係**：なし。**埋土**：なし。**構造**：掘り込みなし。**遺物出土状態**：小形の壺（131）と甕（132）が割れた状態でⅢ層から出土する。壺は破片の散らばりがあまりみられず、甕は壺と比較するとやや散らばって出土している。両者とも接合したが、完形にはならなかった。**時期**：出土土器から弥生時代後期箱清水式期と考えられる。小形の壺と甕のため非日常で使用されたと考えられ、隣接するSM02との関連がうかがわれる。

**出土遺物**：131は小形の壺で赤彩される。132は小形の甕で外面の摩耗が激しいが、頸部には簾状文が巡らされ、口縁部と胴部には櫛描波状文が施されていたと推定される。同一個体と考えられる小形の甕の底部破片が出土しているが接合しない。



第56図 SQ01 遺構図・遺物図

## 7. 遺構外

## 包含層出土遺物 (第57図 PL38)

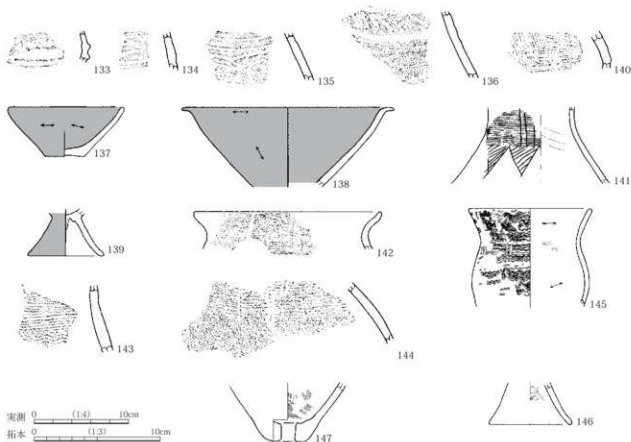
包含層および他時期の遺構から出土した弥生時代の遺物を本項に掲載した。

133は弥生前期末～中期初頭に相当する、条痕文が施された壺の胴部破片である。

134～136は中期に相当する土器である。134は小形の壺の胴部である。小片であるためはっきりしないが、沈線による変形工字文が施されている。135・136は壺の頸部付近の破片である。135は横走する沈線の下部に波状沈線文が施される。136は横走沈線文により横帯区画された文様の中に櫛状工具による刺突が施され、下部には櫛描きで直線文が施される。

137～147は後期の土器である。137は鉢で内外面とも赤彩される。138・139は高坏である。138は鈎縁状口縁高坏の坏部であるが、鈎縁状部の屈曲は不明瞭である。内面は摩耗してはっきりしないが、内外面とも赤彩されていたと推定される。139は脚部で赤彩が施される。140・141は壺である。140は壺の胴部破片であるが、当該期に所属するかは検討を要する。「土器片加工板」（柳澤2015）（註1）の可能性が考えられる。141は頸部の破片で、頸部文様には横走する櫛描直線文を縦方向の垂下文で区画する「T字文」が施され、文様直下には逆三角形内を斜走沈線で充填した鋸歯文が付加される。142～144は甕である。142は口縁部がやや直立する甕の破片で、口縁部には櫛描波状文が施され頸部には簾状文が巡らされる。143は口縁部と胴部に櫛描波状文が、頸部文様には櫛描直線文が施される。144は胴部が球胴と推定される甕の破片で、頸部文様には櫛描簾状文が、胴部には櫛描波状文が施される。145・146は小形の

台付甕で、同一個体と考えられるが接合しない。口縁部と胴部上半に櫛描波状文が充填され、頸部文様には麻状文が施される。147は後期の甕としたが、当該期に所属するかは検討を要する。



第57図 弥生時代後期 遺構外 遺物図

## 8. 小結

弥生時代後期の堅穴住居跡は、約6,000㎡の面的調査の中で7軒検出された。調査区の中はかく乱により破壊されている部分がある。検出できなかった遺構を考慮すると、実際にはもう数軒の堅穴住居跡があった可能性がある。住居の所属時期は出土遺物から「吉田式期」に限定され、重複関係がないことから、ほぼ一時期の集落であったと考えられる。主軸方向は堅穴住居跡SB03のみ北東-南西方向にとるが、ほかは本来の地形の傾斜に沿った北西-南東方向にとる。平面形態は7軒すべて隅丸長方形である。主軸長と直交軸長の比は1:1.43 (SB17)、1:1.45 (SB03推定)、1:1.56 (SB01)で、住居の規模の大小にかかわらずほぼ一定の比率と考えられる。柱穴は主柱穴が4本柱 (SB03のみ6本柱)で、長方形に配列される (SB01、SB02、SB04、SB09、SB17)。また主軸上で主柱穴の短辺を結ぶ線と壁との間に位置する棟持柱のビット (SB01?、SB03、SB09、B17) や棟持柱のビットと反対側の壁側寄りに2基1対の出入口施設と考えられるビット (SB01、SB09?、SB17)、その脇にある貯蔵穴と考えられるビット (SB09?、SB17) が認められる。炉跡は主軸上で、出入口施設と反対側の主柱穴の短辺の間 (SB17) か、やや中心側 (SB01、SB04、SB09) に配置される。3軒はやや窪みをもつ地床炉で、SB04のみ土器埋設炉である。いずれも浅川扇状地遺跡群でみられる弥生時代後期の住居形態と一致しており、一般的な形態といえる。

掘立柱建物跡は独立棟持柱をもち、本遺跡では堅穴住居跡7軒に対して1棟のみ検出された。長軸方向は北西-南東方向で住居跡と同じである。独立棟持柱をもつ掘立柱建物は、後世の神社建築と類似しており、弥生土器・銅鐸に描かれた絵画から、のちの神殿につながるような施設 (宮本1991)、また祖霊祭祀の施設 (広瀬2008) 等の特殊な性格をもった建物であった可能性が指摘されている。設案の分類 (註2)



によれば、本遺跡は、「Ⅰ類」居住域に存在し、A類) 竪穴住居と混在している」パターンであると考えられる。今回の調査では当該期の明らかな墓跡はみつかっておらず、掘立柱建物跡は墓域に伴わない。数軒の竪穴住居に対して1棟からなる独立棟持柱をもつ掘立柱建物は、弥生時代前期に成立し後期まで続く基本形態であるとされており、周辺遺跡での今後の検出例に期待したい。

土器棺墓は2基検出された。SM02は3個体の壺と1個体の甕を重ね合わせるようにして埋設されており、周辺遺跡ではほかに例をみない。SM03は1個体の甕からなる。SM02は箱清水式期であり、SM03も同時期の可能性が高い。本遺跡では当該期の住居跡はみつかっていないが、北方約400mに所在する本村東沖遺跡(長野高校地点)では集落跡がみつかっており、その墓域であると想定される。

註1. 埋文センターが調査した、長野市篠ノ井遺跡群(弥生時代後期)(1997)では「土器片製品」、佐久市森平遺跡(弥生時代中期後半)(2014)では「土器片加工円板」と呼称されている。ここでは西近津遺跡群(弥生時代後期)(2015)で「土器片を再加工している土製品」として報告された「土器片加工板」の呼称を用いる。

2. 設楽氏は独立棟持柱をもつ掘立柱建物の集落におけるあり方を以下のように分類している(設楽2009)。

Ⅰ類 居住域に存在している

- A類 竪穴住居と混在している
- B類 他の掘立柱建物とともに、あるいは単独で竪穴住居群から独立して存在している
- C類 方形区の中ややや外側に存在している

Ⅱ類 墓域あるいは墓に存在している

- A類 墓域の一角に建っている
- B類 墓の上に築かれている

## 第3節 古墳時代

### 1. 流路跡

調査区北部（1区）を北東-南西方向に延びる流路跡が1条ある。本来は南部（2区）においても流路は連続していたと考えられるが、以前の校舎建設やグラウンドの造成に伴って削平された可能性が高く検出されない。

#### SD01（第58・59図 PL16・39）

**位置：**I A25、I B07・08・12・13・17・21、I F05・10グリッド。**検出：**IV層上面の検出面において、遺物の破片を含む褐色～褐灰色砂礫の帯状の広がりを確認する。北東端は調査区外へ延びている。南西端で二股に分かれ途切れる。**重複関係：**SD10を切る。**埋土：**砂、砂質シルト、砂礫を主体とする。掘り込みが浅いため詳細は不明だが、一連の流れの中での堆積物で埋まっていると考えられる。G-H断面における4層、5層堆積物1g中の珪藻殻数は $6.9 \times 10^2$ 個および $6.7 \times 10^2$ 個、完形殻の出現率はいずれも0%で、淡水種からなる。堆積物中の珪藻殻数は非常に少なく、環境指標種群は検出されなかったため、堆積環境についての言及は難しい。**構造：**主軸方向はN33°E。全長約46.7m、溝幅0.54～1.75mを測る。検出面からの深さは2～18cm。断面形は浅い皿状を呈する。検出面や底面の標高から北東からみて、南西方向に流れていたと考えられる。**遺物出土状態：**遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片で砂礫部分を主とし埋土中全体に広がる。ただし、I B12グリッドの流路中央部から東側の縁と、I B17グリッドの流路幅がやや広くなった部分の中央部から東側の縁では、摩耗の少ない完形もしくは完形に近い土師器小型丸底土器（157～159）、土師器高坏（152～156）の坏部や脚部、土師器壺（161・162）の口縁部や底部が7mほどの間にまとまって出土している。**時期：**出土遺物から古墳時代中期とする。

**出土遺物：**掲載した遺物は、すべて埋土からの出土である。148・149は坏である。150は須恵器坏蓋である。外面にヘラ書きが認められる。151～156は高坏である。151・152は口縁部が外に開き、外面下部に稜をもつ坏部の破片である。153・154は裾部が屈曲する脚部、155・156は「ハ」の字に開く脚部の破片である。157～159は小型丸底土器である。159は胴部下半の一部に縄の圧痕が認められる。160～163は壺である。160は口縁が有段となる。164・165は壺としたが検討を要する。166は須恵器瓶としたが、当該期に所属するかは検討を要する。

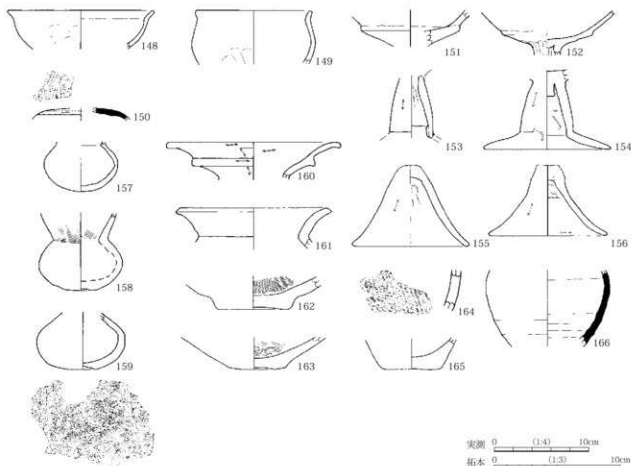


SD01 遺物出土状態中央部北側（西より）



SD01 遺物出土状態中央部南側（西より）





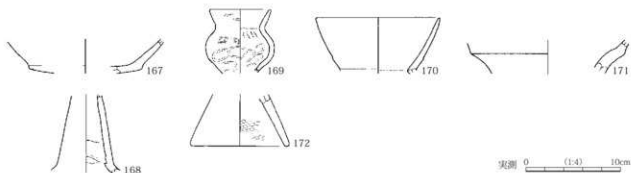
第59図 SD01 遺物図

## 2. 遺構外

### 包含層出土遺物 (第60図 PL.39)

包含層から出土した古墳時代の遺物を本項に掲載した。

167・168は高坏である。167は口縁部が外に開き、外面下部に稜をもつ坏部、168は裾部が屈曲する脚部である。169-170は小型丸底土器である。171は口縁が有段となる壺である。172は台付甕の台部である。



第60図 古墳時代 遺構外 遺物図

### 3. 小結

古墳時代の遺構は流路跡1条のみである。埋土中からは多くは摩耗した土器片が含まれるが、摩耗が少なく完形に近い土器が流路の東側の縁7mほどの間でまとまって見つかった。小型丸底土器や土師器高坏が目立つことから、ここでなんらかの祭祀的行為が行われたか、付近に祭祀施設がある可能性が考えられる。本遺跡の北方約400mに所在する本村東沖遺跡（長野高校地点）では、古墳時代中期の大規模集落跡がみつかっており、本遺跡内へ本村東沖遺跡の人々が足を踏み入れていた可能性も考えられる。浅川扇状地上の駒沢祭祀遺跡では湧水地帯に5世紀を主体とした多量の遺物を伴う遺構が検出され、祭祀に関連する遺構と考えられている（長野市2003）。祭祀遺構は、土坑内に多量の土師器を置いたもの（1号・5号祭祀遺構）、掘り込みをもたずに多量の土師器や石製模造品等を集積した状態のもの（2号・4号祭祀遺構）、破碎した土器片を集積したもの（3号祭祀遺構）、火床の痕跡、湧水を伴う集積が認められ、半径20mほどの範囲に集中している。

流路跡内の堆積物中の珪藻化石が非常に少ない点について、堆積物の堆積速度が速く珪藻が取り込まれなかった可能性と、堆積が一時的なもので乾燥が著しいため珪藻が繁茂できなかった可能性が指摘されている。堆積物や遺物の出土状態から、流路が形成された後、祭祀的行為が行われ、その後短期間で遺物を含むような砂礫で埋没したと想定される。断面形状から人為的な掘削とは想定し難く、自然流路と考えるのが妥当であろう。ただし、完形に近い土器がまとまって見つかった部分は流路幅がやや広くなっているため、人為的に拡張されている可能性も考えられる。



SD01 調査（北より）



SD01 市澤理事視察（北より）

## 第4節 奈良・平安時代

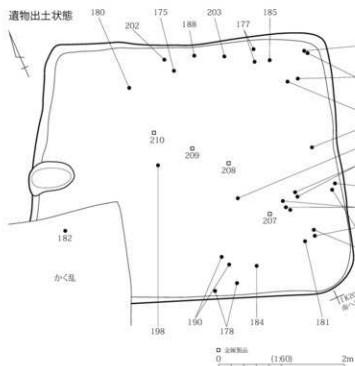
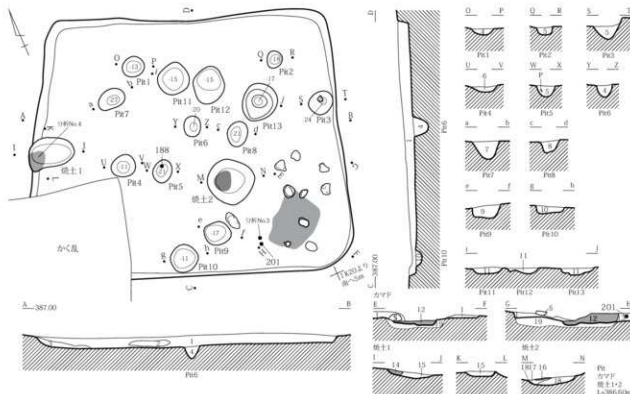
### 1. 竪穴建物跡

SB05 (第61～63図 PL17・40・41・49)

**位置:** I K14・19・20グリッド。**検出:**Ⅲ層中で遺物の散布とやや黒色が強い黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で建物南西隅の床面まで破壊されている。**重複関係:**墓跡 SM02、土坑 SK96・101・113・116・122を切る。**埋土:**黒褐色土を主体とし、壁際に地山の崩落土を含む複層。埋土中に黄褐色土のレンズ状の堆積があることから、本来は黒褐色土は上下に分かれると考えられるが、調査時に分層することができなかった。**構造:**平面ほぼ方形。主軸方向はN113°E。主軸長3.95m、直交軸長4.85m。検出面からの深さは11～17cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13基を床面で確認するが、掘り込みや位置から支柱穴と判断できるものはない。床面からの深さは11～27cmである。**カマド:**南東隅の埋土中から多数の直径約20～30cmの円礫や焼土、炭化物が広がっていたためカマドと想定する。煙道は不明である。また西壁中央付近でも床面がやや窪み焼土が認められたためカマドと想定する。壁がやや外側に膨らんでいるため煙道があった可能性は高いが、遺構検出時には壁外が焼けた状態は確認できず、煙道の立ち上がりの状態は不明である。切り合いがないため両者の新旧関係は不明であるが、カマドと想定した炭化物・焼土等の検出が明瞭であったか否かで、西カマドを破壊後、南東カマドを構築したと考えた。**遺物出土状態:**遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から黒色土器A 杯A (179)、黒色土器A 碗 (181)、黒色土器B 碗 (182)、土師器杯A (185)、土師器口ロコ壺 (192)、土師器壺 (195・196)、土師器壺底部 (201)、棒状鉄製品 (209・210) が出土している。床面からやや浮いた位置で黒色土器A 杯A (174・177・178)、黒色土器A 碗 (180)、土師器杯A (184・188)、灰軸陶器碗 (190)、土師器口ロコ壺 (194)、土師器壺 (197・198)、毛抜き (簞子) (207) が出土している。また埋土中から刀子 (208) が出土している。黒色土器A 杯A (174) は内面に灰色 (5Y5/1～4/1) またはオリーブ黒色 (5Y3/1) の付着物が認められたため赤外分光分析と蛍光X線分析を行ったところ、カオリナイト (粘土鉱物) が検出された。カオリナイトは白色顔料の可能性が示された。**時期:**埋土と床面出土の土器から9世紀後半と判断する。南東隅カマド内埋土から出土した炭化材 (コナラ属コナラ節) (分析No. 3) の放射性炭素年代測定で1,143 ± 20yrBP (暦年較正用年代) の結果を得た (777-790 cal AD (4.1%), 807-842 calAD (5.8%), 862-974cal AD (85.6%))。また西カマド焼土1から出土した炭化材 (広葉樹) (分析No. 4) は1,246 ± 20yrBP (暦年較正用年代) の結果を得た (682-779 cal AD (83.3%), 791-829 calAD (7.0%), 837-865cal AD (5.1%))。

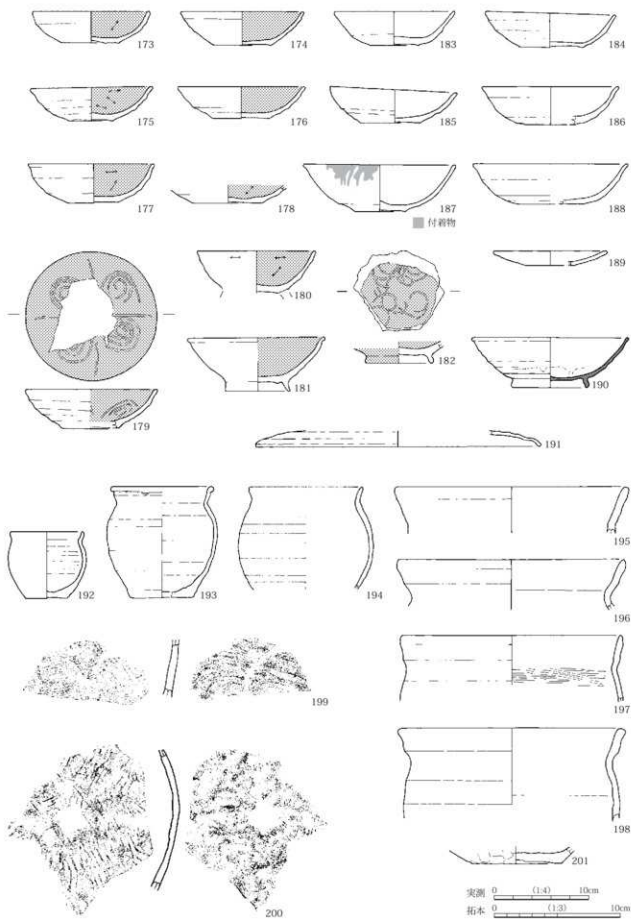
**出土遺物:**173～179は黒色土器A 杯Aである。179には暗文がみられる。180・181は黒色土器A 碗である。180は口縁部外面も磨き調整される。182は黒色土器B 碗で暗文がみられる。183～188は土師器杯Aである。189は土師器皿Aである。190は灰軸陶器碗である。軸は刷毛塗りされる。191は土師器杯蓋としたが検討を要する。192～194は土師器口ロコ壺である。193は底部中央に焼成後穿孔が認められる。195～200は土師器壺である。199・200は胴部の破片で叩き調整される。201は土師器壺の底部の破片としたが検討を要する。202～204は須恵器壺である。206は敲石である。砂岩の自然礫を用い、長軸の片側に敲打痕が認められる。上半部は欠損している。残存する長さは幅の2倍以上である。205は泥岩の2次加工のある剥片で上部は欠損している。剥離面を打面とし、上部の欠損後に二側縁部に加工を施工している。207は毛抜き (簞子) である。幅0.8cmの薄い鉄板を折り曲げて作られている。全長10.1cm。208は刀子である。全長9.5cm、身幅1.4cm、背厚0.5cm、茎長4.8cm、茎幅0.4cmではほぼ完形である。209・

210は棒状製品である。断面は方形であることから釘の可能性が高い。209は屈曲し頭部は欠損している。210は頭部は折り曲げられているように見えるが、断面は方形であり欠けている可能性もある。先端は欠損している。残存長6.4cm。



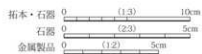
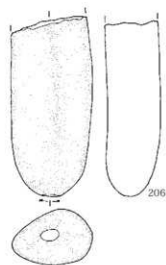
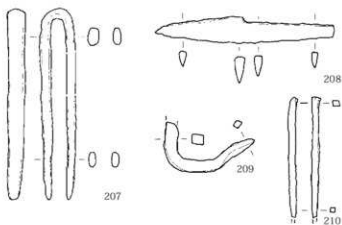
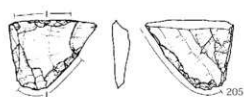
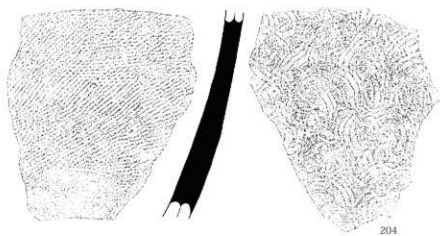
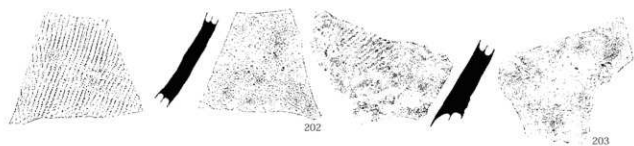
- |                            |  |
|----------------------------|--|
| 1 黒褐色(10YR3/1)             | シルト。粘性・しまり普通。砂・0.5~3mm礫混。炭化物混。                               |
| 2 褐色(10YR4/1)              | シルト~砂。粘性なし。しまり普通。0.5~1mm礫多混。黄褐色砂質シルトブロッツ、全体に混。北西部に断面レンズ状に分布。 |
| 3 褐色(10YR4/4)~黒褐色(10YR3/2) | 砂質シルト。粘性・しまり普通。黒褐色土粒・砂・小礫混。腐落土か。                             |
| 4 褐色(10YR4/1)              | 粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。   |
| 5 褐色(10YR4/1)              | 粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。炭化物・焼土粒混。                                |
| 6 褐色(10YR4/1)              | 粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒5%混。やや暗い。                                    |
| 7 褐色(10YR4/1)              | 粘性ややあり。しまり強。細礫少混。  |
| 8 褐色(10YR4/1)              | 砂質土。粘性なし。しまり強。4cm礫5%混。                                       |
| 9 褐色(10YR4/1)              | 粘性ややあり。しまり強。細礫・炭化物少混。  |
| 10 褐色(10YR4/1)             | 砂質土。粘性ややあり。しまり強。4cm礫5%混。                                     |
| 11 褐色(10YR4/1)             | 粘性ややあり。しまり強。微礫混。   |
| 12 黒褐色(10YR2/2)            | 粘性なし。しまり強。焼土粒・炭化物20%混。                                       |
| 13                         | 12層より明るく焼土粒・炭化物少混。   |
| 14                         | 15層よりやや暗く焼土粒・炭化物多混。  |
| 15 灰黄褐色(10YR4/2)           | 砂質シルト質。粘性なし。しまり普通。焼土粒5%混。                                    |
| 16 赤色(10R4/6)              | 粘性なし。しまり普通。火床。   |
| 17 暗褐色(10YR3/3)            | 粘性なし。しまりやや弱。焼土粒多混。炭化物混。掘方埋土。                                 |
| 18 暗褐色(10YR3/3)            | 粘性なし。しまりやや弱。焼土粒多混。   |
| 19                         | 地山と黒褐色土の混入。掘方埋土。   |

第61図 SB05 遺構図



第62図 SB05 遺物図(1)





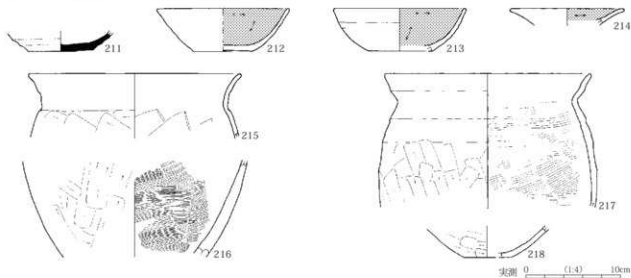
SB05 208 出土状態 (西より)

第63図 SB05 遺物図(2)

## SB06 (第64～66図 PL18・41・42)

**位置:** I K20 グリッド。**検出:** III層中で遺物の散布、やや黒色が強い黒褐色土の広がりや煙道部分と思われる焼土を確認する。かく乱で建物南西部は破壊されている。北東部は2c区を先行して調査した際にIV層上面を検出面としたため掘削してしまった。**重複関係:** SB07に切られる。**埋土:** 黒褐色土を主体とする。単層。**構造:** 平面はほぼ方形。主軸方向はN17° E。主軸長3.22m、直交軸長推定3.60m。検出面からの深さは21～28cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1基を床面で確認するが、掘り込みや位置から主柱穴と判断できない。床面からの深さは12cmである。**カマド:** 北壁の西寄りに位置する。袖は破壊されていて詳細は不明であるが、地山が焼けた火床で両脇に袖石の抜き取り痕跡と考えられる浅い窪みが認められる(第66図SB06カマド遺物図・掘方図)。煙道は緩やかに立ち上がる。**遺物出土状態:** 遺物の総量は少なく埋土中全体に広がる。床面から軟質須恵器A(211)が出土している。カマド内から黒色土器AⅢ(214)、土師器甕(215・217)が出土し、土師器甕(215・217)はSB07カマド床面よりやや浮いた状態で出土の土器と接合する。黒色土器AⅢ(214)はカマド袖石の抜き取り痕跡埋土中から出土している。埋土中から黒色土器AⅡ(212)、土師器甕(216)、煙道から土師器甕(218)が出土している。**時期:** SB07と接合する遺物があることから、切り合いはあるが時期差はほとんどないと考えられる。埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。

**出土遺物:** 211は軟質須恵器Aで底部は糸切りである。212・213は黒色土器AⅡである。214は黒色土器AⅢである。215～218は土師器甕である。



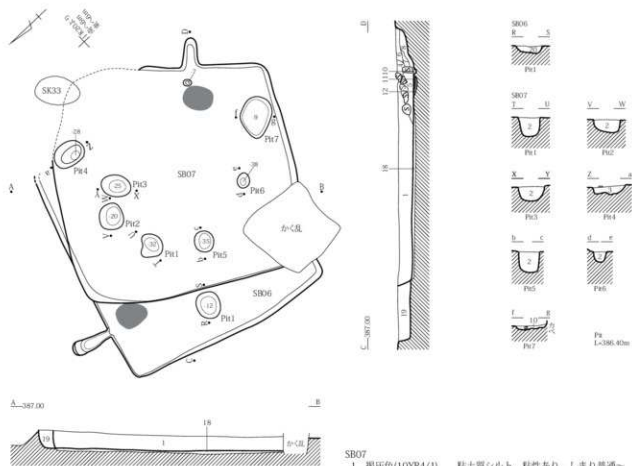
第64図 SB06 遺物図



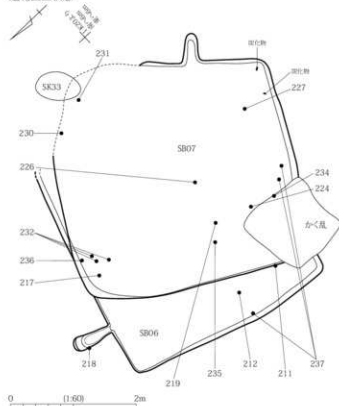
SB06 カマド調査(東より)



SB06カマド 213出土状態(南より)



## 遺物出土状態

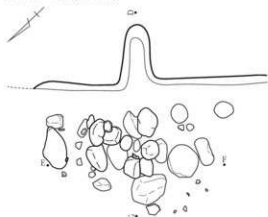


## SB07

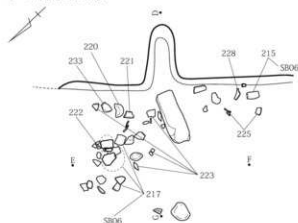
- |    |                               |  |
|----|-------------------------------|--|
| 1  | 褐灰色(10YR4/1)                  | 粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫少量。1～2m炭化物混。カマ下付近焼土粘粒混。            |
| 2  | 黒褐色(10YR3/1)～<br>黒灰色(10YR3/2) | 砂礫多混シルト。粘性なし。しまり普通。  |
| 3  | 黒褐色(10YR3/1)                  | シルト。粘性あり。しまり普通。土器片あり。                                      |
| 4  | 黒褐色(10YR3/1)                  | 黒褐色～灰褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫・3mm焼土ブロック混。                |
| 5  | 褐灰色(10YR4/1)～<br>褐灰色(10YR5/1) | 粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～弱。小礫混。炭化物・焼土粒子多混。                        |
| 6  | 褐灰色(10YR4/1)                  | 粘土質シルト。粘性あり。しまり普通～強。砂～小礫・焼土ブロック混。(4層より少ない)                 |
| 7  | 褐灰色(10YR4/1)                  | 砂質シルト。粘性ややあり。しまり普通。にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混。焼土粒・炭化物粒ほとんど含まない。         |
| 8  | 黒褐色(10YR3/1)                  | 粘土質シルト。粘性ややあり。しまり普通。焼土ブロック少量混。                             |
| 9  | 灰。                            |  |
| 10 | 黒褐色(10YR3/1)                  | シルト。粘性あり。しまり強。焼土粒・炭化物粒混。                                   |
| 11 | 褐色(5YR6/8)～<br>明赤褐色(5YR5/8)   | 褐色～明赤褐色砂質シルト。粘性普通。しまり普通～やや強。円礫少量。火床。                       |
| 12 | 暗赤褐色(5YR3/2)                  | 暗赤褐色砂質シルト。粘性普通。しまり弱。火床。                                    |
| 13 | 褐灰色(10YR4/1)                  | 粘性ややあり。しまり普通。褐色焼土ブロック混。火床。                                 |
| 14 | 褐灰色(10YR4/1)                  | 粘土質シルト。粘性あり。しまり普通。掘方埋土。                                    |
| 15 | 黒褐色                           | 黒褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり強。焼土粒・炭化物粒混。掘方埋土。                        |
| 16 | 黒褐色                           | 黒褐色粘質土。粘性あり。しまり強。黄褐色土ブロック混。                                |
| 17 | 黄褐色                           | 黄褐色砂質シルト。粘性ややあり。しまりやや強。                                    |
| 18 | 黒褐色(10YR3/1)～<br>黒褐色(10YR3/2) | 砂礫混シルト。粘性普通～ややあり。しまり強。黒褐色シルトブロック・黄褐色砂ブロック・0.2～5cm円礫混。掘方埋土。 |

第65図 SB06・07 遺構図(1)

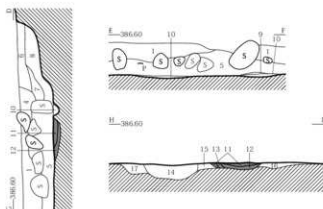
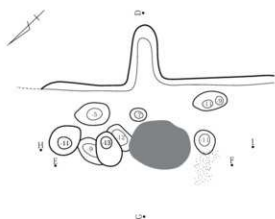
SB07 カマド出土状態



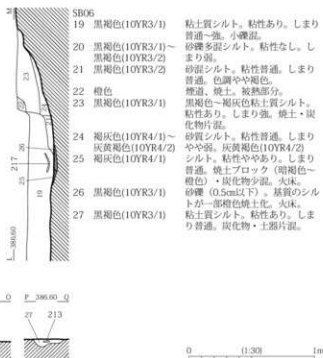
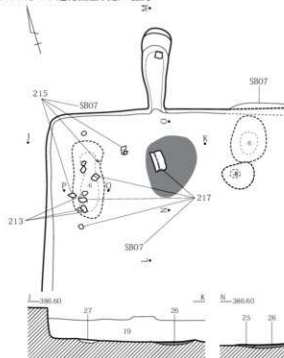
カマド遺物出土状態



カマド掘方



SB06 カマド遺物出土状態・掘方



第66図 SB06・07 遺構図(2)

## SB07 (第65～67図 PL18・19・42・43)

**位置**：I K20 グリッド。**検出**：Ⅲ層中で遺物と礫の散布、やや黒色が強い黒褐色土の広がりや煙道部分と思われる焼土を確認する。かく乱で建物南西隅が破壊されている。北東隅は2c区を先行して調査した際にⅣ層上面を検出面としたため掘削してしまった。ややしまりのよい部分を床面ととらえる。**重複関係**：SB06、SK33・110・112を切る。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面はほぼ方形。主軸方向はN133°E。主軸長3.50m、直交軸長3.70m。検出面からの深さは21～29cm。掘方を埋め戻し床を敷き締めている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7基を床面で確認するが、掘り込みや位置から主柱穴と判断できるものはない。Pit1～Pit6は床面からの深さが20～38cmである。Pit7はカマド南西側に位置し埋土に焼土粒や炭化物粒を含み床面からの深さが9cmほどであることから、カマドに関連する可能性がある。**カマド**：南東壁中央よりやや南寄りに位置する。埋土中から径20～70cm程度の多数の安山岩の亜円礫や凝灰岩を直方体に切り出された天井石と考えられる礫が出土している。亜円礫の一部や天井石は被熱部分が観察できる。原位置を保つ袖石や支脚石は確認できず、カマドは破壊されたと考える。壁から離れた位置に火床を検出し周辺には焼土粒や炭化物、灰の広がりが認められる。煙道は緩やかに立ち上がる。**遺物出土状態**：遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から軟質須恵器坏A(219)、黒色土器AⅢ(227)、土師器甕(232)が出土している。床面からやや浮いた位置で土師器甕(231)が出土している。須恵器甕(237)はSB06床面出土土器と接合する。埋土中から黒色土器A坏A(224)、黒色土器A碗(226)、土師器ロクロ甕(229・230)、須恵器横瓶(236)、須恵器瓶類(235)、須恵器提瓶(234)が出土している。カマドの床面から黒色土器A坏A(225)、土師器ロクロ甕(228)が出土している。カマド床面からやや浮いた位置で黒色土器A坏A(221～223)、カマド埋土中から軟質須恵器坏A(220)、土師器甕(233)が出土している。**時期**：SB06と接合する遺物があることから、切り合いはあるが時期差はほとんどないと考えられる。埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。

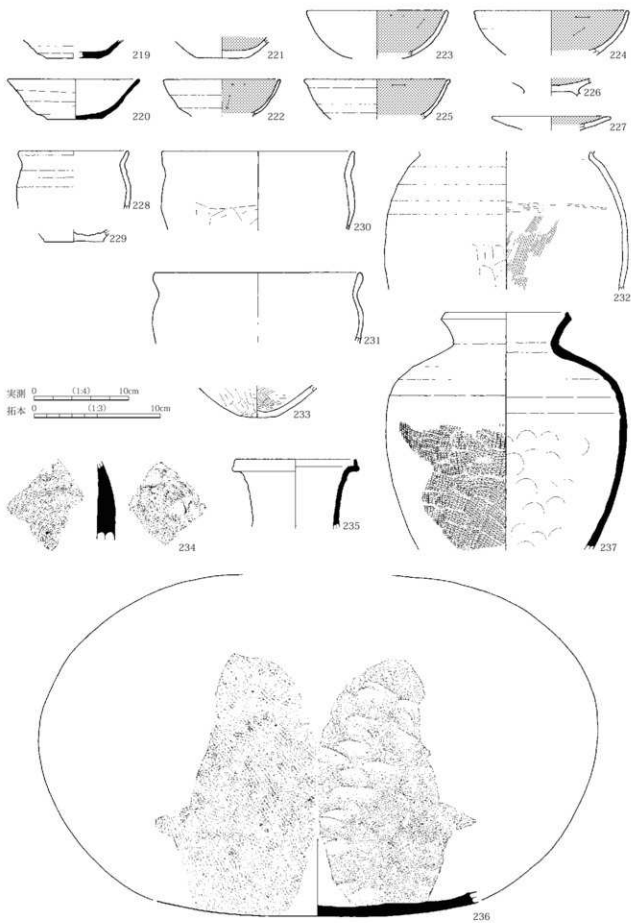
**出土遺物**：219・220は軟質須恵器坏Aで底部は糸切りである。221～225は黒色土器A坏Aである。226は黒色土器A碗の底部破片である。意図的に打ち欠いたものと推定されるが、二次的な使用痕等は確認できない。227は黒色土器AⅢである。228・229は土師器ロクロ甕である。同一個体の可能性も考えられるが接合しない。230～233は土師器甕である。232・233は砲弾形となる。234は須恵器提瓶の胴部破片としたが検討を要する。235は須恵器瓶類口縁から頸部の破片としたが検討を要する。236は須恵器横瓶である。237は須恵器甕である。



SB07 調査(北より)



SB07 237出土状態(北より)

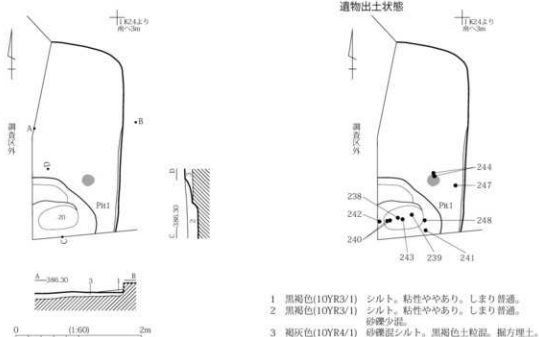


第 67 図 SB07 遺物図

## SB08 (第68・69図 PL20・43)

**位置**：I K23 グリッド。**検出**：調査区南西隅のIV層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱の廃棄物も所々混入する。平面形の北東部隅を検出できたのみで、残りの部分は調査区外へ広がる。検出時ではほぼ床面に達しており、平面図で示した落ち込みは掘方である。**重複関係**：なし。**埋土**：埋土は黒褐色土を主体とする単層。掘方埋土はやや色調の明るい砂礫混じりの褐色土である。**構造**：残存する部分から平面はほぼ方形と推定する。主軸方向はほぼ南北方向と推定する。主軸残存長3.10m、直交軸残存長1.40m。検出面からの深さは2～14cm。掘方を埋め戻し床としているが、硬化面や貼り床はない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1基を床面で確認するが掘り込みや位置から主柱穴と判断できない。床面からの深さは20cmである。**カマド**：調査区外にあると考える。Pit1の北東部の床面で焼土跡を検出したが、壁から離れた位置であることからカマドと判断しない。北東に位置するSB05もカマド以外の床面で同様な焼土跡が検出されている。使用方法は不明である。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく南部に偏って広がる。床面から黒色土器A坏A(239・241)、土師器口ろ壺(244)、土師器甕(248)、須恵器甕破片(247)が出土している。床面からやや浮いた位置で土師器甕(245・246・249)が出土している。Pit1から黒色土器A坏A(240)、土師器坏(238・242・243)、が出土している。**時期**：出土の土器から、9世紀後半と判断する。

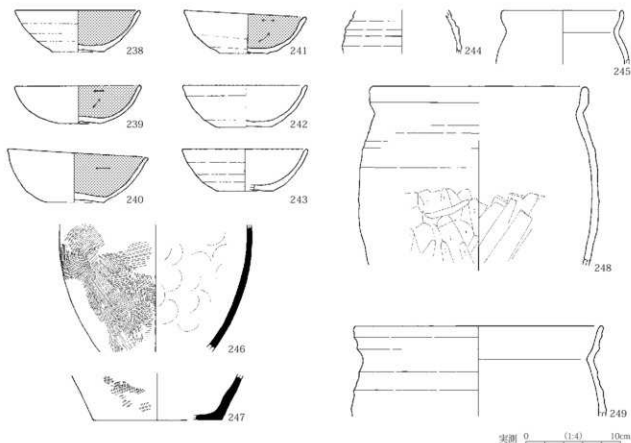
**出土遺物**：238～241は黒色土器A坏Aである。242・243は土師器坏Aである。244・245は土師器口ろ壺である。246・247は須恵器甕である。248・249は土師器甕で、248は砲弾形となる。



第68図 SB08 遺構図



SB08 遺物出土状態(北より)



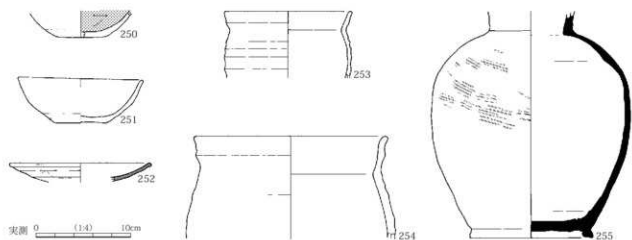
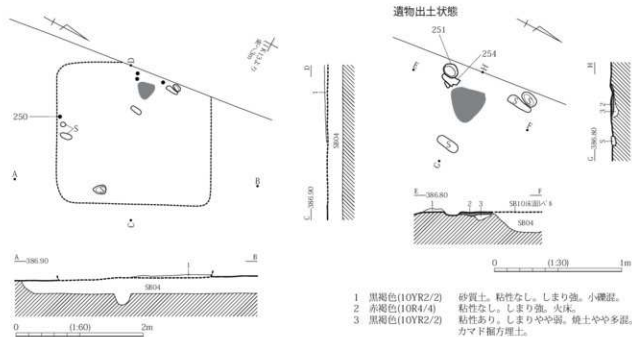
第69図 SB08 遺物図

## SB10 (第70図 PL20・44)

**位置：**I K08・13グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色土の広がりと古代の遺物分布を確認し、当初SB04として調査を開始する。先行トレンチを入れ床面を確認したところ、床面から弥生土器が出土することから、SB04は弥生時代の住居跡と判断する。一方、古代の遺物は埋土上部から出土していることから、弥生時代の住居跡の上に重なるように古代の建物跡(SB10)があると判断する。西側は調査区外に広がる。**重複関係：**SB04を切る。**埋土：**検出時ではほぼ床面に達していたと考えられ、わずかに残る黒褐色土を埋土とする。**構造：**平面は検出できない。西側の一部で硬化面の広がりを確認したこと、遺物の出土位置、カマド跡の位置から方形と推定する。主軸方向は推定N118°W。検出面からの深さは0～数cm。硬化面から貼床と推定、壁の立ち上がりは不明である。ピットは確認できない。**カマド：**西側調査区の壁際に焼土の広がりや被熱礫や土器片のまとまりが認められることから、カマドと想定する。煙道は調査区外にあると想定する。**遺物出土状態：**遺物の総量はわずかである。カマド周囲から土師器坏A(251)、土師器甕(254)が出土している。床面からやや浮いた位置で黒色土器A坏A(250)、埋土中から灰軸陶器皿(252)、土師器ロクロ甕(253)、須恵器瓶(255)が出土している。**時期：**埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。

**出土遺物：**250は黒色土器A坏Aである。251は土師器坏Aである。252は灰軸陶器皿である。口縁部分の小破片であるが釉は刷毛塗りと推定される。253は土師器ロクロ甕である。254は土師器甕である。255は須恵器瓶である。





第70図 SB10 遺構図・遺物図



SB10 調査(東より)



SB10 カマド(東より)

## SB11 (第71・72図 PL20・21・44・49)

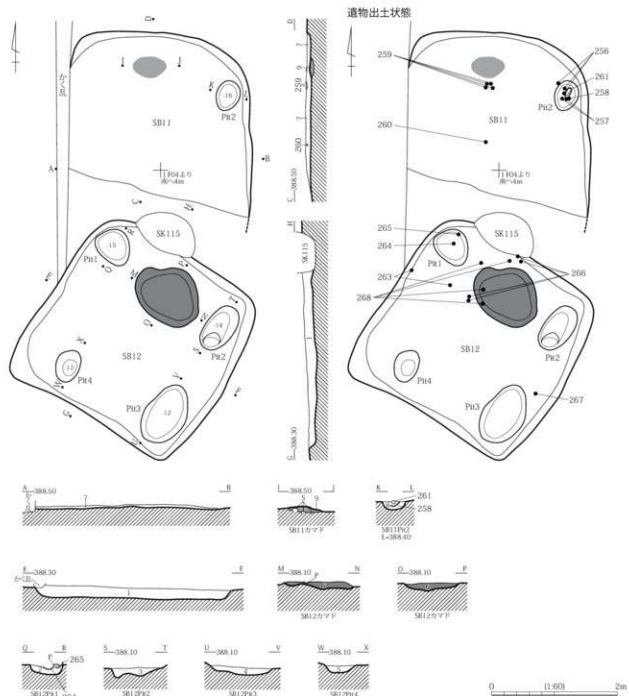
**位置:** I F03・04グリッド。**検出:** IV層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で住居西壁が破壊、南半分は削平されている。**重複関係:** SB12に切られる。**埋土:** 黒褐色土を主体とする単層。**構造:** 平面隅丸方形。主軸方向はN0°。主軸残存長2.48m、直交軸残存長2.83m。検出面からの深さは約5cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット1基 (Pit2) を床面で確認し、主柱穴の可能性が高いが1基のみで断定できない。床面からの深さは約16cmである。**カマド:** 北壁中央で壁から約40cm離れた床面で焼土の広がりが認められ、カマド火床と想定する。煙道は確認できない。**遺物出土状態:** 遺物の総量は少なく、埋土中全体に広がる。Pit2からは軟質須恵器杯A (258) と敲石 (261) が出土し、その上位の床面からやや浮いた状態で須恵器杯A (256)、軟質須恵器杯A (257) が出土している。埋土中から須恵器甕 (259)、土師器ロクロ甕 (260) が出土している。**時期:** 埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。北部埋土から出土した炭化材 (広葉樹) (分析No. 7) の放射性炭素年代測定で  $1,302 \pm 21\text{yrBP}$  (暦年較正用年代) の結果を得た (662-722 cal AD (65.3%), 740-768 calAD (30.1%))。また Pit2埋土中から出土した炭化材 (クリ) (分析No. 8) の放射性炭素年代測定では  $1,230 \pm 20\text{yrBP}$  (暦年較正用年代) の結果を得た (693-747 cal AD (34.1%), 763-781 cal AD (14.2%), 787-878cal AD (47.0%))。**出土遺物:** 256は須恵器杯Aである。257・258は軟質須恵器杯Aである。259は須恵器甕としたが、検討を要する。260は土師器ロクロ甕である。261は敲石である。安山岩を用い、長軸の端部に敲打痕が認められ、長さは幅の2倍以上である。

## SB12 (第71・72図 PL21・44)

**位置:** I F03・04・08・09グリッド。**検出:** IV層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。**重複関係:** SB11を切る。SK115に切られる。**埋土:** 黒褐色土を主体とする。**構造:** 平面方形。主軸方向はN28° E。主軸長2.78m、直交軸長2.92m。検出面からの深さは8～14cm。床は地山敲きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット4基 (Pit1～Pit4) を床面で確認し、位置から4本方形配列の主柱穴であると考えられる。床面からの深さは12～15cmである。**カマド:** 北壁中央付近の床面で炭化物や焼土ブロックの分布を確認し、カマド火床と想定する。煙道は確認できない。**遺物出土状態:** 遺物の総量は少なく埋土中全体に広がる。Pit1から黒色土器A杯A (264・265)、床面からやや浮いた状態で軟質須恵器杯A (263)、土師器甕 (266～268)、埋土中から須恵器杯A (262) が出土している。**時期:** 埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。**出土遺物:** 262は須恵器杯Aである。263は軟質須恵器杯Aである。264・265は黒色土器A杯Aである。265体部外面に文字あるいは記号と思われる線刻が認められる。266～268は土師器甕で砲弾形となる。267・268は同一個体の可能性も考えられるが、接合しない。



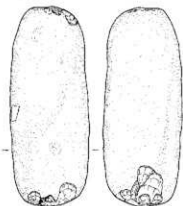
短期大学生見学



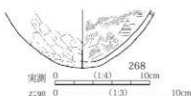
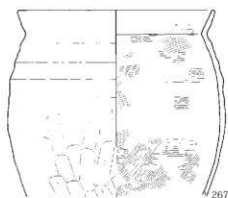
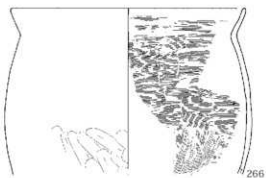
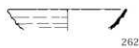
- |                |  |                |   |
|----------------|--|----------------|---|
| 1 黒褐色(10YR3/1) | 細礫混砂質土。粘性ややあり。しまり普通。5~8cm礫集中あり。                          | 6 黒褐色(10YR2/2) | 礫混粘土。粘性ややあり。しまりやや弱。1~5cm褐色砂質土(粘性あり。しまりやや強。)ブロック10%・1~7cm礫40%・1~3cm炭化物1%・3~10cm褐色焼土ブロック30%混。上部に1~3cm礫多混。             |
| 2 黒褐色(10YR2/2) | 砂混シルト。粘性あり。しまり弱。1~5cm礫3%・1cm炭化物1%・2~3cm褐色焼土ブロック1%混。      | 7 黒褐色(10YR2/3) | 粗粒砂混シルト。粘性あり。しまりやや弱。0.5~7cm礫20~30%・1~3cm明赤褐色焼土ブロック5%・1~5cm炭化物5%混。高部に0.5~7cm礫40%・0.5cm暗褐色粗粒砂(粘性なし。しまり強。)ブロック30~50%混。 |
| 3 黒褐色(10YR2/2) | シルト。粘性ややあり。しまり弱。3~5cm礫20%混。                              | 8 黒褐色(10YR3/2) | 細礫混シルト。粘性あり。しまりやや弱。1~3cm炭化物1%・褐色焼土3%混。  |
| 4 黒褐色(10YR2/2) | 粘土質シルト。粘性あり。しまりやや弱。1~7cm礫3%・1cm褐色粗粒砂(粘性なし。しまり強。)ブロック3%混。 | 9 明赤褐色(5YR5/6) | 焼土。   |
| 5 黒色(10YR2/1)  | 粘質土。粘性あり。しまり弱。3~5cm礫5%・1cm黄褐色粗粒砂(粘性なし。しまり強。)ブロック1%混。     |                |   |

第71図 SB11・12 遺構図

SB11



SB12



実測 0 10cm  
石器 0 (1.3) 10cm

第72図 SB11・12 遺物図



SB11 調査(西より)

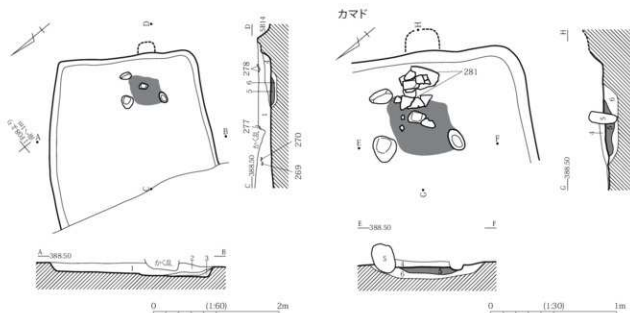


SB12 調査(西より)

## SB13 (第73・74図 PL22・45)

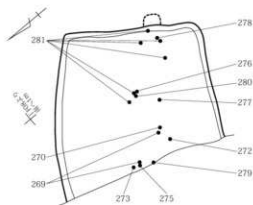
**位置:** I F07・08グリッド。**検出:** IV層上面で遺物の分布と黒褐色土の広がりを確認する。埋設管によるかく乱で埋土中まで破壊されている。西壁は調査区外へ延びる。**重複関係:** SB14に煙道付近を破壊される。**埋土:** 黒褐色土を主体とし、南壁際に崩落土を含む複層。**構造:** 平面ほぼ方形と推定。主軸方向はN129°E。主軸残存長2.60m、直交軸長2.50m。検出面からの深さは13～22cm。床は地山敲きでややしまりがよい。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットはない。**カマド:** 南東壁中央よりやや南寄りに位置する。火床と北側の袖石、支脚石が原位置で、南側には袖石の抜き取り痕跡が確認されることから石組カマドと考えられる。袖石・支脚石ともに安山岩の円～亜円の自然礫で、熱を受け赤褐色に変色している。粘土が貼り付けられていたかどうかは不明である。検出時と断面トレンチ掘削時にわずかに東壁外のIV層が焼けている部分を観察し煙道ありと判断するが、カマド精査時では不明瞭で平面形を確認できなかった。**遺物出土状態:** 遺物は埋土中全体に広がる。床面から黒色土器A坏A(272)、須恵器坏A(269)、須恵器坏B(275)、土師器甕(281)が出土している。埋土中から土師器坏A(273)、須恵器坏A(270)、軟質須恵器坏A(271)、軟質須恵器坏B(274)、須恵器甕(277)、土師器甕(278～280)、土師器鉢(276)が出土している。須恵器坏A(269)は埋土中の、土師器甕(281)はカマド内や埋土中の土器と接合する。**時期:** 埋土と床面出土の土器から、須恵器坏B(275)は硬質で須恵器の終了する頃、軟質須恵器坏Aは出現期の頃、土師器は出現期の頃、黒色土器Aは他の遺構と比較して割合が少ないなどのことから、9世紀中頃と判断する。

**出土遺物:** 269・270は須恵器坏Aである。271は軟質須恵器坏Aである。272は黒色土器A坏Aである。273は土師器坏Aである。274・275は須恵器坏Bである。276は土師器鉢である。277は須恵器甕としたが、検討を要する。278～281は土師器甕である。281は砲弾形となる。



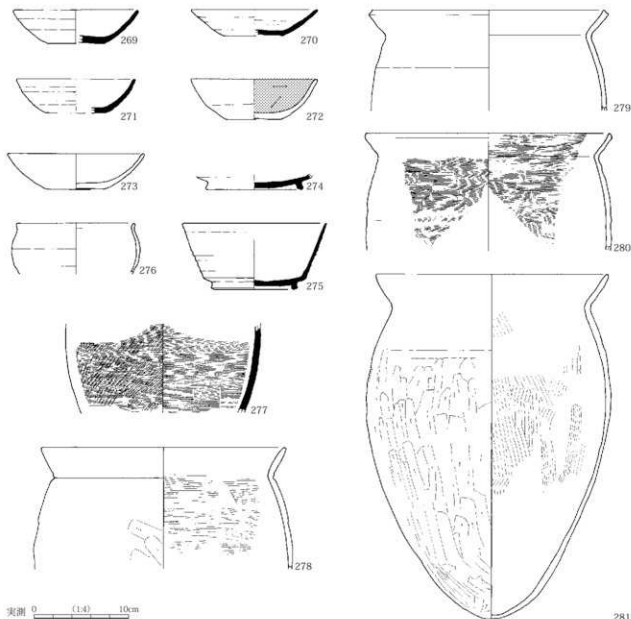
第73図 SB13 遺構図(1)

遺物出土状態



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性普通～やや弱。しまり普通。20cm以下円礫混。
- 2 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト。粘性普通。しまり普通。1～2m橙色焼土ブロック・褐色シルトブロック混。土割片混。
- 3 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性なし。しまりやや弱。
- 4 黒褐色(10YR3/1) シルト。粘性ややあり。しまり普通。砂礫少混。橙色焼土ブロック・炭化物混。
- 5 褐色 シルト。粘性ややあり。しまりやや強。火床。
- 6 黒褐色(10YR3/1) シルト。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。カマド掘方埋土。

0 (1:60) 2m



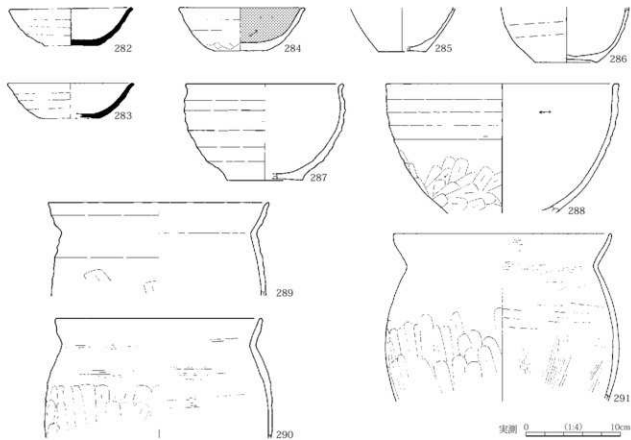
実測 0 (1:4) 10cm

第74図 SB13 遺構図(2)・遺物図

## SB14 (第75・76図 PL22・23・45・46)

**位置**：I F08 グリッド。**検出**：IV層上面で遺物の散布と黒褐色土の広がりを確認する。かく乱で北東壁と南壁が破壊されている。**重複関係**：SB13の煙道部分を破壊している。**埋土**：黒褐色土を主体とする。南西部には黄褐色砂質土のブロックを含む黒～灰褐色の崩落土（地山）の流れ込みが分布する。複層。**構造**：平面はほぼ方形。主軸方向はN9° W。主軸長2.60m、直交軸長3.32m。検出面からの深さは6～20cm。床は地山敷きで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット4基を床面で確認し、位置からPit2～Pit4を主柱穴と判断する。床面からの深さは7～21cmである。Pit1は南東隅の壁際に位置し、埋土中に炭化物や土器片を含み他のピットと異なることから貯蔵穴の可能性が考えられる。住居としての機能はもたないと考えられる。**カマド**：ない。**遺物出土状態**：遺物の総量は少なく、ほとんどが中央部から南東部の埋土中に広がる。床面から土師器鉢（287）が出土している。埋土中から黒色土器A坏A（284）、軟質須恵器坏A（282・283）、土師器鉢（288）、土師器甕（289～291）、Pit1の土師器ロクロ甕（285・286）が出土している。**時期**：埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。Pit1埋土から出土した炭化材（コナラ属コナラ節）（分析No.9）の放射性炭素年代測定で $1,220 \pm 20$ yrBP（暦年較正用年代）の結果を得た（713-744 cal AD（14.3%）、765-885 calAD（81.1%））。

**出土遺物**：282・283は軟質須恵器坏Aである。284は黒色土器A坏Aである。285・286は土師器ロクロ甕である。287・288は土師器鉢である。289～291は土師器甕で、砲弾形となる。



第75図 SB14 遺物図

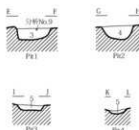
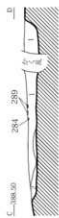
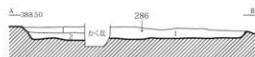
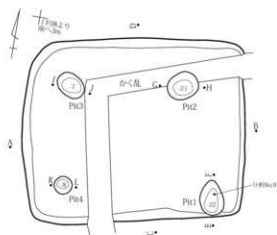
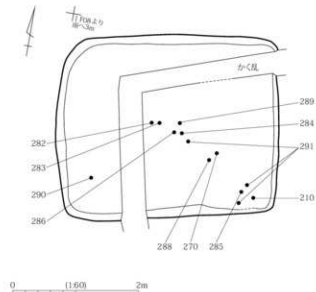


Fig. 1-388.30m

- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
- 2 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
- 3 黒褐色(10YR3/1) ~ 褐灰色(10YR4/1) 0.2m以下黄褐色砂質土ブロック混。細礫多混。砂質シルト。粘性・しまり普通。
- 4 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性・しまり普通。
- 5 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性ややあり。しまり普通。

遺物出土状態



第76図 SB14 遺構図



SB13 調査 (東より)



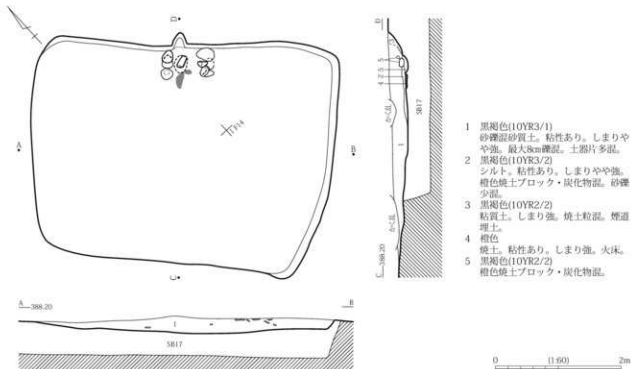
SB14 調査 (北東より)



## SB15 (第77～79図 PL23・24・46・47・49)

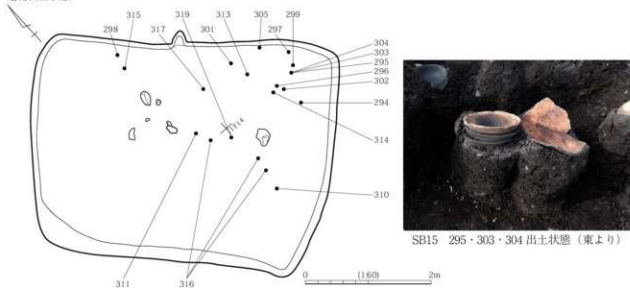
**位置：**I F08・09・13・14グリッド。**検出：**Ⅲ層中で遺物の散布とやや黒色が強い黒褐色土の広がり、煙道部分と考えられる焼土を確認する。**重複関係：**SB17を切る。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**構造：**平面長方形。主軸方向はN43°E。主軸長3.40m、直交軸長4.67m。検出面からの深さは2～27cm。床はSB17埋め戻し土と地山上に位置するが、明確な硬化面はない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは確認できない。**カマド：**北東壁中央からやや北寄りに位置し、煙道、石組の袖石、火床が残存する。支脚石は倒れた状態で、また天井石として用いられたと考えられる被熱痕のある凝灰岩の直角礫はカマド南西側に散っている。袖石は安山岩、チャート、支脚石は安山岩の自然礫を用い、いずれも被熱痕がある。**遺物出土状態：**遺物の総量は多く埋土中全体に広がる。床面から黒色土器A坏A(294～296)、土師器坏A(302～304)、土師器甕(315)、須恵器瓶(319)が出土した。黒色土器A坏A(295)と土師器坏A(303・304)は3個体が重なった状態である。土師器甕(315)は埋土からの出土土器と接合する。カマド内から黒色土器A坏A(300)、土師器皿B(309)、土師器甕(317・318)が出土した。土師器皿B(309)は床面からの、土師器甕(317)は埋土からの出土土器と接合する。床面からやや浮いた位置で土師器坏A(301・305)が出土している。埋土中から須恵器坏A(292)、軟質須恵器坏A(293)、黒色土器A坏A(297～299)、土師器坏A(305)、須恵器坏蓋B(306)、黒色土器A碗(307)、灰軸陶器皿(308)、土師器盤B(310)、黒色土器A鉢(311)、須恵器瓶(312)、土師器ロクロ甕(313・314)、土師器甕(316)、剥片(320)が出土している。**時期：**埋土と床面出土の土器から、9世紀後半と判断する。

**出土遺物：**292は須恵器坏Aである。293は軟質須恵器坏Aである。294～300は黒色土器A坏Aである。301～305は土師器坏Aである。303は底部に×印のへら書きが認められる。306は須恵器坏蓋Bである。307は黒色土器A碗である。308は灰軸陶器皿である。309は土師器皿Bである。310は土師器盤Bとしたが検討を要する。311は黒色土器A鉢である。312は須恵器瓶で底部高台内にへら書きが認められる。313・314は土師器ロクロ甕である。315～318は土師器甕で砲弾形となる。319は須恵器甕である。320は泥岩の剥片である。使用痕は認められない。

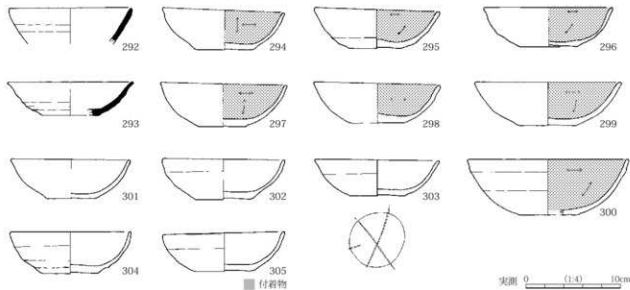
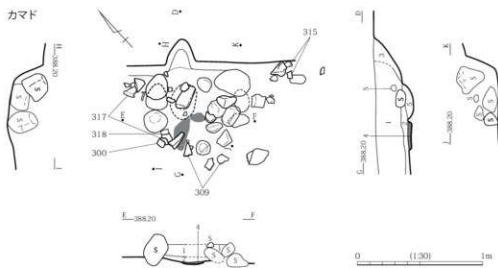


第77図 SB15 遺構図(1)

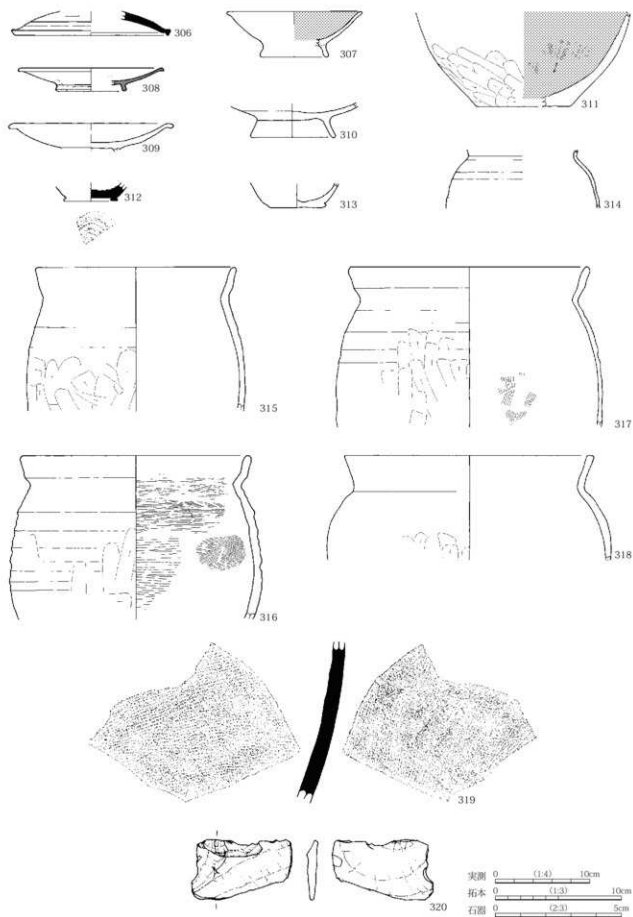
遺物出土状態



カマド



第78図 SB15 遺構図(2)・遺物図(1)



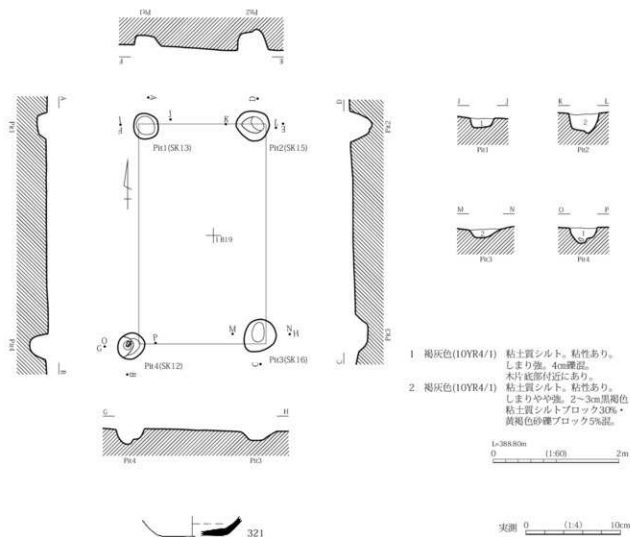
第79図 SB15 遺物図(2)

## 2. 掘立柱建物跡

## ST02 (第80図 PL24・25・47)

**位置:** I B13・14・18・19 グリッド。**検出:** IV層上面で褐灰色土の落ち込みを確認する。当初単独の土坑として調査を開始したが、それぞれの形状と埋土が類似し、等間隔に並ぶことから掘立柱建物跡の柱穴と判断した。**重複関係:** 流路跡 SD03 を切る。**埋土:** 褐灰色土を主体とする単層。**構造:** 棟方向 N0°、側柱建物。1間×1間、長軸長3.40m、短軸長1.92m。柱穴は平面形が径42×50cm～42×55cmの円形～楕円形で、検出面からの深さが14～32cmである。埋土は単層で、柱痕は認められない。**遺物出土状態:** 遺物の総量はわずかで破片である。Pit3 (旧SK16) から須恵器坏A破片 (321) が出土している。Pit4 (旧SK12) から材片が出土している。厚さ1cm程度の板材であるが、腐食が進み加工の有無や樹種は不明である。**時期:** SD03 より新しいことと出土遺物から平安時代と考えられる。

**出土遺物:** 321 は須恵器坏A底部の破片である。



第80図 ST02 遺構図・遺物図

### 3. 流路跡

調査区北部（1区）を南北に縦断する流路跡が2条ある。本来は南部（2区）に延びていたと考えられるが、かつての校舎建設やグラウンドの造成に伴って削平された可能性が高く、確認できなかった。

#### SD02（第81・82図 PL25）

**位置：**I B13・18・23、I G03・08グリッド。**検出：**IV層上面の検出面において、褐色砂礫の帯状の広がりを確認する。I B13・18グリッドではSD03の西側の立ち上がり付近に位置し、I B23、I G03・08では不連続であるがSD03の中央付近と完全に重なる。検出された中央部分はかく乱で破壊されている。南端もかく乱で破壊されている。SD03の埋没後に砂礫を伴う流れがあったと考えられる。**重複関係：**SD03を切る。**埋土：**褐色砂礫を主体とする。**構造：**検出面において、南北方向に全長約38.5m延び、流路幅0.33～0.87mを測る。検出面からの深さは4～14cm。断面形は浅い皿状である。**遺物出土状態：**遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片が埋土中全体に広がる。**時期：**出土遺物と遺構の切り合いから、平安時代とする。

#### SD03（第81・82図 PL25・26・47）

**位置：**I B08・09・13・14・18・19・23、I G03・04・08グリッド。**検出：**IV層上面の検出面において、黒褐色土の帯状の広がりを確認する。北端は調査区外へ延びる。検出された中央部分はかく乱で破壊されている。南端もかく乱で破壊されている。**重複関係：**SD02、掘立柱建物跡ST02（Pit1・Pit3・Pit4）に切られる。**埋土：**下位よりシルト～砂質シルト層（4層）、砂礫層（3層）、黒褐色の粘土質シルト層（2層）の大きく3層に区分できる。上層、中層、下層ともそれぞれラミナを挟み、含有物により細分されるが、トレンチ間のラミナの対比は困難である。E-F断面における2層、3層、4層、5層、IV層堆積物1g中の珪藻殻数は $2.9 \times 10^5$ 個、 $8.8 \times 10^4$ 個、 $1.3 \times 10^5$ 個、 $1.6 \times 10^4$ 個、 $2.5 \times 10^4$ 個、完形殻の出現率は48.0%、49.0%、42.2%、42.6%、55.7%で、主に淡水種からなり、汽水種と海水種をわずかに伴う。堆積物中の珪藻殻数はやや少ない～やや多い。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群（K）と陸生珪藻A群（Qa）が多く、最下流性河川指標種群（L）、沼沢湿地付着生指標種群（O）、高層湿原指標種群（P）などの淡水種と海水種や汽水種をわずかに伴う。環境指標種群の特徴からジメジメとした陸域や中～下流性河川などの淡水域環境が推定される。**構造：**検出面において、主軸方向はほぼ南北で、東西方向に緩やかに蛇行している。全長約44.0m、流路幅2.70～4.40mを測る。検出面からの深さは47～95cmである。立ち上がりは緩やかで、底面はやや凹凸がある。**遺物出土状態：**遺物の総量は少なく、ほとんどが摩耗した破片が埋土中全体に広がる。I B08・13グリッドでは2層からウマの歯破片が散らばって出土している。I B08・13・14・18・19グリッド（1a区）では3層から須恵器坏A（322）、須恵器高盤（323）、須恵器長頸壺（324）、などが、I B23、I G03・08グリッド（1c区）では土師器甕底部（326）が出土している。I B23、I G03・08グリッド（1c区）では4層から材が出土している。**時期：**埋土中の遺物から奈良～平安時代とする。遺存状態の良好なものについて樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。分析No.11は針葉樹の丸木？と判断され、 $1,536 \pm 20$ yrBP（暦年較正年代）の結果を得た（428-497 cal AD（47.0%）、506-583 cal AD（48.4%））。分析No.12は炭化材で亜炭？と判断され、 $44,288 \pm \text{yrBP}$ （暦年較正年代）の結果を得た（46,592-44,637 cal BC（95.4%））。分析No.12については遺構の推定時期よりも大幅に古い年代であり、地層中に埋没していた古い木材が流路の形成で露出した可能性などが考えられる。

**出土遺物：**掲載した遺物は、すべて埋土からの出土である。322は須恵器坏Aである。323は須恵器高盤である。324は須恵器長頸壺としたが検討を要する。325は土師器甕の把手である。326は土師器甕の内

外面とも磨き調整される。701 から 711 はすべてウマ臼歯（前臼歯又は臼歯）永久歯破片だが、性別や年齢の推定はできなかった（第9表）。703 は右上顎歯で 1 本、705・710 は上顎歯、707・709 は下顎歯、706 は下顎歯？で、他は部位不明である。部位が明らかでない 6 資料について観察したところ、咬耗が進んでいないことから、比較的若い個体の可能性が高い。705・710 は 703 と同程度に咬耗が進んでいるので、同一個体の可能性がある。また 707 と 706・709 の咬耗の程度が類似するので、同一個体の可能性がある。しかし 1 個体をこの場で廃棄していればある程度原位置を保って出土すると考えられるので、解体された個体が付近で廃棄され埋没したと想定できる。上顎骨や下顎骨、他の部位の骨が出土しないのは、埋没後に溶けてしまった可能性が高い。

（註）動物骨については、茂原信生氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏のご教示による。

第9表 SD03 出土歯骨一覧

管理 No.	遺構	取り上げ No.	出土層	種類	時期	部位	部位詳細	右左	備考	年齢
701	SD03	No.1	2層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
702	SD03	No.2	2層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
703	SD03	No.3	2層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片	右	1本	永久歯。咬耗少なく、萌出直後か。
704	SD03	No.4	2層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
705	SD03	No.5	2層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片		No.703 と同一か。	
706	SD03	No.6	2層	ウマ	平安時代	下顎歯？	臼歯破片		No.707 と同一か。	
707	SD03	No.7	2層	ウマ	平安時代	下顎歯	臼歯破片			
708	SD03	No.8	2層	ウマ	平安時代		臼歯破片			
709	SD03	No.9	2層	ウマ	平安時代	下顎歯	臼歯破片		No.707 と同一か。	
710	SD03	No.12	2層	ウマ	平安時代	上顎歯	臼歯破片		1本 No.703 と同一か。	
711	SD03	No.13	-	ウマ	平安時代		臼歯破片			



SD03 調査（北より）



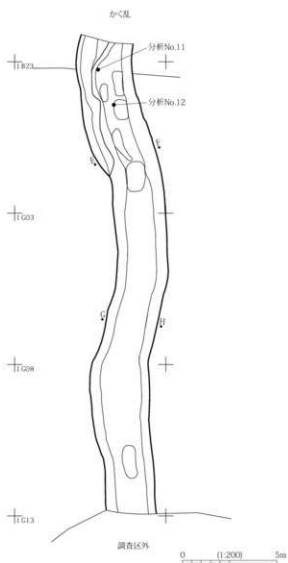
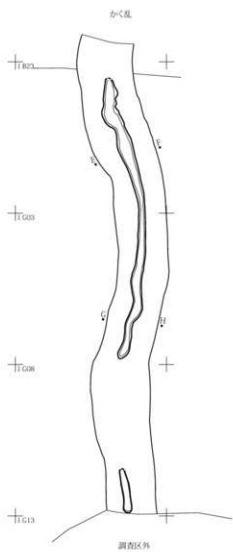
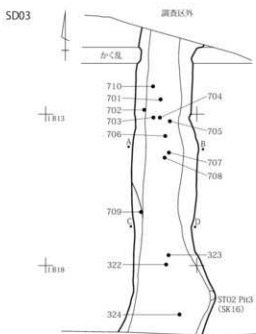
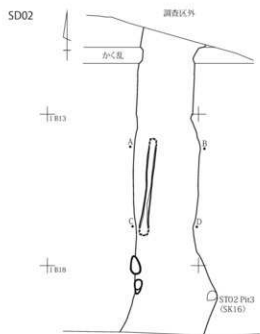
SD03 323 出土状態（東より）



SD 検出（北より）

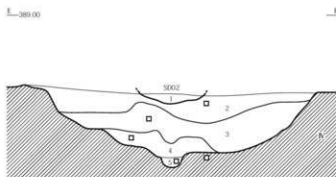
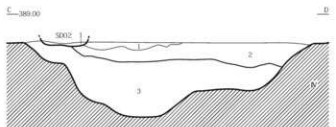
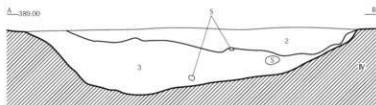


SD02・03 調査（南東より）

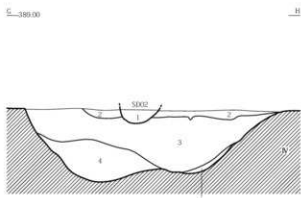


第81図 SD02・03 遺構図(1)

第3章 遺構と遺物



□ 珪藻分析土壌サンプル採取



SD02・03 発掘（北より）

SD02  
1 褐色(10YR4/4) 砂礫。粘性なし。しまり普通。基質粗粒砂。0.5cm以下礫混。

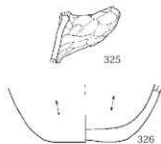
SD03  
1 褐灰色(10YR4/1) 砂礫混シルト。粘性ややあり。しまりやや強。1cm以下白色垂直礫混。粗粒砂ラミナ状に混。

2 黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト。粘性あり。しまり強。歯破片出土。

3 褐灰～灰黄褐色(10YR4/1～10YR4/2) 砂礫。粘性・しまり弱。黒褐色・灰褐色砂質シルト～シルトを層状・ラミナ状に混。黒褐色シルトブロック混。

4 黒色～黒褐色(10YR2/1～10YR3/1) シルト。粘性・しまり弱。灰褐色シルト。細粒砂～砂礫をラミナ状に混。

5 黒色(10YR2/1) 粘土。粘性あり。しまり弱。材出土。



実測 0 (1:4) 10cm

第82図 SD02・03 遺構図(2)・遺物図



#### 4. 土坑

平安時代の遺物を出土する土坑はSK62とSK232、SK233、SK237の4基である。いずれも破片で掲載する遺物はない。SK236、SK239はSK237と、SK234、SK238はSK233と平面形や埋土が類似し、付近に平安時代の竪穴建物跡SB11～15が位置することから同時期の土坑の可能性が高い。

##### SK62 (第83・84図)

**位置：**I L16グリッド。**検出：**IV層上面で暗褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**粘性やしまりのある灰黄褐色砂礫混粘質土と、粘性がややあり、しまりのある黒褐色砂礫混シルトからなる複層。**構造：**掘り込みは主軸方向N67°E、主軸長53cm、直交軸長50cm。平面形は円形で、壁は垂直に立ち上がる。底面は平らである。検出面からの深さは32cmである。**遺物出土状態：**土師器破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器から平安時代と考えられる。

##### SK232 (第83・84図)

**位置：**I F03グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N46°E、主軸長70cm、直交軸長68cm。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平らである。検出面からの深さは32cmである。**遺物出土状態：**土師器破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

##### SK233 (第83・84図)

**位置：**I F03グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N41°W、主軸長40cm、直交軸長36cm。平面形は円形で、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はやや丸く窪む。検出面からの深さは23cmである。**遺物出土状態：**土師器破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

##### SK237 (第83・84図)

**位置：**I F03グリッド。**検出：**IV層上面で黒褐色の円形を呈する。**重複関係：**なし。**埋土：**黒褐色砂礫混シルトを主体とする単層。粘性やしまりは普通。**構造：**掘り込みは主軸方向N21°E、主軸長63cm、直交軸長62cm。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや丸く窪む。検出面からの深さは27cmである。**遺物出土状態：**須恵器破片が埋土中から出土している。**時期：**出土土器と周辺遺構から平安時代と考えられる。

第3章 遺構と遺物

SK62



- 1 黒褐色(10YR3/2) 粘性ややあり、しまりあり、  
黄褐色粒10%混。  
10cm確認。  
2 灰黄褐色(10YR4/2) 粘性・しまりあり。  
粗砂・小礫混。

SK232



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。  
粘性・しまり普通。  
5cm円礫少量。

SK233



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。  
粘性・しまり普通。  
5cm円礫少量。  
土器片混。

SK237



- 1 黒褐色(10YR3/1) 砂礫混シルト。粘性普通。  
しまり普通。5cm円礫少量。  
下半部ブロック土混。  
黄褐色砂礫土地山。

0 1.40 1m

第83図 SK062・232・233・237 遺構図



SK62 完掘 (南より)



SK232 完掘 (北より)



SK233 (左) 完掘 (南東より)



SK237 完掘 (北より)



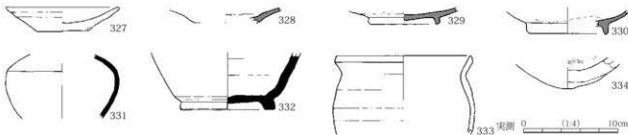
第84図 奈良・平安時代 溝跡・土坑分布図

## 5. 遺構外

## 包含層出土遺物 (第85図 PL47)

包含層から出土した古代の遺物を本項に掲載した。

327は土師器皿Aである。328は灰軸陶器段皿である。329・330は灰軸陶器碗である。330は焼成時に高台が付着した痕跡が内面に認められる。331は須恵器甕としたが検討を要する。332は須恵器瓶である。333は土師器器口ロ口甕である。334は土師器甕である。



第85図 奈良・平安時代 遺構外 遺物図

## 6. 小結

竪穴建物跡は10軒検出された。調査区の中はかく乱により破壊されている部分があるので、検出できなかった遺構を考慮すると、実際にはもう数軒の竪穴建物跡あった可能性がある。建物の所属時期は出土遺物から平安時代9世紀後半に限定され、重複関係があるものの出土遺物の時期差がほとんどないことから、ほぼ一時期の集落であったと考えられる。形状はほぼ方形で、床の状態はさまざまである。また柱穴はあるものの主柱穴が不明な建物や柱穴が検出されない建物もある。カマドの位置は壁中央より隅へ片寄っていて、西側、南東側、北側、北東側とさまざまである。埋文センターで調査中の浅川扇状地遺跡群吉田田町遺跡、桐原宮北遺跡、桐原牧野遺跡では当該期の竪穴建物跡はほぼ北側（北西・北東を含む）にカマドが位置しているため、本遺跡での状況が意味するところは不明である。

掘立柱建物跡は1棟検出されている。竪穴建物跡とはやや離れており、埋土から須恵器片破片が出土する。竪穴建物跡と同時期の建物であるかは不明であるが、流路跡SD03と重複しており、埋没後建物が建てられたと考えるのが妥当である。SD03は埋土中から奈良時代8世紀末から9世紀初頭の遺物が出土しているため、竪穴建物が営まれていた時期には、埋没していたか、ウマを廃棄するような窪地であったと考えられる。

SD03は全層で中～下流性河川指標種群が多い傾向があり、水流を伴う水域環境が成立していた可能性がある。またIV層では陸生珪藻A群が少ないため、地山であるIV層の堆積時は比較的安定した水流が存在していたと思われる。5層から上位層は陸生珪藻A群が多くなり、周辺土壌の流れ込みなどによって乾燥した時もあったと考えられる。さらに、多産傾向にあった中～下流性河川指標種群のPlanothidium lanceolatumは有機汚濁が比較的少ない水流において高い相対頻度で出現する好清水種であるという報告がある（渡辺・浅井, 1992）。よって流水環境下では、比較的汚濁の少ない淡水域環境が成立していた可能性がある。

信濃国では仁和四年（888年）五月八日、仁和の大洪水が発生し、佐久、小県、埴科、更級、水内、高井の各6郡が大規模な洪水被害に遭う（『類聚三代格』巻十七）。浅川扇状地は水内郡に属するが、この仁和の洪水により被害を受けた状況は発掘では認められていない。

## 第4章 総括

### 第1節 浅川扇状地遺跡群の後期弥生式土器の位置づけ

#### 1. 本村南沖遺跡出土の後期弥生式土器

本村南沖遺跡（以下、「本遺跡」と併用する）で出土した弥生式土器は、前期併行に位置づけられる水式土器一個体（土器箱SQ02）を除くと、中期栗林式土器の小破片3点があるのみで、ほかすべての土器が後期である。そのうち、土器箱以外は後期初頭の土器で、1970年笹沢浩（註1）によって「吉田式土器」と命名された土器にあたる。

発掘調査では、堅穴住居跡に切り合い関係はなく、すべての住居跡がほぼ同時期に存在した可能性は高い。しかしながら、資料的に少量であるが、住居跡出土土器（壺形土器）に施文手法の違いがみられること、堅穴住居跡SB03（以下、SB03の表記法で示す）では、「吉田式土器」とともに、それ以後に編年される箱清水式土器が1例混じって出土したことから、本遺跡における住居跡出土土器に時期差あるいは土器形式上の段階差（型式差）を設けられるのではないかと考えた。

まず施文手法であるが、壺形土器頸部への施文法の違いがあげられる。SB02とSB16出土資料では、頸部に篋状工具で平行沈線文（横走平行線、註2）を施し、その下に同様な工具で鋸歯文を付加する。SB03とSB04では、主に櫛歯状工具で平行沈線文を施し、以下に篋状工具で鋸歯文を付加する。この2者を同時期のバラエティと捉える見方も多いが、篋描文の多用は「吉田式土器」以前の栗林式土器の特徴であり、櫛歯文の盛行は以後の箱清水式土器の特徴となるので、壺形土器文様に用いられる描画手法が、篋描文から櫛歯文へと質的に推移していくのであれば、時間的差異を考えてよい。

2つ目の課題、SB03で「吉田式土器」に1例の箱清水式土器が混在したこと。このことは考古学的手法で確認しきれなかった調査上の課題がまったくないわけではないが、出土分布をみる限り、わずかな偏りはあるけれども、ほとんど同一レベルで混在して出土している。SB03出土土器は、櫛歯描きの平行沈線文と鋸歯文で飾られた壺形土器の資料である。厳密な一括資料とはいえないが、「吉田式土器」の終末頃に新しい要素の土器がすでに成立しており、両者は混在したと解釈してよいのか。数点の資料で土器変遷を語る危険性はあるが、以上2つの点を考慮し、「吉田式土器」には古い様相と新しい様相を示す土器があり、それを段階差・時期差まで止揚できるのであれば、一見、単純・同一時期にみえた住居跡群に時期差を与えることができ、集落の捉え方も変わる。

本遺跡出土土器を、以上の視点から住居跡単位に整理し様相の違いを想定したのが第86図である。

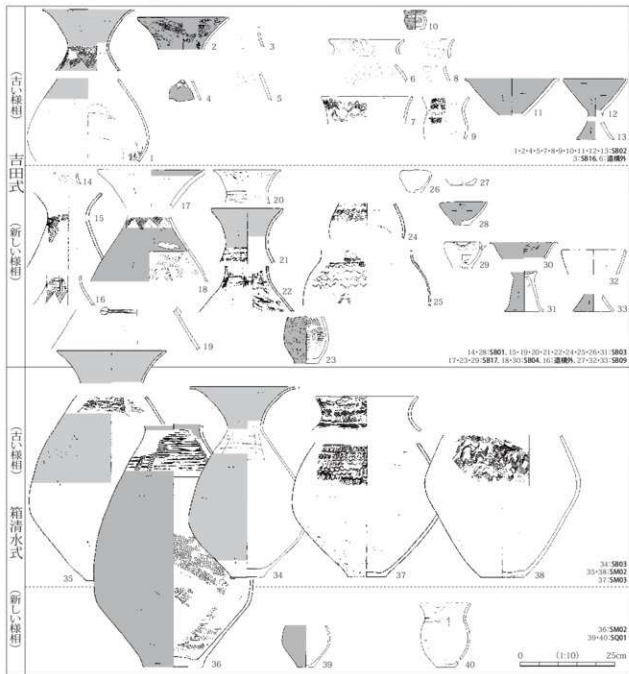
#### (1) 古い様相を示すと考えられる土器

篋描平行沈線のみを用いた壺形土器がSB02とSB16にある。壺形土器はラッパ状に小さく開口するいちじく形の形態で、無彩もあるが器面のほぼ全面に赤彩が施され、口縁外面は縦方向の磨き調整で仕上げられる。頸部は篋状工具で平行沈線文を帯状に施す例（第86図3）、これに鋸歯文を加える例（第86図4・5）がある。また頸部の平行沈線文を幅広く設け、その間を斜線あるいは矢羽状に篋描きする例（第86図1）もある。壺形土器は胴部卵形をした資料が少なく、その主体を占める小形例は底部付近を欠損した資料の場合、台付壺形土器との差異が不明瞭となる（第86図9）。胴部さらには口縁部外面に櫛歯描きで波状

文が施され、頭部は櫛描きの簾状文でまとめられる。また口縁部直直または緩い受け口状で球胴形を呈する例(第86図6~8)もある。緩い受け口例は「吉田式土器」以前から継承される古い要素と考えられるので、遺構外資料(第86図6)も図に加えた。鉢形や甔形、片口鉢形等は今回の出土資料には該当がない。高坏形土器は口縁端部が水平に強く屈曲する、いわゆる罅縁状を呈する例(第86図11)とロート形に開口する例(第86図12・13)の2者がある。坏部は内外面ともに赤彩が施される。

## (2) 新しい様相を示すと考えられる土器

篋描平行沈線文のほか、櫛描平行沈線文を主体的に用いる変形土器がある。SB01・SB03・SB09・SB17に出土例があり、その形態は古い様相と概ね同一だが、頭部文様は篋描きのみならず、櫛描きによる簾状文(第86図14)および平行沈線文が用いられる(第86図16・19~22)。平行沈線文を篋状工具で縦位に区分する「T字文B」(笹沢1970)も新しい要素として加わる(第86図21・22)。このほか、筒形を



第86図 本村南沖遺跡 出土土器の様相

した壺形土器の出土がある（第86図23）。甕形土器は器面全体に櫛描波状文を施す球胴形（第86図24・25）で、頸部の櫛状文直下にボタン状貼付を施す例（第86図25）もある。壺形土器（第86図19）にも同様な貼付が観察されるので、新しい要素と捉えられるのか。鉢形土器は粟林式土器に系統を迫る形態のもので、内外面とも赤彩されるが、2孔一対の穴は1箇所のみ認められる（第86図28）。甕形土器は底部の破片資料で全体形は不明だが、一穴式で鉢形とみられる（第86図27）。片口鉢形土器は注口部の大きな椀形例が1点ある（第86図29）。高坏形土器には2種の形態（第86図30～33）があり、古相とはほぼ同じ特徴をもつ。

### （3）箱清水式土器

壺形土器の頸部文様に採用される櫛描きの平行沈線文「T字文C」の成立をもって、箱清水式土器と判断する（笹沢1970）。本遺跡では堅穴住居跡SB03、土器棺SM02とSM03および土器集中SQ01が該当する。壺形土器はいちじく形を継承するものの、口縁部はラッパ状に大きく外反し、頸部は「く」の字状に屈曲、胴部上半部に文様が施される（第86図34）。櫛描き平行沈線文は「T字文C」を構成し、1本（第86図34・35）と2本一対の例（第86図36）がある。SB03出土土器は当該型式の土器と考えるべきだが、いちじく形のプロポーシオンを留めること、「吉田式土器」と混在して出土したこと等から古い段階に位置づけられる。この1例を除くほかすべてが土器棺およびその関連資料で、住居跡出土例はない。SM03は球胴の甕形土器（第86図37）単体による埋葬で、SM02は壺形土器3点と甕形土器1点を重ねた埋葬である。特にSM02の最も外側に置かれた土器（第86図36）は、胴部最大径を境に底部へ向けて内側にすぼまり、箱清水式の新しい要素・特徴の萌芽がみえる。入れ子状に重ねられた出土状態から、この土器の段階で埋設されたと考えられ、箱清水式の古い様相を示す土器（第86図35）と伴出していることから、両者にさほどの時間差のないこと（同時期使用も含め）が証明される。SM02近くで発見されたSQ01（第86図39・40）も当該期を推定したい。

以上、本遺跡から出土した「吉田式」とされる土器について観察された様相の違いをまとめた。この新古様相差が土器型式の差として段階的に位置づけられるか否か、また浅川扇状地遺跡群を始め、周辺遺跡に同様な様相を抽出できるか否か、少し視点を広げ当該期資料を検討したい（註3）。その際、検討の軸を中期後半の粟林式土器から後期初頭の「吉田式」とされる土器、さらに後期前半の箱清水式土器までとし、壺形土器を指標に、甕形土器や高坏形土器を交えた形式変化、様相の違いを整理し、型式的な変化の方向性を模索する。ただし本稿の目的は、本遺跡出土土器の時間的位置づけを明確にすることにあり、新たな型式区分を与え、無用な混乱を招かないためにも、時間的区分の目安として、古いと考えられる様相のものから順次、1段階、2段階のように仮称して論を進める。

## 2. 中期後半から後期前半の弥生式土器変遷試案

中期後半に位置づく粟林式土器は、藤森栄一のI式・II式の型式区分（藤森1955）以後、多くの研究者により分類され、今日では寺島孝典（寺島1999、2014）や石川日出志（石川2012）の分類案が活用されることが多い。本稿では、本遺跡出土土器の理解に必要と思われる段階、寺島や石川の設定する粟林2式新段階とされる土器を1段階として取り上げ、「吉田式土器」の成立に直接関わる粟林3式とされる土器を2段階および3段階と扱う。紙数の関係上、1段階については関連する土器実測図のみを図示し、検討結果の記述は2段階から入ることにする。

### （1）2段階（第87図1～11、第88図1～12、第89図1～8）

粟林式土器の終焉は、長野市松原遺跡高速道地点（長野県埋文1998～2000）、中野市南大原遺跡（長野県埋文2016）に良好な資料がある。いずれの遺跡も粟林式から「吉田式土器」成立期までの時間幅が

ある。当段階の土器には、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器、甌形土器、蓋形土器等がある。壺形土器は、最大径が胴部下半近くまで下がるいちじく形で、頸部は細くしまり、口縁部はラッパ状に開く形態（壺A類第87図1～5）を主体とする。口縁部形態には受け口状もあるが、数は少ない。A類よりも小形で頸部の太い広口の形態（壺B類第87図7）と壺A類を小形にした徳利形に近い形態（壺C類第87図6）がほかにある。壺A類は器面に施される文様の多寡により区別し、いわゆる「舌状垂下文」を施す装飾性の高い1類（第87図1）、多段の横帯装飾や頸部・胴部に装飾文様を施す2類（第87図2）、頸部のみに横帯文を施す3類（第87図3・4）、無文の4類（第87図5）がある。壺B類と壺C類は無文が基本で、特に後者は全面に赤彩される例がある。器形から短頸壺や甕形土器に類別されることのある器種には、加飾される1類（第87図8）と無文で赤彩されることの多い2類（第87図9）がある。蓋形土器は1段階に比べつまみ部の発達が目立つ（第87図10）。甕形土器は、卵形あるいは胴の張る形態で、口縁は「く」の字状に外反する例と受け口状がある。頸部は無文例もあるが、平行沈線文や間隔を置いて複数止める籠状文がみられ、胴部文様には羽状文（第88図1）や波状文（第88図4・5）、樽状文（第88図3）や粗い縄文（第88図6）、「コ」の字重ね文（第88図7・8）が施される。甌形土器は深い鉢形で口縁部直行する一穴例（第89図1）。鉢形土器は、小さな椀形例を中心に3種ぐらいの容量差がある。口縁やや内湾する形態のA類（第89図2・3）と強く外反する形態のB類（第89図4）がある。A類は無文赤彩の1類が主体だが、ボウル状の大形例には口縁部に縄文や鋸歯文を施す2類（第89図5）がある。またA1類およびA2類のいずれにも口縁端部に注ぎ口をもつ片口鉢形（第89図6・7）の形態がほかにある。高坏形土器は、坏部が椀形で低脚、坏部内外面は赤彩される（第89図8）。

本段階の特徴は、器種全体にわたり口唇部への押圧や縄文施文が減り、器表面の施文の乱れと無文化が進むことである。1段階に中野・飯山地域で発達した壺A2類は減少し、長野・佐久地域を中心に壺A3類が主体を占めるようになる。甕形土器では頸部に施される櫛描の平行沈線文が、複数止めの籠状文へと変化する。また注口形土器と無頸壺、鉢形土器の一部に消失化が起こる。代表的な遺跡（遺構）に、長野市松原遺跡（SB328・SB364・SB1103等）、中野市南大原遺跡（SB14・SD02下層）がある。

## (2) 3段階（第87図12～19、第88図13～19、第89図9～11）

本段階の土器は、南大原遺跡SB04および松原遺跡SB231、SB359の資料を基準に抽出した。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等、2段階とほぼ同様な器種がある。壺形土器は概ね前段階の形態的特徴を継承し、ラッパ状に開口する直行単口縁が主体である。受け口状口縁はわずかに組成するものの、広口口縁や筒形状の形態はみられなくなる。装飾のある壺A1類およびA2類は消失し、A3類では頸部に籠描き平行沈線文と山形文や鋸歯文を施す例（第87図12～15）に絞られてくる。頸部に施された縄文はほぼ消失し、「オオバコ文」と呼ばれる新たな原体による施文で代用される（第87図13・15）。短頸壺の類は無文赤彩の2類（第87図18）のみが残る。甕形土器は、前段階と同様、卵形と球筒形の2者に絞られ、羽状文や波状文の粗雑化が一層進む（第88図13～17）。文様の粗雑化は台付甕形土器にも起こり、受け口状口縁に無文化がみられる（第88図19）。その一方、口縁部の伸張化により施文部が幅広となる例（第88図18）が登場する。鉢形土器には良好な資料が少ないが、前段階同様にA類とB類が主体となるものの、片口鉢形土器（第89図10）には口縁外面に文様を施す例はみられなくなる。高坏形土器および甌形土器も前段階の形状を継承するとみられる。

本段階の特徴は、縄文施文の激減にある。壺形土器ではA1類およびA2類が完全に消失し、甕形土器では、縄文や「コ」の字重ね文を施文する例が少なくなる。口縁部に文様をもつ鉢形土器や浅い鉢形の片口鉢形土器も消滅する。代表的な遺跡（遺構）は、長野市松原遺跡（SB231・SB352等）、同市本村東沖遺跡（市教委1993b）（102号住居址）、中野市南大原遺跡（SB04）等がある。



### (3) 4段階 (第87図20～29、第88図20～27、第89図12～18)

「吉田式土器」の栗林式と箱清水式をつなぐ編年の位置については、現在も変更がない。この型式の成立期は概ね本稿の4段階にあたり、南大原遺跡SB13や吉田高校グランド遺跡(市教委1987c、2001a)19号住居址、松原遺跡SB228出土土器に求められる。土器には壺形土器、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等の器種がある。壺形土器は、ラッパ状に開口する形態と緩い受け口状口縁の2者があり、頸部の文様は大いな描きによる平行沈線文やこれに櫛描波状文が加わる例がある(第87図20～23)。また櫛状文で頸部を飾る例(第87図25)や篋描きで鋸歯文を付加する例(第87図20)もあり、特に鋸歯文は前段階で成立(第87図14)し、本段階へ継承したとみられる。縄文および「オオパコ文」は消失する。外削ぎ状の口縁外部面に櫛描波状文を施す例がみられ、施文後にナデ消す例(第87図24)もある。甕形土器は、全体形を前段階から継承し、わずかながら口縁部に伸張化がある。第88図24・25は、本段階から次段階にかけての資料と考えられ、これらを参考とすれば口縁部は無文化(第88図20・22)が主体になるようである。資料の絶対数が少なくこの点については定かではない。緩い受け口状の口縁は、さらに形散化が進む(第88図22)。台付甕形土器は、胴部に加え口縁部外面全体に波状文を施す例(第88図26・27)が主体を占める。鉢形土器は、口縁や内湾するA類(第89図13)と強く外反するB類(第89図14)があり、いずれも無文赤彩例に集約され、片口鉢形土器(第89図15)は深さのある形態に変わる。高坏形土器は、口縁端部が屈折外反する鉢形を坏部とするA類(鈿線状口縁、第89図16)と口縁部が内湾する鉢形を坏部とするB類(第89図17・18)があり、いずれも坏部内外面に赤彩が施される。

成立段階と捉えた本段階資料の特徴は、縄文施文の消滅と櫛描文の増加にある。壺形土器頸部の文様は、篋描文が主体で、これに櫛描文が加わり、本村南沖遺跡で確認できなかった櫛状文や波状文も存在する。甕形土器および台付甕形土器では、口縁部の伸張化がわずかにみられ、無文が主体のようで、大形で球卵形、小形の卵形を呈する例に櫛描波状文を幅広く施文する例が目立つようになる。胴部文様は羽状文を継承するものの、波状文が主体となり、ほかの文様モチーフは消失する。本村南沖遺跡の古い様相の土器(SB02ほか)には、壺形土器頸部に篋描きの平行沈線を斜線文や矢羽状文で埋めるモチーフ(第86図1)があること、甕形土器口縁部に幅広い無文例がない(第86図6～9)ことから、本段階もしくは、これよりも新しい段階に位置づけられる。代表的な遺跡(遺構)には、長野市の吉田高校グランド遺跡(10・15・19号住居址等)や松原遺跡(SB228)、中野市南大原遺跡(SB19)がある。このうち、住居跡数のまとまった遺跡は吉田高校グランド遺跡のみで、ほかの2遺跡は3段階同様に堅穴住居跡2～3軒程度を確認するに留まる。ただし吉田高校グランド遺跡の住居跡群を、本稿で提案する土器変遷で時間的に区切るとすれば、本段階の住居跡数は3～4軒程度となる。

### (4) 5段階 (第87図30～39、第88図28～32、第89図19～27)

本遺跡で古い様相を示すと考えられる土器は、この段階に相当する。ほかに吉田高校グランド遺跡(6・7・24・25・27号住居址等)が該当し、堅穴住居跡の切り合い関係(24号住居址と25号住居址)と近接した住居設置関係(6号住居址と7号住居址、17号住居址と25号住居址)から時間差が認められる。土器の特徴から、それを説明するのが本稿の目的でもあるが、結論は難しい。出土資料に恵まれない24号住居址と25号住居址については明言できず、17号住居址と25号住居址では前者が新しい傾向(6段階に相当)にある。6号住居址と7号住居址は、前者に4段階の様相が強く後者よりも古いとみられる。しかしながら本稿では、第87図31に示す壺形土器頸部の文様モチーフを暫定的ながらも本段階と捉えるため、6号住居址を本段階として扱い、その出土がない7号住居址を4段階から本段階にかけてと解釈した。今後、第87図31同様の資料が4段階に確実視できれば、土器全体の様相を捉え6号住居址を古く、7号住居址を新しく位置づけ直すべきと考える。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高

坏形土器、鉢形土器等、4段階とはほぼ同様な器種がある。壺形土器はラッパ状に開口する直行単口縁のみに絞られる。開口度の弱い形態も本段階にある。頸部文様は、篋描きの平行沈線文（第87図32）と平行沈線文を細い篋状工具で埋める斜線文や矢羽状文（第87図30・31）、櫛描きの簾状文（第87図33・34）や篋描きで鋸歯文を施す例（第87図30）がある。また広口のB類（第87図37）と徳利形のC類（第87図35・36）も継承される。甕形土器は前段階のプロポーシオンを継承し、緩やかに弧状に内湾する無文の口縁例（第88図28・30）や球胴状の器体で口縁部を含め櫛描波状文を施すとみられる例（第88図29）がある。法量から小形に区分できる甕類は、全体形が台付甕形土器に類似し、欠損状態では区別がつかないほど似る。第88図31等はその例であろう。台付甕形土器は、頸部に簾状文を巡らし、口縁部および胴部に波状文を施す例に絞られてくる。高坏形土器は坏部内外面に赤彩が施され、前段階同様にA類（第89図22～24）とB類（第89図26・27）があり、さらにはロート形をしたC類（第89図25）が新たに加わる。

本段階の特徴は、壺形土器に篋状工具を用いた平行沈線文や鋸歯文がみられるほか、櫛状工具による平行沈線文や簾状文が発達すること。特に簾状文は多段化し、間隔を置いて止める節の部分が上下に重なり1本の区切り線（第87図33・34）のように見え、次段階に出現する「T字文B」につながる効果が見られること。また高坏形土器に形態的なバリエーションが生じ、C類が加わるのも本段階頃と考えられる。

本村南沖遺跡で古い様相とした土器（SB02ほか）には、篋描きの矢羽状文や鋸歯文の施された壺形土器がみられること、櫛描文の例は前述したように認められないながら、高坏形土器にA類とC類がみられること等から、資料数は限定的であるが、本段階に位置づける。しかしながら、SB16とともに遺跡内での住居跡分布をみても、ほかとの違いは見出せない。俯瞰すれば同時期に存在したとしても、なんら不自然さはないので、土器様相の違いが意味するものは極めて近い時間差でしかない。吉田高校グランド遺跡の住居跡分布をみても、やはり同様な評価を与えることができると考えたい（註4）。

#### (5) 6段階（第87図40～49、第88図33～42、第89図28～36）

本遺跡で新しい様相を示すと考えられる土器は、この段階で、ほかに前段階に続き吉田高校グランド遺跡がある。土器の種類は、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等がある。壺形土器は、大きくラッパ状に開口する口縁（第87図43・46）と開口度の弱い口縁（第87図44）がある。頸部は櫛描きの平行沈線文（第87図42～44）が主体となり、篋描きの斜線文や矢羽状文、鋸歯文は本段階までみられるものの（第87図40～42）、篋描きの平行沈線のみは施すはみられなくなる。広口の形態例（第87図47）は継承される。本段階を設定する最大の理由は、櫛描きの平行沈線を篋描き沈線1本または2本対で縦位に区分する手法、「T字文B」（笹沢1970）が出現することにある（第87図45・46）。笹沢が指摘するように、この「T字文B」の手法が篋描きから櫛描きに置き換わり、「T字文C」が成立して次の箱清水式となる。甕形土器には前段階との大きな変化はみられないが、卵形を呈した形態（第88図33・34）に中・小形が増加し、大形例（第88図36・38）では球胴化が進んでいるようにみえる。文様は栗林式以来の縦羽状文が残存するものの、櫛描波状文を施す例が多くを占めるようになる。台付甕形土器の文様も櫛描波状文に絞られる（第88図41・42）。甕形土器は鉢形の一例（第89図28）で、片口の鉢形土器も深さのある形態（第89図34）となる。鉢形土器は、A類に全面赤彩で容量差の違う3種程度（第89図29～31）が確認でき、A類は栗林式以来、容量変化せずに3種が継承されたと考えられる。B類は本段階まで残る（第89図32・33）。高坏形土器は坏部内外面に赤彩が施され、A類（第89図35）とB類（第89図36）があり、前段階に登場したC類も存在する。

本段階の特徴は、篋状工具を用いた平行沈線文が消失し、櫛描文が主流となる点である。特に壺形土器の頸部文様では、多段の簾状文が減少し、櫛描平行沈線文を篋状工具で縦位に区分する「T字文B」が出

現する。また壺形土器の形態においても前段階まで継承されてきた、口があまり開かない形態は衰退する。甕形土器では、大形例に胴部卵形と球胴形の2者が揃い、栗林式以来胴部文様を飾った櫛描きの羽状文が本段階でほぼ消滅する。高坏形土器では、鈔縁状口縁のA類が本段階で消滅する。

本村南沖遺跡では、SB01・SB03・SB09・SB17出土資料が該当する。SB01の壺形土器には頸部に簾状文があり古い様相とみられるが、「T字文B」の土器も併出しており本段階に含まれる。本章1の(1)で述べたように、これらの住居跡すべてに櫛描平行沈線文と「T字文B」の要素がみられる中、それのないSB02やSB16は異質であり、そこに時間差を想定した。またSB03からは箱清水式土器の出土があり、住居の使用時期を直接示すものではないが、出土土器に関して箱清水式成立段階までの時間幅を考える必要がある。「吉田式土器」とは若干分布範囲を異にするものの、同一レベルの出土であり、さほどの時間差は感じられない。ただしSB03だけ、ほかの住居跡とは長軸の向きに違いがあり、今後、その意味を追究していく必要がある。代表的な遺跡(遺構)に、吉田高校グラウンド遺跡(3・4・20・22・23・28号住居址等)、ニッ宮遺跡(市教委2008b)(6号住居址・12号住居等)があげられる。

#### (6) 7段階 (第87図50～57、第88図43～51、第89図37～43)

箱清水式土器は、「吉田式土器」の設定時に笹沢により定義された壺形土器頸部文様に採用される「T字文C」の成立(笹沢1970)をもって判断する。頸部文様の流れは、櫛描きの簾状文から櫛描平行沈線文を篋状工具で縦位に区分する「T字文B」へ、さらに篋状工具ではなく櫛歯状工具で縦位に区分する「T字文C」へと説明される。同様に櫛描平行沈線文から櫛描平行沈線文への推移も概ね理解でき、実態としては「吉田式土器」から箱清水式土器への移行と重なる部分がある。そうした時間的前後関係を土器出土状況から裏付けることは、今のところできないが、施文手法の流れを形式ごとに整理し、土器の変遷を辿る見方は理解しやすい。土器の種類には、壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、鉢形土器等がある。壺形土器の形態は、「吉田式土器」と同様ないちじく形である。口縁部は大きくラップ状に開口し、端部は水平に伸びる。頸部は「く」の字状に屈曲し、胴上半部はやや膨らみのある、なで肩状を呈する(第87図50)。開口度の弱い形態は前時期で消滅すると考えるが、残存例(第87図52)もある。頸部文様は、胴部上半の肩部に施されるため、むしろ胴部文様となる。櫛描きの平行沈線文と「T字文C」で、縦位に区分する櫛描きは1本(第87図50・51)または2本一対(第87図53・54)がある。外面はほぼ全体にわたり赤彩される。甕形土器は、卵形を呈する形態例に中・大形が目立つようになる(第88図43～45)。球胴形の大形例も継承されるが、櫛描波状文が密になる傾向がある(第88図46)。胴部が強く「く」の字形に曲がる形態(第88図47)もあり、前段階(第88図39)を継承する。台付甕形土器は甕部がスマートになり、櫛描波状文は甕形土器(第88図48・49)同様に密となる(第88図51)。鉢形土器はA類が存続(第89図38～40)し、甕形の短頸壺(第87図56)が新しく登場する。高坏形土器は、鈔縁状口縁例(A類)の消失後、これに代わり新たに有稜の高坏(第89図41)が登場するが、依然として数は少ない。坏部は深い鉢形で、口縁端部は緩やかに外反する。

本段階の特徴は、櫛描文が主流となり、特に壺形土器に「T字文C」が出現することである。甕形土器は、口縁部の伸張化と器表面への波状文の密接施文が主流となる。球胴形に変わり卵形を呈した土器が法量分化し、増加する傾向にある。また全面赤彩される甕形の短頸壺の登場と有稜高坏の萌芽がみられる。

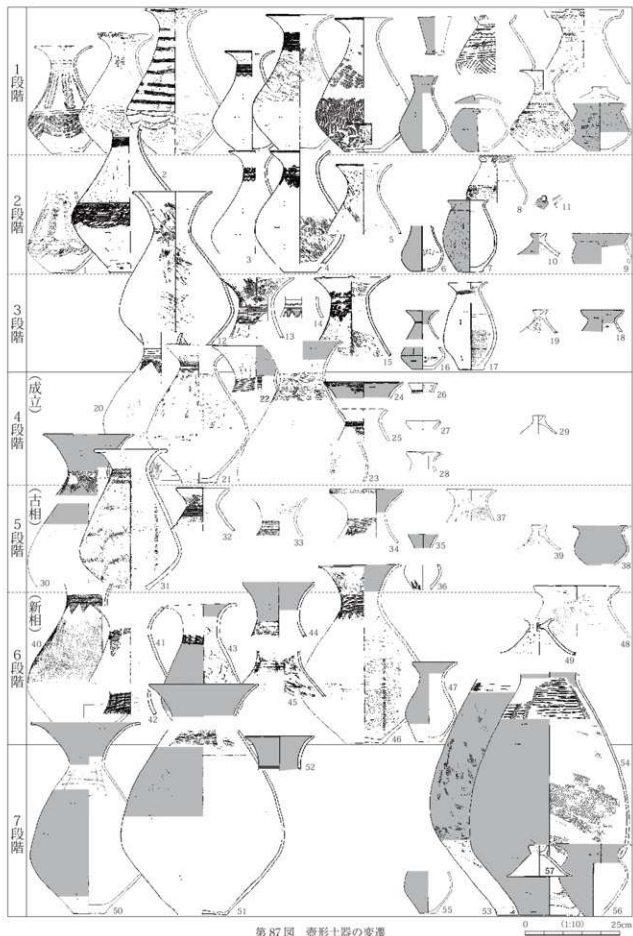
本村南沖遺跡では、土器箱SM02・03出土資料、土器集中SQ01が本段階である。つまり堅穴住居跡のすべてが「吉田式」の時期とみられ、土器箱のすべてが当該期にあたる。居住に関わる施設と墓には時間差がある。住居跡出土土器で最も新しいSB03と墓跡SM02等の関係は、時間的に連続し、わずかな時間差があることは、当時の人びとの生活していた段階と埋葬された段階の差に求められるといえる。では当該期の居住施設の中心はどこにあるのか。本遺跡の北側400mの本村東沖遺跡(長野高校地点)の集落跡が、

まさに当該段階に営まれており、そこが居住施設であった可能性は十分ある。本段階を示す代表的な遺跡(遺構)には、本村東沖遺跡(11・19・45・61号住居址等)、松原遺跡(SB172・SB379等)、檀田遺跡(市教委2005b)等があげられる。

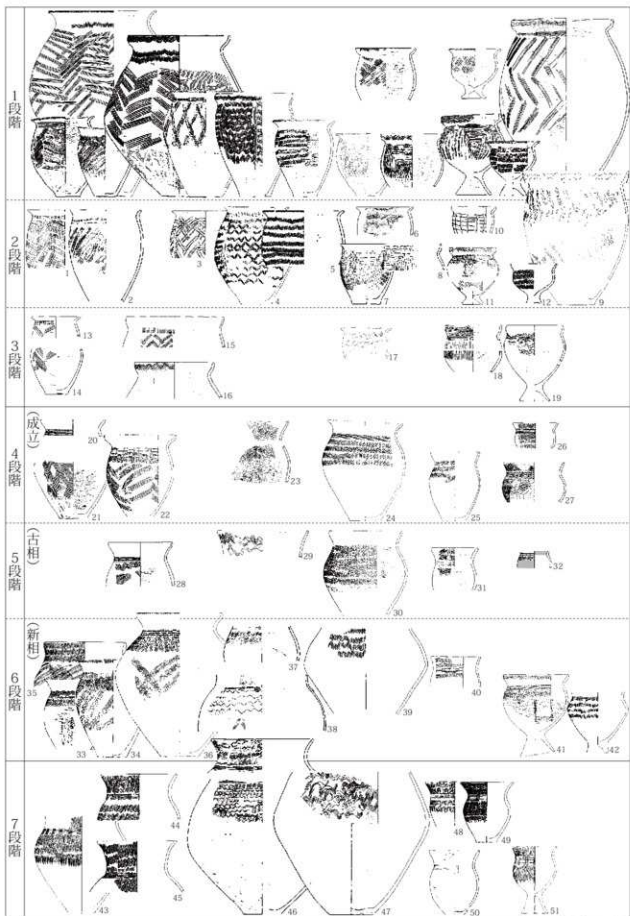
### 3. まとめ

本村南沖遺跡出土土器の所属時期を明らかにするため、「吉田式土器」および前後の土器群に関して、周辺遺跡出土資料を整理した。その結果、中期後半の栗林式期後半から後期前半の箱清水式期前半に至るまで、およそ7つの段階に分けて考えることができ、このうちの4段階から6段階が「吉田式」とされる土器に相当する。したがって「吉田式土器」は3つの段階に区分でき、それを成立段階、古い様相、新しい様相と呼称すれば、5段階が古い様相に、6段階が新しい様相になる。本遺跡の竪穴住居跡は、判断のつかない1軒を除き、2軒が古い様相に、4軒が新しい様相にあたり、成立段階はないと判断される。いずれの住居跡にも切り合い関係がなく、土器の段階差が時間を区切る指針であるとすれば、極めて短い時間幅での移り変わりとして結論づけられる。また一方で、墓跡としての土器棺は7段階の箱清水式土器成立段階にあたり、竪穴住居等居住施設の廃絶時あるいは廃絶直後に設置されたと理解できる。「吉田式」期の居住施設の終焉(移転)とともに、かつての故地が墓跡として利用される。こうした土地と人間との営みの連鎖が地域史を構築しているものと考えられる。

「吉田式」期の集落は、冒頭で述べたとおり、複数の住居を構えた遺跡の発見例が少なく、集落跡としては把握し難い。その中で浅川扇状地上にある吉田高校グラウンド遺跡や二ツ宮遺跡、そして本村南沖遺跡は、集落を追究できる稀有な事例である。今回の調査では、竪穴住居跡以外に、掘立柱建物跡や墓跡もみつけた。短期的ながらも時間差のある集落変遷をつかむことが可能となれば、本村南沖遺跡と本村東沖遺跡のように、別個に調査された2つの遺跡間を結びつけて、歴史史料として考察していくことができる。本村南沖遺跡の記録保存が、長野県の地域史研究にとって大きな貢献材料となるよう、調査研究を深めていく必要がある。

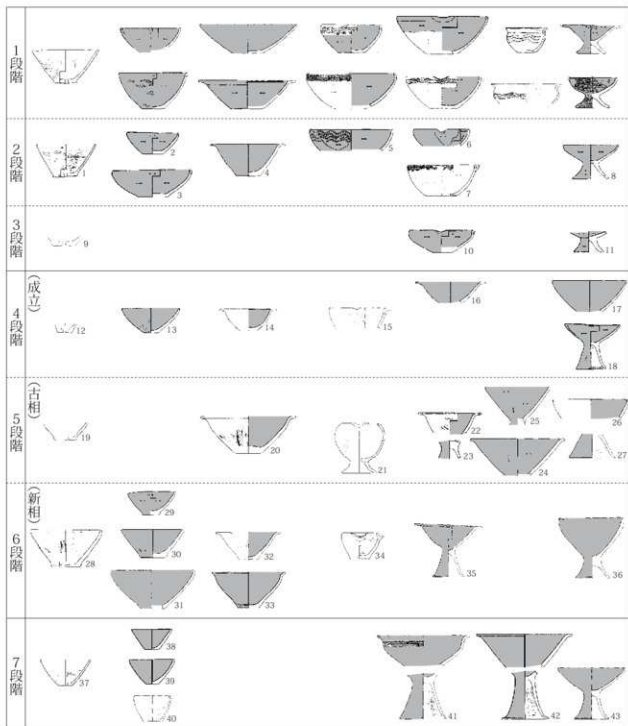


第 87 図 壺形土器の変遷



第88図 壺形土器の変遷

0 1:10 25cm



## 第87回 壺形土器の変遷

1・8・9・10・11(8)16・6・7(8)20,13・18・19(8)24,23・24・29(8)33; 鹿大原  
 2・4(8)28,3(8)36・6,9(8)33,14・16(8)11,12,15・17(8)35(8),22(8)28,49(8)17; 松原  
 12(5)30; 柳久保  
 20(8)13; 柳久保  
 21・26・27・28(19)10(1),25(1)9(1),31・32・36(9)11,33・37・39(24)9(1),34(1)3(1),35・38(9)11,40(2)10(1),42(2)9(1),43・47(9)11,46(2)9(1),48(1)10(1); 長野市田島高松グラウンド  
 30(8)32,41・44・45・50(8)32,51・53・54(8)32(2),55(9)11; 本村集落  
 52(4)31(1),56(1)10(1),57(8)9(1); 本村集落

## 第88回 壺形土器の変遷

1・2(8)44,3(8)32(8),5・12(8)11(8),10(8)12(1),15・19(8)32,16・18(8)11(1); 松原  
 4・7・9(8)32(8)・8・11(8)14(1),13・14・17(8)40,23・27(8)33; 鹿大原  
 20・26・10(1)11(1),21(1)9(1),22(1)9(1),24・25・27(1),28(9)11,30(1)9(1),32(2)7(1),33(2)8(1)11,34・42(2)9(1),36(2)9(1),38(2)8(1),40・41(1)2(1)9(1); 長野市田島高松グラウンド  
 35(1)14(1); ニツ堂  
 29・31(8)32,37・38(8)33,46(8)40(1),47(8)42,50(9)11; 本村集落  
 43(1)10(1),44(4)9(1),45・49(1)9(1),48(6)10(1),51(8)9(1); 本村集落

## 第89回 鉢形土器・高杯形土器の変遷

1・3・7(8)11(8),2(8)36(4),8(8)32(8),10(8)32,11(8)23(1); 松原  
 4・6(8)32,20(8)42,30(8)42,18(8)33; 鹿大原  
 12・14(10)11(1),12・15・19(1)11,14(7)11(1),17(1)9(1),19(5)11(1),20(6)9(1),22・23(1)10(1),26(2)7(1),27(2)4(1),28(2)4(1),30・35(5)11(1),31・36(1)9(1),32(2)9(1),33(1)7(1)9(1); 長野市田島高松グラウンド  
 21(8)14(1); 柳久保  
 24・25(8)32,29(8)31,34(8)11; 本村集落  
 37・38(8)9(1),39(1)10(1),40・41・43(6)11(1),42(1)9(1)9(1); 本村集落

第89回 鉢形土器・高杯形土器の変遷

## 第2節 浅川扇状地遺跡群の弥生時代集落の変遷

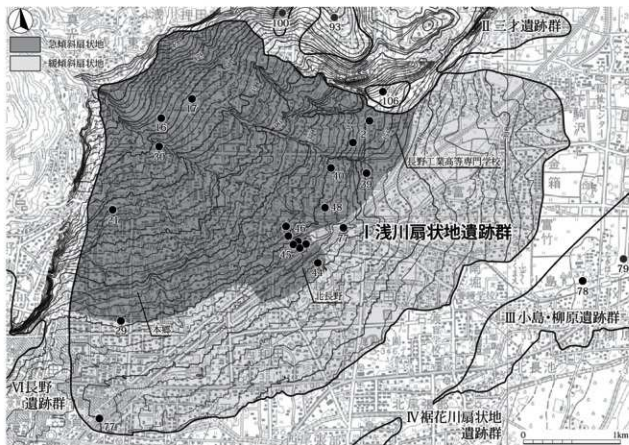
浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡周辺の弥生時代の遺跡について、主に集落の変遷を概観し、調査成果の理解の一助としたい(第90図～第92図)。なお遺跡の番号については、第8図、第8表と一致する。

### 1. 浅川扇状地と弥生時代の遺跡の立地

浅川が形成する扇状地地形については、第2章第1節で述べたとおりである(第4・5図)が、地形図と浅川扇状地上でこれまでに調査された遺跡と重ね合わせたところ、集落の立地に特徴がみられた。

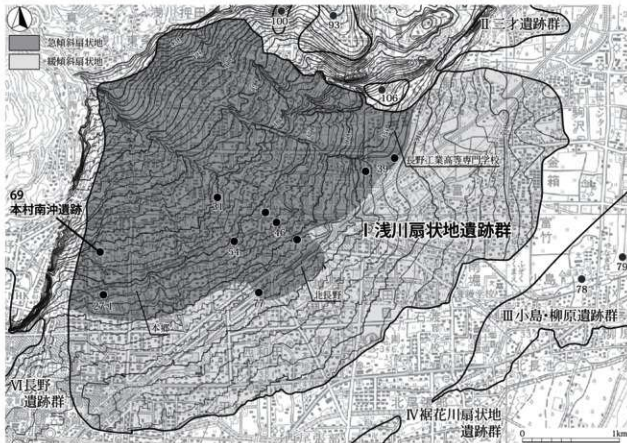
等高線から浅川扇状地を概観すると、扇頂から本郷-北長野-長野工業高等専門学校を結ぶ辺りまでは1kmで約25m下がり、それより下流の扇端側で裾花川の旧河道や千曲川の後背湿地に接する部分までは1kmで約20m下がり、傾斜に違いがある。(前者を「急傾斜扇状地」、後者を「緩傾斜扇状地」と呼ぶ。)弥生時代の遺跡は、このうち急傾斜扇状地上の範囲に分布している。吉田のJR北長野駅付近では、急傾斜扇状地が南東へ突出している。これはかつて浅川が形成した微高地であり、本来浅川の本流は扇状地のほぼ中央部を北西から南東方向へ流れ裾花川の旧流路と合流し千曲川へ流れ込んでいたことを示すものである。また等高線からは浅川本流以外の幾筋かの流路(以下「支流」という)が扇状地上を開析したと考えられる谷状地形が認められる。

浅川は渇水期には水量が著しく減少するが、大雨や雪解けで増水があれば急流となり土砂があふれ出す荒れ川である。本流に近い場所ではあふれた土砂で微高地が形成される。なお現在の地表や等高線からは判読できない支流跡や遺構の希薄な部分が発掘調査では確認されていて、大きく地形を変化させるほどで

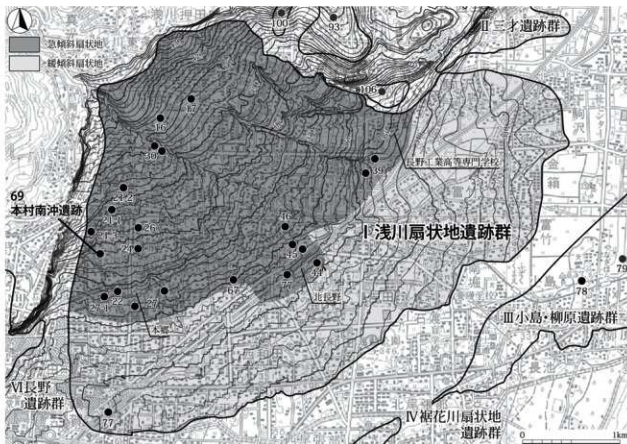


第90図 弥生時代中期 栗林式期の遺跡





第91図 弥生時代後期 吉田式期の遺跡



第92図 弥生時代後期 箱清水式期の遺跡

はないが、昭和の浅川の記録（長野県浅川改良事務所 2007）から一時的に地表を流れ集落の形成に影響を与えた浅川とその支流の氾濫があったことが想定できる。一般に扇状地での地下水は、扇尖部は伏流して地下水位が深く、扇端部で湧水となる。急傾斜扇状地と緩傾斜扇状地との境付近は、急傾斜扇状地の扇端部に相当し湧水が認められる。微高地上でかつ水を得やすい場所が集落を営む上で好まれるであろう。

弥生時代前期は土器の出土がごくわずかで、報告のあるものは本村南沖遺跡（69）で出土した墓跡 SQ02 の深鉢と本村東沖遺跡（21）上松東団地地点の土坑 SK01（報告書では縄文時代晩期）から出土した条痕文を施した深鉢のみである。出土状態から土器棺蓋と考えられ、近隣に居住域があった可能性が予想される。いずれも急傾斜扇状地西側の扇尖から扇端部に位置するが、集落がみつからないため、立地について言及できない。

弥生時代中期の集落跡は、急傾斜扇状地扇尖部で浅川左岸の檀田遺跡（16）（中期後半）、浅川右岸の浅川遺跡（30）、徳間川左岸の神楽橋遺跡（17）、扇尖部西側の本村東沖遺跡長野高校地点（21）（中期栗林式期末）と扇端部で浅川右岸の吉田町東遺跡（46）・吉田古屋敷遺跡（45）・吉田四ツ屋遺跡（44）・辰巳池遺跡（33）・新幹線浅川（77）（W13・W14区）、扇端部西側の本郷前遺跡（29）（弥生中期後葉）、扇端部東側の本郷遺跡（40）・二ツ宮遺跡（39）・徳間柳田遺跡（2）でみつまっている。全体として急傾斜扇状地の扇尖と扇端部に集落域が分布する。検出された住居跡数から檀田遺跡、神楽橋遺跡は栗林式期の中心的な集落域と考えられる。なお、新幹線浅川（W2A・W2B・W2C区）は緩傾斜扇状地の扇端部際で裾花川の旧河道に面している。長野遺跡群（IV）と同様裾花川との関連性が高く、浅川扇状地との境界は明確に引けないが、裾花川扇状地上の立地と考えた方がよいだろう（第90図）。

弥生時代後期初頭吉田式期の集落跡は、急傾斜扇状地扇端部で浅川右岸の吉田高校グランド遺跡（31）・吉田町東遺跡・桐原宮北遺跡（54）・新幹線浅川（W10B区）、扇端部西側の本村南沖遺跡、三輪遺跡保育園地点（27-1）、扇端部東側の二ツ宮遺跡でみつまっている。全体として急傾斜扇状地の扇端部中央、西側、東側に分かれて集落域が集中する。検出された住居跡数から中央部の吉田高校グランド遺跡が中心的な集落域と考えられる（第91図）。吉田式期の住居跡は、どの遺跡でも切り合いがなく吉田高校グランド遺跡で3軒中2軒の切り合いが確認されるほかは、ほぼ一時期に限定される。集落の継続期間は短かったと予想できる。吉田高校グランド遺跡以外は出土土器の量が少ない。

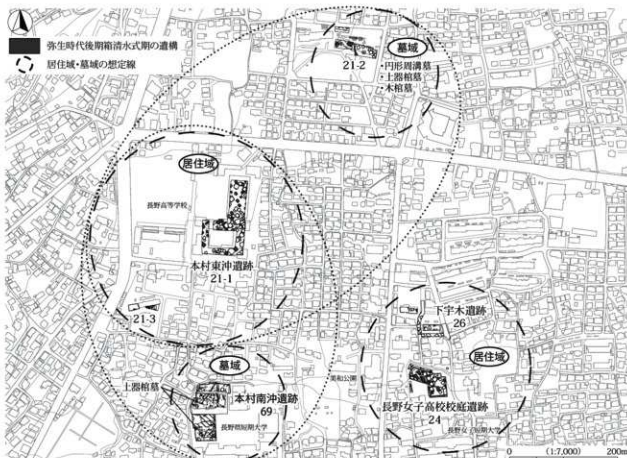
弥生時代後期前半～後半箱清水式期の集落跡は、急傾斜扇状地扇尖部で浅川左岸の檀田遺跡、浅川右岸の浅川遺跡、扇尖部西側の本村東沖遺跡、扇尖部東側で徳間川右岸の神楽橋遺跡、扇端部西側の下宇木遺跡（26）・長野女子高校校庭遺跡（24）・三輪小学校遺跡（22）・三輪遺跡（27）、扇端部で浅川右岸の吉田町東遺跡・吉田古屋敷遺跡・吉田四ツ屋遺跡・桐原牧野遺跡（57）・新幹線浅川（W10B区）、扇端部東側の二ツ宮遺跡でみつまっている。全体として急傾斜扇状地の扇尖と扇端部に集落域が分布する。検出された住居跡から本村東沖遺跡、長野女子高校校庭遺跡、檀田遺跡が中心的集落と考えられる（第92図）。

吉田式期の集落は、急傾斜扇状地の扇端部中央、西側、東側に分かれて集中し、特に中央部の浅川右岸の微高地上は中心的な集落域になるであろう。吉田式期の遺構の検出数は栗林式期、箱清水式期と比べて少なく、今後の調査事例の増加に期待したい。

## 2. 本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期遺跡の様相

本村南沖遺跡（69）から南へ600mほど離れた三輪遺跡保育園地点（27-1）では吉田式期の住居跡が1軒検出されている。検出数がわずかであるが、住居形態は浅川扇状地遺跡群でみられる弥生時代後期の一般的な形態であり、主軸方向は北西～南東方向にとること、出土遺物は吉田式の新しい様相を呈することから、両遺跡は同じ集落域の可能性を指摘する。

箱清水式期の最も古い段階は本村東沖遺跡長野高校地点(21-1)で住居跡が分布するが、土器の様相から、南へ400m離れた本村南沖遺跡が墓域となる可能性がある。本村東沖遺跡長野高校地点の集落が最大規模となる段階の墓域は北東へ300m離れた上松東団地地点(21-2)となる。ここでは円形周溝墓や木棺墓・土器棺墓が検出されている。また本村東沖遺跡長野高校地点から南西へ200m離れたサーバス上松地点(21-3)は長野高校地点と同一の居住域になろう。さらにその後の中心となる長野女子高校校庭遺跡(24)は隣接する下字木遺跡(26)と同一の居住域となるが、セットになる墓域はみつからない(第93図)。箱清水式期の中心的集落である檀田遺跡(16)は居住域と墓域が明らかに隔たれた場所で見ついている。吉田四ツ屋遺跡(44)・吉田古屋敷遺跡(45)では住居跡と墓跡が見ついている。本村南沖遺跡周辺の居住域と墓域のあり方も同様であり、遺跡名は異なるが1つの集落としてとらえることが出来るだろう。



第93図 本村南沖遺跡周辺の弥生時代後期箱清水式期の遺構分布

註1. 文中敬称を略。

- 土器説明の用語は、吉田式土器設定に関わる笹沢論文(笹沢1970)にもとづき、それ以降の研究動向により、必ずしも一致させていない。「横走平行線」は、「平行沈線文」と、「有段口縁」は今日的に使用頻度の高い「受け口口口縁」を選択した。
- 「吉田式土器」期と評価される集落遺跡は、長野市松原遺跡や中野市南大原遺跡等、そのほとんどが極めて断片的(1~2軒程度の住居跡数)で、複数の住居跡が集まる葉林2式期に比して特異である。そうした中、浅川扇状地遺跡群内では複数の住居跡で構成される集落遺跡が確認できる。
- 浅川扇状地遺跡群での「吉田式」期の住居跡は切り合い関係がほとんどなく、土器の型式変化も十分に整理が尽くされていないため、集落の時間的な変化がみえない。一見、同時期にみえる集落跡の時間的推移を模索する試案が本稿であるが、それでも吉田高校グランド遺跡では6号住居跡と7号住居跡の関係のように段階的に定まらない。同様に12号住居跡には5段階の様相があり、5号住居跡および13号住居跡は6段階の様相に近い。まだまだ混沌としており、本試案が「吉田式」の考古学研究に少しでも関与できれば幸いである。

註 付表

本書 2017		県埋文センター調査遺跡			市教委調査遺跡			寺島(中野)・香本(飯沼) 1999
		長谷川 柳沢	西大豆 松原 川入保	藤ノ井 (遺跡)	三輪	飯田 本郷	吉田町東	栗林式土器 古渡遺跡 古渡新跡
1 段階	栗林式							中渡遺跡 中渡新跡
2 段階					本村東沖	二ノ宮		新飯田
3 段階				浅川W100 (新飯田)			吉田高	1 段階
4 段階		本村東沖						2 段階
5 段階	吉田式							2 式 1 段階
6 段階								2 段階
7 段階	箱清水式				長野女子			2 段階 4 段階
								5 段階
								6 段階

引用・参考文献

- 青木一男 1999 『長野盆地南部の後期土器編年』99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』p76-85 長野県考古学会
- 赤羽貞幸・加藤禎一・宮樫茂子・金原啓司 1992 『中野地域の地質 地域地質研究報告(5 万分の1 地質図幅) 地質調査所 106p』
- 石川日出志 2002 『栗林式土器の形成過程』『長野県考古学会誌』99・100 合併号 p54-80 長野県考古学会
- 石川日出志 2012 『栗林式土器編年・系譜と青銅器文化の受容』『中野市 柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100 p182-191
- 一志茂樹 編 1979 『長野県の地名』日本歴史地名大系 20
- 加藤禎一・赤羽貞幸 1986 『長野地域の地質 地域地質研究報告(5 万分の1 地質図幅) 地質調査所 120p』
- 活断層研究会 1980 『日本の活断層-分布図と資料』東海大学出版会 363p
- 活断層研究会 1991 『新編日本の活断層-分布図と資料』東京大学出版会 437p
- 黒岩隆 2016 『磨石をもつ土器片』『琵琶島遺跡・聖田遺跡・ねごや遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 112 p142-143
- 国史大辞典編集委員会 1989 『国史大辞典』第 10 巻
- 小林幹男 1996 『時の祭祀と古東山道』『長野女子短期大学研究紀要』第 3 号 p8-23
- 笹沢浩 1970a 『長野市下宇木遺跡 B 地点出土の土師器』『長野県考古学会誌』8 号 p61-65 長野県考古学会
- 笹沢浩 1970b 『箱清水式土器発生に関する一試論』『信濃』第 22 巻第 11 号 信濃史学会
- 笹沢浩 2011 『信州における弥生中期文化研究の到達点と課題(抄)』『長野県考古学会誌』138・139 合併号 p146-149 長野県考古学会
- 笹澤浩 2013 『信州弥生文化研究の現状と課題-「信州における弥生社会のあり方」の理解に向けて-』『文化の十字路信州』p12-20 日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『浅川原状地遺跡群・三才遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 34
- 信濃史料刊行会 1968 『信濃史料』第 2 巻
- 信濃毎日新聞社 1981 『長野県百科事典 補訂版』
- 設楽博己 2009 『独立棟持柱建物と祖堂祭祀』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集 p65-89
- 須坂市 2016 『遺跡詳細分布図』埋蔵文化財包蔵地について 須坂市オフィシャル WEB サイト
- 千野浩 1989 『千曲川水系における後期弥生式土器の変遷』『信濃』第 41 巻第 4 号 p44-56 信濃史学会
- 寺島孝典 1999 『長野盆地南部の様相』99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』p67-75 長野県考古学会
- 寺島孝典 2013 『栗林式土器の成立と展開-栗林式土器編年の再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで-』『文化の十字路信州』p285-290 日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料集
- 富澤恒雄 1991 『VI 善光寺地震』『長野盆地のおい立ちと地震』
- 直井雅尚 2014 『周辺から見た栗林式土器の実質と変化』『長野県考古学会誌』138・139 合併号 p50-66 長野県考古学会
- 長野県浅川改良事務所 2007 『信濃川水系長野側河川整備計画(浅川)』

- 長野県考古学会 1999『長野県の弥生土器編年』（冬季大会資料）
- 長野県史刊行会 1982『長野県史』考古資料編／全1巻（2）主要遺跡（北・東信）昭和57年
- 長野県史刊行会 1989『序章－三 古東山道から令制東山道へ』第三章－四 水内郡』『長野県史 通史編』第1巻 原始・古代
- 長野県地質図活用普及事業研究会編著 2015『長野県デジタル地質図 2015』
- 長野県町誌刊行会 1936『長野県版 長野県町誌』第1巻 北信篇
- 長野県埋蔵文化財センター 1997『篠ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
- 長野県埋蔵文化財センター 1998,1999,2000『松原遺跡 弥生中期・弥生後期・古墳前期（第1分冊～第6分冊）』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 長野県埋蔵文化財センター 2013『川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99
- 長野県埋蔵文化財センター 2012『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
- 長野県埋蔵文化財センター 2014『佐久市春平遺跡・寄塚遺跡・今井西原遺跡・今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107
- 長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 長野市 2016『遺跡地図（埋蔵文化財）』長野市行政地図情報 長野市オンラインサービス（2016現在）
- 長野市教育委員会 1975『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第2集
- 長野市教育委員会 1980a『四ツ屋遺跡（第1次～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第3次）』長野市の埋蔵文化財第9集
- 長野市教育委員会 1980b『三輪遺跡・付水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡調査報告』長野市の埋蔵文化財第6集
- 長野市教育委員会 1981a『南谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集
- 長野市教育委員会 1981b『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』長野市の埋蔵文化財第11集
- 長野市教育委員会 1982『牟礼バイパス A・E 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第12集
- 長野市教育委員会 1983『迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財第13集
- 長野市教育委員会 1984『箱清水遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第15集
- 長野市教育委員会 1986『牟礼バイパス B・C・D 地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第17集
- 長野市教育委員会 1987a『三輪遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第20集
- 長野市教育委員会 1987b『芹田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第21集
- 長野市教育委員会 1987c『長野市吉田高校グラウンド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集
- 長野市教育委員会 1988a『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第29集
- 長野市教育委員会 1988b『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集
- 長野市教育委員会 1991a『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第38集
- 長野市教育委員会 1991b『中俣遺跡・押鎌遺跡・横田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集
- 長野市教育委員会 1992a『二ッ宮遺跡・本根遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡（第1分冊）（第2分冊）』長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会 1992b『中俣遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第48集
- 長野市教育委員会 1993a『三輪遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第49集
- 長野市教育委員会 1993b『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 1993c『駒沢新町遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第55集
- 長野市教育委員会 1994a『三輪遺跡（5）・上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集
- 長野市教育委員会 1994b『牟礼バイパス B 地点（2）』長野市の埋蔵文化財第65集
- 長野市教育委員会 1995a『本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集
- 長野市教育委員会 1995b『徳間本堂原遺跡』長野市の埋蔵文化財第69集
- 長野市教育委員会 1995c『八幡田沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第70集
- 長野市教育委員会 1995d『二ッ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』長野市の埋蔵文化財第71集
- 長野市教育委員会 1996a『吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6）・栗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第75集
- 長野市教育委員会 1996b『駒沢城跡・中俣遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第76集
- 長野市教育委員会 1996c『松ノ木田遺跡』長野市の埋蔵文化財第77集
- 長野市教育委員会 1997a『水内坐一元神社遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第80集
- 長野市教育委員会 1997b『松ノ木田遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第82集
- 長野市教育委員会 1997c『吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第84集
- 長野市教育委員会 1997d『寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第86集

- 長野市教育委員会 1998a 『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』 長野市の埋蔵文化財第 88 集
- 長野市教育委員会 1998b 『西方遺跡・中沢城跡館跡』 長野市の埋蔵文化財第 91 集
- 長野市教育委員会 1998c 『小板屋遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 94 集
- 長野市教育委員会 2001a 『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』 長野市の埋蔵文化財第 97 集
- 長野市教育委員会 2001b 『徳間覆田遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 99 集
- 長野市教育委員会 2003 『浅川端遺跡 (2)・差出遺跡・三合塚西古墳・石川桑里遺跡 (10)』 長野市の埋蔵文化財第 102 集
- 長野市教育委員会 2004a 『篠ノ井南桑遺跡・辰巳池遺跡・本郷前遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 103 集
- 長野市教育委員会 2005a 『天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 104 集
- 長野市教育委員会 2005b 『檀田遺跡 (2) (第 1 分冊) (第 2 分冊)』 長野市の埋蔵文化財第 105 集
- 長野市教育委員会 2004b 『西方遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 107 集
- 長野市教育委員会 2005c 『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡 (2)・吉田古屋敷遺跡 (2)・返日遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 108 集
- 長野市教育委員会 2005d 『石川桑理遺跡 (11)・本村東沖遺跡 (3)・上長畑遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 111 集
- 長野市教育委員会 2006a 『吉田東町遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 112 集
- 長野市教育委員会 2006b 『水内坐一元神社遺跡 (4)』 長野市の埋蔵文化財第 113 集
- 長野市教育委員会 2007a 『平林東沖遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 116 集
- 長野市教育委員会 2007b 『吉田古屋敷遺跡 (3)』 長野市の埋蔵文化財第 118 集
- 長野市教育委員会 2007c 『吉田古屋敷遺跡 (4)・田牧居塚遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 119 集
- 長野市教育委員会 2008a 『吉田古屋敷遺跡 (5)』 長野市の埋蔵文化財第 120 集
- 長野市教育委員会 2008b 『ニッ宮遺跡 (3)・浅川端遺跡 (3)』 長野市の埋蔵文化財第 122 集
- 長野市教育委員会 2010a 『水内坐一元神社遺跡 (5)・中俣遺跡 (4)』 長野市の埋蔵文化財第 125 集
- 長野市教育委員会 2010b 『吉田町東遺跡 (3)・駒沢新町遺跡 (3)』 長野市の埋蔵文化財第 126 集
- 長野市教育委員会 2011a 『大門遺跡・駒沢城跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 127 集
- 長野市教育委員会 2011b 『芹田東沖遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 129 集
- 長野市教育委員会 2012 『桐原宮北遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 130 集
- 長野市教育委員会 2013 『御所遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 132 集
- 長野市教育委員会 2014a 『長野女子高校校庭遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 134 集
- 長野市教育委員会 2014b 『押録遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 136 集
- 長野市教育委員会 2014c 『御所遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 137 集
- 長野市教育委員会 2014d 『平林東沖遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 138 集
- 長野市教育委員会 2015a 『徳間本堂原遺跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 139 集
- 長野市教育委員会 2015b 『三輪遺跡 (7)・三輪遺跡 (8)』 長野市の埋蔵文化財第 140 集
- 長野市誌編さん委員会 2003 『長野市誌』 第 12 巻 資料編 原始・古代・中世
- 長野市立博物館 1997 『第 39 回特別展 古代・中世人の祈り - 善光寺信仰と北信濃 -』
- 長春英明・古川竜太・早津賢二 2003 『戸隠地域の地質 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅)』 産総研地質調査総合センター 109p
- 花岡邦明 2004 『浅川扇状地』・『浅川』『長野の大地 見どころ 100 選』 p52-53, 62-63 地学団体研究会長野支部 長野の大地編集委員会
- 馬場伸一郎 2008 『弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 145 集
- 広瀬和雄 2008 『弥生墳墓と神殿 - 前方後円墳祭祀と弥生墳墓祭祀 -』『国史館考古学』 第 4 号 p1-19 国史館考古学古学会
- 福島正樹 2002 『古代における善光寺平の開発について』『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 96 集 p69-86
- 藤森栄一 1955 『中部高地・北陸』『日本考古学講座 4 弥生時代』 河出書房
- 宮本長二郎 1991 『弥生・古墳時代の掘立柱建物』『弥生時代の掘立柱建物 - 本編 -』 p33-54 埋蔵文化財研究会 第 29 回研究会実行委員会
- 柳澤亮 2015 『土器片加工版』『西近遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104 p90-92

第10表 壑穴住居跡一覽 (弥生時代)

図面番号	写真図面 図面番号	遺構番号	グリッド	形態・規模			礎土 深さ (cm)	位置 北緯 東経	形状	柱穴		遺構No.	出土遺物 種類No.	時代	備考	
				主軸長 長さ (m)	副軸長 長さ (m)	面積 (㎡)				柱穴間隔 (m)	柱穴形状					
第3618	PL5	S801	1 B11-12 16-17	南北長方形	N42.5° W	6.10	3.90	23.79	10 ~ 16 階層	-	4 階層	3.05 ~ 3.13 (あり)	出入口施設	26 ~ 40	弥生前期	
第2918	PL5-6	S802	1 L21-22 19-20	南北長方形	N22° W	(4.20)	4.80	(20.64)	12 ~ 25 階層	-	4 階層	1.95	なし	41 ~ 62	弥生前期	
第31-3218	PL6-7	S803	1 B14-15 19-20	南北長方形	N22° E	(7.45)	5.15	(38.00)	10 ~ 25 階層	-	6 階層	2.00 ~ 2.15 (あり)	-	60 ~ 85	弥生前期 ▼SK25-26 弥生前期	
第3918	PL8	S804	1 K08-13	南北長方形	N30.5° W	5.05	<1.00>	<30.20>	20 ~ 30 階層	北緯 東経 主柱穴間隔	3 階層	2.70	なし	87 ~ 93	弥生前期	
第3818	PL8-9	S805	1 K24	南北長方形	N26° W	<6.00>	4.24	<25.44>	22 ~ 48 階層	北緯 東経 主柱穴間隔	4 階層	1.66 ~ 1.80 (あり)	出入口施設 または貯蔵穴	94 ~ 105	弥生前期	
第3918	PL10	S816	1 K31	南北長方形	N27° W	(1.45)	<2.70>	(3.92)	22 ~ 24 階層	-	-	-	-	106,107	弥生前期	全く底により破壊
第4118	PL10-11	S817	1 F08-09 13-14	南北長方形	N45° W	6.40	4.45	28.48	50 ~ 60 階層	北緯 東経 主柱穴間隔	4 階層	2.96 ~ 3.00 (あり)	出入口施設 貯蔵穴	108 ~ 119	弥生前期	

第11表 壑穴住居跡一覽 (平安時代)

図面番号	写真図面 図面番号	遺構番号	グリッド	形態・規模			礎土 深さ (cm)	位置 北緯 東経	構造	カマド		柱穴間隔 (m)		出土遺物 種類No.	時代	備考
				平面形状	主軸方向	主軸長 長さ (m)				副軸長 長さ (m)	面積 (㎡)	基礎	その他			
第6118	PL17	S806	1 K14-19 20	方形	N11.7° E	3.85	4.85	19.16	11 ~ 17 階層	西壁	礎土のみ	-	礎土のみ	171 ~ 210	平安	
第65-6618	PL18-19	S806	1 K20	方形	N17° E	3.22	<3.60>	<11.59>	21 ~ 28 階層	南東壁 西壁	石積み?	-	礎土	211 ~ 218	平安	
第65-6618	PL18-19	S807	1 K20	方形	N13.3° E	3.50	3.70	12.95	21 ~ 29 階層	北壁 西壁	石積み?	-	礎土	219 ~ 227	平安	SI06の掘り出し、または貯蔵の付加か
第6818	PL20	S808	1 K23	方形	-	(3.10)	(1.40)	(4.34)	2 ~ 14 階層	南東壁 南壁	大塚、土厚石、 礎石施設	-	礎土	228 ~ 249	平安	
第7018	PL20	S810	1 K08-13	方形	N11.8° W	-	-	-	西壁	-	礎土敷石	-	礎土	250 ~ 255	平安	
第7118	PL20-21	S811	1 F02-04 (南長方形)	90°	(2.48)	(2.83)	(7.61)	5 階層	(北壁)	-	礎土	1	礎土	256 ~ 261	平安	南半分を高平と見たい
第7118	PL21	S812	1 F03-04-08 9	90°	N26° E	2.78	2.92	8.12	8 ~ 14 階層	(北壁)	-	4	階層	170 ~ 210,260 ~ 266	平安	
第73-7418	PL21	S813	1 F07-08	方形	N12.9° E	(2.60)	2.30	(6.30)	13 ~ 22 階層	南東壁 西壁	石積み 不規則形状	-	礎土	269 ~ 281	平安	
第7618	PL22-23	S814	1 F08	方形	N9° W	2.60	3.32	8.63	6 ~ 20 階層	-	礎土	3	階層	282 ~ 291	平安	PL1は貯蔵穴か
第77-7818	PL23-24	S815	1 F06-09-13 14	長方形	N43° E	3.40	4.67	15.88	2 ~ 27 階層	北壁中央 西壁、土厚石	礎土	-	礎土	292 ~ 320	平安	

第12表 掘立柱住居跡一覽

図面番号	写真図面 図面番号	遺構番号	グリッド	規模・形態			柱穴間隔			柱穴間隔			出土遺物 種類No.	時代	備考	
				構造	柱穴間隔	面積	柱穴間隔	面積	柱穴間隔	面積						
第4318	PL12	ST03	1 G24-25 1 G26	掘立柱	N17° W	掘方間	2.80 × 1.20	5.40	2.63	10.96	2.46 ~ 2.84	200 ~ 207	掘方間 不規則形状	42 ~ 47, 50 E	弥生後期	弥生後期
第4018	PL21	ST02	1 B15-16-18 19	掘立柱	N 0°	長方形	1.00 × 1.00	3.40	1.92	6.33	1.78 ~ 2.05	128 ~ 205	掘方間 不規則形状	14 ~ 22, C-E	平安	△SK03

第13表 葛跡一覧

図面番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模				埋土	出土遺物 総数 No.	遺構関係 の図号 ▼切り込み	時代	備考
				平面形	長軸方向 長 (m)	短軸方向 幅 (m)	高さ (m)					
第44回	PL13	SM01	I B10-15	隅丸長方形	N57° W	2.10	0.80	31 ~ 32	黒褐色を主体とする複層			発生時期
第45 ~ 49回	PL13	SM02	I K14-15-19-20	楕円形	N31° E	1.24	0.83	17 ~ 23	黒褐色土	121,122,123,124	▼SB05	発生時期
第50回	PL14	SM03	I F10	楕円形	N63° E	0.70	0.58	12 ~ 19	上部層内：黒褐色土を主体とする単層	125		発生時期

第14表 溝・流路跡一覧

図面番号	写真図版	遺構番号	グリッド	結構・形態				埋土	出土遺物 総数 No.	遺構関係 の図号 ▼切り込み	時代	備考
				長軸方向 長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)	深さ (cm)					
第56回	PL16	SD01	I A25-1807-08 I 22-15-17-21 I P05-10		N33° E	46.70	0.54 ~ 1.75	2 ~ 18	複層。褐色(10YR4/4 ~ 10YR4/1)砂礫～砂質シルト。底部～灰黄褐色～褐色の砂質シルトを含む。	148 ~ 166	△SD10	古墳中期
第81-82回	PL25	SD02	I B13-18-23 I G03-03		N 0°	38.50	0.33 ~ 0.87	4 ~ 14	褐色 (10YR4/4) 砂礫。粘性なし。しまり普通。		△SD03	平安
第81-82回	PL25	SD03	I B08-09-13 I 14-18-19-23 I G03-04-08		N 0°	41.00	2.70 ~ 4.40	47 ~ 95	複層。上層：黒褐色 (10YR3/1) シルト主体。中層：褐色土 (10YR4/1) 砂礫主体。下層：褐色土 (10YR5/1) 砂質シルト主体。クワリ土は多量。	322 ~ 326, 701 ~ 711	▼SD02 ▼ST02	奈良～ 平安
第82回	PL14	SD04	I B15 I C08-11		N9° E	3.90	0.35 ~ 0.80	11 ~ 35	褐色 (10YR2/2) 複層。粘性なし。しまりやや弱。2 ~ 5cm 礫 2% 混入。			発生時期?

第15表 土坑一覧

図面番号	写真図版	遺構番号	グリッド	形態・規模				埋土	出土遺物 総数 No.	遺構関係 の図号 ▼切り込み	時代	備考
				平面形	長軸方向 長さ (cm)	短軸方向 幅 (cm)	深さ (cm)					
SK01	I B11	円形	B	20	20	19	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性ややあり。しまり強。暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト混入。0.5 ~ 1cm 礫混入。					
SK02	I B12	楕円形	C	20	17	7	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性ややあり。しまり強。暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト混入。0.5 ~ 1cm 礫混入。					
SK03	I B07	円形	A	34	30	10	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下砂礫を全体に混入。					
SK04	I B12	円形	C	24	22	12	黒褐色 (10YR3/1) 砂。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混入。					
SK05	I B12	楕円形	C	41	35	11	黒褐色 (10YR3/1) 砂。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混入。					
SK06	I B13	楕円形	C	31	15	11	黒褐色 (10YR3/1) 砂。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混入。					
SK07	I B13	円形	C	22	22	11	黒褐色 (10YR3/2) 砂礫混入。粘性なし。しまり普通。SK01 ~ 02 より砂礫多量。					
SK08	I B17-18	円形	C	34	30	19	黒褐色 (10YR3/2) 砂礫混入。粘性ややあり。しまりやや強。1 ~ 1.5cm 礫混入。					
SK09	I B18	楕円形	C	75	48	17	黒褐色 (10YR3/2) 砂礫混入。粘性ややあり。しまりやや強。1 ~ 1.5cm 礫混入。					
SK10	I B18	円形	C	40	34	16	黒褐色 (10YR3/2) 砂礫混入。粘性ややあり。しまりやや強。1 ~ 1.5cm 礫混入。					
SK11	I B18	円形	C	26	23	13	黒褐色 (10YR3/2) 砂礫混入。粘性ややあり。しまりやや強。1 ~ 1.5cm 礫混入。					
SK14	I B14	円形	B	25	23	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂。やや砂質。粘性普通。しまりやや強。0.5cm 以下礫混入。					
SK17	I K20	円形	A	32	30	8	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。					
SK18	I K20	楕円形	A	24	22	9	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。浅い凹み。					
SK19	I K20 I L16	楕円形	F	70	56	32	1.黒褐色～褐色 (10YR3/1 ~ 2/1) 砂。粘性あり。しまり強。0.2 ~ 1.5cm 礫混入。2.黒褐色～褐色 (10YR3/1 ~ 2/1) 砂。粘性あり。しまり強。0.2 ~ 1.5cm 礫混入。褐色(4)の細かめの土混入。					
SK20	I L11	楕円形	C	32	22	14	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。					
SK21	I K20	楕円形	B	36	36	22	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性ややあり。しまり普通。0.2 ~ 1cm (最大径 3 ~ 5cm) 礫混入。					
SK22	I K20 I L16	円形	C	62	60	23	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。空気に硬塊混入。					
SK23	I L16	楕円形	C	38	29	13	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。					
SK24	I K20	円形	C	38	36	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性。しまり普通。0.2 ~ 1.5cm 礫多量。砂混入。					
SK25	I K20	円形	C	36	32	13	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。礫径 0.2cm 程度混入。SK17 より多量。					
SK26	I K20	楕円形	C	48	43	14	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/1) 砂のブロンズ土混入。粘性普通。しまりやや強。礫径 0.2cm 程度混入。SK17 より多量。					
SK27	I K20	楕円形	B	31	36	18	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性あり。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫を全体に混入。					
SK28	I K20	円形	C	40	39	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/4) 砂の 5cm ブロンズ土混入。粘性。しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混入。					
SK29	I K20	楕円形	B	40	16	22	黒褐色～褐色 (10YR3/1 ~ 2/1) 砂。粘性あり。しまり強。礫混入。					
SK30	I K25	楕円形	C	34	30	24	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/4) 砂の 5cm ブロンズ土混入。粘性。しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混入。					
SK31	I K25	楕円形	C	52	40	19	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性あり。しまりやや強。0.2 ~ 1.5cm 礫を全体に混入。					
SK32	I K25	楕円形	C	44	34	16	黒褐色 (10YR3/1) 砂と褐色 (10YR4/4) 砂の 5cm ブロンズ土混入。粘性。しまり普通。0.2cm 以下砂礫を全体に混入。					
SK33	I K20	楕円形	C	70	46	16	黒褐色 (10YR3/3) 砂。粘性。しまり普通。0.2cm 以下黄褐色砂礫を全体に混入。			▼SB07		
SK34	I B14	円形	C	37	34	13	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性普通～ややあり。しまり普通。小礫混入。					
SK35	I B14	円形	A	27	24	11	黒褐色 (10YR3/1) 砂。粘性。しまり普通。			△SB03		



図版番号	写真 図号	透視 番号	グリッド	形態・規模				埋土	出土 遺物 種類	重要関係 品等 ※記される	時代	備考
				平面形	断面 形	基軸長 (cm)	高さ (cm)					
		SK36	I B15	円形	A	40	40	11	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性普通。しまり強。0.5～2cm 夾層層混。中心浅く凹み。		△ S303	
		SK37	I B20	楕円形	C	46	35	18	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性普通。しまり普通～やや強。黄褐色土70%少混。			
		SK38	I B15	円形	C	45	43	17	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまりやや強。黄褐色土70%少混。0.2～2cm 層全体に混。			
		SK39	I B15	円形	A	46	46	22	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまりやや強。3cm 層。0.2cm 以下の砂混。近辺は黄褐色砂70%混。			
		SK40	I B20	円形	B	27	24	11	黒褐色 (10YR3/2) 44、粘性。しまり普通。0.5cm 以下砂層全体に混。			
		SK41	I B20	楕円形	C	26	19	14	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまり強。0.5～5cm 層混。			
		SK42	I B20	楕円形	B	46	41	24	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまりやや強。下部は黄褐色土40%砂混。			
		SK43	I B20	楕円形	E	76	62	39	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性普通。しまり強。0.2～3cm (最大8cm) 層混。黄褐色砂全体に混。			
		SK44	I B20	楕円形	A	53	37	23	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまり強。0.5～5cm 層混。			
		SK45	I B20	楕円形	C	28	20	8	黒褐色 (10YR3/2) 44、粘性。しまり普通。0.5cm 以下砂層全体に混。			
		SK46	I B20	楕円形	A	50	28	14	黒褐色 (10YR3/2) 44、粘性。しまり普通。0.5cm 以下砂層全体に混。			
		SK47	I B20	(楕円形)	C	72	-	15	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性。しまり普通。0.2～1cm 砂層混。			
		SK48	I B20	不整形円形	C	174	47	25	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性。しまり普通。0.2～1cm 砂層混。			
		SK49	I B15	不整形円形	C	115	42	30	黒褐色 (10YR3/1) 砂質44、砂礫層。0.2～4cm 礫多混。地中20%褐色。			
		SK50	I B15	楕円形	C	55	28	11	黒褐色 (10YR3/1) 砂質44、砂礫層。0.2～4cm (最大10cm) 層多混。地中10%褐色。			
		SK51	I K15	楕円形	C	41	32	22	1.黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまりやや強。 2.黒褐色 (10YR3/2) 砂質44、小礫少量。1と2の層は順相的。			
		SK52	I K15	円形	B	60	54	31	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまりやや強。小礫少混。			
		SK53	I K15	円形	A	35	33	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性普通。しまりやや強。3cm 円層多混。			
		SK54	I K15	楕円形	B	50	40	22	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまりやや強。2～3cm 円層少混。			
		SK55	I K15	楕円形	A	36	30	12	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまりやや強。2～3cm 円層少混。			
		SK56	I K15	円形	C	40	37	18	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまり強。黄褐色土70%少混。円層少混。			
		SK57	I K15 I L11	不整形円形	A	38	30	11	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまり強。黄褐色土70%少混。円層少混。			
		SK58	I L11	円形	B	19	16	27	黒褐色 (10YR3/1) 44、粘性あり。しまり強。黄褐色土70%少混。0.2cm 円層混。			
		SK59	I K15	楕円形	A	45	27	9	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまり強。0.2cm 黄褐色土70%少混。			
		SK60	I L11	円形	C	35	32	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまり強。2～3cm 円層多混。			
		SK61	I L11	円形	B	66	60	30	黒褐色 (10YR3/1) 砂混44、粘性あり。しまりやや強。円層少混。下部は砂礫多混。粘性ややあり。しまり普通。産卵的。			
第83図		SK62	I L16	円形	C	53	50	32	1.黒褐色土 (10YR3/2)、粘性ややあり。しまり強。黄褐色土粒 10%混。10cm 層混。2.灰黄褐色土 (10YR4/2)、粘性あり。しまり強。粗砂、小礫混。			平安
		SK63	I L16	楕円形	C	46	38	31	1.暗褐色土 (10YR3/3)、粘性ややあり。しまり強。2～5cm 層 5%混。2.暗褐色土 (10YR3/3)、粘性なし。しまり強。礫少混。			
		SK64	I L16	楕円形	C	56	40	22	1.暗褐色土 (10YR3/3)、粘性ややあり。しまり強。2～5cm 層 5%混。2.暗褐色土 (10YR3/3)、粘性なし。しまり強。5cm 層多混。			
		SK65	I K20	円形	B	45	40	28	黒褐色土 (10YR3/1)。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒 10%混。			
		SK66	I K20	楕円形	C	58	50	26	1.黄褐色土 (10YR3/1)、粘性なし。しまり強。黄褐色土粒 5%混。2.にぶい黄褐色土 (10YR3/3)、粘性なし。しまり強。5cm 層 5%混。			
		SK67	I L21	楕円形	C	47	35	23	黒色土 (10YR2/1)、粘性ややあり。しまり強。			
		SK68	I L11	円形	C	37	35	13	黒褐色土 (10YR2/2)。粘性なし。しまり強。5～8cm 層 20%混。			
		SK69	I K09	不整形円形	B	62	53	27	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。2cm 以下層混。			
		SK70	I K14	円形	C	40	38	14	黒褐色 (10YR3/1) 砂質44とにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質44の小70%の土混。粘性。しまり普通。2cm 以下層混。			
		SK71	I K14	不整形円形	C	45	42	12	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。2cm 以下層混。			
		SK72	I K14	円形	A	47	43	16	黒褐色 (10YR3/1) 砂質44とにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質44の小70%の土混。粘性。しまり普通。2cm 以下層混。			
		SK73	I K14	楕円形	C	78	50	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂混。粘性なし。しまり普通。0.2～1cm (最大3cm) 層混。			
		SK74	I K09	円形	C	45	42	14	黒褐色 (10YR3/4) 砂混。粘性なし。しまり普通。0.2～1cm (最大3cm) 層混。			
		SK75	I K14	円形	C	39	39	23	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。0.2～0.5cm 層混。			
		SK76	I K14	円形	C	44	40	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。0.2～0.5cm 層混。底部は黄褐色砂礫少混。			
		SK77	I K14	楕円形	C	67	45	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。0.2～1cm (最大3cm) 層混。			
		SK78	I K10	楕円形	B	35	27	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。0.2～0.5cm 層混。			
		SK79	I K15	円形	B	50	47	18	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。3～5cm 層混。			
		SK80	I K15	楕円形	B	43	34	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混44、粘性。しまり普通。0.2～0.5cm 層混。			
		SK81	I K15	楕円形	C	62	43	21	黒褐色土 (10YR3/1)。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。下部ほど黄褐色砂粒混。			
		SK82	I K14+15	楕円形	C	61	50	33	黄褐色土 (10YR3/1)。粘性。しまり普通。0.2～3cm 砂礫混。			
		SK83	I K15	楕円形	B	25	22	21	黄褐色土 (10YR3/1)。粘性。しまり普通。0.2～0.5cm 砂礫混。黄褐色土粒混。			
		SK84	I K15	楕円形	A	52	45	21	黄褐色土 (10YR3/1)。粘性ややあり。しまり普通。砂礫混。			
		SK85	I K15	円形	A	45	43	15	黒褐色土 (10YR3/1)。粘性。しまり普通。砂礫混。黄褐色土粒混。			

図面番号	写真 図説	遺構 番号	グリッド	形制・規模				埋土	出土 遺物 総数 No.	登録関係 No. 切らぬ	時代	備考
				平面形	前面 幅 (cm)	奥面 幅 (cm)	長さ (cm)					
		SK86	I K15	円形	A	43	42	15	黒褐色土 (10YR3/1)、粘性、しまり普通、砂礫混。			
		SK87	I K15	円形	C	35	33	15	黒褐色土 (10YR3/2) 砂質44、粘性、しまり普通、砂礫混。			
		SK88	I K23-24	円形	C	50	30	18	黒褐色土 (10YR3/1)、粘性、しまり普通、0.5-3cm 砂礫混。			
		SK89	I K24	円形	A	90	84	19	黒褐色土 (10YR3/2) 砂質44、粘性、しまり普通、0.2-2cm (最大5-8cm) 砂礫混。			
		SK90	I K25	楕円形	B	40	33	23	黒褐色土 (10YR3/1-3/2)、粘性、しまり普通、0.2-3cm 砂礫混。			
		SK91	I K25	円形	C	30	28	12	黒褐色土 (10YR3/2) 砂質44、粘性ややあり、しまり普通、砂礫混。			
		SK92	I K25	楕円形	A	52	44	14	黒褐色土 (10YR3/2) 44、粘性、しまり普通、砂礫混。			
		SK93	I K25	楕円形	C	36	30	12	黒褐色土 (10YR3/2) 44、粘性ややあり、しまり普通、黄褐色土粒混。			
		SK94	I K25	方形	A	27	25	20	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性ややあり、しまり普通。			
		SK95	I K25	楕円形	B	34	25	13	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性ややあり、しまり普通。			
		SK96	I K19	円形	C	34	30	22	黒褐色土 (10YR3/2)、粘性なし、しまり強、砂礫混。		▼SK95	
		SK97	I K19	楕円形	C	68	62	22	暗褐色土 (10YR3/3)、粘性なし、しまり普通、砂礫混。			
		SK98	I K14	円形	A	30	26	6	暗褐色土 (10YR3/4)、粘性なし、しまり普通、砂礫混。			
		SK99	I K14	円形	B	24	22	25	黒褐色土 (10YR2/3)、粘性あり、しまり強、細礫 5% 混。			
		SK100	I K14	楕円形	A	50	35	19	黒褐色土 (10YR2/3)、粘性ややなし、しまり強、細礫 5% 混。			
		SK101	I K19	楕円形	C	45	34	15	黒褐色土 (10YR2/3)、粘性あり、しまり強、細礫 10% 混。		▼SK95	
		SK102	I K19	円形	C	37	32	17	黒褐色土 (10YR2/3)、粘性あり、しまり強、細礫 10% 混。			
		SK103	I K19	円形	C	40	33	18	暗褐色土 (10YR3/3)、粘性ややあり、しまり強、5cm 礫 30% 混。			
		SK104	I K19-24	楕円形	C	40	34	13	暗褐色土 (10YR3/3)、粘性ややあり、しまり強、5cm 礫 30% 混。			
		SK105	I K19	円形	A	36	34	13	暗褐色土 (10YR3/3)、粘性ややあり、しまり強、礫少混。			
		SK106	I K26	円形	A	25	23	13	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト、粘性あり、しまり強。			
		SK107	I K20	円形	B	22	22	25	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト、粘性あり、しまり強。			
		SK108	I K20	楕円形	B	21	16	15	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト、粘性あり、しまり強。			
		SK109	I K20-25	楕円形	F	56	40	27	黒褐色土 (10YR2/2)、粘性なし、しまり普通、3cm 礫 5% 混。			
		SK110	I K20	楕円形	A	47	34	7	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト。		▼SK97	
		SK111	I K20	円形	A	30	28	14	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト、粘性あり、しまり強。			
		SK112	I K20	円形	C	36	35	14	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト。		▼SK97	
		SK113	I K20	楕円形	C	40	29	10	黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫混シルト、粘性あり、しまり強。		▼SK95	
		SK114	I K20	円形	C	40	40	23	黒褐色土 (10YR2/3)、粘性あり、しまり強、細礫 5% 混。			
		SK115	I F04-04	楕円形	C	103	68	45	黒色 (10YR2/1) 砂礫混シルト。		△SK112	
		SK116	I K20	楕円形	C	48	34	18	黒褐色土 (10YR2/3) 礫少混。		▼SK95	
		SK117	I K20	楕円形	C	60	35	12	黒褐色土 (10YR2/3) 礫少混。			
		SK118	I K15	円形	F	70	70	31	黒褐色土 (10YR2/3) 礫混混。			
		SK119	I K15	円形	C	54	48	17	黒褐色土 (10YR2/3) 細礫混混。			
		SK120	I K14	円形	B	41	38	39	黒褐色土 (10YR2/3) 細礫混混。			
		SK121	I K14	円形	B	24	26	25	黒褐色土 (10YR2/3) 細礫混混。			
		SK122	I K14-19	楕円形	C	168	94	34	黒褐色土 (10YR2/3) 砂質土、粘性ややあり、しまり強。		▼SK95	
		SK124	I F04	(円形)	C	60	(30)	36	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性、しまり普通、黄褐色土粒混。			
		SK125	I F04	円形	B	42	44	22	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性ややあり、しまり普通、黄褐色土粒混。			
		SK126	I F04	楕円形	B	42	27	27	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質土、粘性なし、しまり普通、黄褐色土粒混。		△SK134	
第5区画		SK127	I F04	楕円形	E	52	43	40	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性、しまり普通、黄褐色土粒混。	126	△SK134	第5区画
		SK128	I F04	不整形楕円形	F	56	48	24	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性、しまり普通、最大5cm 砂礫混。			
		SK129	I F04	楕円形	C	36	22	18	黒褐色土 (10YR2/1) 44、粘性あり、しまり普通。			
		SK130	I F04	楕円形	B	28	25	20	黒褐色土 (10YR3/1)、黒褐色土粒混砂質44、粘性、しまり普通、最大3cm 砂礫混。			
		SK131	I F04	円形	B	18	16	19	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性、しまり普通、黄褐色土粒混。			
		SK132	I F09	楕円形	C	115	94	17	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性、しまり普通、最大3cm 礫混。			
		SK133	I F09	長方形	C	104	80	14	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性ややあり、しまり普通、礫少混。			
		SK134	I F04	不整形楕円形	B	60	48	28	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質44、粘性、しまり普通、黄褐色土粒混。		▼SK128 ▼SK127	
		SK135	I A25	楕円形	C	23	18	11	暗褐色土 (10YR4/6) 44、粘性あり、しまり強、黄褐色土粒混。			
		SK136	I A25	楕円形	C	24	20	10	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性あり、しまり強、黄褐色土粒混。			
		SK137	I A25	楕円形	C	22	16	12	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性あり、しまり強、黄褐色土粒混。			
		SK138	I A25	楕円形	C	64	36	20	暗褐色土 (10YR4/6) 44、粘性あり、しまり普通、黄褐色土粒混。			
		SK139	I A25	楕円形	C	36	28	14	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性、しまり普通、黄～白色砂礫混。			
		SK140	I A25	楕円形	C	21	18	13	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性、しまり普通、黄～白色砂礫混。			
		SK141	I A25	楕円形	C	28	22	12	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性、しまり普通、黄～白色砂礫混。			
		SK142	I A25	円形	C	20	20	13	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性あり、しまり普通。			
		SK143	I A25	円形	C	16	16	15	黒褐色土 (10YR3/1) 44、粘性、しまり普通、黄～白色砂礫混。			

図版番号	写真図版	透視番号	グッド	形態・規模				埋土	出土遺物の種類	量産状況 ※記される	時代	備考
				平面形状	断面形状	全軸長 (cm)	最大口径 (cm)					
SK144	I A25	楕円形	A	50	40	9	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK145	I A25	不整形円形	B	31	26	19	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆。					
SK146	I F05	円形	C	20	18	10	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。褐色斑状赤褐色。					
SK147	I F05	円形	C	42	41	15	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK148	I F05	楕円形	C	48	36	9	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK149	I F05	楕円形	C	36	25	8	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK150	I A25	楕円形	C	50	26	18	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性普通、しまりやや強。底部に礫多量。					
SK151	I A25	楕円形	A	50	26	18	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性普通、しまりやや強。					
SK152	I A25	楕円形	B	25	16	10	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。砂礫多量。					
SK153	I B21	楕円形	C	38	26	13	黒褐色 (00YR3/2) 44、粘性なし、しまり弱。小礫多量。					
SK154	I B21	楕円形	C	40	32	13	黒褐色 (00YR3/2) シルト。粘性なし、しまり弱。小礫多量。					
SK155	I B21	楕円形	C	27	22	15	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK156	I B16	円形	B	14	14	13	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK157	I B21	円形	B	17	14	13	黒褐色 (00YR3/1) 44、礫少量。					
SK158	I B21	円形	B	20	20	10	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK159	I B21	円形	A	26	25	9	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK160	I G01	円形	C	22	23	36	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性ややあり、しまりやや強。					
SK161	I G01	楕円形	B	30	21	34	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。小礫混。黄褐色土被覆あり。				表土下赤土層片出土	
SK162	I G01	楕円形	D	70	60	24	黒褐色 (00YR3/1) 砂混44、粘性、しまり普通。					
SK163	I B21	円形	C	50	43	22	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、黄褐色土被覆あり。					
SK164	I G01	円形	C	30	25	30	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性ややあり、しまり普通。礫多量。					
SK165	I G01	円形	B	35	31	19	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。砂礫全体に混。黄褐色土被覆。					
SK166	I G01	円形	C	30	30	33	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性ややあり、しまり普通。					
SK167	I G01	円形	C	30	28	37	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性ややあり、しまり普通。円礫混。					
SK168	I G01	円形	B	26	24	23	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。0.5～1cm 礫混。					
SK169	I G01	円形	F	35	53	30	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。礫少量。					
SK170	I G06	楕円形	A	46	28	19	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。礫20混。					
SK171	I G06	楕円形	A	50	36	13	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。礫少量。					
SK172	I G06	楕円形	C	48	40	20	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。円礫多量。黄褐色土被覆。					
SK173	I G01	楕円形	A	50	17	13	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。円礫混。					
SK174	I G01	楕円形	F	60	36	22	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。円礫混。					
SK175	I G06	楕円形	E	70	54	30	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。円礫混。					
SK176	I B22	楕円形	C	58	20	14	黒褐色 (00YR3/2) 砂混44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆ありかつ全体に混。					
SK177	I B22	楕円形	C	62	30	20	黒褐色 (00YR3/2) 44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆ありかつ全体に混。					
SK178	I B22	円形	B	48	46	20	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。円礫全体に混。					
SK179	I B22	円形	B	30	30	18	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。円礫全体に混。					
SK180	I G02	円形	C	30	30	24	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆。円礫少量。					
SK181	I G02	楕円形	B	34	24	15	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆。円礫やや多量。					
SK182	I G02	円形	B	26	25	19	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆。円礫やや多量。					
SK183	I G07	楕円形	A	26	18	11	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。					
SK184	I G02	楕円形	C	32	23	31	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。下部は砂礫混。					
SK185	I G01	不整形円形	C	90	82	42	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。砂礫多量。				底部に灰・円石粒混跡あり	
SK186	I G02	狭長方形	C	84	73	29	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性、しまり普通。黄褐色土被覆ありかつ全体に混。					
SK187	I G07	円形	C	28	26	15	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。礫少量。					
SK188	I B22	楕円形	C	35	40	17	黒褐色～灰褐色 (00YR3/1～4/1) 44、粘性あり、しまり普通。					
SK189	I B22	円形	C	37	36	14	黒褐色～灰褐色 (00YR3/1～4/1) 44、粘性あり、しまり強。赤角礫混。					
SK190	I B22	円形	C	26	24	12	黒褐色 (00YR3/2) 砂混44、地山との界面層に類似。					
SK191	I G02	楕円形	C	65	34	21	黒褐色 (00YR3/1) 砂混44、粘性、しまり普通。礫少量。					
SK192	I G02	楕円形	E	80	36	22	1. に近い黄褐色土 (00YR2/5～3/5)、粘性あり、しまり普通。砂、小礫混。2. に近い黄褐色土 (00YR2/5～3/5)、粘性あり、しまり普通。					
SK193	I G02	円形	C	43	42	16	黒褐色 (00YR3/2) 44、粘性、しまり普通。小礫多量。					
SK194	I G02	楕円形	B	78	66	41	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性なし、しまり弱。(上部はやや堅くなる)				底部に灰・円石粒混跡あり	
SK195	I G02	楕円形	A	38	29	12	黒褐色 (00YR3/2) 砂混44。					
SK196	I B23 I G03	楕円形	C	40	36	33	黒褐色 (00YR3/1) 砂礫混44、粘性なし、しまり普通。砂礫多量。					
SK197	I G03	楕円形	C	32	22	43	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性あり、しまり普通。					
SK198	I G03	楕円形	C	50	36	16	黒褐色 (00YR3/2) 44、粘性、しまり普通。礫混混。					
SK199	I G03	不整形円形	E	45	38	21	黒褐色 (00YR3/1) 44、粘性、しまり普通。砂礫多量。					

図面番号	写真 図説	遺構 番号	グリッド	形番・規模				埋土	出土 遺物 総数 No.	書籍関係 の図号 切り取る	時代	備考
				平面形	断面 形	主軸長 (cm)	副軸長 (cm)					
		SK200	I G03	円形	C	35	31	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性なし。しまり普通。			
		SK201	I G02	楕円形	C	64	50	25	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。	△	SK202	
		SK202	I G02	楕円形	B	44	(26)	24	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。	▲	SK201	
		SK203	I G07	楕円形	B	28	30	14	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。			
		SK204	I G02	楕円形	B	24	30	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性や中あり。しまりや中混。礫多量。	△	SK205	
		SK205	I G02	楕円形	B	22	18	13	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性や中あり。しまりや中混。礫多量。	▲	SK204	
		SK206	I G03	円形	B	40	40	32	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。礫多量。	△	SK207	
		SK207	I G03	楕円形	C	(35)	28	12	黒褐色 (10YR3/1) 3-2 砂礫混(4)、粘性なし。しまり普通～やや中混。小礫～砂粒に混。	▲	SK206	
		SK208	I G07	楕円形	C	30	24	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。西側と底面に砂礫混。深色土?と黄褐色砂質土混。			
		SK209	I G07	楕円形	B	36	17	31	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。			
		SK210	I G07	楕円形	E	68	55	48	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。円～条状礫全体に混。黄褐色土?の?混。			底部西側円柱 柱礎跡小?
		SK211	I G08	円形	C	45	42	17	黒褐色 (10YR3/1) 土ブロック、赤褐色 (10YR6/6) エゴブロック、円礫の混合。粘性なし。しまり強。			
		SK212	I G04	楕円形	A	40	33	12	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性あり。しまりや中混。			
		SK213	I B24	楕円形	B	25	20	14	黒褐色 (10YR3/1) 砂混(4)、粘性。しまり普通。底部中央突出。			
		SK214	I G04	円形	A	30	27	13	黒褐色 (10YR3/1) 砂混(4)、粘性。しまり普通。黄褐色土?の?混。			発生?埋土類似
		SK215	I G04	楕円形	A	60	46	14	黒灰色 (10YR4/1) 砂礫多混(4)、粘性なし。しまり普通～弱。1cm 以下礫多量。			発生?埋土類似
新加 国	PL15	SK220	I G05	円形	B	52	52	30	黒灰色 (10YR7/1) 4-1 砂礫多混(4)、粘性なし。しまり普通～弱。1cm 以下 (最大3cm) 礫混。	127 128		発生 痕跡
		SK224	I B22	楕円形	C	65	52	28	黒褐色 (10YR3/2) 砂、粘性。しまり普通。砂粒混。	△	SK207	
		SK225	I G02	楕円形	B	50	40	54	上部:黒褐色 (10YR3/2) 砂、粘性。しまり普通。砂粒混。下部:黄褐色砂質土。粘性や中なし。しまりや中混。黄褐色土?の?混。	△	SK207	
		SK226	I A25	円形	B	32	28	12	黒褐色 (10YR3/1) 3-2(4)、粘性。しまり普通。周囲よりやや暗色。			
		SK227	I A25	不整形円形	F	74	50	20	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。黄褐色土?の?混。砂礫少混。			
		SK228	I A25	楕円形	C	56	21	28	黒褐色 (10YR3/1) 礫混(4)、粘性。しまり普通。3cm 円礫混。			
		SK229	I A25	楕円形	C	22	35	7	黒褐色 (10YR3/1) 礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 以下円礫混。			
		SK230	I F05	円形	B	30	27	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。3cm 以下円礫少混。			
		SK231	I F05	楕円形	B	41	32	19	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。3cm 以下円礫少混。			
新加 国		SK232	I F03	円形	C	70	68	32	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫少混。			平安
新加 国		SK233	I F03	円形	B	40	36	23	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫少混。			平安
		SK234	I F03	円形	B	36	36	16	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫少混。			平安?埋土類似
		SK235	I F03	不整形楕円形	B	50	28	25	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。灰黄褐色土?の?混。5cm 以下円礫少混。			
		SK236	I F03	楕円形	C	82	58	37	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫少混。砂礫或は土?の?混。砂礫?多混。			平安?埋土類似
新加 国		SK237	I F03	円形	B	63	62	27	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫少混。下半部にて?の?全体に混。			平安
		SK238	I F03	円形	B	36	30	18	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。			平安?埋土類似
		SK239	I F03-08	楕円形	C	98	90	54	上半部:黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。5cm 円礫混。下半部:灰黄褐色 (10YR4/0) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。黒褐色土?の?多混。5cm 円礫混。			平安?埋土類似
		SK241	I A14	楕円形	C	76	68	18	黒褐色 (10YR3/1) 砂混(4)、粘性や中あり。しまり普通。3cm 円礫混。			
		SK242	I A19	円形	C	32	30	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂混(4)、粘性や中あり。しまり普通。灰黄褐色土?の?多混。円礫混。			
		SK243	I A15	円形	C	42	40	21	黒褐色 (10YR3/1) 砂混(4)、粘性や中あり。しまり普通。円礫、灰黄褐色土?の?多混。			
		SK244	I A20	円形	A	41	40	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性なし。しまり弱。黄褐色土?の?多混。			
		SK245	I A20	楕円形	C	36	30	17	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性なし。しまり弱。黄褐色土?の?多混。			
		SK246	I A20	楕円形	C	50	33	19	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。に?い黄褐色土?混。			
		SK247	I A15	円形	C	56	56	25	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。3cm 以下円礫混。に?い黄褐色土?混。			
		SK248	I A15	楕円形	C	50	28	19	黒灰色 (10YR4/1) 砂礫混(4)、粘性普通～なし。しまり普通～弱。3cm 以下円礫多混。			
		SK249	I A15	楕円形	C	42	38	15	黒褐色 (10YR3/1) 砂礫混(4)、粘性。しまり普通。に?い黄褐色土?混。			
		SK250	I A15 I B11	楕円形	C	54	47	18	黒褐色 (10YR3/2) 砂混(4)、粘性。しまり普通。3cm 以下円礫少混。に?い黄褐色土?混。			
		SK251	I B16	円形	C	34	34	13	黒灰色 (10YR4/1) 砂、粘性。しまり普通。に?い黄褐色土?混全体に混。			
		SK252	I A19	円形	A	42	38	16	黒褐色 (10YR3/1) 砂質土(4)、粘性。しまり普通。円礫少混。			
		SK253	I A19	楕円形	B	96	60	37	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。3～5cm 以下円礫～條状礫多混。			
		SK254	I A14	(楕円形)	C	253	56	21	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。1cm 以下小礫多混。			
		SK255	I A19	楕円形	C	78	62	21	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。1cm 以下小礫多混。			
		SK256	I A19	楕円形	C	79	60	33	黒褐色 (10YR3/1) 砂、粘性。しまり普通。3～5cm (最大5cm) 円礫～條状礫多混。			
		SK257	I F10	楕円形	B	40	24	23	黒褐色土? (10YR2/2)、粘性や中あり。しまり普通。黄褐色土? 3% 混。3cm 礫少混。			
		SK258	I F10	楕円形	C	50	42	18	黒褐色土? (10YR3/1)、粘性なし。しまり強。黄褐色土? 5% 混。5cm 礫少混に混。			

図版番号	写真 図号	透視 番号	グリッド	形態・規模				埋土	出土 遺物 種類 No.	重要度 No. ★印される	時代	備考
				平面形	断面 形	基軸長 (cm)	高さ (cm)					
		SK259	F10	円形	B	22	22	20	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒3%混。			
		SK260	F10	楕円形	C	40	30	17	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒3%混。3cm 縦線微混。			
第53図		SK261	F10 IG66	楕円形	C	49	34	17	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒3%混。3cm 縦線微混。	129		発生地所
		SK262	IG66	不整形円形	E	60	55	21	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり強。3-5cm 縦線10%混。			
		SK263	IG66	楕円形	C	44	38	16	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり強。3-5cm 縦線10%混。			
		SK264	IG66	楕円形	B	58	52	35	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒3%混。3cm 縦線微混。			
		SK265	IG66	楕円形	A	41	24	15	黒褐色土(10YR2-2)、粘性ややあり。しまり強。3-5cm 縦線10%混。			
		SK266	IG66-07	楕円形	A	40	30	20	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
		SK267	IG67	円形	B	18	16	11	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
		SK268	IG67	円形	B	24	22	14	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
		SK269	IG66-07	楕円形	D	70	36	17	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり強。黄褐色土粒5%混。			
		SK270	IG67	円形	A	20	20	10	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
		SK271	IG66-07	楕円形	C	40	31	12	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
		SK272	IG67	楕円形	C	40	26	12	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			
	SK273	IG67	不整形楕円形	A	46	30	12	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK274	IG66	不整形楕円形	A	54	42	8	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK275	IG66	円形	A	32	30	12	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK276	IG67	円形	C	20	19	15	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK277	IG67	円形	C	21	23	17	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK278	IG67	楕円形	B	30	17	15	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK279	IG67-12	不整形円形	C	40	38	15	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。			底面2ヶ所、内 み2ヶ所あり	
	SK280	IG67	円形	A	72	79	16	黒色土(10YR2-1)、粘性なし。しまり強。				
	SK281	IG12	不整形円形	A	24	20	10	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK282	IG67	不整形楕円形	A	74	62	17	黒色土(10YR2-1)、粘性なし。しまり強。			底面2ヶ所、内 み2ヶ所あり	
	SK283	IG67	楕円形	C	54	44	29	暗褐色土(10YR3-0)、砂混、粘性なし。しまり普通。3cm 縦線10%混。				
	SK284	IG67-12	楕円形	B	50	44	28	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり普通。				
	SK285	IG68-13	不整形楕円形	F	(175)	118	68	黒褐色土(10YR3-1)、粘性なし。しまり強。3cm 縦線微混。	SK286(非 目不明)			
	SK286	IG68-13	楕円形	C	90	(62)	41	黒褐色土(10YR2-3)砂混、粘性なし。しまり普通。	SK285(非 目不明)		発生地所 黒土層状	
第54図	PL15	SK287	IG69	楕円形	C	128	96	63	黒褐色土(10YR2-2)、粘性なし。しまり普通。3cm 縦線微混。	130		発生地所
		SK288	IG69	楕円形	A	88	79	19	黒褐色土(10YR2-2)、粘性なし。しまり普通。3cm 縦線微混。			発生地所 黒土層状
		SK289	IG69	楕円形	C	102	68	21	黒褐色土(10YR3-2)、粘性なし。しまり強。3cm 縦線10%混。			発生地所 黒土層状
		SK290	IG69-10	円形	C	(78)	75	23	黒褐色土(10YR3-2)、粘性なし。しまり普通。3cm 縦線微混。	△SK291		発生地所 黒土層状
		SK291	IG10	不整形楕円形	F	(132)	94	56	黒褐色土(10YR3-2)、粘性なし。しまり普通。1-3cm 縦線20%混。	▼SK292 ▼SK293		発生地所 黒土層状
		SK292	IG10	楕円形	C	70	58	20	黒褐色土(10YR3-2)、粘性なし。しまり普通。3cm 縦線微混。	△SK294		発生地所 黒土層状
		SK293	IG11	楕円形	A	42	36	15	黒色(10YR2-1)砂混4%、粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒3%混。			
		SK294	IG11	円形	C	26	21	13	黒色(10YR2-1)砂混4%、粘性なし。しまり普通。黄褐色土粒3%混。砂少混。			
		SK295	IG11	円形	C	30	30	14	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。			
		SK296	IG11	不整形楕円形	A	46	26	16	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。			
		SK297	IG66-11	不整形楕円形	F	55	30	20	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒3%混。			
		SK298	IG11	円形	C	37	34	20	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。			
SK299	IG11-12	楕円形	C	56	48	17	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。	△SK300				
SK300	IG11-12	楕円形	A	(42)	28	11	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。	▼SK299				
SK301	IG66-07	円形	A	20	20	12	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK302	IG66-07	円形	A	15	13	12	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK303	IG12	楕円形	C	41	20	19	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK304	IG12	楕円形	E	63	48	33	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK305	IG12	円形	B	28	26	20	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK306	IG12	円形	B	21	20	15	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。砂少混。					
SK307	IG12	楕円形	C	60	36	24	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
SK308	IG13	楕円形	A	70	58	11	暗褐色土(10YR3-3)、粘性ややあり。しまり普通。黄褐色土粒2%混。					
第54図	PL15	SD06	IG03	長楕円形	C	166	75	44	暗褐色土(10YR3-0)砂混少混。粘性なし。しまり強。1-2cm 縦線10%混。黄褐色土粒2%混。	△SK309		底面1ヶ所 凸状
		BD2 IG02	長楕円形	C	228	92	52	暗褐色土(10YR3-1)粘性ややあり。しまり強。黄褐色土粒3%混。3cm 砂少混。	▼SK310 ▼SK311		底面1ヶ所 凸状	
第54図	PL15	SD07	BD2	長楕円形	D	187	60	33	黒褐色土(10YR3-1)粘性ややあり。しまり強。黄褐色土粒3%混。3cm 砂少混。土層縦線多混。	△SK312		底面1ヶ所 凸状
第54図	PL15	SD09	IA25	長楕円形	F	280	120	55	暗褐色土(10YR3-1)砂混少混。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒5%混。土層に3-7cm 縦線多混。	△SK313		底面1ヶ所 凸状
第54図	PL15	SD10	IF05	長楕円形	F	263	90	35	暗褐色土(10YR3-1)砂混少混。粘性なし。しまり強。黄褐色土粒5%混。砂少混。	▼SK314		底面1ヶ所 凸状

第16表 縄文土器一覧

遺跡番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器片数	重量 (g)	法量		保存部位	器種	時期	出土位置 (遺跡内、埋没品、土器名)	外底面		内底面	土質	構成	外底面型 (備文改訂)	内底面型	備考
							保存	位置					外底面	内底面						
第25182	丸底土器	19.30	279	1c	1	5.0	-	-	底部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S202-03	10Y22-2黄褐色 褐色	10Y22-2黄褐色	1	灰	北朝2本地方向	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25183	丸底土器	19.30	283	1c	1	20.9	-	-	底部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S202下層	3Y385.6明赤褐色 褐色	3Y385.6明赤褐色	2	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25184	丸底土器	19.30	343	1c	1	8.8	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S202 1層	2Y326.412.赤い 褐色	2Y326.412.赤い	1	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25185	丸底土器	19.30	296	2b	1	28.3	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S202N.9	3Y355.412.赤い 褐色	3Y355.412.赤い	1	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25186	丸底土器	19.30	377	2c	1	68.1	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 日置	3Y365.6明赤褐色 褐色	3Y365.6明赤褐色	2mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25187	丸底土器	19.30	284	1c	5	197.2	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S203 1層	3Y387.412.赤い 褐色	3Y387.412.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25188	丸底土器	19.30	285	1a	2	23.8	-	-	底部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S203	2Y385.412.赤い 褐色	2Y385.412.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25189	丸底土器	19.30	380	1c	1	31.0	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 狭	2Y387.2明褐色 褐色	2Y387.2明褐色	白色粒子・石炭・2 mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25190	丸底土器	19.30	298	2b	1	6.8	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S204-北東	3Y385.6明赤褐色 褐色	3Y385.6明赤褐色	2 - 3mm厚さ・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25191	丸底土器	19.30	342	1c	1	10.5	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 日置	3Y385.412.赤い 褐色	3Y385.412.赤い	白色粒子・石炭 2mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25192	丸底土器	19.30	311	1c	1	16.2	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S217東2層	3Y385.6明赤褐色 褐色	3Y385.6明赤褐色	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25193	丸底土器	19.30	299	2a	1	8.1	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S204	10Y277(4)2.赤い 褐色	10Y277(4)2.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25194	丸底土器	19.30	287	1a	4	44.7	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S203	3Y385.6明赤褐色 褐色	3Y385.6明赤褐色	白色粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25195	丸底土器	19.30	380	2a	1	67.9	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S203	10Y352(1)2.赤い 褐色	10Y352(1)2.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭・2 - 3mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25196	丸底土器	19.30	339	1c	1	68.1	22.9	-	接合部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 日置	3Y385.6明赤褐色 褐色	3Y385.6明赤褐色	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25197	丸底土器	19.30	031	1c	1	8.4	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S202-西	3Y385.412.赤い 褐色	3Y385.412.赤い	白色粒子・石炭 4mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25198	丸底土器	19.30	286	1a	2	18.8	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S203	3Y385.412.赤い 褐色	3Y385.412.赤い	白色粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25199	丸底土器	19.30	287	2a	1	6.0	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S204北東	3Y386.412.赤い 褐色	3Y386.412.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25200	丸底土器	19.30	305.1	1c	1	9.3	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S215南	3Y385.412.赤い 褐色	3Y385.412.赤い	白色粒子・石炭・ 2mm厚さ	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25201	丸底土器	19.30	305.2	1c	1	7.9	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S215南	3Y386.6赤褐色 褐色	3Y386.6赤褐色	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25202	丸底土器	19.30	306	1c	1	10.2	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 S215N.6	10Y277(2)2.赤い 褐色	10Y277(2)2.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25203	丸底土器	19.30	344.2	1c	1	11.7	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 日置	2Y385.412.赤い 褐色	2Y385.412.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25204	丸底土器	19.30	344.1	1c	2	18.4	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 日置	3Y385.412.赤い 褐色	3Y385.412.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	
第25205	丸底土器	19.30	345	1c	1	13.7	-	-	上部	深鉢	縄文 前期後半	遺跡外 狭	10Y277(4)2.赤い 褐色	10Y277(4)2.赤い	白色粒子・赤褐色 粒子・石炭	灰	赤部	ナギノ・葦尻	編み谷心	

第17表 発生土器一覽

遺跡番号	発見 図説	管理 番号	出土位置		時期	種類	結構	保存 部位	保存 率	口徑 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	最大径 (cm)	内径	内底径	外底径	外周色調	胎土	胎色	外底調整 (陶文表)	内底調整	形状	用途	備考	
			層位	層高																					
第24181	Pl.5	00	1c	S402	S402.1c表	赤土 土器	土器部 一部份	10%	16.4	18.88	47.66	172.25	253.84	107.81	107.81	107.81	白色胎子少、赤褐色胎子多	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27182	Pl.5	02	2c	S001	No.1	赤土 土器	土器部 一部份	90%	12.3	4.2	23.00	-	104.6	104.6	104.6	104.6	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27183	Pl.30	00	2c	S001	S01	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	-	14.0	-	107.97	107.97	107.97	107.97	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27184	Pl.30	06	2c	S001	No.4	赤土 土器	土器部 一部份	10%	20.8	3.1	34.1	-	107.07	107.07	107.07	107.07	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27185	Pl.30	09	2c	S001	未	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	-	10.3	-	107.84	107.84	107.84	107.84	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27186	Pl.30	03	2c	S002	北東部	赤土 土器	土器部 一部份	<23.0>	-	-	35.1	-	107.62	107.62	107.62	107.62	白色胎子少、赤褐色胎子多	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第27187	Pl.30	01	2c	S001	南東	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	-	30.3	-	75.93	75.93	75.93	75.93	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301842	Pl.31	02	2c	S002	No.S40.10.北西	赤土 土器	土器部 一部份	10%	22.8	11.4	182.2	-	104.8	104.8	104.8	104.8	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301843	Pl.31	08	2c	S002	No.8.北東	赤土 土器	土器部 一部份	10%	20.8	4.0	32.9	-	238.4	238.4	238.4	238.4	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301844	Pl.30	02	2c	S002	No.2.北西	赤土 土器	土器部 一部份	40%	16.6	10.0	28.07	-	104.4	104.4	104.4	104.4	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301845	Pl.30	08	2c	S002	No.5	赤土 土器	土器部 一部份	10%	-	3.7	26.5	-	104.8	104.8	104.8	104.8	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301846	Pl.30	07	2c	S002	No.8	赤土 土器	土器部 一部份	10%	-	9.8	48.8	68.5	72.84	72.84	72.84	72.84	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301847	Pl.30	09	2c	S002	No.7	赤土 土器	土器部 一部份	10%	-	7.3	136.6	-	257.85	257.85	257.85	257.85	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301848	Pl.31	09	2c	S002	No.S40.6.北西	赤土 土器	土器部 一部份	10%	24.4	9.7	128.7	-	104.4	104.4	104.4	104.4	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301849	Pl.31	09	2c	S002	No.1	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	27.2	-	-	238.3	238.3	238.3	238.3	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301850	Pl.31	06	2c	S002	南東	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	74.5	-	-	253.85	253.85	253.85	253.85	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301851	Pl.30	04	2c	S002	No.A407.2a.9 No.A3.南西	赤土 土器	土器部 一部份	20%	22.6	6.6	42.1	-	257.97	257.97	257.97	257.97	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301852	Pl.6	03	2c	S002	No.11	赤土 土器	土器部 一部份	30%	22.6	16.1	63.00	-	238.4	238.4	238.4	238.4	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301853	Pl.31	03	2c	S002	No.33.北東	赤土 土器	土器部 一部份	30%	-	22.0	104.53	<32.2>	107.62	107.62	107.62	107.62	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		
第301854	Pl.31	08	2c	S002	No.8	赤土 土器	土器部 一部份	10%	-	5.6	11.8	62.0	-	104.4	104.4	104.4	104.4	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ	
第301855	Pl.31	02	2c	S002	No.8	赤土 土器	土器部 一部份	-	-	-	8.5	-	257.96	257.96	257.96	257.96	白色胎子多、赤褐色胎子少	赤褐色	口縁部ハナハナ、底文ハナハナ	口縁部ナシ、側部ナシ	片	内外側	口縁部ハナハナ		

図説番号	寄附機関	寄附番号	出土位置		時期	種別	形状	保存部位	保存率	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	断面 最大径 (cm)	外面径	内面径	内面形状	胎土	組成	外面装文 (陶文表化)	内面装文	形状	備考
			区域	遺構・基壇 (埋蔵物・表出物)																			
昭301036	PC11-001	2c-S102	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<27.0>	25.9x4.3	10.0x2.4	2.10	31.0	25.9x4.3	2.0x0.4	2.0x0.4	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭301037	PC11-002	2c-S102	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<27.0>	25.9x4.3	10.0x2.4	1.64	16.4	25.9x4.3	2.0x0.4	2.0x0.4	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭301038	PC11-003	2c-S102	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<12.0>	11.3	6.3	<11.6>	6.3	11.3	10.0x2.4	2.0x0.4	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭301039	PC11-002	2c-S102	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<26.6>	22.2	10.7	7.2	10.7	22.2	2.0x0.4	2.0x0.4	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭301040	PC11-001	2c-S102	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	90%	5.7	4.2	3.0	6.0	5.9	4.2	2.0x0.4	2.0x0.4	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331043	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	12.6	6.9	1.0	1.0	1.0	6.9	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331044	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<13.8>	7.3	2.6	2.6	2.6	7.3	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331045	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	20%	<10.2>	10.7	2.2	2.2	2.2	10.7	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331046	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331047	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	12.3	13.3	13.3	13.3	13.3	13.3	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331048	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	<17.8>	9.0	1.8	1.8	1.8	9.0	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331049	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	18.4	14.5	5.2	5.2	5.2	14.5	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331051	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	20%	12.2	10.0	10.0	10.0	10.0	10.0	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331052	PC11-002	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	26.0	26.0	26.0	26.0	26.0	26.0	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331053	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	11.5	20.4	20.4	20.4	20.4	20.4	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331054	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	26.8	26.8	26.8	26.8	26.8	26.8	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	
昭331055	PC11-001	1b-S103	北東	北東	陶土	甕	口縁部 一部破	10%	11.6	6.8	7.3	7.3	7.3	7.3	1.0x4.6	1.0x4.6	赤褐色粘土・白色顔料を施した土質	黒土	上部縁部に赤文、下部縁部に赤文、ハタギ模様	縁ミヤギ	縁ミヤギ	縁ミヤギ	



図説番号	写真番号	図説番号	出土位置			種類	材料	形状	重量(g)	最大径(mm)	外周径	内周径	軸土	結成	外周調整	内周調整	形状	備考
			種別・埋藏層・基点(方眼)	形式	用途													
第331876	PL33 043	1b-S103	No.5	底土	10%	底面	底面	28.1	<18>	10787(3)に多い	10787(3)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	成面土子	ハチノナテ	ハチノナテ		
第331877	PL33 042	1b-S103	No.36	底土	10%	底面	底面	72.3	5.0	10786(3)に多い	72086(4)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	ハチノナテ・磨孔土子・工具によるナテ	ナテ、ハチノナテ	ナテ、ハチノナテ	高山上段部の下に位置する	
第331878	PL33 047	1b-S103	No.1	底土	10%	底面	底面	280.0	9.7	75925(6)9褐色磁土	10787(3)に多い	3mm厚、褐色磁土子	具	ハチノナテ	磨孔	ハチノナテ		
第341879	PL31 001	1b-S103	No.2No.20 No.22No.24 No.25No.33 No.34No.35 No.36No.42S103 南土S13	底土	60%	口縁部	口縁部	3264.0	8.8	1084(6)赤褐色 75928(6)褐色	1084(6)赤褐色 75928(6)褐色	赤褐色磁土子、白色磁土子	具	口縁部ハチノナテ	口縁部ハチノナテ	口縁部ハチノナテ	口縁部ハチノナテ	
第341880	PL31 005	1b-S103	No.4No.5No.34 No.43No.49	底土	10%	口縁部	口縁部	164.8	9.4	75925(6)赤褐色磁土	75925(6)赤褐色磁土	白色磁土子・赤褐色磁土子	具	磨孔状文・磨孔	ハチノナテ	ハチノナテ	磨孔状文・磨孔	
第341881	PL31 004	1b-S103	No.2No.3No.11 No.32No.6(3)	底土	20%	口縁部	口縁部	320.0	14.0	75928(6)褐色	75928(6)褐色	白色磁土子・赤褐色磁土子	具	ハチノナテ	ナテ	ナテ		
第341882	PL33 006	1b-S103	No.31	底土	-	口縁部	口縁部	94.6	-	10787(4)に多い	75925(4)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	ハチノナテ	ハチノナテ	ハチノナテ		
第341883	PL31 003	1b-S103	No.4No.6No.20	底土	70%	口縁部	口縁部	81.4	4.2	75928(6)に多い	72086(4)に多い	赤褐色磁土子、白色磁土子	具	口縁部磨孔	ハチノナテ	ハチノナテ	磨孔状文	
第351887	PL33 007	2a-S104	No.1北土S104	底土	10%	口縁部	口縁部	86.8	4.4	1084(6)赤褐色	1084(6)赤褐色	白磁土子	具	口縁部磨孔	ハチノナテ	ハチノナテ	口縁部磨孔	
第351888	PL3 002	2a-S104	No.2No.3No.11 No.32No.6(3)	底土	20%	口縁部	口縁部	122.3	17.3	1084(6)赤褐色	10786(4)に多い	赤褐色磁土子・白色磁土子	具	磨孔	ハチノナテ	ハチノナテ	磨孔	
第351889	PL33 005	2a-S104	P62No.1	底土	10%	底面	底面	170.7	8.2	1084(6)赤褐色	10787(3)に多い	白磁土子・赤褐色磁土子	具	磨孔	磨孔	磨孔		
第351890	PL33 004	2a-S104	南土	底土	10%	口縁部	口縁部	15.8	-	75925(6)赤褐色磁土	75925(6)赤褐色磁土	赤褐色磁土子・白色磁土子	具	磨孔状文・磨孔	ハチノナテ	ハチノナテ	磨孔状文・磨孔	
第351891	PL33 006	2a-S104	北土	底土	10%	口縁部	口縁部	28	-	75928(6)に多い	75928(6)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	磨孔状文	ナテ	ナテ	磨孔状文	
第371894	PL34 009	2a-S109	No.32	底土	10%	口縁部	口縁部	29.9	6.0	10786(3)に多い	10786(3)に多い	白磁土子・赤褐色磁土子	具	ハチノナテ	ハチノナテ	ハチノナテ		
第371895	PL34 010	2a-S109	北土	底土	10%	口縁部	口縁部	28.8	4.0	1084(6)赤褐色	75928(6)に多い	白磁土子・赤褐色磁土子	具	磨孔	ナテ	ナテ	磨孔	
第371896	PL34 011	2a-S109	No.9	底土	20%	口縁部	口縁部	280.9	10.0	10786(3)赤褐色	10786(3)赤褐色	白磁土子・赤褐色磁土子	具	口縁部磨孔	磨孔	磨孔		
第371897	PL34 007	2a-S109	北土	底土	10%	口縁部	口縁部	5.6	6.0	10786(3)に多い	10786(3)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	口縁部磨孔	ナテ	ナテ	口縁部磨孔	
第371898	PL34 008	2a-S109	南土北土	底土	10%	口縁部	口縁部	94.6	9.0	75928(6)に多い	75928(6)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	口縁部磨孔	ナテ	ナテ	口縁部磨孔	
第371899	PL34 001	2a-S109	南土	底土	10%	口縁部	口縁部	86.8	7.0	1084(6)赤褐色	10787(3)に多い	白磁土子・褐色磁土子	具	口縁部磨孔	ナテ	ナテ	口縁部磨孔	

設備番号	等価設備	管理番号	設置位置	器具・設備名	設置台数	流量				内径	材質	備考				
						口径 (mm)	流量 (L/min)	流量 最大値 (GPM)	流速 (cm)							
第37回100	PL24	00	2a	S109	0	-	(17.1)	369.1	<32>	75785.3に多い	10787.4に多い	白磁磁子・黒磁磁子 少・赤磁磁子・黒 少・赤磁磁子	具	ハテ→ハテ 朝日ハテ、朝日ハ テ、朝日ハテ少	内径調整 可能	
第37回101	PL24	00	2a	S109	0	-	-	123	-	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・石黒・黒 少、赤磁磁子	具	ハテ→朝日朝日ハ テ、ハテ→ハテ少	内径調整 可能	
第37回102	PL24	04	2a	S109	0	-	-	60	-	75785.3に多い	75785.3に多い	白磁磁子・黒磁磁子 少、赤磁磁子	具	ハテ→ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ、朝日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第37回103	PL24	00	2a	S109	0	-	-	108	-	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・石黒・黒 少、赤磁磁子	具	ハテ→ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ、朝日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第37回104	PL24	00	2a	S109	0	-	-	65	-	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・石黒・黒 少、赤磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第37回105	PL24	00	2a	S109	0	-	-	101	-	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・黒磁磁子 少、赤磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第39回106	PL24	07	1c	S106	0	-	-	268	-	75785.6に多い	75785.6に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、石黒色 磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第39回107	PL24	07	1c	S106	0	-	-	250	-	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第40回108	PL10	06	1c	S107	No.2	0	5.2	69	215.5	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→ハテ、朝日 朝日ハテ、朝日朝日 ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回109	PL24	06	1c	S107	0	-	-	148	-	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、石黒・黒 少、赤磁磁子	具	ハテ→ハテ、朝日 朝日ハテ、朝日朝日 ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回110	PL10	08	1c	S107	No.2	0	6.4	125.5	542.0	75785.4に多い	75787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回111	PL24	07	1c	S107	0	-	-	67	67.5	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、石黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回112	PL24	07	1c	S107	0	-	-	118	118	75786.6に多い	10787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回113	PL24	07	1c	S107	No.1	0	4.0	148	284	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回114	PL24	07	1c	S107	0	-	-	26	-	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回115	PL24	08	1c	S107	0	-	-	278	-	75785.4に多い	75785.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回116	PL24	08	1c	S107	0	-	-	215	-	75786.4に多い	75786.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回117	PL24	04	1c	S107	2c	2	-	95	-	75786.4に多い	75786.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第40回118	PL24	02	1c	S107	S107	0	-	303	-	75786.4に多い	75786.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ、朝日朝 日ハテ、朝日朝日ハ テ少	内径調整 可能	
第40回119	PL24	03	1c	S107	2c	2	-	24.9	-	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第42回120	PL12	26	1c	S108	1c	1	-	596.1	-	75785.6に多い	75785.6に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子	具	ハテ→朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少	内径調整 可能	
第46回121	PL13	02	2a	S102	S102	2a	-	14.0	62.1	10787.4に多い	10787.4に多い	白磁磁子・赤黒色 磁磁子少、赤黒色 磁磁子	具	朝日朝日ハテ、朝 日朝日ハテ少、朝日 朝日ハテ、朝日朝日 ハテ少	内径調整 可能	



図録番号	学名 学名	整理 番号	出土位置		時期	種別	保存 部位	保存 率	口径 (cm)	直径 (cm)	重量 (g)	断面 最大径 (cm)	通量		外周曲線	内周曲線	胎土	胎文	外周図説 (簡文表)	内周図説	形状	備考	
			区域	層位・ 遺構名・ 出土層位									口径 (cm)	重量 (g)									
第57図141	PL28	347	1c	遺構95	目埴	胎土上部	胎土	-	-	8.1	69.5	10796/3に 属色	10796/3に 属色	72976/4に 属色	72976/4に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略文字・簡略文、 ミヤキ・ナギ、赤胎 灰	ハタ→ミヤキ?赤 灰	ハタ	ハタ	ハタ	
第57図142	PL28	350	1c	遺構95	目埴	胎土上部	胎土	<19.5>	-	3.9	43.2	75395/2に 属色	75395/2に 属色	72976/3に 属色	72976/3に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ→ミヤキ?赤 灰	ハタ	ハタ		
第57図143	PL28	352	1a	S103	目埴	胎土上部	胎土	-	-	-	24.5	10797/4に 属色	10797/4に 属色	10797/4に 属色	10797/4に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ→ミヤキ?赤 灰	ハタ	ハタ		
第57図144	PL28	352	1c	遺構95	目埴	胎土上部	胎土	-	-	-	75.7	72976/4に 属色	72976/4に 属色	72976/4に 属色	72976/4に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ	ハタ	ハタ		
第57図145	PL28	361	2a	遺構95	表	胎土上部	胎土	49%	<12.4>	-	182.2	<12.4>	10797/2に 属色	10797/2に 属色	10797/2に 属色	10797/2に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ	ハタ	ハタ	
第57図146	PL28	362	2a	遺構95	表	胎土上部	胎土	19%	-	8.6	65.3	75396/4に 属色	10797/3に 属色	10797/3に 属色	10797/3に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ	ハタ	ハタ	1.60と同じ 形状	
第57図147	PL28	336	1a	遺構95	目埴	胎土上部	胎土	19%	-	3.7	63.3	72976/4に 属色	72976/4に 属色	72976/4に 属色	72976/4に 属色	白胎灰子・赤褐色 子・右裏・赤胎 灰	具	簡略漢文・簡略 漢文・簡略漢文、 赤胎灰	ハタ	ハタ	ハタ	1.65と同じ 形状	

第 18 表 古墳・奈良・平安・中世土器一覽

遺跡番号	発掘調査年度	発掘調査番号	出土位置		年代	種類	保存部位	保存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	内径	外径	内高	外高	胎土	施文	内装	外装	内装図	外装図	備考
			東経	北緯																			
第 59 Ⅷ 148	1929	249	1a	S001	AS001	土師器	胴部	10%	<13.1>	-	4.0	166	-	25786.8 褐色	25786.8 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 149	1929	250	1a	S001	AS001	土師器	胴部	10%	<12.0>	-	3.7	258	-	25785.4 褐色	25785.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 150	1929	256	1a	S001	AS001 1層	土師器	胴部	20%	-	1.4	9.7	-	36.0 褐色	36.0 褐色	白磁子・赤褐色胎子	白磁子・赤褐色胎子	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部へハダキ	
第 59 Ⅷ 151	1929	256	1a	S001	AS001 2層	土師器	胴部	20%	-	3.9	28.4	-	25784.4 褐色	25784.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子	白磁子・赤褐色胎子	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部へハダキ	
第 59 Ⅷ 152	1929	253	1a	S001	No.9	土師器	胴部	10%	-	4.7	63.1	-	25787.4 褐色	25787.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部へハダキ	
第 59 Ⅷ 153	1929	255	1a	S001	No.11	土師器	胴部	20%	-	6.3	63.8	-	25786.4 褐色	25786.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部へハダキ	
第 59 Ⅷ 154	1929	251	1a	S001	No.2	土師器	胴部	40%	-	12.8	84.1	241.6	-	25787.4 褐色	25787.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 155	1929	252	1a	S001	No.8	土師器	胴部	30%	-	42.0	83	180.1	-	25784.4 褐色	25784.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 156	1929	254	1a	S001	No.7	土師器	胴部	20%	-	42.2	72.3	112.3	-	10787.3 褐色	10787.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 157	1929	256	1a	S001	No.12	土師器	胴部	60%	-	3.2	29.2	7.6	-	10787.2 褐色	10787.2 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 158	1929	300	1a	S001	No.10	土師器	胴部	90%	-	2.3	82	263.6	6.8	25787.3 褐色	25787.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 159	1929	259	1a	S001	No.13	土師器	胴部	30%	-	3.0	61.1	86.8	9.4	10786.3 褐色	10786.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 160	1929	257	1a	S001	AS001 1a 直壁	土師器	口縁部	10%	<18.0>	-	3.9	66.4	-	25785.3 褐色	25785.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 161	1929	262	1a	S001	No.6	土師器	胴部	10%	<15.4>	-	4.3	82.9	<8.4>	10786.2 褐色	10786.2 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 162	1929	261	1a	S001	No.3	土師器	胴部	10%	<2.2>	3.3	147.1	-	10786.2 褐色	10786.2 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦		
第 59 Ⅷ 163	1929	261	1c	S001	1c S001	土師器	胴部	10%	-	5.8	34.0	180.0	-	10787.3 褐色	10787.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 164	1929	265	1a	S001	1a S001	土師器	胴部	10%	-	-	39.3	-	-	10785.3 褐色	10785.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 165	1929	267	1a	S001	No.14	土師器	胴部	10%	-	5.8	32.3	122.2	-	10787.3 褐色	10787.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	
第 59 Ⅷ 166	1929	267	1c	S001	1c S001	土師器	胴部	10%	-	8.2	83.3	-	36.0 褐色	36.0 褐色	白磁子・赤褐色胎子	白磁子・赤褐色胎子	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部白磁	
第 60 Ⅷ 167	1929	351	1c	遺跡外	表	土師器	胴部	10%	-	3.0	61.0	-	25787.3 褐色	25787.3 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部白磁	
第 60 Ⅷ 168	1929	335	2b	遺跡外	表	土師器	胴部	20%	-	8.3	103.3	-	25786.6 褐色	25786.6 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	外部白磁	
第 60 Ⅷ 169	1929	279	1c	遺跡外	10	土師器	胴部	30%	<5.4>	-	6.7	65.5	<8.0>	10787.4 褐色	10787.4 褐色	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	白磁子・赤褐色胎子・石瓦敷	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	同様ナナテ・赤瓦	





付表

設備番号	等価設備	管理番号	設置場所	出土位置		時期	種類	状態	保存部位	保存率	口径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	測定最大径 (cm)	外部形状	内面形状	胎土	胎底	外底形状	内底形状	備考	
				器種	位置																	
№6718222	PC42 137	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<12.2>	-	330	269	-	75197.0 (1.23)	75197.7 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	円筒形・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	1.5mm厚・白胎土・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718223	PC42 139	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	40%	<14.7>	-	550	947	-	75198.4 (1.23)	75198.4 (1.23)	2~4mm厚・白胎土・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718224	PC42 141	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	<16.0>	-	447	284	-	75198.4 (1.23)	75198.4 (1.23)	白胎土・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718225	PC42 136	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<13.2>	-	422	271	-	75197.4 (1.23)	75197.4 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718226	PC42 142	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	-	<1.9>	678	-	-	75197.4 (1.23)	75197.4 (1.23)	2~8mm厚・白胎土・赤褐色胎土・右・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718227	PC42 143	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<12.2>	-	113	363	-	75198.3 (1.23)	75198.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718228	PC42 147	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<11.3>	-	81	281	-	75198.4 (1.23)	75198.4 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718229	PC42 146	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	-	<6.0>	113	363	-	75195.3 (1.23)	75195.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718230	PC42 144	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	<20.0>	-	933	259	-	75195.3 (1.23)	75195.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718231	PC42 145	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	<21.6>	-	733	202	-	75198.4 (1.23)	75197.4 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718232	PC42 146	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	-	<14.6>	1268	-	-	10195.3 (1.23)	10195.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718233	PC42 149	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	-	<4.0>	340	410	-	75195.3 (1.23)	75195.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718234	PC43 153	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	-	-	-	260	-	-	NS4.0 (0.0)	NS7.0 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718235	PC42 152	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	<12.5>	-	733	206	-	75193.1 (0.0)	75194.1 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718236	PC43 151	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	-	-	600	312.5	-	<27.0>	NS6.0 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6718237	PC42 150	2a	S107	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<12.6>	-	631.7	<25.3>	-	NS0.0 (0.0)	NS0.0 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918238	PC43 136	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	30%	<13.0>	-	84	692	-	10196.3 (1.23)	10197.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918239	PC43 135	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	50%	132	45	40	96.6	-	5192.6 (0.0)	NS15.0 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918240	PC43 136	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	30%	146	61	52	265	-	10197.3 (1.23)	NS2.0 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918241	PC43 154	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	100%	126	51	42	192.6	-	25195.6 (0.0)	75193.1 (0.0)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918242	PC43 157	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	90%	129	56	44	133.4	-	5197.3 (1.23)	5197.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918243	PC43 139	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	20%	<13.0>	-	44	65.5	-	10196.2 (0.0)	75195.3 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土
№6918244	PC43 162	2a	S108	平文	平文	平文	平文	平文	平文	10%	-	-	440	310	-	75197.4 (1.23)	75197.4 (1.23)	円筒形・赤褐色胎土・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	同様・赤褐色胎土	内面赤褐色胎土



試料番号	区画番号	管理番号	出土位置			種類	記録	保存部位	保存率	口縁径 (cm)	底径径 (cm)	胴径径 (cm)	胴高 (cm)	最大径 (cm)	外周線	内周線	胎土	胎色	外周装飾	内周装飾	備考
			層位	周長	高さ																
第6918285	PL43	165	2a	S108	P01	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<12.6>	-	5.61	6.02	-	7.93(9.3に欠)	10785.2(2.黄褐色)	黄褐色、白色胎子、赤褐色胎子、白色胎子、赤胎子	同様ナナナ・準乳	同様ナナナ	今令分同	
第6918286	PL43	161	2a	S108	S182a	平安	胎部279度	胎部	10%	-	<13.4>	13.17	-	-	7.97(8.4に欠)	7.97(8.4に欠)	赤褐色胎子、赤胎子、赤褐色胎子	タナキ	赤で同ナナナ	今令分同	
第6918287	PL43	166	2a	S108	No.6	平安	胎部279度	胎部	10%	<13.5>	(4.9)	26.9	-	-	7.97(8.4に欠)	7.97(8.4に欠)	赤褐色胎子、赤胎子、赤褐色胎子	タナキ	赤で同ナナナ	今令分同	
第6918288	PL43	161	2a	S108	No.3	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<22.4>	(18.9)	21.15	-	-	10784.1(脚白色)	10784.1(脚白色)	赤褐色胎子、赤胎子、赤褐色胎子	上胎部ナナナ、下胎部ナナナ	上胎部ナナナ、下胎部ナナナ	今令分同	
第6918289	PL43	163	2a	S108	S182a	平安	胎部279度	口縁部	10%	<26.0>	-	9.3	18.8	-	7.97(8.4に欠)	7.97(8.4に欠)	赤褐色胎子、赤胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018250	PL44	167	2a	S110	No.3	平安	胎部	胎部	25%	<5.2>	(2.8)	3.17	-	-	11.5(9.黄色)	11.5(9.黄色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018251	PL44	168	2a	S110	No.6	平安	上胎部279度	口縁部	20%	13.0	5.5	4.7	16.2	-	10786.2(赤褐色)	10786.2(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018252	PL44	169	2a	S110	2a	平安	胎部	口縁部	10%	<14.5>	(1.9)	10.4	-	-	11.5(9.白色)	11.5(9.白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018253	PL44	172	2a	S110	S14	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<13.2>	-	7.0	38.1	<13.4>	5375.8(赤褐色)	5375.8(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018254	PL44	179	2a	S110	No.1	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<20.0>	-	10.88	10.15	-	7.97(7.4に欠)	7.97(7.4に欠)	赤褐色胎子、赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7018255	PL44	173	2a	S110	S14	平安	胎部	胎部	35%	<12.2>	(2.8)	78.8	<21.0>	-	10784.1(脚白色)	10784.1(脚白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218256	PL44	171	1c	S111	No.10	平安	胎部	口縁部	90%	12.6	5.8	3.6	126.5	-	10.9(9.白色)	10.9(9.白色)	赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218257	PL44	175	1c	S111	No.10	平安	胎部	口縁部	30%	<12.5>	<5.8>	3.5	34.5	-	10787.1(赤白色)	10787.1(赤白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218258	PL41	176	1c	S111	P02No.1	平安	胎部	胎部	90%	13.1	5.7	3.8	103.4	-	10.9(9.白色)	10.9(9.白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218259	PL44	177	1c	S111	No.3	平安	胎部	胎部	10%	<11.6>	-	10.0	64.0	<23.2>	10.9(9.白色)	10.9(9.白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218260	PL44	178	1c	S111	No.7	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<12.4>	-	6.7	17.5	<21.1>	25785.8(赤褐色)	25785.8(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218262	PL44	182	1c	S112	青黒	平安	胎部	口縁部	10%	<12.4>	-	4.23	5.5	-	10.9(9.白色)	10.9(9.白色)	赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218263	PL44	181	1c	S112	No.3No.6	平安	胎部	口縁部	80%	13.5	6.1	3.7	133.3	-	10.9(9.白色)	10.9(9.白色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218264	PL41	180	1c	S112	P02No.1	平安	胎部	口縁部	60%	13.6	5.9	4.7	133.7	-	2577.2(赤褐色)	2577.2(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218265	PL41	179	1c	S112	P02No.2	平安	胎部	口縁部	90%	15.5	6.8	4.9	236.3	-	10787.2(赤褐色)	10787.2(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218266	PL44	181	1c	S112	No.1No.7	平安	胎部	口縁部	10%	<24.4>	-	17.5	268.6	<26.6>	10787.3(赤褐色)	10787.3(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218267	PL44	185	1c	S112	No.8	平安	上胎部279度	口縁部	10%	<26.4>	-	19.7	181.9	<28.0>	25786.6(赤褐色)	25786.6(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	
第7218268	PL44	186	1c	S112	No.3No.1No.8	平安	胎部	胎部	10%	<31.1>	-	6.0	129.1	-	10785.2(赤褐色)	10785.2(赤褐色)	赤褐色胎子、赤褐色胎子	同様ナナナ	同様ナナナ	今令分同	





付表

図説番号	寄附者 氏名	寄附 年月	種別	記録 種別	保存 部位	保存 率	寸法			重量 g	数量 部	素材 最大径 cm	内装品類	外部品類	軸土	構成	外部装類	内装品類	備考
							口径 cm	長さ cm	断面 最大径 cm										
第79図23	伊藤 47	1945	土師器 27A	底面	底面	20%	-	5.2	42.5	71.8	-	10737.1 黒褐色	白磁粒子・石黒塵	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第79図24	伊藤 47	1945	土師器 27A	胴部	胴部	10%	-	6.1	16.5	-	25327.4 12.25白	白磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第79図25	伊藤 47	1945	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<23.7>	-	15.1	28.0	<22.3>	35385.4 12.25白	白磁粒子・石黒塵	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	
第79図26	伊藤 47	1945	土師器 27A	胴部	胴部	30%	<26.6>	-	17.2	50.1	<8.4>	35385.4 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	
第79図27	伊藤 47	1945	土師器 27A	胴部	胴部	20%	<25.0>	-	16.0	33.0	<8.1>	35385.4 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	
第79図28	伊藤 47	1945	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<28.0>	-	11.0	6.0	-	35385.4 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	
第79図29	伊藤 47	1946	土師器 27A	胴部	胴部	-	-	-	-	22.5	-	35.0 灰色	35.0 灰色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第80図21	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<6.3>	2.1	2.1	-	3577.1 灰白色	3577.1 灰白色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第82図22	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	70%	<14.4>	7.9	4.0	12.0	-	25327.6 褐色	25327.6 褐色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第82図23	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	40%	-	2.4	26.2	-	2537.2 赤褐色	2537.2 赤褐色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第82図24	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	7.6	-	12.6	26.5	-	3532.2 オリーブ	3532.2 オリーブ	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第82図25	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	-	-	-	12.2	-	-	25327.6 褐色	25327.6 褐色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第82図26	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<7.0>	6.0	20.7	-	25327.4 12.25白	10737.2 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図27	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	30%	<11.8>	5.4	2.5	76.9	-	10736.3 12.25白	10737.3 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	
第85図28	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	-	-	1.7	6.2	-	3532.2 オリーブ	3532.2 オリーブ	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図29	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<6.8>	1.8	2.4	-	2537.1 灰白色	2537.1 灰白色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図30	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<8.0>	2.0	2.4	-	3577.1 灰白色	3577.1 灰白色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図31	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	-	-	6.0	46.6	<12.0>	35385.4 12.25白	35385.4 12.25白	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図32	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	20%	-	9.8	60.0	27.5	-	25327.6 褐色	25327.6 褐色	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図33	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	<14.0>	-	8.3	56.3	<15.0>	35385.4 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図34	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	10%	-	3.3	19.3	-	25326.4 12.25白	25326.4 12.25白	赤褐色・白磁粒子・石黒塵・白磁粒子・2.5mm	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		
第85図35	伊藤 47	1947	土師器 27A	胴部	胴部	-	-	-	5.3	-	-	10752.4 オリーブ	10752.4 オリーブ	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子	同磁粒子		

第19表 石器一覧

器種番号	写真撮影 図版番号	出土位置 遺構	注記内容 (材質・形状・重量)	器種	材質	色調	保存率	寸法			断面形状	備考
								長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)		
第27図32	PL-6 302	北	S301	灰岩	暗灰色	100%	30.0	4.0	22.5	-	両側打撃部、打痕ありによるもの	
第27図33	PL-6 303	北	S301	石英	暗灰色	-	63.0	3.0	23.0	▽	断片、両側打撃部有り 表面風化有り 断片周囲に付う断片ではない、可能では有り 使用痕跡認められない	
第27図34	PL-6 304	北	S301	黒曜石	黒色黒曜石	-	11.0	1.4	0.5	△	-	
第27図35	PL-6 304	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	34.0	4.1	6.5	▽	-	
第27図36	PL-6 306	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	65.5	10.0	9.5	▽	両側打撃、使用痕あり、欠損有 (風化)	
第28図37	PL-6 303	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	31.0	3.8	6.0	△	-	
第28図38	PL-6 306	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	44.0	20.5	5.5	△	-	
第28図39	PL-6 307.2	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	35.0	4.0	5.0	△	-	
第28図40	PL-6 307.1	北	S301	流紋岩	暗灰色	-	61.0	7.0	6.0	△	-	
第28図41	PL-6 311	北	S302	燧	暗灰色	-	33.0	4.5	5.5	△	-	
第28図 第29図 第30図 第31図	PL-6 307 PL-6 307 PL-6 307 PL-6 307	北	S302	燧	暗灰色	-	76.0	13.0	9.0	△	-	
第30図42	PL-6 309	北	S302	燧	暗灰色	90%	126.0	8.0	71.0	80.0	楕円形	正面打入
第30図43	PL-6 310	北	S302	燧	灰白色	90%	130.0	7.0	62.0	60.7	台形	下面打入
第34図44	PL-9 315	北	S303	燧	暗灰色	-	49.0	6.0	11.5	32.4	△	両側打撃、使用痕認められるも使用痕とは断定できず、1.2cmは断片に付う、6.7cm
第34図45	PL-9 313	北	S303	燧	灰白色	70%	140.0	10.0	55.0	103.0	楕円形	正面・後面打入
第34図46	PL-9 314	北	S303	燧	灰白色	90%	116.0	8.0	72.0	71.3	楕円形	正面打入、後面打入
第35図47	PL-9 316	北	S304	燧	暗灰色	90%	126.5	36.5	25	2.8	△	表面打、表面面に使用痕有り、両面は両側打加工して打撃によるもの 打撃痕は打撃によるもの 打撃痕は打撃によるもの 打撃痕は打撃によるもの 打撃痕は打撃によるもの
第35図48	PL-9 317	北	S304	燧	暗灰色	-	48.0	2.0	7.0	10.9	△	-
第33図49	PL-6 329	北	S312	燧	暗灰色	100%	133.0	5.0	27.0	33.0	長楕円形	楕円形
第33図50	PL-6 331	北	S326	燧	暗灰色	100%	123.0	6.0	31.0	21.9	台形	厚手
第63図246	PL-9 339	北	S305	燧	暗灰色	-	28.0	3.0	7.0	7.3	△	両側打撃によるもの 断片に付うによるもの 断片に付うによるもの 断片に付うによるもの
第63図246	PL-9 338	北	S305	燧	暗灰色	80%	143.0	6.0	44.0	60.5	長楕円形	三角形
第72図281	PL-9 350	北	S311	燧	灰白色	100%	137.0	6.0	63.0	63.0	長楕円形	楕円形
第79図280	PL-6 327	北	S315	燧	暗灰色	-	24.0	4.0	4.5	4.8	△	上面・下面打入 使用痕あり

第20表 金属製品一覧

図版番号	写真撮影 図版番号	出土位置 遺構	出土遺構	出土位置 出土層	出土状況	材質	寸法			重量 (g)	備考
							長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)		
第63図287	PL-9 601	北	S305	北	灰	鉄	61.0	10.0	8.0	13.29	平安
第63図288	PL-9 602	北	S305	北	灰	鉄	96.0	14.0	5.0	8.89	平安
第63図289	PL-9 603	北	S305	北	灰	鉄	48.5	26.5	5.0	5.56	平安
第63図290	PL-9 604	北	S305	北	灰	鉄	64.0	5.0	4.0	2.14	平安

# 報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちせいせきぐん ほんむらみなみおきいせき							
書名	浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡							
副書名	新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	113							
著作者名	長谷川桂子、町田勝則、西 香子、高山いず美、福井優希							
編集機関	(一般財団法人) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2017年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡	長野県長野市 三輪8丁目 49-7	20201	A-①	36° 39' 55" (世界測地系)	138° 12' 03" (世界測地系)	20150407 ～ 20151130	6,000	新県立大学施設整備事業に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡	集落跡	弥生時代 前期以前  弥生時代  古墳時代  奈良・ 平安時代  弥生～ 平安時代	墓跡1  竪穴住居跡7、掘立柱建物跡1、墓跡3、溝跡1、土坑4、遺物集中1  流路跡1  竪穴建物跡10、掘立柱建物跡1、流路跡2、土坑4  土坑292	縄文土器、弥生土器、土器片加工板?、打製石斧、磨製石鏃、敲石、凹石、土師器、須恵器、黒色土器、灰軸陶器、青磁、鉄製品(刀子ほか)、歯破片(ウマ)	浅川扇状地上の弥生時代後期と9世紀後半の集落跡。 弥生時代後期吉田式期の竪穴住居跡7軒のうち1軒は逆位に置かれた土器埋設炉をもつ。掘立柱建物跡は棟持柱をもつ。 箱清水式期の土器棺墓のうち1基は3個体の壺と1個体の甕を組み合わせたもので、中心となる壺1個体は胴部に焼成後の穿孔がある。			
要約	<p>浅川扇状地の扇尖部西端の標高387～390mに立地する。</p> <p>縄文時代は遺物のみで、遺構は確認されない。弥生時代前期は墓跡1基のみが確認される。</p> <p>弥生時代後期は集落跡で、後期初頭の吉田式期の竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、土坑が確認される。短期間に存在した集落で、標式遺跡である吉田高校グランド遺跡の集落の時期とほぼ同時期である。後期前半からは箱清水式期の成立段階に相当する土器棺墓が2基、遺物集中が1か所確認される。</p> <p>古墳時代は中期の祭祀行為が行われた可能性のある流路跡1条のみ確認される。北方400mに古墳時代中期の拠点集落である本村東沖遺跡が存在し、関連がうかがわれる。</p> <p>奈良・平安時代は、7世紀末から8世紀前半頃には埋没を始める流路跡1条のみ確認される。平安時代は集落跡で、9世紀後半の竪穴建物跡10軒が確認される。竪穴建物跡は切り合いがあるが、出土土器に差がないため、ほぼ同一時期の集落である。また土坑や流路の埋没後には掘立柱建物跡が建てられる。中世は青磁破片が1点出土したのみで、遺構は確認されない。</p>							

平成 29 (2017) 年 3 月 15 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 113

**浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡**

新県立大学施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者 長野県  
（一財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail [info@naganomaibun.or.jp](mailto:info@naganomaibun.or.jp)

印刷者 明和印刷株式会社  
〒 380-0943 長野県長野市安茂里 2161-2  
Tel 026-226-5311 Fax 026-228-0799

# 写真図版



ヤマボウシ



1 1区西壁

J断面

(東より)



2 2区南壁

H断面

(西より)



3 1区西壁(留舎)

C断面付近

(東より)



5 1区北壁

E断面付近

(南より)



6 2区南壁

F断面付近

(北より)



7 2区南壁

G断面付近

(北より)

8 2区南壁

H・1断面付近

(北東より)



9 1区西壁(留舎)

J断面付近

(東より)

10 1区西壁

K断面付近

(東より)



- 1 2区西壁  
L断面付近  
(東より)
- 2 2区南壁  
M断面付近  
(北より)



- 3 2区西壁  
N断面付近  
(南東より)
- 4 1区南壁  
O断面付近  
(北より)



- 5 1区南壁  
P断面付近  
(北より)
- 6 2区北壁  
Q断面付近  
(南東より)



- 7 1トレンチ  
断面全体  
(南西より)
- 8 1トレンチ  
R断面  
(南西より)



- 9 2トレンチ  
断面全体  
(南西より)
- 10 2トレンチ  
S断面  
(南より)

1 3トレンチ

断面全体  
(南西より)

2 3トレンチ

T断面  
(南東より)

3 4トレンチ

断面全体  
(南西より)

4 4トレンチ

U断面  
(南より)

5 5トレンチ

断面全体  
(南西より)

6 5トレンチ

V断面  
(南より)

7 6トレンチ

断面全体  
(西より)

8 6トレンチ

W断面  
(南東より)

9 7トレンチ

断面全体  
(南西より)

10 7トレンチ

X断面  
(南西より)



1 8トレンチ  
断面全体  
(南西より)

2 8トレンチ  
Y断面  
(北西より)



3 1区a断面  
(南西より)

4 1区c断面  
(北東より)



5 1区e断面  
(北西より)

6 1区h断面  
(西より)



7 2区i断面  
(南西より)

8 2区j断面  
(南東より)



9 2区B断面  
(北より)

10 2区k断面  
(北東より)

1 SQ02

1 出土状態  
(東より)2 SB01 断面  
(南より)

3 SB01

遺物出土状態  
(南東より)4 SB01 完掘  
(南東より)

5 SB01

26 出土状態  
(南東より)

6 SB01

36 出土状態  
(南東より)

7 SB01-02

完掘  
2c 区全景  
(空撮)



1 SB02  
A-B 断面  
(北より)

2 SB02  
遺物出土状態  
(北西より)



3 SB02 完掘  
(北より)

4 SB02  
遺物出土状態  
接写  
(西より)



5 SB02  
52 出土状態  
(北より)

6 SB02  
60 出土状態  
(北より)



7 SB03  
A-B 断面  
(南西より)

8 SB03  
遺物出土状態  
(南西より)



9 SB03  
遺物出土状態  
接写  
(南より)

10 SB03  
遺物出土状態  
接写  
(南より)

1 SB03

Pit5 完掘  
(南より)

2 SB03

Pit7 完掘  
(西より)

3 SB03

Pit9 完掘  
(東より)

4 SB03

Pit10 完掘  
(東より)

5 SB03

Pit11 完掘  
(西より)

6 SB03

Pit12 完掘  
(南より)

7 SB03

完掘 (北より)





1 SB04  
A-B 断面  
(南より)

2 SB04  
遺物出土状態  
(東より)



3 SB04  
88 遺物出土  
状態 (東より)

4 SB04  
炉完掘  
(東より)



5 SB04  
Pit2 断面  
(東より)

6 SB04  
Pit2 完掘  
(東より)



7 SB04  
Pit3 完掘  
(東より)

8 SB04 完掘  
(南より)



9 SB09  
A-B 断面  
(北より)

10 SB09 炉検出  
(南より)



1 SB09

Pit1 完掘  
(東より)

2 SB09

Pit4 完掘  
(北より)

3 SB09

Pit5 完掘  
(北より)

4 SB09

Pit6 完掘  
(北より)

5 SB09

Pit8 完掘  
(北より)

6 SB09

Pit9 完掘  
(北より)

7 SB09 完掘

(北より)





- 1 SB16  
C-D 断面  
(東より)
- 2 SB16 完掘  
(東より)



- 3 SB17  
AB-C-D 断面  
(南より)
- 4 SB17  
遺物出土状態  
(南東より)



- 5 SB17  
108 出土状態  
(東より)
- 6 SB17  
110 出土状態  
(南東より)



- 7 SB17  
炉 G-H 断面  
(南西より)
- 8 SB17  
炉 火床  
(南東より)



- 9 SB17  
Pit1 完掘  
(北西より)
- 10 SB17  
Pit2 完掘  
(南東より)

1 SB17

Pit3 完掘  
(北西より)

2 SB17

Pit4 完掘  
(北西より)

3 SB17

Pit5 完掘  
(南東より)

4 SB17

Pit6 完掘  
(北西より)

5 SB17

Pit7 完掘  
(北西より)

6 SB17

Pit8 完掘  
(北西より)

7 SB17 完掘

(北西より)





1 ST01  
Pt1 完掘  
(北より)

2 ST01  
Pt2 完掘  
(北より)



3 ST01  
Pt3 完掘  
(北より)

4 ST01  
Pt4 断面  
(南より)



5 ST01  
Pt4 完掘  
(北より)

6 ST01  
Pt5  
I20  
出土状態  
(北より)



7 ST01  
Pt5 断面  
(南より)

8 ST01  
Pt5 完掘  
(北より)



9 ST01  
Pt6 完掘  
(北より)

10 ST01  
Pt7 完掘  
(北より)

1 ST01  
完掘全景  
(空撮)



2 SM01  
A-B断面  
(南西より)



3 SM01完掘  
(南東より)



4 SM02  
遺物出土状態  
(東より)





1 SM02  
CD断面東側  
(南より)

2 SM02  
A-B断面  
(東より)



3 SM02  
遺物出土  
状態(下面)  
(北西より)

4 SM02 完掘  
(南より)



5 SM03  
125 出土状態  
(北より)

6 SM03  
棺内完掘  
(北より)



7 SM03  
125 出土状態  
(南西より)

8 SM03 完掘  
(北より)



9 SD04  
A-B断面  
(東より)

10 SD04 完掘  
(南東より)

- 1 SD06 断面  
(南西より)
- 2 SD06 完掘  
(北東より)



- 3 SD07 完掘  
(東より)
- 4 SD08  
A-B 断面  
(北西より)



- 5 SD08 完掘  
(東より)
- 6 SD09 完掘  
(北東より)



- 7 SD10 完掘  
(北東より)
- 8 SK220 完掘  
(北より)



- 9 SK287  
130 出土状態  
(北東より)
- 10 SQ01  
131・132  
出土状態  
(南より)





1 SD01  
A-B 断面  
(南西より)

2 SD01  
C-D 断面  
(南西より)



3 SD01  
G-H 断面  
(南西より)

4 SD01  
遺物出土状態  
(南西より)



5 SD01  
152・158  
出土状態  
(南より)

6 SD01  
遺物出土状態  
中央部  
(西より)



7 SD01  
北半分完掘  
(南西より)

8 SD01  
南半分完掘  
(北より)



1 SB05

C-D断面  
(南西より)

2 SB05

遺物出土状態  
(北より)

3 SB05

カマド遺物  
出土状態  
(北西より)

4 SB05

カマド礎  
出土状態  
(北西より)

5 SB05

カマドG-H  
断面  
(北西より)

6 SB05

カマド炭化物  
出土状態  
(南西より)

7 SB05

Pit5  
186  
出土状態  
(南より)

8 SB05

焼土1断面  
(東より)

9 SB05

焼土2検出  
(北より)

10 SB05

完掘  
(北西より)



1 SB06-07  
C-D 断面  
(南西より)

2 SB06-07  
A-B 断面  
(南東より)



3 SB06-07  
遺物出土状態  
(北西より)



4 SB06  
カマド遺物  
出土状態  
(南より)

5 SB06  
カマド検出  
(南より)



6 SB07  
カマド遺物  
出土状態  
(北西より)

7 SB07  
カマド火床  
検出  
(北西より)

1 SB07  
カマドG-D  
断面  
(南より)



2 SB07  
カマド掘方  
完掘  
(西より)



3 SB06完掘  
(南より)



4 SB07完掘  
(北西より)





1 SB08 検出  
(東より)  
2 SB08  
遺物出土状態  
(南より)



3 SB08  
Pit1 遺物出  
土状態  
(北より)  
4 SB08 完掘  
(北より)



5 SB10  
遺物出土状態  
(東より)  
6 SB10  
カマド検出  
(東より)



7 SB10  
カマドF-G-H  
断面  
(南より)  
8 SB11  
C-D 断面  
(東より)



9 SB11  
遺物出土状態  
(北より)  
10 SB11  
カマド下火床  
検出  
(北より)

1 SB11

Pit2

258・261

出土状態

(北東より)



2 SB11 完掘

(北より)



3 SB12

E-F 断面

(南より)



4 SB12

火床CD断面

(南より)



5 SB12

Pit1

264・265

出土状態

(北より)



6 SB12

Pit2 完掘

(東より)



7 SB12 完掘

(南西より)





1 SB13  
C-D 断面  
(南西より)



2 SB13  
カマド遺物  
出土状態  
(北西より)

3 SB13  
カマド遺物  
出土状態  
(北西より)

4 SB13  
カマド E-F  
断面  
(北東より)



5 SB13  
カマド G-H  
断面  
(南西より)

6 SB13 完掘  
(南東より)



7 SB14  
C-D 断面  
(北東より)

8 SB14  
遺物出土状態  
(北西より)



9 SB14  
Pit1 断面  
(西より)

10 SB14  
Pit1 完掘  
(西より)

1 SB14 完掘  
(北より)



2 SB15  
C-D 断面  
(東より)



3 SB15  
A-B 断面  
(西より)



4 SB15  
遺物出土状態  
(北東より)



5 SB15  
遺物出土接写  
(北東より)



6 SB15  
カマド遺物  
出土状態  
(南西より)



7 SB15  
カマド完掘  
(南西より)





- 1 SB15  
 カマドエレ  
 ベーション  
 H-I 断面  
 (北西より)
- 2 SB15  
 カマドエレ  
 ベーション  
 J-K 断面  
 (南東より)



- 3 SB15 完掘  
 (南西より)



- 4 ST02  
 Pit1 完掘  
 (南より)
- 5 ST02  
 Pit2 完掘  
 (北より)



- 6 ST02  
 Pit3 完掘  
 (北より)
- 7 ST02  
 Pit4 完掘  
 (南より)



1 ST02 完掘  
(北より)



2 SD02  
C-D 断面  
(南より)



3 SD03  
A-B 断面  
(南西より)

4 SD02-03  
E-F 断面  
(南東より)



5 SD02-03  
G-H 断面  
(南東より)

6 SD03  
遺物出土状態  
(南より)



7 SD03  
703 出土状態  
(西より)





- 1 SD03  
分析 No.10  
出土状態  
(北より)
- 2 SD03  
分析 No.12  
出土状態  
(北より)



- 3 SD03  
北半分完掘  
(南東より)



- 4 SD03  
南半分完掘  
(北より)

1 1a区  
 完掘全景  
 (南西より)



2 1a区  
 完掘全景  
 (東より)



3 1b区  
 完掘全景  
 (東より)



4 1b区  
 SK群  
 完掘全景  
 (北より)





- 1c区  
北側完掘全景  
(東より)
- 1c区  
SB周辺完掘  
全景  
(南より)



- 1c区  
最東側完掘  
全景  
(北より)
- 1c区  
最東側完掘  
全景  
(南より)



- 1c区  
東側完掘全景  
(北より)
- 1c区  
東側完掘全景  
(南より)



- 1c区  
西側完掘全景  
(空撮)

1 1c区  
西側完掘全景  
(南より)



2 1c区  
最西側完掘  
全景  
(南より)



3 2a区  
南完掘全景  
(北より)



4 2a区  
南完掘全景  
(北より)



5 2a区  
SK群  
完掘全景  
(北より)



6 2a区  
北側検出  
(南より)

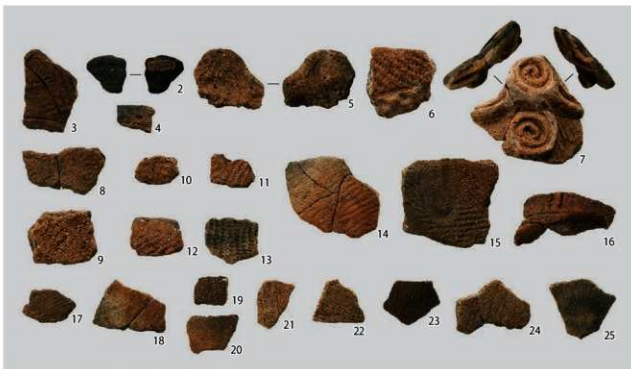


7 2a区  
完掘全景  
(南より)



縄文時代以外の遺構。

検出面



2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25

SQ02

1



SB01

26  
27  
28  
29  
30  
31



SB02 (1)

44  
45  
46  
47  
51  
52



51



52

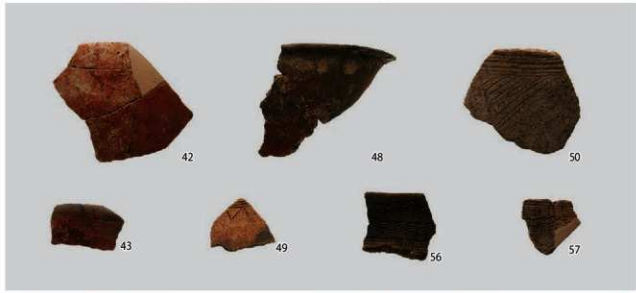
SB02 (2)

42  
43  
48  
49  
50  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60



SB03 (1)

集合写真



69

70

71

72

79



79



69



70



71



72



SB03 (3)

63  
64  
65  
66  
67  
68  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
80  
81  
82  
83



SB04

87  
88  
89  
90  
91

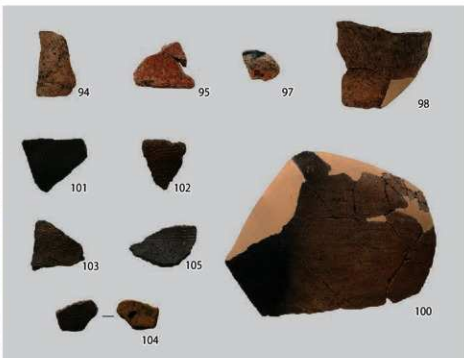




96



99



94

95

97

98

101

102

103

105

100

104

SB09

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

SB16

106

107



106

107



108

109



SB17

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119



112



113



111

114

115

116

117

119

118

ST01

120



120



127

128

129



131



132-1

132-2

SK220

127

128

SK261

129

SQ01

131

132-1

132-2

SM02 (1)  
121



SM02 (2)

122

124



122



124

SM02 (3)  
123



SM03

125

遺構外

1a 区

140

143

147

1c 区

133

134

135

136

137

138

141

142

144

2a 区

139

145

146



125



133



134



135



136



140



138



146



139



145



137



141



142

143



144



147

SD01

集合写真

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

遺構外

1a区

169

170

171

1c区

167

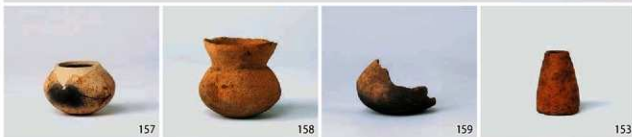
172

2a区

168



SD01



157

158

159

153



154

155

156

165



148

149

150

151

152

160

164



162

163

161

166



168

172

167

169

170

171





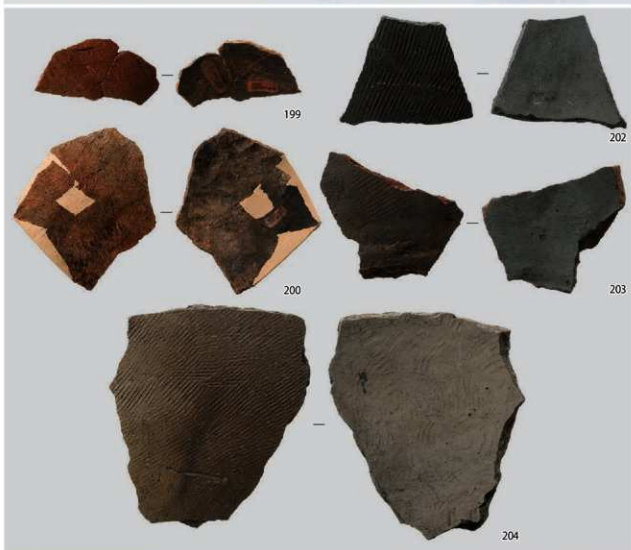
SB05 (2)

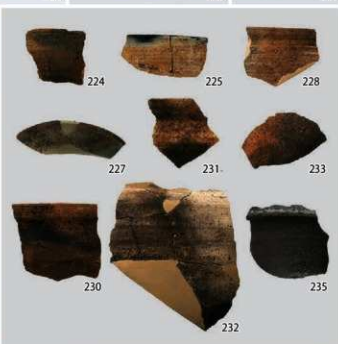
173  
175  
176  
178  
180  
186  
187  
188  
194  
197  
199  
200  
202  
203  
204



SB06 (1)

211  
212  
215  
217





SB06 (2)

- 213
- 214
- 216
- 218

SB07 (1)

- 219
- 220
- 221
- 222
- 223
- 224
- 225
- 226
- 227
- 228
- 229
- 230
- 231
- 232
- 233
- 235
- 237

集合写真



SB07 (2)

234

236

SB08

集合写真

238

239

240

241

242

243

244

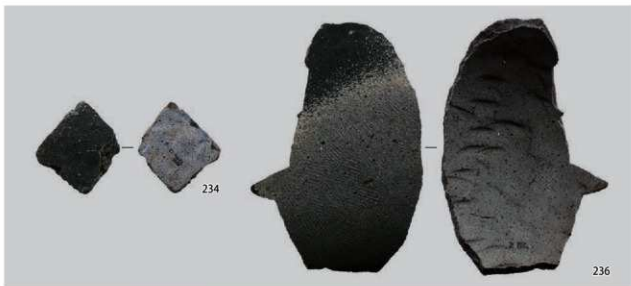
245

246

247

248

249



SB08





251



253



255



250



252



254

SB10 (1)  
250  
251  
252  
253  
254  
255

SB11・12  
集合写真

SB11  
256  
257  
258  
259  
260



SB11・12

SB12  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268



256



257



259



258



260



263



264



265



266



267



268



262

SB13

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

SB14 (1)

282

283

284

285

286

287

291





288



289



290

SB14 (2)

288

289

290

SB15 (1)

集合写真

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

304

307

316

317



SB15



316



317



299



300



307



293



294



295



296



297



298



301



302



304

SB15 (2)

292  
303  
305  
306  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
318  
319



SD03

322  
323  
324  
325  
326



ST02

321

遺構外

1a 区

335

1c 区

331

333



2a 区

327

328

329

330

332

334





SB01

32

33

34

35

36

37

38

39

40

SB02

41

61

62



SB03

84

85

86

SB04

92

93

SB05

205

206

SB11

261

SB15

320

SK127

126

SK287

130



SB05

207

208

209

210

